

語り継ぐ 4

5歳で体験した阪神・淡路大震災を

高校3年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科3年

「3つの感謝」

学校長 新居 寛

本校に環境防災科が産声をあげて、はや6年目を迎えました。したがって専門学科の規定による卒業研究が4回目ということになります。

校長として、皆さんに感謝したいことが3つあります。

I 「安全・安心の追求」

人間の営みの中で何が大切なものを追求してゆくと、1つの解答として「安全・安心」が挙げられます。本科では、人間の行動・心理についても学習した筈です。多くの人の中で自分が、市民のリーダーになるとしたらできることは何か。きっと多くのことを学んだはず。君たちが学んだことから、私たち教師も学んでいます。このことを感謝の第1にあげます。

II 「ジャングルの大木を誰も知らない」

ジャングルに人知れず育った大木はその存在を知られることはありません。誰かが見つけて、そのことを流布しない限りは。逆の言い方をすれば、今やっていることを発信することで多くの人が、その取り組みや行動について知ることができ、共感したり、共助することができます。高校生の皆さんの活動が、社会をさわやかにそして明るくしていることに感謝します。

III 「後輩のよき見本たれ」

皆さんが歩んだ3年間と同じように、後輩がまた試行錯誤しながら歩みます。そのときは、あなた方に先輩がしてくれたように、是非後輩を支えてやってください。「きっとそうするだろう。」その可能性が大いに期待できる皆さんに感謝したい。

も く じ

題名	名前	震災時の住所	ページ
「3つの感謝」	学校長 新居 寛		2
幸せな未来のために	池田 剛	神戸市須磨区横尾	4
親から子へ、親から子へ...	石川 雄太	神戸市垂水区学が丘	8
私の知らない記憶	石田 夏樹	神戸市垂水区五色山	12
忘れかけた記憶	因幡 顕	神戸市兵庫区菊水町	16
死から学ぶ	植原 晃一	神戸市西区大津和	20
語り継ぐ	江川 まいこ	神戸市垂水区狩口台	24
震災、これから...	尾崎 加奈	神戸市垂水区星陵台	27
12年間の記憶	片山 千佳子	神戸市長田区東尻池町	31
幼い記憶	亀山 美幸	神戸市長田区神楽町	35
未来へ	川原 弘之	神戸市垂水区星陵台	39
あの頃から今	神吉 大地	加古川市西神吉町	43
未来への教訓	北野 真也	神戸市垂水区神陵台	47
使命	小池 真名美	伊丹市南町	51
~ありがとう、私から~	斎木 章太	神戸市垂水区五色山	56
MEMORY ~ 記憶 ~	境 豊	神戸市垂水区本多聞	60
記憶	皐月 麻衣	神戸市長田区苅藻通	64
「人」という字	柴田 葵	加東市東条町	68
「あの日から12年」	柴田 隆広	神戸市西区伊川谷町	71
阪神・淡路大震災を経験して	清水 麻莉菜	神戸市垂水区清水が丘	75
私と地震と神戸。	住友 香織	尼崎市武庫之荘	79
一瞬	高峰 里佳	神戸市垂水区西舞子	83
私が語り継ぐ理由	丹羽 成美	神戸市垂水区五色山	87
記憶の力	橋本 陵	神戸市垂水区	91
助け合いの大切さ ~ 阪神・淡路大震災 ~	畑中 翔太	宝塚市逆瀬川	95
記憶をたどって	林 優子	神戸市須磨区	99
あの日の記憶	速水 絵理	西宮市川西町	103
生きてこそ	袋田 理歩	神戸市須磨区高倉台	107
振り返るあの日、あの時	船橋 悠	神戸市垂水区狩口台	110
「歩」	槇野 翔太	高砂市北浜町	114
「震災、そして夢の実現へ」	政田 達彦	神戸市北区小倉台	118
阪神・淡路大震災からの教訓	増田 理香	神戸市須磨区菅の台	122
卒業研究「語り継ぐ4」	元生 裕也	神戸市垂水区南多聞台	126
阪神・淡路大震災	安政 友晴	加古川市東神吉町	129
あの日から学んだもの	山田 真志	神戸市垂水区舞子台	133
薄れていく記憶	山本 翔太	神戸市垂水区	137
今を生きる	山本 美羽	神戸市垂水区	141
過去、現在、未来	若林 ゆい	神戸市垂水区	145

幸せな未来のために

神戸市須磨区横尾
池田 剛

1. 震災の前日

1月16日。阪神・淡路大震災の前日。自分は4歳。幼稚園に入園していたころだった。その時は地震がどんなものかさえ知らなかった。明日、大きな地震が来るなど微塵も感じていなかった。それは自分以外の人も同じだろう。もし自分が「明日、神戸が大きな地震に襲われる」と知っていたとしてもその地震自体を知らなかったので何もしなかっただろう。

1月16日、山田牧場というスキー場にいた。まだスキー板を履いてゲレンデを滑ることができなかったのでソリで遊んだり、1つ上の姉や親戚たちと雪だるまを作ったりして遊んでいた。全然覚えていないのだが、その時、母が雪山で遭難していたらしい。母は親戚のおじさんやスキー場で滑っていた人たちに助けられた。そのせいで母が「もう帰ろう」と言い出し、その日は昼にスキーを止め家に向かうことになった。そして1月16日の夜10時くらいに阪神高速を走っていた。もし母が遭難などしていなくて夕方までスキーをしていたら滑り終わったあと、スキー場でゆっくり晩御飯を食べ夜にスキー場を出発していた。そして1月17日の午前6時くらいに阪神高速を走っていたと父が言っていた。兵庫県南部地震が起きたのは午前5時46分。つまり母が遭難しなかったら兵庫県南部地震を阪神高速の上で体験していたかもしれない。もしかしたら阪神高速の下敷きになっていたかもしれない。その話を聞いたとき体が震えた。母の遭難に関して感謝しないほうが良いが、夕方までスキーをしていたらと考えるとぞっとした。

阪神高速といえば橋脚が18本折れ、635mにわたって横倒しになった高速道路だ。一番有名な話は高速バスの前輪が宙に浮いていた話だ。もしその高速バスがあと1秒でも早く前を走っていたら間違いなく転落していただろう。この話は今でも奇跡だと思っている。

2. 1995 1.17 05:46

「ここどこ？」1月17日に発した第一声だ。寝ぼけているせいか自分が今、どこにいるのかさえ分からなかった。辺りを見渡しても周りが暗いので分からなかった。近くには姉もいた。まずここがどこか知りたかったので何か特徴的なものはないか探した。その中の様子は狭く、四隅に木の足があり、周りには布で覆われており、天井は低く中央には網状の物体があり、何かコードみたいなものが外へと伸びていた。それから時間が経ち、その暗さに目が慣れるとようやくここがどこか分かった。それはコタツの中だった。その時は「昨日、コタツの中で寝てもたんだな」と思っていた。当時、1月で寒かったからコタツで寝ることもしばしばあった。しかし後から両親に聞くと両親が自分と姉をコタツの中に入れてと教えてくれた。家具などの危険なものから2人を守るためにしてくれた行動だった。その話を聞いた時、両親に深く感謝した。

3. 揺れが収まり

それから家族4人は家の中にあつた毛布を持って駐車場まで移動し、二次災害に遭わないようにするため車の中で過ごした。家よりは窮屈だったが両親が側にいてくれたので安心して眠ることができた。外には直径10センチくらいの灰が飛んでいた。長田の方を見てみると真っ赤になっていた。余震が何度かあったみたいだがそれも気付かなかった。家の中の様子は覚えていないが両親によると「皿が数枚割れた程度」だったそうだ。そして家の中のドアがゆがんで開けにくくなったという話も聞いた。家の中にはピアノやタンスなど重くて大きな家具があったので最初は倒れているのではないかと心配していたが倒れなかったと聞き「よく倒れなかったな」と思った。

地震発生後2日目に水が一時的に止まったくらいでそれ以外のライフラインは被害を受けなかった。しかし、親戚の家では水が止まっていたらしくお風呂に入れなかったため、たくさんの親戚の人がお風呂に入りに来ていた。その光景はまるで臨時の銭湯みたいだった。たくさんの人がお風呂に入りに来ていたので朝から晩までお風呂を沸かしていた。そのことが原因でお風呂の湿気で壁紙が剥がれたそうだ。

母の兄が尼崎から7時間かけて水や食料を持って来てくれた。しかし家では水が出ていたので平気だった。

これらのおかげで震災当時、家の中にはたくさんの親戚の人がいて話しかけてくれたため、寂し

い思いはしなかった。その1ヶ月間の水道代・ガス代はいつも払う金額の4倍だったそうだ。

4. 祖父母の家

祖父母が心配になったので車で祖父母の家まで行くことにした。道の状態、車の数などは覚えていないが、その時に印象強く残っているのは母方の祖父母の家に行く途中、大きな火を見たこととガス臭かったこと、そして1台の車の姿だった。その火はとてつもなく大きかった。母も見たらしく「まるでゴジラぐらいの大きさだった」と言っていた。それからその大きな火は「ゴジラの火」と呼ぶようになった。あんな大きな火は今まで見たこともなかった。窓をあけると鼻が曲がるような臭いがした。どこかのガス管が破裂したのか、窓を開けるとガスのにおいが鼻をついた。白い軽自動車のワンボックスが陥没している道路の穴にはまっていた。そんな光景は今まで見たこともなかった。それから板宿にあったビルが傾いていたと父が言っていた。

兵庫にある母方の祖父母の家に着。家からは然程離れていなかったがかなり時間がかかっていたらしい。車の中では基本的に寝ているので時間は分らなかった。震災当時、母方の祖父母は2階建てのアパートに住んでいた。まずそこで目に入ったのは祖父母の車がボコボコになっていた光景だ。上からたくさん瓦が落ちてきて、フロントガラスも割れていたそうだ。その車は無残な姿だった。そして屋根がまるでドーム状になっていたことだ。多分、左右からの揺れによってそうなったと思う。祖父母は無事だった。

次に父方の祖父母のところへ行った。母方の祖父母は先に横尾の家に行ってもらったらしい。父方の祖父母は火災の被害がひどかった長田に住んでいた。母方の祖父母の家と父方の祖父母の家は兵庫と長田なので、普段、車で行くと5分で行ける。しかし震災当時は4時間かかったそうだ。家に向かう途中、ふと横をみるとそこは歩道のはずなのに単車が走り回っていた。車道は車でいっぱいになっていたので単車に乗っている人は歩道を走ったのだろう。少し走ると新開地にある銀行の窓がほとんど割れていてブラインドが七夕の短冊みたいに風になびいていたそうだ。それから西市民病院を見たらガタガタに潰れていた。

ようやく父方の祖父母の家に着。祖父母はJR兵庫駅の近くにあるマンションに住んでいた。幸い家は被害がなかった。しかし祖母が左腕を深く切っていた。病院に行っても診てくれなかったそうだが、それは祖母よりも酷い怪我をしている人が多かったために診る余裕が無かったからだそうだ。祖父母を自分たちの車に乗せ横尾まで帰った。

両方の祖父母は1ヶ月くらい横尾の家で暮らしていた。自分は祖父母が大好きだった。日ごろ、あまり会わないのですぐ側に祖父母がいてくれることがすごく嬉しかったし安心した。たくさん大人たちに囲まれていて幸せだった。

5. 震災直後

父は震災当時、市バスで働いていた。当日の会社の車庫にいた父の同僚は「少し揺れたかな」と思ったらしい。そのバスは朝の5時59分に落合にある車庫を出発した。三宮方面のバスを運転している人が三宮駅に着いたときに初めて今回の地震の大きさに気づいたらしい。もう三宮駅はぐちゃぐちゃだったそうだ。「寒いからバスに乗せてください」と言ってきた人が何人も何人もバスに乗ってきて、ある意味バスジャックされたと聞いた。バスは暖かい。それは電車とバスを使って通学している自分にもよく分かる。しかしバスは大きな乗り物。当然、道路を走っている。そのバスにたくさんの人が乗ってきたらバスも勝手には動けなくなって立往生してしまう。その考えすら頭に浮かんでこないぐらい市民の方はパニック状態に陥っていたということだ。改めて兵庫県南部地震の大きさを知った。

震災の数日後、母の兄の結婚式があったそうだ。母は、母の兄とそのお嫁さんが割れている地面を歩いていたと言っていた。その話を聞いた時、とてもかわいそうだと思った。結婚式は人生で最も大切にしたい儀式。その儀式の前に地震が起こり、割れている地面を歩くなんてかわいそうだ。本当に不運としか言いようがない。

母がおにぎりを握り、水筒にお茶を入れて長田の公民館に持って行ったという話を聞いた。母がそんなことをしていたなんて知らなかったので驚いた。公民館に着き、おにぎりとお茶を入れた水筒を持って中に入っていくとおにぎりがすぐに無くなり、お茶もすぐに無くなって水筒が返ってこなかったそうだ。それほど救援物資の配給が遅かったのかなと思った。

6. 震災後

地震から数ヵ月が経ち、すこし落ち着いてきたときに家の近くの大きな公園が仮設住宅で埋め尽くされていた。その光景は今でもはっきりと覚えている。小さい頃からその公園で遊んでいた。しかし仮設住宅があるせいで遊べなくなってしまった。当時は「なんであそこに家があるん？」と思っていた。だが今、考えてみるとそこはただの建物ではなく家なのだ。その仮設住宅に住んでいる人にとってはそこが住む場所なのだ。震災で家がなくなったのかどうかは分らないが実際に住んでいるのだ。仕方がないことだ。その公園の仮設住宅は小学校を卒業するときまでであった。小学校の時、野球部に所属していた。しかし大きな公園は仮設住宅があるので小学校で練習するしかなかった。他の学年が試合のときは練習ができなかった。中学校に進学。中学でも野球部に所属した。練習の休みの日には小学校の野球部のお手伝いとして練習に参加していた。今でもそれはしている。もう仮設住宅はないので小学校とその大きな公園を使って練習している。練習場所が増えているので少し羨ましく思ったことを覚えている。

7. 環境防災科

2005年。兵庫県立舞子高校に入学。環境防災科の生徒として高校生活をスタートさせた。最初は阪神・淡路大震災のことに学んだ。自分が知らなかったことを多く学んだ。例えば消防の話だ。火災現場を鎮火し終えたところにたくさんの消火器が転がっていた。使い方が分らず、投げ込んだようだ。その話を聞いた時、使い方さえ知っていたなら消せた火事があったのでは...と思った。いざという時に誰もが使えるように訓練するべきだと感じた。

2004年12月23日。新潟県中越地震発生。兵庫県南部地震程の大きな地震ではなく、阪神・淡路大震災程の大きな被害はなかったが、死者67名を出した大きな地震だ。

その翌年の2005年のクリスマスシーズン、環境防災科の仲間と一緒に新潟県へ行った。そこでは集会所の周りの除雪作業を手伝った。除雪作業など今まで遊び程度しかしたことがなく、「余裕や」と思っていた。しかし除雪作業を続けていると体が重くなってきた。この作業を新潟県の住民の方たちは毎朝していると聞いたときは驚いた。そこでの除雪作業は苦しいものではなかった。それは周りに環境防災科の仲間たちがいてくれたから。1人ではできなかったことだと思う。次の年もまた同じようなシーズンに新潟へ行った。前の年とは姿が変わっていた。全然雪がなかった。すこし残念に思いながらバスに揺られていた。新潟県の小千谷高校と交流することができた。そこではお互いの体験を話し合った。自分たちは12年前、幼稚園の頃に兵庫県南部地震に遭った。12年前の記憶なのではっきりとは覚えていない。しかし小千谷高校の人たちはつい1年前に起こった出来事だったので鮮明に覚えていた。今後、小千谷高校の人たちには自分の経験を次世代に伝えていき新潟県中越地震のことを風化させないで欲しい。

新潟県中越地震と同じころ、世界ではとてつもなく大きな地震が起こっていた。2004年12月26日。スマトラ島沖地震発生。そのあとその地震が原因でインド洋大津波が発生した。この2つの災害で約23万人が亡くなった。23万人が亡くなった災害など今まで聞いたことがなかった。

2006年の夏休み。そのスリランカに行った。そこでは色々な人と交流し、環境防災科のことを発表し、津波の被害を見てきた。見たことのない光景ばかりだったので胸が痛くなった。そこで思ったことは国と国との間に壁はないということ。英語を話すことは苦手だ。実際にスリランカに行って、周りの人は英語で話しているのに自分はあまり理解できなかったという場面が多々あった。だがそれでコミュニケーションがとれなかった訳ではない。会話の時は先生や先輩の力を借りて、小さい子供たちと遊ぶ時は自分の知っている単語を使い、あとは身振り手振りでコミュニケーションをとることができた。遊び始めたら言葉は関係ない。一緒に遊んでいるだけで楽しかった。たった1つのボールで世界の子供たちと楽しく遊べるスポーツの素晴らしさをそこで改めて実感した。

つい最近の2007年3月25日。石川県能登半島地震発生。このような大きな地震が日本に起こったのは兵庫県南部地震から数えると7つ目になった。その前には大きな地震は10個あったようだ。単純計算するとあと3つ大きな地震が起これば、再び未曾有の大災害を引き起こすような大地震が起きてもおかしくない。備えをするなら今のこの時からしておくべきだ。少し遅いかもかもしれないが。自分も避難経路の想定、寝る場所が安全であるかどうかの確認、危険なら変更、寝床に履物を置くといったような身近な備えをしていきたい。

その年の春休み、石川県へ行きボランティアをすることになった。今回のような、地震が起きて間もない被災地に行くのは今回が初めてだった。被災者の方とどのように話せばいいのかわからなかったし、被災者の方は自分たちを受け入れてくれるのか不安があった。

石川県に到着。途中の車道は地震のせいかボコボコになっていた。家の屋根にはブルーシートが置かれていた。壊れてしまった家の中に雨が入らないようにしていると聞いた。このような光景はテレビでしか見たことがなかった。遠くではわからなかったが近くで見ると建物にも亀裂があって今にも倒れそうな家は何軒もあった。自分たちはそこで住民の方たちに聞き取り調査を行った。「今、困っていることはないですか」というような内容だ。それと一緒にボランティアセンターのピラを配った。そのピラにはボランティアセンターの住所と電話番号が記されていて、イベントの案内なども書いてあった。住民の中には「もう大丈夫だから」と言う人もいた。それは住民の方たち自身が作業を行ったという所もあれば、その前に別のボランティアが来たという所もあった。しかし住民の方は「来てくれてありがとう」と言ってくれた。あたたかいまちだなと思った。

その一方で「全部困っている」といったような所も何軒もあった。自分たちには何もすることができないので「ボランティアセンターに連絡してくださったら人を派遣するので」と言うしかなかった。そこで自分の無力感を感じた。

2日間ボランティアを行ったが、実際に作業を手伝ったのは2軒だけだった。そのうちの1軒では家の中の家具を元あった場所に戻す作業をした。その家にあがらせてもらい家の中の被害を見た。ぐちゃぐちゃというわけではなかったが、被害の大きさを物語るような様子だった。

災害はいつどこで起きるか分らない。その災害に備えるためには世界みんなが協力して災害に立ち向かうしかないと思う。みんなが一緒だったら怖いものは何もないと思う。災害というものはきっと神様が世界みんなにつながって欲しいと願って起こすもの。その神様の願いを踏みにじるわけにはいかない。人がつながることはとても大切なことだ。つながることで見えてくるものもきっとある。これからも人と人とのつながりを大切にしていきたい。

8. これから

こんなに大きな災害が何回も何回も起きたのだからもう災害は起こらない。というわけにはいかない。必ず災害は発生するもの。その災害にどう立ち向かっていくかということがこれからの全ての人の課題だと思う。災害は時・場所・人を選ばない。だから全ての人に「自分にも襲いかかってくるかもしれない」という意識を持って欲しい。

意識を持つと共に防災について考えて欲しい。どうすれば災害によって出る被害を減らすことができるのか。防災に正解、不正解はないので自分特有の防災というものを持って欲しい。その自分の防災知識を他の人に話すことが大切だ。自分の中で閉じ込めておくのではなく伝えることで他の人の防災意識が高まる。その一方で言うだけではなく人の防災知識を聞くということも大切だ。他の人の防災意識というのは自分が想像もしなかったようなことがあるかもしれない。その防災知識を聞いて改善すべきものを見つけさらに良い知識として自分に蓄えることができる。それを繰り返すことで自分に合った防災知識というものが生まれると思う。その防災知識を周りの人に伝えていくことが今後の防災に役立つと思う。

過去の災害の経験を記憶から無くしたい人もいる。悲しい過去を消し去りたい人もいる。しかしその経験を記憶から消してしまったら次の災害で多くの被害者が出てしまう。また悲しむ人が増えてしまう。辛いことを乗り越ればきっと新しい世界が見えてくる。だから自分自身が持っている経験をより多くの人に話そうと思う。その先にみんなが楽しく幸せに暮らしている未来が見たいから。

親から子へ、親から子へ...

神戸市垂水区学が丘
石川 雄太

震災体験は、僕自身の人生を変えたと言っていいくらい大きな存在になった。

【幼稚園 年少 5歳】

震災が発生する約1年前に今の一軒家の家に父親、母親、2歳年上の兄、5歳年下の妹、家族5人で引っ越してきた。引っ越す前の家はとても狭かったため、自分の身長より高いタンスや引き出しなどが、寝ている場所のすぐ近くに置いてあり、そこは危険地帯だった。引っ越してきた今の家では、寝ている場所にはタンスがなくなり寝る部屋は安全地帯となった。引っ越しせずにあのままの危険地帯で寝ていたとしたら...と思うと「ゾッ」とすることがある。

16日の夜は1日1本と決めていた大好きなアイスを食べ、いつもと同じように9時頃には2階の子供部屋で寝てしまっていた。僕は、早寝早起きで寝起きも毎日機嫌よく起きることができていた。17日も、いつもと同じように機嫌よく起きることができた。しかし、自分の回りはいつもと違っていた。今までに自分でも散らかしたことの無いくらいのおもちゃが散乱していた。寝る前のことを思い出しても、こんなにも自分では散らかしてはいないとすぐに分かるほどだった。まだ、この時点では何が起こったのかわかっていなかった。別の部屋で寝ていた両親が騒ぎ出してから、なんとなく、凄いことが起きたのだということが分かった。けれど、それが地震だということは全く分らなかった。その後、余震が続く中、父親が1階の様子を見に行こうとしたので、僕も付いて行こうとした。しかし、「お父さんが行ってくるから」と言う父親の頼りがいのある言葉で行けなくなったので「じゃあ僕がこの揺れを止めるから」と言い、すぐに息を止めて、できるだけ息をしないようにしていた。当時、地震という言葉をもっと聞いたことがなく知識もなかったため、なぜ起こるかなどということは全く知らず、自分が息をしている間は揺れて、自分が息を止めている間は揺れが止まるものだと思っていた。なぜあの時その様な言葉が自然に出てきたのか、今でも時々すごく不思議に感じることもある。父親の声で、僕も1階にあるリビングへ行った...。リビングは、誰かが暴れたように、グラスや食器などが粉々に砕け散っていた。いつも家族みんなで一緒に御飯を食べていたテーブルの上も、棚の上から落ちたグラスや食器類などによってゴチャゴチャになっていた。天井にある蛍光灯も地面に落ちて割れていた。今でもあの光景は忘れることができない。それに、もう2度と見たくないと思うような光景だった。震災が発生するまで、当たり前のように生活してきた自分たちの住んでいた場所が地震というまったく出会ったことのない、他人のようなものに壊されすごく腹が立った。

地震が発生してから1時間も経たないうちに、父親は僕たち家族を置いて自分の職場へ出勤して行ってしまった。消防士としての職務を果たすためであった。その時の、僕自身の父に対する気持ちとして、『この人はなぜ家族を置いてまで仕事に行くのだろう』という疑問と腹立たしさを感じていた。

僕たち家族は、父が出勤していった後に、家から歩いて5分ほどの祖父母の家に避難した。祖父母の家まで歩いている途中、空の景色はとても薄暗く、いつもよりも寒く感じた。祖父母の家も全く被害はなかったとは言えないが、食器や物置など倒れるものは、ほとんど何も置いていなかった、5畳ほどの被害のない部屋があり、そこにコタツを置いて父親を除く家族6人で避難生活を送った。その部屋にあった唯一のテレビに対して、スイッチを押してもつかないと分かっているのに、何回も何回も気が狂ったように押していた。何もすることがなく、家族間の会話もなく、祖父が別の部屋から持ち出してきたラジオによる被災状況が部屋で流されているだけであった。朝早い時間帯から何も口にしていない僕に祖母がくれたソーダ味のあめは今でも忘れられないほどおいしかった。今でも、そのソーダ味のあめは好きで、食べるたびに当時のことを思い出している。

母親に「父親は当分帰ってこないだろう」と言われていたが、その日の夜には祖父母の家に帰ってきていた。大きな水色の容器に満タン入った水を2つ持って帰ってきてくれていた。僕はすぐにその水を飲んだ。その水で、晩御飯にカップラーメンも食べた。顔を洗うこともできた。でも、お風呂に入れるほどの水はなかった。父親が持って帰ってきてくれた水には本当に感謝した。帰ってきた父親は、とても疲れた顔をしているように思った。でも、いつもと同じようにやさしいままで、帰ってきてからもい

つもと同じように接してくれた。その次の朝にはまた父親は出勤していった。それから、2~3日は帰って来なかった。

4日間ほどお風呂に入っていないと、何もしていないのに、体がベトベトになって気持ちが悪くなってきていた。そこで、父親が2~3日ぶりに帰ってきたとき、車に乗って西区にあるお風呂屋さんへ行った。家のお風呂は壊れていて、水も出せなかったため、次にお風呂に入れるのがいつになるのだろうと少し不安になりながら入った。その時のお風呂はすごく気持ちがよくて、地震があったことを一瞬でも忘れさせてくれるほどだった。

震災から数日経ったある日に、東京に住んでいる、父親の兄である伯父が救援物資を送ってきてくれた。カップラーメンやお菓子などがたくさんダンボールに入れられていた。家族みんなが、本当に感謝していた。僕も心の底から嬉しかったことを覚えている。その時、家族のつながりの大切さを実感した。

それから数週間が経ち、ライフラインもすべて復活し、自分たちの家で生活できるようになった。それでも父親は毎日忙しそうに出勤していった。

いつも当たり前のように、日常生活でしていたことが急にできなくなることは、辛いことであり、自分たちのみじめさを感じさせられるものであると思った。阪神・淡路大震災では、普段の生活でどれほど周りの人たちに支えられて生きているかを感じさせられた。

【幼稚園 年長 6歳】

震災当時、僕の兄は小学2年生だった。兄の通っていた小学校は、地震によって倒壊してしまっていた。自分たちの学校で授業を受けることができないため、近くにある別の校区の学校に毎日授業を受けに行っていた。近くといっても小学生にとってはかなり遠い距離だったと思う。

それから、半年ほどで自分たちの学校の運動場にプレハブの校舎ができ、兄はそこで授業を受けることができるようになった。学校の運動場にプレハブ校舎が建ってしまったため、体育や運動会をできるスペースはなかった。運動会は、近くの中学校の運動場を借りて行われた。学校には必ずあると言っていいほどのプールもなかった。プールがあった場所の上には、給食室が建てられていた。夏にあるプールの授業も中学校に行き、プールを借りて授業を行っていた。

小学生の頃は、あまり物事を考えずいろんなことをプラス思考で考えるため、プレハブ校舎での学校生活を行うことができたのではないかと思った。

【小学校 1年生 7歳】

幼稚園を卒園して小学校に入学した時、まだプレハブ校舎だった。初めての小学校での生活だったため、何もかもが新鮮でプレハブ校舎でも十分に楽しくて嬉しかったのを覚えている。プレハブ校舎は、歩くとたびに床が軋んでいた。トイレは少し汚かった。兄から聞いていたとおり、プールの上に給食室が建てられていた。給食室の床は少し高いように思った。兄と同様に、中学校で運動会を行ったり、プールの授業を受けたりということがあった。小学校生活のすべての出来事が初めてだったため、何も不思議に思うことはなかった。プレハブ校舎での学校生活が普通なものだと感じるようになっていた。

【小学校 2年生 8歳】

プレハブ校舎での学校生活を1年間過ごしてきて、ついに新校舎が完成した。プレハブ校舎での学校生活しかしたことがない自分たちにとって、大きな新校舎はとても感動的であった。教室を歩いても床は軋まない、トイレはとてもきれいで、給食室もきっちりとしたスペースが確保されていた。ウサギ小屋やニワトリ小屋など見たことのないモノがたくさんあった。ここからまた新しい学校生活を過ごしていくと考えたらとてもわくわくした。

それから数週間で運動場にあったプレハブ校舎も取り除かれ、運動場が姿を見せた。初めて自分の学校の運動場の姿を見た。新しい鉄棒、新しいジャングルジム、新しい体育倉庫。どれも中学校や、別の小学校でしか見たことのない物ばかりであった。プールの上にあったプレハブの給食室も取り除かれた。そこには、本当に25mのプールがあった。運動会も体育もプールの授業も自分たちの学校で行うことができた。何をしても自分たちの学校で出来るようになった。

震災があったからこそ新校舎での生活を送ることができた。プレハブ校舎での授業といった、めったにできないような貴重な体験をさせてもらえることができた。この体験を、絶対に忘れないという思いでいっぱいである。

【小学校 6年生 12歳】

プレハブ校舎での入学から早々と6年が経ち新校舎での小学校生活もあと1年間だけとなっていた。そんなとき、僕の父が、東京にある消防大学というところに消防の勉強をするために単身赴任することになった。その時また、震災の時の父に対する疑問と腹立たしさを思い出してしまった。なぜ、こんなに何度も家族を見捨てて仕事をしに行けるのかということも思った。今考えると、父もよく考えてのことだったのだと思う。

それから半年間、父親のいない生活が続いた。たまに家に帰ってくることもあった。こっちから東京に行く機会が一度だけあった。父親は、東京の観光案内をいろいろとしてくれた。東京のことをたくさん知っていたので、本当に東京に来て勉強をしているのか、という疑問も持った。この時は、楽しめたという理由で父が東京に行ってくれてよかったと思っていた。

父の単身赴任生活も終わり、消防大学を卒業して帰ってくる日が来た。全国の消防の中から呼ばれた消防官が消防大学に集まって勉強すると聞いていて、凄いことだということは何となく思っていた。しかし、帰ってきて早々、その中で優秀賞を取ったということを知り驚いた。その時、父の消防に対する気持ちがとても強いのだと感じた。

そんな父親の背中を見ているうちに、阪神・淡路大震災以降の消防に対するイメージが少し変わってきて、自分自身も消防という仕事に少し惹かれていくような気がした。もし、父が東京に行っていなかったらこんな気持ちにはなっていなかったと思う。

【中学校 3年生 15歳】

環境防災科という学科があると知ったのは、中学校1年生の終わりごろだった。阪神・淡路大震災を教訓に創られた学科と知り、少し興味を持てる部分があった。僕自身、阪神・淡路大震災では、すごく恐い思いをしたけれど、自分以外の人たちがどのような震災体験をしてきたのかなど、興味があり、知りたい部分もたくさんあった。そんな思いがあったために、環境防災科に入ろうとしていたけれど、最終的に決めた理由は、震災当時の消防についての活動が学べると思ったからである。消防について学べれば、父親の気持ちも少しは分かる様になるかもしれないと思った。

環境防災科は推薦入試だったので面接があった。面接の時は、自分自身の震災体験や何を学びたいかをしっかりと伝えようと思っていたけれど、伝えることができなかった。しかし、合格することができた。相手に気持ちをしっかりと伝えることの大切さを学ぶことができた。

【環境防災科 1年生 16歳】

環境防災科に入学してからは、震災当時の話をたくさんの人たちからいろいろと聞くことができた。関西電力、神戸市水道局、大阪ガスなど当時のライフラインの状況の話を詳しく聞かせてもらい、周りの地域の被害と比べると、自分の家の被害の軽さに気がついた。自分よりも、もっと苦労した人がいたと知り、考えさせられた。

神戸市消防の方の話を聞き、消防士になりたいと思った。震災当時、神戸市全体の被害があまりに大きかったため、消防という組織が十分に機能することができなかった。人員不足、機材不足、情報不足、水不足などが原因だった。1枚の写真を見せてもらった。そこには、消防士が少しだけしか水の出ていないホースを片手に、激しく燃えている建物に1人で消火活動を行っている姿が映っていた。そんな悲惨な現実があったことなど、考えもしなかった。自分の家族を置いてまで、災害現場に行き、助けを待っている人の命を助けることができなかった消防士にとって、人の命を救うことが目的の仕事をしているはずなのに、救えることができた命を救うことができなかったということは本当に辛いものだと思う。

僕の父親も、震災当時出勤していったときに、瓦礫で人が埋もれているという災害現場に行き、6人ほど瓦礫の中から出したけれど、ほとんどの人が生きてはいなかったと聞いた。

辛かったり悲しかったりしたのは、残された家族ではなかったのではないかと思うようになった。本当に辛いのは、命を助けたいと思って災害現場に行き、助けられたかもしれない命を目の前で助けられなかった消防士である父親だったのではないかと考えるようになった。そんなことを今まで考えもせず、震災当時の父親の消防士としての仕事の活動に対して、不審に思っていた自分が少し恥ずかしくなった。命が助かっている自分よりも、生死の境にいる被災した人たちの方がもっと辛い。たくさんの命がなくなりかけているかもしれない災害現場に行き、1人でも多くの命を救いたいと思うのは消防士としても、人間としても当然のことである。僕自身も、震災当時に父親である消防士と同じ立場であったなら、同じ行動をとっていたと思う。

今こうして、父親の気持ちを理解できることができたのだから、自分たち家族が父親のために強くならなくてはならない。災害時には、家族のことを心配せず、救助活動を行ってもらえるようにしたい。そして、1人でも多くの命を救って欲しい。

【環境防災科 3年生 18歳】

高校3年生になって、1冊のアルバムを見た。それには、震災の年の写真がたくさん貼られていた。震災当時、まだ赤ん坊だった妹の写真があった。妹は、震災当時のことは何も覚えてはいない。今は元気に育っている。これからは、阪神・淡路大震災という災害があったことを全く知らない世代が増えてくる。たくさんの犠牲者を出したにも関わらず、何の反省もしないでこれから生きていくのはだめだと思う。過去の災害から学べることはたくさんある。だからこそ、過去の災害を風化させはいけない。僕は、阪神・淡路大震災の経験が無駄にはしていきたくない。震災があったからこそ、自分の夢を持つことができた。それに、父親に対しても消防士に対しても強く考えることができた。震災を経験した時の記憶がある最後の世代である僕たちが、今後どれだけ震災を知らない世代に伝えて真剣に考えてもらうかということが大切だと思う。

【これから...】

親から子へ、親から子へ...。僕が父親から学んできたことと同じように、僕も自分の後々の子供へ伝えていきたいと思う。僕自身が、父親と同じ消防士になり、子供に、命の重さを理解して生きていって欲しいと思う。災害時には、命が助かっている自分より、何倍も辛い人がいるのだということや、消防士の家族から強くならなければいけないということだけでなく、何らかの形で何かを親から感じていってもらい、そして、その子がまた大きくなって親になったとき、子供に何か伝えていき...。これを続けていくことができればと思う。伝わっていくことが阪神・淡路大震災のような震災のことなら、震災が風化することはなくなるかもしれないし、防災のことなら「家系的な防災」ができるのではないかと思う。何が伝わっていても、親から子へ伝えていくことが大切だと思っている。

この3年間、防災を学んできて、自分なりの防災に対する考えがすごく大きなものとなった。今は、過去の災害を風化させないことの大切さ、そして、震災を経験していないこれからの世代の子供たちへ語り継いでいきたいという気持ちでいっぱいだ。

私の知らない記憶

神戸市垂水区五色山
石田 夏樹

何でかなあ...こんなにも、阪神・淡路大震災のことを思い出すのが難しいとは思っていなかった。当時私は5歳。時間が経つにつれて、記憶が薄れていくのは知っていた。文章を書きながら12年前のことを思い出す。当時の記憶が頭の中を巡り、鮮明ささえ感じられた。が、記憶は印象的だったことだけを思い出し、その後は色あせていった。断片的にしか残っていない私の記憶。自分が思っていた以上に風化していた。

「ドーン！！」下からの強い揺れだった。私の体は30センチ位地面を離れ、次の瞬間には母が私を守るために覆いかぶさっていた。地震発生直後、家にいたのは母、弟、私の3人だけだった。父は仕事に行くため早朝から出掛けていた。揺れがおさまり2階で寝ていた私たちは1階へ下りることになった。また地震が起こるのではないかと脅えた。前日まで上り下りしていた階段が、長く急に見えた。一段一段震える足で下りた。1階に着き、外に出ることになった。近所の人たちは既に集合していた。皆いつもの様子と違った。落ち着きがなく、そわそわしていた。隣の家のお兄さんが大声で叫んだ。

「皆さん落ち着きましょう。家族は全員そろっていますか。」

お兄さんの声で近所の人たちは少し落ち着きを取り戻した。

少し時間が経ち、近くに住んでいた母の兄（おっちゃん）が私たちの様子を見に来た。母は兄に会ったことで、大分気が楽になったようだった。懐中電灯を取り出すために母は家の中に入って行った。私も後を追いかけて家の中に入った。食器棚の戸が開き、皿がバラバラ散乱していた。母が私の様子に気が付き怒鳴った。

「危ないから入ったらアカン。」

間もなく懐中電灯を持った母が家から出てきた。スイッチを押すが、電気が点かない。電池が切れていたのだ。当時、神戸には地震は起こらないと信じられていた。そのため私の家では、地震に対する備えは全くと言ってよい程行っていなかった。おっちゃんの家に行くことになった。おっちゃんの家は私の家から徒歩5分位のところにあった。電気が点かないためロウソクで過ごした。誰も何も話さず沈黙の時間が続いた。

朝日が昇り切った頃、父が私たちを迎えにきた。父は興奮気味に自分の体験を話し始めた。地震発生直後、父は三宮駅にいた。大きな揺れとともに崩れ始めた三宮駅。父のいた場所では天井が落ち、悲劇は起きた。父の2メートル先を歩いていた女性が、天井の下敷きになり亡くなったのだ。まるでスローモーションを見ている様だったと言う。戦場化した三宮には、瓦礫の下敷きになった人が大勢いた。崩れた建物の下からは、生きていた人が助けを求める声がした。しかし、誰もその人を助けることは出来なかった。父は仕事先から車を借り、家へと急いだ。地震直後は電車もバスも動いていなかったため、とても助かったと言っていた。父は三宮から垂水までの運転中、何度も「車に乗せてください」と頼む人を見たそう。中には血まみれで重症だと分かる人も大勢いたという。が、父は車を止めなかった。助けを求める人の表情は、皆殺気立っていて、車を止めると引きずり降ろされ車を奪い取られると思ったからだ。話をする父の顔には、恐怖の色が見えた。

おっちゃんの家から自分たちの家へ帰ることになった。家へ着き私が第一にとった行動は、テレビを点ける事だった。大好きだったアニメ『ビックリマン』が見たかったのだ。しかし、電気が回復していなかったためにテレビは点かなかった。今考えると、とても能天気な行動だったと思う。が、幼かった私は地震が起こり、今自分の周りで何が起こっているのかということを理解出来なかったのだろう。何が起きたのか分らなかった私とは裏腹に、父と母は生きていくために試行錯誤していた。水道をひねり、水の確保を行った。水道からは赤水が出ていた。いつもなら捨ててしまう水だが、父と母は何か利用できるのでないかと相談していた。水と関連して私の記憶に残っているのが、家ではお風呂を沸かせないために銭湯へ行ったことだ。銭湯でも全ての水道からお湯が出るわけではなく、多くは冷たい水が出てきた。そのため、お湯を湯船から何度も汲んできたのを覚えている。後に母から聞いた話では、母は1歳になる私の弟（友樹）と一緒に入っていた。まだ幼い弟は、母から離れることが出来なかった。それを見かねた見ず知らずの奥さん達が、何度も何度も母のためにお湯を汲んできてくれたのだ。この

話をしている母の顔は、いつも以上に優しく見えた。

弟は生まれつき重度のアトピーだった。幼い弟は痒いのを我慢できるはずもなく、体が真っ赤になっても掻くの止めなかった。手には、皮膚を傷つけないため赤ちゃん用の手袋をしていたが、直ぐに外してしまう。弟の体は、いつも真っ赤だった。両親は、痒みを抑えるために1日に2度着替えさせていた。が、水が出ず洗濯物は溜まる一方。震災前出来ていて当たり前だったことが、出来ないことへ苛立ちを覚えた。水が出るようになってからも苦悩は続いた。銭湯に行かない日は、ガスコンロを使って湯を沸かした。何度湯を沸かしても浴槽に半分以上お湯をはることは出来なかった。同じ作業の繰り返しで両親は飽き飽きしていた。

気が付くと私の家には父方の家族(祖父・祖母・父の妹・妹の旦那さん)が来て一緒に生活していた。祖父と祖母は長田に住んでいたが、比較的被害は少なくて済んだ。家での母の様子は、祖父・祖母に大分気を使っているようだった。ストレスも溜まっていたと思う。

ある日、私は缶ジュースを飲みながらプルタブを指で弾いて音を鳴らし遊んでいた。すると祖父が、
「何の音や!!」

と驚いたように叫んだ。母が事情を説明し祖父は落ち着いたが、小さな物音にさえも敏感になっていたのだろう。12年経った今、母に震災時の私の様子を聞くと、特に何も無く落ち着いていたと言う。でも私の本当の気持ちは落ち着いていたのではなく、誰も遊んでくれなくて寂しかったのだ。両親は生活を支えるために一生懸命だったし、祖父母も長田の家が気になるのかピリピリしていた。母の暇を見つけて甘えようとするが、幼い弟が母を奪っていく。「なんで友樹ばかり…」5歳の私は、この思いを口に出す事無く、ずっと寂しい気持ちを隠していた。弟が生まれた時と同じ気持ち。それまで一人っ子で母に甘えたい放題だったのに、出産が近付き家には母が居なくなる。誰も居ない部屋で、声を殺して泣いた。弟が生まれてからも私はヤキモチを妬き続けた。が、次第にお姉ちゃんになったということを実感し始め、ヤキモチを妬くことは少なくなっていた。そんな時に地震は私を襲った。いつもと違う毎日に不安を感じ、心配して欲しいのに母は私に構ってくれない。大人たちは皆忙しそうで声を掛けられない。毎日が退屈で退屈で仕方なかった。

長田の祖父母の家が安全であることを確認し、父は実家に祖父母を送り届けた。長田に父の過ごした思い出のまちは残っていなかった。幼い頃走り回った商店街は跡形も無く、友人の家も灰と化していた。

「今まで築き上げてきたものが地震のせいで一瞬にして失われた。財産、建物、命、人間は強くない」父の言葉である。現在父の実家の周辺には、新しい家が建てられている。しかし、家と家の間には空き地が目につく。父は実家に帰省するたびに、

「この町も寂しなったなあ。」

と呟く。大きく町の風景が変化したのは長田だけではない。比較的被害の少なかった垂水にも仮設住宅が立ち並び、小学校低学年の間まで残っていた。小学生の私は、仮設住宅であることを知らずによく遊びに行った。仮設住宅の周辺には広場があり、犬の散歩場所として市民の人たちから利用されていたのだ。小学校に入学した頃の頃は仮設住宅で埋め尽くされていた場所も、月日が進むにつれて姿を消していった。そして、気がついた時には全ての仮設住宅が回収され、今では地域の小さなお祭り会場として使用されている。しかし、お祭り以外の日は誰も訪れず草が生い茂って寂しい場所になっている。12年経ち、兵庫の町は信じられないほど復興した。しかし、この場所には未だ阪神・淡路大震災の名残がある。

地震から何日か経って、父の妹が長田の区役所へ書類を取りに行くというので、父は付き添って行くことにした。当時区役所の周辺は治安が悪く、女性1人で行くには危ない雰囲気だったそうだ。区役所は避難所になっていた。中に入ると、異様な臭いが鼻についた。汚物の臭いだった。

小学校の思い出の1つに、防災教育を受けたことがある。記憶は薄れていて断片的だが、小学校1年生か2年生の時だったと思う。『しあわせ はこぼう』という教材を使い授業を行った。『しあわせ はこぼう』の中で最も印象的だったのは、「かいじゅうがおそってきた」という文章だ。このページは、町のあちこちから火事によって煙が上がっている風景を背景として使っている。青いはずの空が煙によって灰色に染まり、暗い印象を与える。小学生の私は自分の町を撮影したものだと知らずに「かいじゅうがおそってきた」を朗読した。「かいじゅうだ かいじゅうがおそってきた みんな ふみつぶされる かいじゅうは 何を考えているのだ かいじゅうの バカーツ」なぜか分からないが、私はこの文章に引き付けられた。何度も何度も読み返したのを覚えている。授業で先生が「今この場所で地震

「が起こったらどうしますか」「トイレで起こったらどうしますか」「登下校中に起こったらどうしますか」という質問を出した。私は真剣に考えた。考えれば考えるほど不安になった。私の両親は共働きで、2人が家に帰ってくるのは日が暮れた後だった。「お父さんやお母さんが居ない時に地震が起こったらどうしよう。私は一人ぼっちになってしまうのではないか。」こんなことを考えた。当時は、地震後離れ離れになった時の待ち合わせ場所などは決めていなかった。阪神・淡路大震災を経験しても私の家族は地震に対する備えを何もしていなかった。何もしていないというよりも、何も変わっていないのだ。しかし、私の家にも家族防災会議が開かれる日がやってきた。きっかけをくれたのは小学校の授業だった。「家族の人たちと避難場所、離れ離れになった時の集合場所を決めてきなさい」という宿題が出されたのだ。家族全員がそろって話し合った。私の思っていた以上に家族防災会議は白熱したものになった。誰かが一方的に話を進めるのではなく、皆で意見を出し合い石田家の防災計画が出来上がった。

ある日、私の記憶の途切れた部分を母によって埋め合わされた。母から聞いた話は震災時の仕事に関することだ。母は震災前から大阪の会社に勤めていたため、地震直後は交通機関の関係で大阪までは通えなかったそうだ。そのため会社が考慮して、家に近い支社へ当分の間は通っていた。父はというと、地震により失業していた。この話を聞いた時、私は直ぐには信じられなかった。父は現在、庭師の仕事をしている。自分の仕事に誇りを持ち、辛いという言葉は口に出したことはない。私が小学生の時、学校の宿題で「なんで庭師になったん??」という質問を父にしたことがある。父は「庭師になりたかったから」「バカボンのパパに憧れたから」と答え、私の期待する「カッコいいおとうさん」の答えは返ってこなかった。「庭師になりたかったから」「バカボンのパパに憧れたから」というのは決して嘘ではないと思う。けれど、本当の理由を知った時は驚きを隠せなかった。震災が原因で失業した人がいることは知っていた。が、自分の父がその1人であることを信じたくなかったのだ。変なプライドだが、私の本当の気持ちである。父は時折こんな言葉を口にする。「お客さんの『ありがとう』が、何より嬉しい。人に感謝される仕事に就けて幸せや」父の仕事は決して楽なものではない。夏は真っ黒になるまで働き、冬は何枚も重ね着をし、熊のような体形で仕事に向かう。恥ずかしいので口に出したりはしないが、自分の仕事を大事に思い、弱音を言わない父を心の中では誇らしく思っている。震災は、悲劇や苦痛を多くの人々に与えた。それと同時に父へ庭師という転職を与えた。そんな父の跡を追うように、震災時1歳だった弟が庭師になろうと父と一緒に仕事に出かける。

偶然なのか必然なのか、私は今、舞子高校の環境防災科で勉強している。中学生の頃は、全く阪神・淡路大震災に無関心だった。1月17日が来てもテレビの報道を見て思い出す始末だった。その私が環境防災科に入学したのは、2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震が大きく影響している。中学3年生の私の夢は、JICAが派遣している青年海外協力隊になることだった。受験生になり、国際協力が学べる学校を探していた。いろいろな学校を回る中で環境防災科に出会った。中学3年生の私は、普通科に進むよりも専門学科に進むことで、協力隊になるために必要な専門知識をつけたいと考えていた。「防災」あまり耳にしたことがない言葉だったが、専門知識には持って来いだと思った。そんな矢先、インドネシア西部でスマトラ島沖地震が発生。テレビや新聞の情報機関は、「防災教育が広まっていなかったことが被害の拡大につながった」と報道した。地震が起こったら高台へ逃げる。日本人なら当たり前のよう知られていることが、開発途上国では知られていない。助けられる命が、たくさん奪われた。津波が押し寄せる映像を見ながら、私は決意した。「青年海外協力隊になり、防災教育を広めよう」同じ過ちを繰り返してはいけない。私が防災教育を広めることで、少しでも守れる命を増やしたい。私はこの思いを胸に、環境防災科に入学した。そして今も、青年海外協力隊になるという夢は変わっていない。

環境防災科で学ぶようになり、私自身にいくつかの変化があった。1つ目は、阪神・淡路大震災があった1月17日を大切に考えるようになったことだ。テレビや新聞で阪神・淡路大震災のことが流れる度に言葉には出来ない感情が湧きあがってくる。今年も阪神・淡路大震災のことが忘れられていないと喜びの気持ちがある反面、眼には涙が浮かぶ。その涙は、嬉しさの涙でも、悲しみの涙でもない。今までいろいろな人に出会い聞いた震災の話が頭をよぎり、知らず知らずのうちに目頭が熱くなっているのだ。『しあわせ運べるように』が震災を体験していない子供たちによって歌われる。私も小学生の時に知らず知らずのうちに覚えた曲だ。当時は歌詞の意味を考えたことはなかった。ただ、毎年1月17日が近付くと学校中にこの曲が流れていたのを覚えている。12年経ち、『しあわせ運べるように』を歌う機会はパタリと無くなってしまった。しかし、12年前の私が知らなかったことを今の私は知っている。それは、『しあわせ運べるように』には元気や勇気を与える力があることだ。私は環境防災科に入ってから、新潟県中越地震の被災地へボランティアに行く機会があった。新潟県で行ったボランティアは、仮設住

宅でクリスマス会を開くというものだった。クリスマス会では、ゲームやクリスマスの歌を皆で歌った。そして最後に、神戸からの贈り物として『しあわせ運べるように』を歌ったのだ。『しあわせ運べるように』を聞いたクリスマス会の参加者の中には、一緒に歌ってくれる人や涙を流してくれる人がいた。私は、その時初めて『しあわせ運べるように』の歌の素晴らしさを知った。被災地に大きな変化をもたらしたわけではないが、歌を歌うことで私たちの気持ちを伝えることが出来た。「ありがとう」という言葉をもらうことが出来た。私はこの歌で、もっと多くの人達を勇気づけたいと思った。それと同時に、『しあわせ運べるように』が忘れられることがないように、これからもずっと歌い続けていく必要があると感じた。

2つ目の変化は、私の性格に関することだ。自分で言うのは何だが、私は中学生の時ひねくれ者で、どこか冷めた性格をしていた。周りの環境が高いプライドで出来上がっていて、自分たちと価値観の合わない人は排除していく。他の意見を認めず、違うと言えない世界で私は中学生時代を過ごした。ずっと息苦しさを感じていた。そこで私のとった行動は、自分の周りに壁を作ることだった。「あなた達とは考え方が違うから、近寄らないで」というオーラを常に張っていた。これが原因かどうかは分からないが、いじめの対象にもなった。人を疑いの目で見て生活する自分が大嫌いだ。人を見下した様な考え方をする自分が嫌だった。中学を卒業して2年経った。「夏樹、入学した時と比べて性格丸なった」と友達に言われる。私自身も、その様に思う。入学当初は、直ぐに性格を変えられるはずもなく、冷たいオーラを出し続けていた。が、自分でも気がつかない間に素を出している私がいた。変な気を張って、人を寄せ付けない私はバカだと思った。私がこのように感じるようになったのは、環境防災科で学ぶ中で、いろいろな考えを持つ人たちと出会い、意見を交換し合ったこと、被災地を訪ね人間の温かさを感じられたことが大いに関係している。阪神・淡路大震災では、全国から大勢のボランティアさんが私たちを心配して助けに来てくれた。近所の人たちは自分たちも大変なのに私の家族のことを心配してくれた。人間は誰だって優しく温かい心を持っている。私は今まで人の嫌な部分ばかり探して、その人の持っている優しい部分を探そうとしていなかったのだと思う。私の考え方「人間誰にだって好き嫌いはあるねんから、1人や2人嫌い合っても別にいいやん」というのは少し間違っていたのかもしれない。今の私の考えは、「人間誰にだって合う合わないはあるが、その人の良い所は忘れないでいたい」というものだ。最近の私の口癖「優しい人になりたい」という言葉の通りに優しく温かいオーラを出せる人になることが今の私の目標だ。

長々と『語り継ぐ』を書きながら、「記憶が薄れてもう書けない」と何度思ったか分からない。家の中を探し回っても、当時の家族の写真や日記は残っていなかった。しかし、父や母の記憶の中には、はっきりと阪神・淡路大震災のことが記されていた。『語り継ぐ』は私に父や母と震災の話をする機会を与えてくれた。私が聞かなければ、一生父や母の記憶の中で眠っていただろうということも聞き出すことが出来た。私の知らない所で父は苦杯を喫していた。母は、震災を乗り越えられたのは子供たちがいたからだと言ってくれた。私を守り生かしていくために、一生懸命になって育ててくれた。『語り継ぐ』の最後に父母に感謝の気持ちを書こうと思う。

お父さん、お父さんが震災の時どんな体験したのか初めて聞いた時は、すごく驚いた。1月17日に三宮にいたり、女性が目の前で亡くなったり、お父さんが今生きてるのは奇跡なんかと考えたこともあった。今、庭師として剪定してるとことか、子どもたちにサッカー教えて生き生きしてるお父さんを見て凄いなあと思うことがいっぱいある。自分の好きなことを貫き通すお父さんは、私にとってカッコいいお父さんやで。お父さんの、「今出来ることは、今のうちにせなアカン。後になって出来ひんで後悔したらアホらしい」という考え方好きやで。お父さん、生きててくれてありがとう。これからも、お父さんらしくいてください。

お母さん、1月17日お父さんがいない中で、私と友樹を一生懸命助けてくれてありがとう。お母さんは忘れてるかもしれないけど、皆が外に避難した後も懐中電灯を探すために1人で家に入っていく姿は、カッコよかったです。この前、震災の話をしてくれた時に「震災を乗り越えられたのは、あんた達がおったから」と言ってくれた時は、すごく嬉しかったよ。私もお母さんがいたから、今まで生きてこれたんやと思う。何かに悩んで辛い時は、いつも話を聞いてくれた。何も言わないでも私が悩んでるの知ってた。前にも言ったことあるけど、私は将来、お母さんみたいなお母さんになります。ありがとう。

忘れかけた記憶

神戸市兵庫区菊水町
因幡 顕

本当に僕たちの住んでいるこの神戸のまちにあれほど大きなつめ跡を残す地震が起きたのだろうか。そう疑ってしまいたくなるほど、今の神戸は様変わりし、同時に記憶も時間とともに薄れていっている。

1月17日早朝、小刻みな揺れの後に下から突き上げるように大きな揺れが襲った。僕は8畳ほどの部屋で家族と寝ていた。5時46分、それは父がすでに起きている時間だった。季節は冬、ガストーブが部屋を暖め出したころその揺れが我が家を襲った。何秒間かの空白があったのだろう。しかし地震の揺れそのものの記憶はもうなくなってしまった。家族の存在を確かめるために発せられた『たっくん（兄）大丈夫！？』『お父さん！！』という普段聞きなれない母の緊迫した声は、幼い僕の恐怖をよりいっそうかきたてるものだった。当時5歳の僕に、地震が来たのだという意識があったのだろうか。しかし地震の揺れがおさまってもなお、机の下に布団を頭からかぶり、動けなくなっていたという僕自身の記憶から、相当の恐怖であったのだろうと今になって思う。さらに地震発生から1週間近く一言もしゃべらなかつたという話も聞いた。

神戸やその周辺に住んでいた何十万人もの人が同時にこの恐怖に襲われたのだと考えると、恐ろしいものである。後から聞いた話で、父は地震の揺れに驚いてそのまま身動きも取れず固まったままだったそうだ。兄は本箱が倒れてきたが、ケガはなく無事。姉は、あの状況でも寝ぼけていてイマイチ状況をつかめていないようだった。母は、真っ暗な家の中で1人ずつ安否確認のために名前を叫んでいたそうだ。

辺りは暗く、もう2度と明るくならないんだと感じていた。どれくらい時間が経ったか分らなかった。

避難所に行けば『大丈夫ですか！？どうぞ』と被災者を温かく迎えてくれるものだろうと思っていた。そして、家族全員で自宅から南に300mほど行ったところの小学校へ、家財道具もそのまま放置し、家を飛び出した。しかしそんな予想を裏切るように、小学校の門には鍵がかかったまま何時間も待たされ、時間と共に周りには多くの避難者の方が集まるようになってきた。季節は冬。地震による恐怖を味わった体を刺すように、冷たい風が吹いていた。体一つで飛び出してきた家族を温かく迎えてくれる場所など、どこにもなかった。今考えるとそれは当然のことである。神戸の大部分が被害を受けた状況で、避難所開設のために一番に駆けつけられるわけがないのだから。半日だけその避難所になった小学校にいたようだがその記憶もない。その間も校舎には鍵がかかっていたため校庭での避難となった。地震から数時間しか経っていないため、救急車も消防車の音もなく、1台のラジオが『淡路を震源とした地震...』と報道してただけだった。恐怖のあまり会話は少なく、ただラジオが鳴っているだけという状態だったそうだ。多くの被災者がこの小学校に集まっていたが、異様な静けさとラジオの音だけが辺りを包んでいたという様子に、人々の不安が伝わってきた。

その後、開校されるのを待つことなく、僕たち家族は母の両親にあたる祖父母の家に移動した。家から南西に500mほどの所にその家はある。幸いにも祖父母の家の倒壊は免れたものの、水道・ガス・電気ともに使えなかった。そのためろうそくを立て、親戚を含めた3家族が集まって生活をしていた。およそ3日間ほどであろうか、その状態が続いた。もちろんその間も余震は続き、その度に『おお！！来たぞ...』とまるで地震を待っているかのような状態だった。いつ余震が来るか分からないため、ろうそくのの前には必ず誰か見張りがいて、いざという時は消せるよう準備をしていた。僕は5歳ながら小学校へ配給の水をもらいに行ったりしていた。近くには小さいが立派な熊野神社があった。その鳥居も簡単に落とされていた。母はその鳥居が崩れている光景が一番ショックだったと話してくれる。その後、被害が小さかった名谷のあたりの親戚の家で生活をするようになった。しかし、やはり『迷惑ばかりかけていられない』と常に感じていたそうだ。そのため、生活できる場所を確保したいという考えがあり、家さがしに走り回っていたそうである。

地震の後いったい何をして生活していたのだろうか。職場を失い、学校・幼稚園にも行けず、生活する場所もみんなと一緒に。本当ならすることもなく暇と感じてしまうような時間の流れ。しかしこのとき

ばかりは精神的に暇などと感じたことはなかったそうだ。というより落ち着く場所がなかったのかもしれない。突然起きた地震というものを現実のものと捉えることが出来ずに、ただ自然の脅威を実感していた。とは言うもののただじっとしているわけにはいかないため、母と父は事務所や家を見て回ったりしていた。家の前に『因幡は にいます。連絡先.....ケガ人はいません。』という張り紙を残していたらしい。地域周辺にはガス会社・電力会社により車による安全確保のためのアナウンスも様々な所で響いていた。

地震後の家の中は、目には見えないものが暴れ疲れ、去って行ったかのように、多くの物が散乱した状態で静かに止まっていた。

幸いその辺りの地区では平屋建ての家が多かったこともあり、倒壊も少なく、救助者・死亡者はいなかった。ただ人々の混乱があったことは間違いなく、当時は、学校の授業があることも考える暇はなかった。そこまで冷静に考えていなかったと言ったほうが分かりやすいかと思う。地震後いろんな所へ生活場所を変え、地域から離れてしまったので、本当の地震後の体験をあまりしていない。それがいいのか、悪いのかは分らないと、母は語ってくれた。

今も祖父母の家に遊びに行くと、至るところに亀裂を埋めた跡が残っている。玄関、ソファの後ろ、家の外壁に至るまで、いまなお悲しく残っている。幼い頃その傷を自然と見つめてしまっていた。しかし今はそれが地震によるものだという実感さえ薄らいでしまっていたことに気付いた。

当時、何度も家を見に行った。僕たち家族は1階部分で生活をし、家の2階にあたる部分はアパートになっていて3人ほどの人が住んでいた。地震によって基礎と柱の間に歪みが生じてすべての戸は閉まらず、そのため鍵を閉めることも出来ない状態だった。むろん、とても住める状態ではなかったのだ。その家は全壊だった。トイレは床が今にも抜け落ちそうになっていた。そんな時、僕はトイレに行きたくなったらしく『トイレ...』と母を困らせてしまったそうだ。母は幼い僕の手をひっぱりながらそのトイレに連れていったが、トイレの床に足をかけたとたん床が崩れた。『あの時は死ぬかと思った。』と母は未だに思い出話をしてくれる。

そんな思い出の詰まった家は、潰してしまい今はない。生活最低限のものだけを持って新しい家に引っ越したため、兄が獲った表彰状や昔の思い出を多く残したまま、重機によって壊されていった。その様子は見ていなかったが、ホコリが舞い、いとも簡単に崩されていく家の様子を何度も想像してしまった。

幼いころのアルバムを開くと昔の家と兵庫の町の写真がいくつも思い出として残っている。1人で、おもちゃで遊んでいる写真にも、泣きながら写っている写真にも、どれも後ろには背景として家が写っていた。古いが広くていい家だったと母は寂しそうに語ってくれる。今となってはそれらの写真だけが過去を証明してくれているようである。建築基準法改正よりも前の家であり、戦後に建てられ、2階部分を増築していたことを最近知った。

その場所を今写真に撮ると砂利がまかれた駐車場が写る。家が亡くなったのだ。

つい最近兵庫(湊川)を訪れた時にそこへ足を運んだ。昔に比べ道幅も狭く感じ、やはり昔と変わっていることばかりだった。砂利がまかれただけの簡単な駐車場になっていた家の跡地は、アスファルトで舗装され昔ここに家が建っていたとは誰も思わない姿になっていた。自分自身もここに家が合ったということを感じることが出来ない。なんだかとても寂しい気持ちになった。

隣の家には仲良しの女の子がいてその子とよく遊んでいた。向かいの家には大きな桜と大きな犬(レオ)を飼ったおばさんがいた。その方は地震ではケガもなく無事だったが、地震から12年。今は亡くなってしまい、地震から月日が経ったことを物語っているように感じた。

自宅からよく買い物に行っていたトポスという店。黄色い看板にその名前が印象的で、幼い記憶に大きく残っている。幼い頃その名前を繰り返し呼んでいたそうだが、その店も地震後すぐに取り壊され新しくマンションに変わっている。高校生になった今、あの場所に何があったのか...姉にこの場所に『あの店があったんだよ』と教えられるまでは忘れてしまっていた。それと同時にその時の様子が頭の中に広がったことを覚えている。

トポスの店の前には大きな集合マンションがある。兵庫(湊川)に行くと必ず目についていたマンションである。そのマンションは地震から11年目も、昔の傷を残しながらそこに立っていた。10階以上はあるその建物には、多くの亀裂が残っていて、そこだけ地震直後のような風貌で立っていたのだった。剥がれかけた外壁、さびついた公園、建物の周りには、崩れた壁が散乱しないように緑色のカバーが覆っていたのが印象的だった。住民と建て替えか修復かでもめていたそのマンションも、ついに建て替えが決定した。先日初めてそのことを知ったのだが、10階以上あった建物は完全に壊され、そこだけポッカリ穴が開いたようになっていた。その様子を見たときは寂しい気持ちになり、湊川の町が普段と違って見えた。多くの人は、地震による傷痕は早く消えて欲しいと、復興を願ってはいるが、1995年1月17日の時間のまま止まっていたものがなくなるというのは、なぜだか寂しい気持ちになるのだろうと思う。

12年経ち、過去の記憶が薄れていく中で、被害時期と平常時期の境目はいつなのだろうということに疑問に思うことがある。避難所の生活が終わった時なのか？家が再建されたときなのか？報道されなくなった時なのか？それともまだ平常時期とは言えないのだろうか？これは人々の被災の度合いによって大きく変わってくるものだ、としか言いようがないのだろうか。

地震発生から地震後までの記憶はほとんどが抜け落ちてしまっている。

地震のあと数回引っ越しをくり返した。兵庫を離れ、伊川谷のマンションに引っ越し、小学校2年の冬に今の町に移り住んだ。地震によって被害のあった家の様子を写真に撮って残していたようだったが、その写真も当時の様子を物語っていて、思い出すのが怖く捨ててしまったらしい。それがいいのか、悪いのか僕にはわからない。

「6434人の方が亡くなった1つの地震というよりは、1人1人が亡くなった6434通りの地震だ。」と言った人もいた。その通りだと思った。ただ忘れてはいけないのは6434人の方が亡くなったということはその周りにいた何千・何万という人がその人の死を悲しんだということだ。そして、その遺族の悲しみは消えることはないだろう。

僕が恐怖におびえている、その時と同じ頃に6434人の命が1つずつ亡くなっていったのかと考えると不思議な感じもするが、恐ろしい。今でも考えさせられるのは、本当の恐怖は体験した人にしかわからないということだ。経験していない人にとって、あの地震で感じた言葉に表せない感覚は分からないはずだ。建物の倒壊によって挟まれ身動きとれず、救助を待っている間に命が尽きた人、自分の命を守るために大切な家族を見捨てざるを得なかった人、そんな状況が神戸の至るところであったことを想像するのは容易ではない。そしてまた、その人たちの気持ちも簡単に表すことはできないと思った。

年月は流れ、12年経ち再建の決まったものがある一方で、未だにその傷が癒されていないものもある。それは被災者の心の傷だ。当時から『傷つけることの容易さと癒すことの難しさ』を常に感じてきた。もちろんこれは地震だけに限って言うことではない。僕たちが普段使うパソコンでも簡単に表現することができる。悲しかったこと・辛かったこと・楽しかったこと・多くの過去を思い出しながら少しずつ文章で埋めているこの『語り継ぐ』も、バックスペースキーを押せば白紙にもどる。一度の動作で一瞬にしてゼロになってしまうのだ。それに、一度ゼロにしてしまった文章を元の状態に戻すには時間も労力もかかるうえ、完全に元の状態に戻すのは不可能になってしまうかもしれない。しかしパソコンは、保存をすることができるし、「もどる」を押せば元の文章に復元することだって可能なのだ。ただ神戸の街は一度に修復することはできない。「もどる」を押したからと言って亡くなった人・壊れたまちがもとに戻るはずはない。そもそも「過去にもどる」ためのスイッチなんて存在しないのだから。人間だって同じである。『嫌い』の一言で人間の心も傷をつけることができる。数十秒の揺れと、数十年の復興。そう考える復興の難しさを感じる。阪神・淡路大震災によって多くの人の心を傷つけ、その傷跡は今なお多くの人の心の中に残っている。しかし12年経った神戸が今のように美しくなったことは素晴らしいことだと強く感じる。

地震から12年。当時5歳になりたてだった僕も、今は17歳になった。しかし12年経った今でもテレビでは特別番組をしたり、特集を組んだりしている。それほど大切な教訓のあった災害と言えるのではないだろうか。僕自身、阪神・淡路大震災を経験した最後の世代になるのではないか。それらの教訓を忘れず、伝えるために僕たちは生かされていると思う。

しかし人々の記憶はおかしなもので、次々と起こる災害によって過去の教訓が押し出され忘れ去られてしまうことも少なくない。すべての災害それぞれに災害が起きた時最も大切な教訓は必ずある。だから決してそれぞれの災害を過去に起きた災害の1つとするのではなく、教訓を生かす活動をする必要があると感じている。

この環境防災科に入り、強い印象を受けた活動がある。2007年3月25日マグニチュード6.9の地震が石川県能登半島沖で発生した。その時僕は、近くの消防署の行事に参加していたが、その一報を受け改めて地震の唐突さを実感した。そして2007年4月の頭に現地に行けることになったのだ。地震発生から2週間ほどしか経っていない現場を、ブラウン管を通してではなく、生で見ることは非常にいい経験となった。

能登半島に入り輪島市門前町という地区で活動をしたが、中心地に近づくほど被害は生々しかった。ごくごく普通に家が倒壊しており、ほこりが舞い、ブルーシートで覆われている。その状況に参加した生徒全員が息を飲んだらう。目に入ってくる映像が阪神・淡路大震災と重なるようだった。しかし違っていたのは確立されたボランティア活動だった。ボランティアに混乱がなく慣れたように組織され運営されている様子に驚いた。これも阪神・淡路大震災で言われたボランティア元年からの教訓なのだろうかと感じた。阪神・淡路大震災の時には、僕の知らない間に多くのボランティアが神戸を支えてくれていたのだろう。当時、若者もたくさん集まり人々の間に助け合いの輪が広がっていた。このような事も環境防災科に入り初めて知ったことだ。だから今、当時活動して下さっていたボランティアの方々に感謝の気持ちでいっぱいだ。そんな心持で現地に入り聞き取り調査などの活動をしたが、ここでも人々の優しさにいっぱい触れた。ボランティアをしている側が被災者の方にかけていただく言葉に逆に勇気をいただいていることを実感した。

環境防災科に入りさまざまな経験をすることで、忘れそうになっていた記憶を自分の中に記録することができた。東遊園地には、阪神・淡路大震災の慰霊碑がある。犠牲になった方の名前が並べられている。当時発生した火災の火を今もなお燃やし続けている。それはまるで亡くなった方の希望の炎のようにも思う。

1月17日、「1.17のつどい」に参加した。竹筒で形作られた竹灯を見るとあの日を思い出す。この日を今までこんなに静かな気持ちで迎えたのはその日が初めてだったかもしれない。いつもTVで何気なく見ていたその様子。この日を忘れてはいけないということを改めて実感した。

6千本以上並んだ竹筒ひとつひとつに1人1人の想いがこめられているんだと思った。5時46分を迎える前、僕たちは、その竹灯の準備のお手伝いをさせていただいた。こういうボランティアは初めてだったのでいるんなことを考えながら作業を進めていった。竹筒にろうそくを入れ終わり、希望の灯りの火が竹筒へと注がれていった。1本1本丁寧に...

そして5時46分を迎えた...黙とう...あの日から12年目を迎えた1月17日。とても寒い朝だった。竹筒の前に涙を流している人、震災より後に生まれたであろう子供たち、そしてあの日あの場所にいたすべての人が6434人の命を見つめ直した。忘れられない記憶。忘れてはいけない。絶対に。6434人ものがあの揺れでこの世から姿を消したという事を...

去年、今年とこの日はまるで人々の涙であるかのように雨が降り続いていたことが印象的だった。

僕たちに今出来ることは何か。過去の経験を見つめ直し、2度と阪神大震災のような悲惨で残酷なことが起きないように活動していくことが、今の僕たちに出来る亡くなった方への哀悼の意だと言える。

死から学ぶ

神戸市西区大津和
植原 晃一

1、震災発生

まず初めに感じた感覚は、暑苦しさだった。

隣に寝ていた母が、僕を布団で包んで上からがっしりと抑え込んでいたからだった。暑くて、暑くて、息ができなくて、むしろ今にも殺されてしまいそうな勢いだった。布団の中から飛び出し、あらぬ方向へ飛ばされていたらどうなっていたことか。そんな生死をわけの一瞬だというのに、「なんの悪い冗談だ」と思いながら必死で抵抗していた。そして、自分の意志とは関係なく体が左右に揺れているような感覚（親に抑えつけられているにも関わらず）が伝わってきた。このとき、まさに兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は起こった。つい昨日の夜は、明日のことやら今かかっているインフルエンザと、いつものように眠って、目を覚まして、朝食を食べて、1日がスタートすると思い、そんなことを考えながら眠りにおちた。しかしその瞬間から自分では想像もつかないような1日の始まりとなっていった。

2、幸い

その日の朝は母親に起こされることも、いつも焼けているパンの匂いも、目玉焼きの匂いもしなかった。地震がとりあえず拳を収めた時、僕はようやく母の腕から抜け出し、「死ぬ一步手前だった」と感じながらたっぷり息を吸い込んだ。しかしなぜかその日の朝は、いつもより早く起きたため妙に外は暗く、いつも寝るときにつけている豆電球もついていなかった。その時になって初めて自分はいつものような平穏な朝に迎えられたのではなく、危険な状況に置かれていたことを知った。とにかく自分も母も、家具が固定されていたことによって奇跡的に傷一つなく地震をしのいでいた。つい最近母から聞いて思い出したことだけれど、自分は震災が起きる数日前にインフルエンザにかかり、それこそ振動が伝わっていくように次々と家族にうつして回っていたらしい。しかし自分がインフルエンザにかかったため、看病も兼ね、1つの和室に家族全員が並んで眠るという形をとることになった。結果、自分自身も姉も地震発生直後両親に守られることになり、あわてることもなく無事地震をやり過ごすことに繋がった（当時僕と姉は1つの個室で2段ベッドを使って寝ていたが、和室に移ったため普通の敷布団になった）。正直自分たちの身に何が起きているのか判別するためには、まだ頭も足りなかったし、説明されてもきくと理解出来なかったと思う。2つの意味で親が僕たち姉弟の隣にいたということは、今ここに何の障害もなく生活できていることに大きく繋がっている。それでも普段生活している家が、電気もないので不自然に暗く、重く、当時から飼っていた魚の水槽や食器が混ぜこぜになって割れている様は、今でも良い印象を残していない。水槽の中から床に叩き出された魚たちは苦しそうにはねていたが、結局応急処置をして生き残った魚は数匹だった。本棚自体は倒れなかったが、食器と同様中身は固定されているわけでもない。よく読んでいた本も知らない本も放り出され放題になって、数冊水につかってふやけてしまった。よく知る自分の家の景色だったが、不思議と全く知らない空間だった。突然親に連れられて、誰か別の人の部屋に入った時の感覚によく似ていた。しかし当然実際には自分の家のことなので、無視するわけにもいかない。ふやけた本は拾い、乾かす必要があったし、割れた食器類も拾う必要があった。もちろん掃除機なんてものは使えず、全て手作業だった。

今回の地震は先ほど書いたように両親が隣に寝ていたことにより無傷で済んだが、もし自分の隣に両親がいなかったとしたら、僕達はベッドから放り出され、床に叩きつけられ、折り重なる形で倒れそのまま動くこともできず倒れてくる物に押しつぶされていたかもしれない。もっとも親の話では僕達の使っていたベッドは倒れていなかったらしいのだが、勿論それだけで僕たちが落ちなかったということの保証にはなりえないし、なにもベッドの上にいることだけが危険だったというわけでもない。その次に恐ろしいものが床に散らばったガラスの破片だった。今でこそ当たり前のこととして認識していることだが、当時全くの無知だった僕なら真先に助けを求めて親のいる寝室へと走っていただろう。暗く視界が悪い中、パニックに陥っている自分が考えなしに廊下を突っ切っていたら、と想像するだけで足が痛い。しかし実際には父が1人、玄関まで家族全員分の靴と、1つか2つくらいの懐中電灯、そして本来この日の朝食として食べるために残しておいたパンを取ってきてくれた。そのパンだけは鮮明に覚えている。確かパンの中にチョコクリームが入った小さなパンで、1パックに5つくらい入っているやつ

だ。僕は当時からそのパンがとても好きで、寝る前に食べるのを楽しみにしていたが、まさかこんな形で好みのパンを食べることになるとは夢にも思わなかった。そうして家の中での移動手段と、当面の食べ物には困ることがなかった。家族もはなればなれにならなかったし、何も心配することがなかった。しかししばらくして、ふとテレビをつけてみると、今まで見たこともない、ありえないほど悲惨な町が映し出されていた。その様子はまるでウルトラマンの怪獣が街を踏みつぶしたのか、それともいきなり戦争が起こったのかと思うほど、崩れた積み木のようにグチャグチャになった自分たちの街が映っていた。その映像を見るまでは、自分たちのことで頭がいっぱいだったが、自分たち以上に苦しんでいる人たちがごまんといふことをこの時初めて知ったと思う。もともと上空から自分たちの町を詳しく見たことも、テレビに映ったこともなかったけれど、それでも幼かった自分が理解するには十分すぎるほど荒んだ光景。まさに死の町だった。幼いころから読んでいた絵本では、毎度悪者が正義の味方に懲らしめられることによって、人々が平和になり、正義はヒーローと称されるといふものばかりだった。しかし一体、この日は自分たちが何をしたというのだろうか。自分たちは誰かを傷つけ、誰かを困らせたのだろうか。そうやって考えを巡らせていくと、自分には全く何も該当しないように思えて、なぜ自分たちはこんなに苦しい思いをさせられているのだろうかという疑問に思ったほどだった。

3、復興にむけて

当時僕達の住んでいたマンション(11階に住んでいた)は、震災を受けたが特に建物の倒壊などといった大きな被害はなく、ところどころひび割れ、多少建物自体が傾いただけだった。比較的淡路に近い地域ではあったが、道路のひび割れがあったものの、幸いなことに誰かが直接被害を受けて亡くなることや、見渡す限り火事もなければ、家が倒壊したという話も聞くことがなかったし(聞いていないだけかもしれないが)自分達の身にも怪我ひとつ見受けられず、親戚も無事だった。友達の安否も気になってはいたものの、とりあえずしばらくの間幼稚園も休みになり、家で過ごすことになった。が、生活していくにしても水が不足しがちだった。皿洗いはもちろんのこと、洗濯から風呂、トイレにいたるまで毎日当たり前におこなっていたことがすべてできなくなってしまった。今から思うと、自分自身このときからライフラインに対する意識が変わったのではないかと思う。例えば普段は全く思いつかないことだが、皿の上にサランラップをかけて使うことによって食器洗いをなくすこと、ガスコンロを使用して火をつけていたこと、そういったことをやり繰り返して水の使用を最低限に抑え、生活していった。

そこから先、風呂やトイレ、飲み水に使うため、僕以外の家族が必死になって、わずかでもできるだけ多くの水をもらおうとせわしなく動いていた。支給された水は風呂場に貯められ、できる限り蓄えておけるようにされていた。主に給水タンクが来ることから始まったようだが、マンションの下で貯めていたタンクから水をもらうことが主流になっていた。タンクから水をもらい、実に1階から11階までの距離を階段で(エレベーターは動かなかった)必死に上っていた。しかし僕はというと、何もしていなかった。自ら進んで手伝うとも申し出たが、当時の力の弱さと体力の少なさから、一番下からこの11階まで水を運ぶことは困難だと判断され、手伝う必要はないと言われたからだった。その時僕は延々と1人で遊んでいたが、正直納得いかないという気持ちが強かった。自分たち以上に苦しんでいる人たちはおろか、自分たちのおかれた状況をなんとかすることもできなかったからだ。これから先のことはあまりよく印象に残ってはいないが、家族のみんなが大変僕を守ってくれていたのだろう、さほど不自由を感じることなく電気、ガス、水道が復興し、再び元の生活に戻ることができた。

ある日、家族で外を歩いてみた。当然家族全員でだが、大体マンションの周辺をグルッと回ってみた。すると割れた道路やひしゃげた道、倒れたポールなど震災のエネルギーを物語るものが見渡す限りあった。しかし、それも徐々に修復され、元の街に戻りつつあった。時間が経ち、神戸の街が落ち着くと、姉は再び小学校に、自分も幼稚園に行くことになった。ずっと変わり果ててしまった街を見続けていた僕だったが、多少みんな地震に対するわだかまりが残っていたものの、友達の無事な姿、いつもと変わらない、くだらないような冗談や生活がとてもなつかしく、新鮮に思え、それだけで十分すぎるほど勇気ももらった。姉の方は詳しくは聞いてはいなかったが、自分と同じように多少安心感を得たようだった。ただ、給食で使われていた牛乳瓶が、紙パックに変わったということを訴えていた。なんでも、震災により瓶が割れてしまい、牛乳が台無しになってしまったことが原因らしかった。確かに僕が小学校に行く頃には瓶の存在などすっかり消え去っており、紙パック以外で出された試しがない。ちなみに僕が小学生だった頃、食器がアルミからプラスチックに変わったことがあったが、それは震災とはあまり関係がないらしかった。特に変わったと感じたことは、地震発生時を想定した避難訓練、地域ごとに緊

急避難時に近所の公園を指定したこと、身の守り方などに対する教育方針が変わっていったことは確かだった。また阪神・淡路大震災のときに送られてきた応援歌や、メッセージを読む機会も与えられた。

4、震災から

震災が過ぎ、時間が経つと街は再び元の姿を取り戻しつつあった。道路、割れたタイルも徐々に新しく修復された。しかし精神的に回復し、元の生活に戻ることは容易にはいかないだろうと思った。そして、この体験は記憶の端から薄れていくことがあっても、決して忘れることはできない。死んでしまった人は2度と帰っては来ない。そうやって昔の自分は悪いことにばかり目を向けていた。しかし今になって、いやむしる今だからこそ、昔ただ目の前の震災に打ちのめされていた時の考え方が大きく変わった。今から思うと、あの震災のすべてが悪いというわけではないのだと考え直すようになった。

今でも両親は、あんな辛い経験は2度としたくない、震災なんて永遠に来なければいいと言っている。もちろん僕もあんな経験は2度としたくないし、どんなに震災に興味を持ったとしても、地震に遭遇して嬉しいなんてことはない。あのころ自分は何の罪の意識も感じず、ただ震災を恐れていた。しかし全く罪の意識がなかったかと言えば、そんなことはない。自分だって生活している中で、地球を破壊しているのだ。延々と地球の資源を掘り起こし、使い、元あった木や鉱物を私利私欲のために使っている。その影響はいつだって地球そのものにも、また自分たち人間以外の生物にも及んでいる。地球温暖化による気温の上昇、それによって南極の氷が溶けてしまい、そこに住んでいた生き物を死に追いやっている。木を切ったことが原因で、森林の数が減ってしまい、動物の住み家、また木の実を食物としている動物の食糧を奪っている。「母なる海」と称している海でさえ、年々汚染されている。さらに深く追究すると、それらのことを一切止めたとしても、生きてゆくために他の生物を食べている。あれほど震災で亡くなった人たちのことを考えると胸が苦しくなったのに、不思議と他の生物が死に、存続が脅かされていることに対して、何の配慮もしなかった。今まで奪ってきた数の方が明らかに多いにも関わらず。これだけのことをして、果たして自分が何も悪いことをしていないと言い切れるのだろうか。一体正義のヒーローに懲らしめられ、平和が訪れることを真に待っているのはどちらなのか。宗教を否定するわけではないが、仏教やキリスト教の救いは他の生き物には与えられないのか。そう考え、1つの物事にに対し根底から否定することはやめようと思った。1つの物事が起きるということには、必ず何か理由があるということがわかったからだった。本当の意味で災害を理解するということは、地球と人類、両方の立場から考えるということ。そのどちらかが欠けても駄目だし、どちらかだけを優先している限り意味のないことなのだと感じた。きっと阪神・淡路大震災も、地球の長い歴史のなかでも些細なことで、寝返りをうつ程度のものかも知れないし、地球も自分たちと同じだということを知り、受け止める必要がある。

5、祖父から

阪神・淡路大震災から1年もすると、町は驚異的なスピードで復興されてゆき、僕たちも元々住んでいたマンションから近くの一戸建てに引っ越すことになった。引っ越しといっても通う幼稚園が変わるほどでもないし、姉も転校する必要がないような引っ越しだった。そもそも震災が起きる以前から建設していたもので、地震が過ぎ去って少しの間で移り住むことができた。そのため震災の爪痕を残した部屋も見ることなくなり、震災からも時間が経ち、生活への障害もなくなり、まさに心機一転で全てが元通りになりかけていた時期だった。しかしそれから間もなく、ある朝突然母に起こされ、祖父の死が伝えられた。

原因は以前から患っていた肺がんだった。僕らの新居の建築と同様、震災が起きる前から祖父はタバコが原因で肺を病んでいて、震災を乗り切れるかどうかよく心配していたと思う。地震が過ぎ、祖父の安全を知った時は本当に安心した。本当ならばこの後病院で入院し、適切な治療を受けていればもう少し長く生きていただろうが、祖父はそうしなかった。震災が過ぎたのち、ずっと自分の家の修理に携わっていた。もう年齢的にも相当負担がかかることだから、ガンを患った状態でそれだけのことをやり遂げることは困難だった。結局、修理完成まであと一歩というところまで来たときに祖父は僕と別れを告げることなくこの世を去った。その時祖父がどんな気持ちで決断し、残された命を生きようとしていたのか詳しくはわからないが、そんな大それた理由はなく、ただ、自分の大切な家族のために生きたい、何かしたいという一途な気持ちだけだったと思う。そんな祖父に気付くことも、支えることもでき

なかったことを今でも悔やんでいる。直接的ではないにしろ、震災が原因で肉親を失ったことは初めてで、もう2度と祖父に会えないと思うととても辛かった。

祖父のしたことは世界を救うなどといった大げさなことでもないし、大規模なことでもなかった。しかし、再び訪れた祖父の家はとてもきれいで、一度見に来たときのような悲惨な状況は面影もなかったし、住んでいて怪我をするなんて心配もなくなり、元の家修復されていた。もちろん今でもあの家はしっかりと建っている。こんなどこにでもありそうな話だけれど自分にとってこのことは、1人の命を守ることがいかに大変かを痛感させられた。この世には、困ったとき必ず現れるようなヒーローなんていないし、必ずしも敵を倒すことなどではしない。正義が悪に屈することもある。それでも言えることは、最後まで祖父は地震にも病気にも負けはしなかった。自分の命が尽き、死ぬまで戦い続け、そして確かに果たすべきことを最後まで果たした。そしてそのことを他人事として流してしまうのではなく、自分もそう変わっていくべきだと感じ、最善を尽くすことが大切であり、またそれが今後の自分への課題でもあるということだけはわかる。

これから先、生きていく中で、前回と同じように避けて通ることのできない、人にとっての災いが勝る時がまた必ず来る。しかし逆に震災への恐怖、悲しみは忘れ去られてゆき、また新たな大災害は幾度となく起き、頭から頭へ風化していく。再び地震がやってきて、自分自身も含め圧倒的に打ちのめされたその時、どうしても物事を投げ出してしまいたくなる。全てが嫌になってくる。そのなか辛いことから逃げ、楽なほうへ流されてしまうのか、正義のヒーローが現れるのを待ち続けるのか、どちらかを選ぼうなんて考えた時点で間違っている。僕は楽な方へ逃げてしまうよりは祖父がそうでなかったように、最後まで自分の意志で動き、自分にできることを最大限実行していきたい。これからの課題は、もちろん自分の命から人の命まで救う術を身につけること。しかし、それ以上に近代自殺や殺人事件が多発している世の中で、いかに命が大切であり、奪うことよりも守ることが難しいかということ伝えることも自分の役目であると思う。今大きな地震を再び迎えようとしているときに、災害を学ぶための意図を掴まなければ意味がない。お互いが助け合い、協力し合って初めて救うことのできる命がある。家畜のように決められた死が待っているのではなく、ちょっとした工夫、例えば家具を固定するというほんの数分の作業で命を守ることができる。それを多くの人に伝えていきたい。そして人間は、自分達が思っている以上に簡単に死んでしまうということを再認識していきたい。気づいたらすでに死んでいたなんということが、この先明日にでも本当にあるかもしれない。

語り継ぐ

神戸市垂水区狩口台
江川 まいこ

その瞬間

私には阪神・淡路大震災の記憶があまりない。私の家族は父と母と妹と私の4人家族だ。その日も4人みんなで一緒に寝た。揺れた瞬間、ゴォーという音がしたとか、突き上げるような縦揺れだったなんということは後から聞いた話で、当時の私はきっと何が起こったかちっとも分らなかったと思う。父の体の上には白雪姫や、7人の小人たちの人形がバラバラと落ちていた。母はまだ1歳だった妹と私をかばうのに必死だったらしい。きっと母にテーブルの下まで連れて行ってもらったのだと思うが、私はそこでガタガタと震えていた。1月の明け方ということで寒さもあつたと思うが恐怖のほうが大きかったと思う。とても怖かったし、涙も出ていたような気もする。そのことだけは今でも覚えている。

震災の前・後

阪神・淡路大震災が起こる前、近畿地方には地震は起こらないと思われていた。私の家もそうだった。そんなこと考えたこともなかったし、今のようにテレビで地震特番のようなものもあまりされていなかった。だから、私の家は、特に防災をしていなかったし、きっと近所の家だつたぶんしていなかったと思う。

今は、貴重品をまとめておいたり、背の高い家具は置かないようにしたり、災害保険に入ったりしている。震災直後は、もう2度とこんな地震には遭わないだろうと思っていたが、いまはそうではないかもしれないという風に思っている。今、もし阪神・淡路大震災のような地震が起こったとしたら、大丈夫でないかもしれない。震災時住んでいた築2年の集合住宅から一戸建に引っ越した。少し古いし一度、阪神・淡路大震災を経験している。それに、父が単身赴任で家にいないし、近所の付き合いもあまりよくない。犬を飼っているから、避難するとしたらどうするのかなど、とても問題が多いと思う。

当時の様子

家のベランダから見える周りの家の屋根瓦が落ちていたり、住んでいた集合住宅のレンガにひびが入ったりした。郵便ポストの取り出し口がうまく閉まらなくなった。

阪神・淡路大震災のときはとても寒かったらしい。私の親は寒さ対策が大変だったらしい。私が地震の直後にインフルエンザになつたりして大変だったらしい。

ライフラインの復旧は、電気は当日の昼、水道が約1週間後、ガスは約2、3週間後に復旧した。それまでは、お風呂に入れず、鍋で給水車の水を沸かして、それを使ってタオルで体を拭いたりしていた。当時まだおむつをしていた妹をお風呂に入れてやれなかったことがとても困ったことだったと母は言っていた。当時の私はよくわかっていなかったが、今になって当たり前の生活が当たり前でなくなることがあるんだと思った。今まで当たり前だったことが本当はとてもありがたいことなんだということも、阪神・淡路大震災を通して初めてわかった。ライフラインが1つでも欠けるとかなり不便だった。水道が復旧しても、ガスが来なければお湯を沸かすことができないし、ガスがなければ、料理を作ることもし難い。ライフラインは3つすべてが揃っていてやっと、今ある当たり前の生活ができるんだとわかった。

私の行っていた幼稚園は、それから約1か月後に再開した。私は、幼稚園がずっと休みだったから夏休みなどのような気持ちでいたが、きっと父や母には休みなどなく、ずっと緊張した気持ちでいたのだと思う。子供を守らないといけない。いつ余震が起こるか分からない。そんな不安や心配でいっぱいだったのだと思う。本当に安心して暮らせるようになったのは、ライフラインもほぼ復旧し終わった1か月後ぐらいだったらしい。

父の当時の職場は東灘だった。垂水区と言ってもほとんど明石市に近い自宅から、職場まで毎日こぼこの道をバイクで通勤したらしい。非常時だから、仕事を休めるとは思っていないが、大変だったと思う。特に、私の家のように幼い子供がいて、養わないといけない人が自分以外に3人もいるような家庭では、本当に大変だったと思う。家の片付けや、元の生活に戻すための事など、たくさんしなければならぬこともたくさんあつたと思う。そんな中でも私たちを養うために毎日大変な思いをして仕事に

行ってくれた父に感謝したいと思った。

震災と祖母

ある日、祖母と曾祖母が家に来た。曾祖母が私の家に来ることはあまりなかったし、大好きな祖母・曾祖母と一緒にいられることがとてもうれしかった。なぜ祖母たちが避難してくるようになったかというのは後で知った。祖母たちの家は須磨にあった。テレビを見ていると祖母たちの家のすぐ近くまで炎が迫っていたからだという。当時、私の家には車がなかったため、近所の友達の家の車を借り、父が迎えに行った。そのとき、私も行くと言ったが父と母は「ダメだ」と言って、母と待つことになった。きっと、道路はうまく使えなかっただろうと思う。少し帰ってくるのが遅かったのはそのせいなのだと思う。

当時祖母の家の付近の公園は仮設住宅でいっぱいになった。どの公園もあまり大きな公園ではなかった。西神の仮設住宅のようにきれいに並んで建てられておらず、仮設住宅がひしめきあっていた。大好きだった、船の形の遊具のある公園も仮設住宅だらけになった。それまでは公園だったから大きな声を出してはしゃいでも良かったが、仮設住宅が建ってからは、住宅街のような感じであまり遊ばせてもらえなかった。その仮設住宅は、私が大きくなって小学校に入ってからもなくなることはなく、数は減っていくものなくならなかった。きっと住むところが見つからない人がたくさんいたのだと思う。その小さな公園の中でもそういった、家を見つけられない人が数人いるのだから、もっと大きな西神の仮設住宅のような場所だと、もっとたくさんの人たちが取り残されたのではないかと思う。私は仮設に入らなかったからわからないが、私の家のような家族構成の人たちが、あの狭い仮設住宅で何か月も、何年も暮らすのは大変なことだと思う。

結局、祖母たちの家は焼けなかった。しかし、再開発か区画整理かなにかのために、祖母たちの家は行政に買い取られた。祖母たちの家は古かった。まだトイレは和式だったし、ネズミが出るような家だった。でも私はその家が大好きだった。「おばあちゃんの家のにおい」というにおいがして、台所へ行けば、曾祖母の大好きなゆずシャーベットのにおいがする。庭には柿の木があって、そこから柿を切ってきて食べさせてくれた。私も好きだったが、祖母や曾祖母はもっと好きだったと思う。何十年も住み続けてきたその家を手放すのはいやだったと思う。でも祖母と曾祖母は復興住宅に引っ越した。元の家の跡地はどうなったのか見に行ったが、家は壊され、柿の木も切られ、ただの空き地になっていた。何年たっても何か作られる様子はなく、ずっと空地のままだった。何のために祖母たちが引っ越したのかわからない。

現在その復興住宅には、曾祖母が亡くなって、祖母が1人で住んでいる。私や母が心配なのは、独居死や孤独死である。最近ニュースなどでそのことがよく報じられている。祖母はまだまだ元気だが、ぜんそくなどの持病を持っている。お年寄りだし、もし、何かあってもそれを知ることができないし、自分で救急車などを呼べない状況だったとしたら大変だからだ。

非日常の世界

子供の私は、被災しているといういつもと違う状況をとて楽しいと思っていた。雷が鳴るとなぜかわくわくするように、非現実的なことをとて楽しんでた。お皿にラップやアルミホイルを敷いてその上に食べ物をのせ、水で洗わなくてもいいようにしていた。そんなことは初めてのことで、とても面白かった。カセットコンロを使うのも、お鍋をする時ぐらいでキャンプのような感じだった。幼稚園にも行かなくていいし、お風呂があまり好きでなかった私は、毎日お風呂に入らなくていいことも少しうれしかった。

しかし、父や母はきっと大変な思いだったと思う。これからどうなるかということや、子供のこと、仕事のことなど、きっと不安でいっぱいだったと思う。特に母は、ずっと家にいて小さい妹とわがままな私を世話するのにとても大変だったと思う。ライフラインも整っていない中でご飯を作り、お風呂の代わりに体を拭いて、家の片付けをし、大変だったと思う。当時は何も考えていなかったが、最近になってとても感謝している。

お世話になった人

阪神・淡路大震災の時、私はたくさんの人にお世話になった。三木に住んでいる母の親友は、三木で食料や生活雑貨などを買いだめして車で何時間もかけて持ってきてくれたり、2回ほど、私たちの家族を車に乗せて三木の家まで連れて行ってきて、お風呂を貸してくれた。ご飯までごちそうになった。

明石市の友達の家には水道が来ていたので、そこを借りて皿洗いなどをさせてもらった。

近所の人たちとは、食料を分け合ったり、車を貸してもらったりしてお互いに助け合ったらしい。当時、集合住宅に住んでいて、近所の家族も私の家のような家族構成が多かったし、同じ幼稚園に行っている子が多かった。そのため、普段からよく一緒に遊んだり、幼稚園のお迎えでおしゃべりしたりして、近所の人とはとても仲が良かった。今、問題になっている、コミュニティの希薄化は近所ではなかったようだ。阪神・淡路大震災をきっかけに、食料を分け合ったり、助け合ったりしたことで今までよりも近所の絆がより深まったらしい。震災を体験して近所づきあいの大切さを改めて感じた。

追悼式

今年の1月16日から17日にかけて、初めて東遊園地の追悼式に行った。今まで何度かテレビで見たことはあったが、環境防災科に入るまで、そんなに興味もなかったので行かなかった。しかし、勉強するうちに阪神・淡路大震災で亡くなった6434人ひとりひとりに人生があって、そのことが一瞬で奪われたんだと学んだ。6434という数字ではなく、そこに6434人分の人生があるんだということを感じた。今まで漠然と6434という数字でしか見ていなかったことに申し訳なく感じ、参加してみようと思った。

思っていたほど規模は大きくない気がした。準備のボランティアをしていたら1人のおじいさんが「年々、規模が小さくなるなあ。」とおっしゃっていた。風化していつているのかなあと思った。

竹筒の中に水をためて、ろうそくを浮かべて火をつけるのだが、雨が降っていたために、なかなか火がつかなかった。毎年来ている方は「この日はあまり、いい天気恵まれぬ。」とおっしゃっていた。

マスコミ関係の人たちがたくさん来ていて、中には、テレビで見たことのあるキャスターの人がいた。インタビューを受けている方の中には、涙を流しながら答える人もいたし、5時46分の知らせの時に泣いている方もいた。まだまだ心の傷は癒えてないんだなあと思った。その光景を見ていると、本当に悲惨な災害だったんだと気づいた。

将来

将来は、小学校の先生になりたいと思っている。小学校の先生になって、子供たちに阪神・淡路大震災のこと、震災の教訓、防災などについて教えたいと思っている。子供たちに防災教育をすることで、将来の災害を減らしたいと思う。阪神・淡路大震災では多くの犠牲が出たが、そのことで得た教訓を子供たちに語り継ぐことで、その犠牲者の方たちへの恩返しにしたいと思う。その人たちが亡くなったことで得た教訓もあるから。私が子供の時に感じた恐怖を、これからの子供たちに感じて欲しくないと思ったからだ。

最後に

阪神・淡路大震災は多くのものを破壊した。しかし、多くの教訓を残した。阪神・淡路大震災で多くの犠牲者が出た。今も苦しんでいる人だってきっといると思う。その人たちの悲しみや苦しみが無駄にならないためにもその教訓を語り継いでいかないといけないと思う。震災の時に、神戸市内の小学校の音楽の先生が作った「しあわせ運べるように」の歌詞にも「亡くなった方々の分も、毎日を大切に生きてゆこう」とある。

阪神・淡路大震災の記憶というものは街の復興とともに忘れられていると思う。阪神・淡路大震災の時の長田の様子や、三宮の様子を今の長田や三宮から知ることはできない。当時、幼稚園児だった私も三宮や長田の被害の様子を生で見た記憶はない。長田の街が焼けている様子や阪神高速道路が倒れた現場、神戸市役所の6階部分がつぶれた現場などは、写真や映像で見ただけである。まして、今の小学生は阪神・淡路大震災を体験していない。その一方で、大切な人を亡くした方などは、いつまでたっても完全には心の傷はなくなり、傷あとはいつまでも残る。私は阪神・淡路大震災で家族や親戚、友達など大切な人を誰も失わなかった。だから、阪神・淡路大震災で、大切な人を亡くした方の気持ちを本当にわかることはできない。きっと悲しいという言葉では言い表せないほど悲しいだろうし、辛いという言葉では言い表せないほど辛いだろう。体験した私たちが教訓を語り継ぎ、これから起こるといわれている、東南海・南海地震、首都直下地震などに備えていかなければならない。阪神・淡路大震災の教訓が活かされ、それで1人でも多くの命が救われたらそれはとてもいいことだと思う。あの悲しみを今後、誰も味わってはいけない。

震災、これから...

神戸市垂水区星陵台
尾崎 加奈

はじめに

震災から12年という月日が経った。その間にも記憶というのは日に日に薄れていっている。実際、私は震災当時のことは正直、あまり覚えていない。私だけでなく家族もそうだった。きっと私みたいに当時の記憶が風化されていっているのが、現実だろう。今回、書くのはほとんどが家族や親戚に聞いた話になる。

震災発生時

私は当時5階建ての官舎の1階に住んでいた。幼稚園の年中だった私は父、母、兄と4人で並んで寝ていた。いきなり窓がカタカタ揺れ始め、ドンという大きな揺れが襲ってきた。食器棚の扉が開き、食器が落ちる音がした。停電した真っ暗な部屋にその音が響いていた。1回目の揺れが一瞬止まる。すると、より大きな2回目の揺れがきた。私は怖くて布団から出られず家族全員布団にくるまり自分の身を守っていた。

揺れが収まると上の階に住んでいる人たちが階段を駆け降りる音が聞こえてきた。父が懐中電灯を探し出してきて、その小さな明かりで着替えた。台所の割れた食器をうまく避けながら外へ出た。猫も一緒に避難させようとしたが、怖かったためか開いた窓から外へ逃げてしまった。帰ってきたのは12時間後の夕方だった。

外へ出ると駐車場に官舎に住んでいる人がたくさん避難していた。車の中でラジオを聴いていると地震のニュースが流れていた。その内容に阪神高速道路が倒れたというものがあつた。父と母はずっとラジオを聴いて情報収集していて、兄と私は全く状況が飲み込めずただその様子を見ているだけだった。余震が何度も（繰り返し）来るので車の中に避難していた。

しばらくして、近くのコンビニに人影が見えた。父は食べ物を売っているかもしれないと思い、6時すぎに行ってみた。棚から落ちた商品が床に散乱していて、グチャグチャになっていてとても悲惨な状況だった。電気がついていなくて暗かったが、20人以上の人が食料などを買いに来ていた。床に散乱している中から選び、店の人が1人か2人で懐中電灯の明かりの中対応していた。父は家族分のパンと飲み物を買って車に戻ってきた。他の官舎の人も車に避難していた。車を持っていない人は子どもだけでもと他の人の車に入れてもらって助け合っていた。

7時ごろになって外が明るくなってきた。両親は車の外で近所の人と情報交換をし、これからどうしようかなどを話していた。すると、外から黒いものがひらひら降ってきた。はじめは何か全くわからなかったが、ラジオのニュースを聞き、それが長田や須磨で起きた火事の灰ということがわかった。私と兄はバタバタしている両親の姿を車の中からただ目で追っていた。

9時をまわって電気が復旧し、母だけ家の片付けのため戻った。父、兄、私は車でその間待機していた。その時はまだ電気もガスも使えたので母は割れた食器を片付け、掃除機をかけた。その後父、兄、私は家へ戻った。

外の水道管が破裂していて、石垣から水が噴き出していた。それを見てか、近所のおじさんが「水が止まるかもしれん」と教えてくれた。その後、すぐにお風呂や鍋に水を溜めた。昼食と夕食の時、ライフライン（水、電気、ガス）が止まっていなかったのが普段通り食事をとることができた。元々、家にお茶、レトルト食品、缶詰、おかしなどを備蓄していたので数日間は食べ物に困ることはなかった。卓上コンロとガスボンベがあつたので、しばらくはそれを使っていた。

家の中の小さな片付けが終わった後、加古川に住んでいる祖母の家に電話をかけるとつながった。祖母の近所では屋根の瓦がずれただけだった。神戸と加古川での被害の大きさの違いに驚いた。他の親戚

に連絡したが、全くつながらなかった。

まだ余震が続いていたので、玄関に近いリビングで家族全員そろって寝ることにした。自分たちの周りには家具を置かないようにした。そして、すぐに避難できるように車の中に着替えを入れて眠りについていた。

震災数日後

2日目

電気は使えたが水道、ガスが止まった。母は買い出しのために垂水まで友人のおばさんと買い物へ行った。しかし、商店街の開いている店は少なかった。スーパーでは何時間も待たなければならなかったため、一度帰宅した。父は交通手段がなかったため、仕事場から3日間自宅待機と言われた。

近所の人に水が出る場所を教えてもらい、父はレバンテの近くの公園の水道に行き、水をくんだ。一度くむのに数時間かかった。地震発生後1週間ほど1日1回、夜にいつもくみに行っていた。水を無駄に使わないように洗濯機は洗剤を使わず、その排水はトイレに再利用して使っていた。

3日目

2日目に買い物ができなかったため、近所にあるトーホーに買い物に行った。昨日と違い、30分ほどで買い終えた。母はいちごなど洗って食べるものは避け、すぐに食べられるみかん、バナナ、インスタント食品、缶詰などを買った。

父が仕事から帰ってきたとき、加古川に住んでいる祖母の家へお風呂に入りに行った。いつもは高速道路を通ると30分で着いていたが、そのときは神戸から出て行く人で渋滞していて、2時間もかかった。帰りはいつも通り30分で帰れた。祖母は神戸にいる親戚から連絡がなかったため、母から話を聞くまで神戸の被害を全く知らなかった。1件、公衆電話から祖母の家へかけてきてその電話だけが通じた。そして、祖母と叔父は物資を車に詰め込み、神戸の親戚中に配り回った。

4日目

今までは必要な物を買込みに行っていたが、落ち着くようになった。牛乳等の商品はありすぎて値段を安くしていたが、他の人も1日目、2日目と違って買い占めていなかった。

1週間

官舎の水道が時間制限で出るようになった。手動で自治会の人が出してくれた。

父の仕事と被害

私の父は国家公務員だ。日常時の仕事は、貿易に必要な岸壁や防波堤を建設していて、神戸港に事務所があった。そして、毎日そこに出勤していた。

地震発生後3日間ほどは自宅待機をしていたが、4日目から交通手段である船の手配ができたので、出勤することになった。出勤してみると、事務所内には建物が何棟もあったが、そのうちの5棟が傾いており危険な状況だった。被災の程度が小さかった建物は、事務棟が1棟と食堂だけだった。構内でも注意して歩かないと危険な状態だったらしい。

事務所の前の道路を見ると、ひどい状態で車では移動が無理な状況で、唯一の移動手段が船だった。

発生直後、事務棟内では災害対策本部を立ち上げ、三宮の宿舎に入っている者がすでに出勤していて、情報収集に飛び回っていた。

一度出勤するとなかなか帰れる状態ではなかったため、宿泊できるように作業船の上にプレハブを建てた物が借り上げされていた。父だけは、いつも2時、3時になったので机の後ろの簡易ベッドで寝ていたらしい。

調査を基に復旧方法や復旧費用の算定を6班に分かれて作業をしたが、父は班長として班内のとりまとめを行う役目だった。この作業は、4月中旬までかかり、4月1日には全国から応援部隊が来て、復旧工事がスタートした。応援部隊は、積算、設計、工事部隊に配属され、工事部隊は6係からなり、父は現場監督として、課長と2人で六甲アイランドの岸壁や防波堤を復旧する工事を担当した。岸壁の復旧には多大な費用が必要で、父が担当した工事費だけで200～300億円にもなっていた。

私の覚えている少ない記憶の中で父が家にいたのは1日目以外ほとんどない。何日も泊まりがけで頑張ってくれていたのを知って、私は父を尊敬している。

親戚の被害

長田区に住んでいた叔母の家は半壊。垂水区に住んでいた親戚はマンション全壊。長田区に住んでいた親戚の家は全焼。

家が全焼した親戚は地震発生時、被害はなかった。その後、近所で生き埋めになっている人がいると聞き、近所の人と助けに行った。それが終わり一段落して、その付近ではガス漏れしているのに気付かず、近所の人たばこに火をつけ、引火して火が広がり親戚の家は全焼してしまった。しかし、これほどの被害を受けたにも関わらず、親戚の中にけが人や亡くなった方は1人もいなかったのは本当に奇跡だったと思う。

追悼式

毎年1月17日に行われている追悼式に、今年初めて行った。東遊園地に着く前からなんとも言えない気持ちだった。私以外にもたくさんの環境防災科の生徒がボランティアに来ていた。雨にも関わらず、想像していたよりもたくさんの方が来ていた。

作業を始めるまで時間があつたのでテントの中で休ませてもらっていた。そこには東京から来た歌手の方がいた。その方は当時西宮に住んでおり、被害を受けたそう。少し言葉を交わし、4曲ほど生で歌とギターを披露してくれた。とても力強い歌声で圧倒された。歌を聴いて、その人その人の伝え方は違うとあらためて思った。この方は、音楽で伝えようとしている。私は話すことが好きだから言葉で伝える。

私の心の中に今でも忘れられない言葉がある。誰が言ったのかは忘れてしまったが、鮮明に覚えている。「この日は今年も雨やね...亡くなった人が泣いとるみたいや。」この言葉を聞いた時、心にずっしりきた。亡くなった6434人の方が泣いている、本当にそんな強い雨が降っていたから、そう思ったのかもかもしれない。

将来の夢

私の将来の夢は養護教諭だ。なりたいと思ったきっかけは小・中学校の時の保健の先生に憧れていたから。その頃は遊び回っていてよく怪我をして保健室に通っていた。行くといつも先生がやさしく手当てしてくれ、話し相手にもなってくれた。いつしか、そんないつも笑顔で迎えてくれる保健室の先生になりたいと思うようになった。

環境防災科に入って阪神・淡路大震災の教訓の他に防災や命の大切さを学んで、憧れだったものが夢に変わった。震災では6434人の尊い命がその時に失われた。死にたくないと思っていても亡くなった人がいる。だから、「生きているとつらい」「死んだら楽になる」と言って自ら命を絶つ子が1人でも少なくなつて欲しい。今ある命を粗末にしないで欲しい。そこまで思い詰める前に話を聞いてあげられるようになりたいと思った。

これから長い人生を歩いていき、未来を担っていく子どもたちに命の大切さを伝えたい。そして、防災についても教えることができればいいと思う。

日常時は学校の保健室で全校の子どもたちの相談に乗ったり、心身の健康状態の問題への個別指導をしたりたくさん子どもと関わっていきたい。たくさん生徒たちとコミュニケーションをとって、災

害が起きた時、心が傷ついた人の話を聞いてなにか希望をあげられるようになりたい。

書き終えて

震災のことを両親に聞くのは初めてではないが、これほど詳しく聞いたのは今回が初めてだった。はじめにも言ったように私は当時の記憶がほとんどない。覚えているのは、地震が起きてからの約3時間と飛び飛びにだけ。なので、両親から震災当時の話を聞くと、経験しているが全く覚えていないことばかりだったので変な感じがした。それは、小さかったということもあるが、記憶が薄れていっているということが一番の原因だと思う。今の小学6年生より下の人たちは震災を経験していない。これからさらに時間が経っていくと震災を経験した人は年をとり、経験していない人が増えていく。震災のことは決して忘れず語り継いでいかなければいけない。震災を経験して生き残った自分が伝えていけないといけない。これから大人になっても語り継いでいこうと思う。

12年間の記憶

神戸市長田区東尻池町
片山 千佳子

1月17日

地震が起きる直前に母は「寒いな～そろそろ起きてお弁当作らないとあかんわ」と思って、布団の中でうとうととしていたようだ。すると、ゴゴゴゴという大きな音と共に激しい揺れが起きた。一瞬にして母と私は飛び起きた。母は「地震や!!」と言って布団を頭から被せてくれて、私を抱きしめ守ってくれた。何が起きたのか全く分からずに、ただ揺れが収まるのを静かに待った。被った布団から出て部屋を見渡して私はぞっとした。なぜなら、いつも私が寝ている布団の上には大きなタンスが飛んできていたり、テレビが落ちてきていたからだ。しかし、私はその日だけは母の布団まで寝返りをうっていたらしく、幸いにもタンスやテレビの下敷きにならずにすんだ。また、母も布団の中でうとうとせずに、すぐ起きてお弁当を作っていたら、台所の棚が頭に直撃していたり、油をかぶって大火傷をしていたり、家が燃えてしまっていたりと大惨事になっているところだった。

すると父が「お前ら大丈夫か?」と言って2階から慌てて降りてきた。父は玄関のシャッターが地震の被害で勝手に上がっていたり、扉が開いて光が漏れていたことにとても驚いたようだ。すると、すぐに近所の友達のお父さんが「大丈夫ですか?」と声をかけに駆けつけてくれた。すごく嬉しかった。

そしてすぐに、父は店に住んでいる祖母と伯母のことが心配で店に出掛けて行き、私たちはとりあえず家の片付けをすることにした。私は裸足で歩くのは危険なので枕元に置いていたお気に入りのピエロの靴下を履いて母の手伝いをしようと思った。母は「危ないから手伝わなくていいよ。部屋の布団の中におり」と言ってくれたが、「また大きな地震が起きたらどうしよう?」という恐怖心があったので、ずっと母の傍を離れることが出来ずに何所へ行くにも後を追っていた。やっぱり部屋を出てみると想像以上の光景が広がっていた。食器棚の扉が開いて食器が飛び出し、床に破片が散らばっていたり、お弁当を作ろうと準備していた油が床に撒き散らかっていたりした。自分の家ではないと思った。そうして片付けをしていると手が汚れてしまい、蛇口をひねったが水は一滴も出なかった。けれど、私は日頃からお菓子のケースに水を入れて洗面所に置く習慣があったので、その水で手を洗うことが出来た。その時、母に「千佳ちゃんの水が役に立ったね。」と言われ、小さいながらに「備え」の大切さを自分の身をもって体験することが出来た。

私の家族は豆腐屋を営んでいるので、朝早くに起きて豆腐や揚げを作ったりしている。後から聞いた話によると、いつも父が豆腐を作っている場所に太い柱が倒れてきて、築80年だった木造の脆い店は潰れた。地震が起きた時間には、いつもなら火を使っていたので、店は焼けて父は死んでしまうところだった。奇跡的に父は地震当日だけ「寝坊」をしたので助かった。父から話を聞いてみると、「頭に置いてた造花が落ちてきて目が覚めたから地震を知らへんねん。すごい音がしたから初めはトラックが家に激突したんかと思った。」と明るく話す父に私たちは「ほんまに良かった」という言葉を何度も何度も繰り返した。また、父が駆けつけると店は潰れて祖母と叔母は生き埋めになっていた。その光景を見て気が動転したけれど、父1人で助けることは流石に無理なので、店の近所の方に声をかけたり、「大丈夫ですか?」と声をかけてくれた人などと6人ぐらいで、壊れた家の柱や壁を片付けながら祖母と伯母を、一緒になって協力して助け出した。怪我なく2人とも助かった。また父は、「豆腐屋さんのところで大勢で助けてたから、うちのところまで手が行き届かなくて間に合わなかった」と言われたこともあって、辛い思いをしたことも私に話してくれた。

以前は家と店が離れていたもので、店の近所の方々とはあまり交流はなかった。ところが震災を機に地域の繋がりが広がったので、震災は悲劇だけをもたらしたのではなく、今後の私たちに大切なことも残してくれたことを忘れないでおこうと思う。このように私たち家族はいくつもの奇跡が重なって命が救われた。救われた命もある一方で、亡くなられた尊い命が遥かにたくさんある。生と死は本当に紙一重なんだと痛感した。

バイクや徒歩で親戚などが何人も様子を見に来てくれた。当時は、なかなか安否確認がしにくい状況で、潰れた店の様子や長田の町の悲惨な様子を見て、多くの親戚は「もう、ダメやったのかなあ...」と落胆の気持ちでいっぱいだったので、私たちの姿を見ると安心したのかしゃがみ込んで泣き出す人もいたようだ。そして、鈴蘭台から様子を見にきてくれた叔父と共に家族で中学校の体育館に避難した。し

かし、私たちが行った時にはすでに体育館の中は人で溢れかえっていた。私たち家族は足も伸ばせない程狭いところに小さくなって座っていた。父と母が「どうしようか？」と悩んでいると、鈴蘭台の叔父が避難所まで「店の隣の風呂屋さんがおいでって言うてくれてるから行こう」と言いに戻って来てくれた。その日から銭湯の脱衣所に毛布や布団を敷いての生活が始まった。余震もまだたくさん起きていて、脱衣ロッカーがガタガタと揺れるのを見て「ホンマに倒れてこないかなあ？」と銭湯での生活は初めてのうちは緊張しながらの生活だった。私たちの店は全壊だったけれど隣の銭湯はライフラインも止まっていなかったの、すごく驚いた。住まわせてもらって感謝の気持ちでいっぱいだったが、やはり自分の家ではないので不便だという不足の気持ちもあった。例えば、銭湯の井戸水を貰いに朝早くから夜遅くまで人が来ていたのでゆっくりと眠れない時があったことや、やはり自分の家ではないので常に気を遣った生活をしていたことである。

また、ライフラインが止まっていなかったの銭湯の人が水を配給したそう。多くの人が水不足で困っていて長蛇の列を作っていた。母から聞いた話の中で、水の順番のことで大人が喧嘩をしている光景を見たそう。「震災で大変な時こそ、もっと思いやりを持って接することが出来ないかな？こんな時に何をしてるんやろうか...」と呆れてしまったと話してくれた。この話を聞いて私も、大変な時こそ地域の人たちが協力し合い・譲り合い・励まし合うことが大切であり、日頃から心にゆとりを持って生活していれば非常時のときもしっかり対処出来るだろうと思った。

また、生活をするためには食べ物が必要不可欠だ。おにぎりやパン・お茶などの救援物資を、家族の分を公民館まで籠で取りに行った。すごく救援物資は助かった。そんなとき、家の近所の知人が避難所で1人で生活していて、物資が余って食べきれなくなってきたら、私の家族は多かったの頻りに持って来てくれた。人の善意をすごく暖かく感じる事が出来た体験をした。その避難所にいた方のお話で、避難所生活で見ず知らずの他人とずっと一緒にいると、人間の嫌な面が見えてくる事がすごく辛かったと聞いた。その時、他にも辛いと思っている人や悩みを抱えて困っている人が避難所には溢れていたと思う。やはりこういう時こそ少しの時間でも話し相手になってあげることや、子供たちの遊び相手になってあげるなどのボランティアの大きな力が大切なんだと思った。

地震発生2日目～1ヶ月後

父は地震発生2日目に屋根のシートを買うため、火災の被害がひどかった菅原へ行った。けれど、電線が垂れ下がりショートしているところがたくさんあって危険だった。父は菅原の火事を見たけれど、消防車が来てくれると思いそのままシートを捜しに行ってしまったそう。しかし、菅原に住む友達に後で聞くと消防車は来なかったし、水道は止まっているし、燃え放題だった。全焼でたくさんの方が亡くなったことも聞いたそう。

震災が発生してすぐに、私だけ加古川の親戚の家に10日くらい預けられた。加古川ではいとこが2人いて、遊園地やボーリングに連れて行ってくれたり、家ではままごとにつき合ってくれたりして、私が寂しくないように、いつも遊んでくれていた。地震の怖さも忘れるほど楽しい毎日を過ごすことができていた。その間、父と母は毎日少しずつ家や店の片付けをしてくれていた。父は店の片付け担当だった。店は全壊だったので、まず役所の方が道路の整備をして人や車が通りやすいようにしてくれた。そこから、片付けという片付けは出来ずに、とりあえずお金や書類などの大切な物を瓦礫の中から探し出したそう。母は、油がこぼれた後や食器の壊れた後片付けなど、手伝いに来てくれた親戚と共に家の片付けを行った。まずは布団が敷ける状態にしないといけないと必死だったそう。また、屋根の瓦が全て落ちていたのでブルーシートを父と母で協力してかけたそう。私がない時に2人が何とか元の生活を取り戻そうと頑張ってくれていた話を聞いて、今度もし災害が起きてしまった時には私が家族の力になって積極的に活動したいと強く思った。

1ヶ月くらい経って初めて家へ帰るときはとても緊張した。私は心の中で「きっと大きな地震が何度もきたんだから家は潰れてるやろうなあ...」という気持ちで見に行った。しかし、家の横の角を曲がって、しっかり立っている自分の家を見たとき、うれしい気持ちでいっぱいになった。

普段不自由なく生活していると、家があるのが当たり前。水が出るのが当たり前。ご飯をお腹いっぱい食べられるのが当たり前。布団に入って1日の疲れを取るために寝られることが当たり前。このように、何でも「当たり前」な世の中になっているが、震災でその「当たり前」の大切さを実感することが出来た。

冬だったので風呂に入ったのも震災からだいぶ月日経った日のことだった。寒いなか長蛇の列に並び、風呂に入った。人が多くてゆっくり入ることは出来なかった。けれど、久しぶりに入ったお風呂は気持ちよく癒されたことを私は今でも忘れていない。また、母が鷹取の駅前に行ったときに多くの建物は焼けてしまっていた。火は消えていたけれど、まだあちこちで燻っていて、瓦礫をかき分けて遺体を捜しているような作業をしているある1人の自衛隊員を見つけた。母は、ドラマや映画の世界にいるみたいな異様な雰囲気が漂ったその光景が今でも頭に焼き付いて忘れられないそうだ。

須磨に住んでいる伯母の震災体験

テレビとタンスが伯母の寝ている布団の上に倒れてきた。しかし、枕元に置いている小さな机のお陰でわずかな隙間が出来たので、身動きは取れなかったけれど、その隙間にちょうど顔を出すことが出来て助かった。すると、1階から叔父が「降りて来い」と声をかけた。もちろん身動きが取れない伯母は大声で叫んで、叔父に2階へ上がって来てもらった。そして叔父は、普段なら絶対に持ち上げることの出来ない大きなタンスを1人で持ち上げて伯母を救出したそうだ。外が明るくなり、部屋の片付けをしてタンスを動かそうとしたけれど、びくともしなかった。人間いざという時には不可能を可能に変えてしまう強い力を持っていて、その力を発揮することが出来るのだと私は改めて思った。そして、私の家や会社の様子を見に行くために外へ出ると、家の前に止めていたバイクが落ちてきた瓦で埋まっていた。外の景色は長田方向の空に黒い煙が上がっていたり、前の家がドミノのように倒れていたり、いつもと違う風景に戸惑いを隠せなかった。また、叔父の会社は2階が1階にぺちゃんこに潰れてしまっていたそうだ。

そして、すぐに妙法寺川の近くから火が出たので、地域のみinnで協力してバケツリレーをした。そのお陰で火は燃え広がることなく鎮火出来たそうだ。また、今では公園をたくさん作って火災が起きた時に延焼を防ぐことや、川の設備も良くなり消火活動がやりやすくなっている。他にも消防車や救急車が入って来やすいように細い道を無くしたりして、町がだんだん変わって来ていると日々感じるそうだ。

その後、板宿に住んでいる友達が「避難しておいで」と言ってくれたので向かっていると、家などが倒れていた為に、あらゆる道という道が塞がれて道では無くなっていた。仕方なく線路の上を歩いたという思い出もあるそうだ。板宿に無事に到着して1日だけ住まわせてもらった。そこで、最も困ったことはトイレである。やはり、家のトイレは水が流れなかったので駅で借りたけれど、話にならない程みんなが汚い使い方をしていたので使えなかった。

それから2件ぐらい家を渡り歩いたけれど、快くみんな受け入れてくれたことがすごく有難かったそうだ。また、店の片付けをしていたらお客さんが「大丈夫？」と顔を出してくれたことや、普段なら近所の方へ会っても特に何も思わないけれど「無事やったんやね。良かった。」と人に会える事や話が出来ることが嬉しくて、人が恋しかったと話してくれた。

環境防災科に入った背景

私が環境防災科に入学したいと思ったのは、中学3年生の時に地震が多発していて、地震が起きるたびにフラッシュバックしてしまい「阪神・淡路大震災の時のように地震でたくさんの人の命が奪われるのはもう見たくない。防災について勉強して自分の命を守るのはもちろんだけれど、家族や周りの人の命も守りたい！！」と強く思ったからである。環境防災科に入ることが出来て、消防士や自衛隊などの外部講師の方々の震災体験や、大学の先生の災害に関する講義を受けたり、たくさん貴重な体験をさせてもらった。そして、疑問に思ったことは積極的に調べたり質問したりして自分のスキルアップに繋げることの大切さや、みんなで協力して活動することの素晴らしさを身をもって体験出来た。また、人前に立って喋ることが苦手で、事前に考えておいたセリフしか喋れなかった私だが、授業でプレゼンテーションを繰り返すうちに、考えておいたセリフではなく、以前よりも少しは自分の言葉で発表し、臨機応変に対応できる力も身についたと思う。

私の周りでは阪神・淡路大震災によって亡くなった人や怪我をした人はおらず、正直亡くなった方の数字だけ見ても漠然としていた。だから、この学科で何より一番「命の大切さ」を痛感した。これから先、地震をはじめ災害というものは、何らかの形で絶対に私たちの身に降りかかって来るだろう。そんな時、自分の大切な人・物を守ることが出来るように、卒業までに1つでも多くの防災について学びたい。

将来

将来は保育士・社会福祉士の資格を取得したい。保育士としては子供たちに直接、防災を伝えることも大切だと思うけれど、まずは一番子供たちに身近な親に、防災について関心を持ってもらうために伝えたいと思う。また、防災は小さいころから身につけておくべきだと思うので、運動会でバケツリレーをしたりキャタピラリレーをして楽しく防災についてふれてもらったり、防災意識の向上のため紙芝居や絵本を使って自分の被災体験を伝えたい。また、社会福祉士としては災害時に気軽に誰もが相談してくれるように、日頃から福祉施設を訪問してコミュニケーションをとっておくこと。スムーズな避難方法を高齢者・児童・障害者など、それぞれの目線から考えて迅速な対応が出来るようにマニュアルを作ること。災害が発生する前の防災訓練など積極的に参加してもらえるように呼びかけたいと思う。やはり、私たち若者が先頭に立って実際に行動することが大切である。そして、これからの時代を担う子供たちに防災を伝えていき、私たちのような怖い思いをしないように防災に強い人々を育てていきたい。

幼い記憶

神戸市長田区神楽町
亀山 美幸

あの瞬間だけは今でもはっきりと覚えている。

- 前日 -

17日、私の家では東京に住む知人の奥さんのお葬式を行った。私にとって初めてのお葬式だったのでよく覚えている。当時、私たちが生活していた家は新築で、その隣に木造で屋根瓦の築44年ほどの家があり、そこでお葬式が行われていた。知人の家族全員が家に泊まっていたので、私と母はいつも寝ている部屋ではなく、姉の部屋で寝ることとなった。

- 地震発生 -

それは突然だった。突き上げるような揺れの中、母に守られながら目を覚ました。当時私は幼かったため、どのくらい強い揺れだったのか、どのくらいの間揺れていたのかなど、はっきりと鮮明には覚えていない。母に聞いてみると、ガタガタの田舎道をトラックで走っているようだったという。母は私に布団をかぶせた。その上からでも小さな小物がばらばらと落ちてくるのがわかった。揺れが収まり、何もなかったかのようにシーンとした薄暗い部屋では、オルゴールの音だけが鳴っていて不気味だった。私は今でもそのオルゴールの音を聞くと、とても恐ろしい気持ちになる。

兄たちの部屋で寝ていた父が「大丈夫か!？」と様子を見に来た。兄は「学校休みになるんちゃう?」とうれしそうに言ったので、父は「そんなどころじゃない!」と答えたそうだ。祖父はすでに起きており、階段を降りる途中で地震が起こったそうだが、必死に手すりにしがみついた大丈夫だった。寝ていた家は新築だったため、全く被害もなく全員無事だった。

布団から出て周りを見渡すと、部屋は足の踏み場もないほどいろいろな物が散乱していた。母は窓から、お葬式を行っていた木造の家を見た。家は大きく傾いており、高さが半分ぐらいになっていたそうだ。もちろん全壊だった。うちの家だけが大きな被害にあって恥ずかしいと思っていたらしいが、反対側の窓から外を見ると、他の家は将棋倒しのようにになっていたそうだ。この時やっと事の重大さに気付いたという。

床には割れたガラスなどが散乱していて、みんな裸足で危ないのでスリッパを履き、とりあえず部屋を片付けることになった。

- 火災 -

昼になり外に出ると、東と西と南の三方で煙が上がっているのが見えたらしい。少し遠かったのですが、ここまでは火は回って来ないだろうと思ったそうだ。ところが父が北の方を見に行ったら、工場から少し煙が出ていた。火が小さかったため、火災の被害が大きい場所で消火活動をしている消防士はもちろんいなかった。しかし、この火はうちの家まで回って来そうだと感じたそうだ。

父の思ったとおり、火は夜になって大火災となった。家の北側から火の粉が飛んで来たことを覚えている。火が回って来るかもしれないということで、たくさんの荷物を持ち、近くの小学校へ避難することとなった。

- 避難 -

私は父のちゃんちゃんこに包まれ、母にだっこされながら避難所へ向かった。避難所までの景色は、まるで戦争中のような感じだったと思う。黒い空。煙の臭い。灰が舞っていたのを覚えている。

姉と祖父母は、父の運転する車で小学校へ向かった。電柱がたくさん倒れていたため、電線が道を塞いでいた。このような状態では車が通れないので、姉が車から降り電線を持ち上げ、車が通れるスペースを作った。後ろにも車が何台も重なっていて、次から次からとそのスペースを通過していくので、姉は電線をなかなか放せず困ったという。道路はガタガタで、川に架かっていた橋も落ちていて、結局車では小学校までたどり着けなかった。

- 避難所 -

避難所となっている小学校にはたくさんの人がいて、すでに体育館はいっぱいだったので玄関に腰を下ろした。玄関はコンクリートで座ると冷たかったのでタオルを敷いた。夜中だったため気温が低く、ドアが開いたり閉ったりするたびに冷たい風が吹き寒かった。「寒いからドアを開けるな！」と怒鳴っている人もいたという。また、テレビ局の人たちがビデオカメラを持ちライトをつけ、避難所の様子を撮っていたらしい。母は自分たちの避難している姿を撮られて、嫌な気分だったという。

避難所から燃えている建物が見えた。ゆっくりと私たちの家に火が迫っていくのを見ていた父は、もう駄目だと思ったそうだ。燃えている建物のそばで、消火活動をしなくて、ただ火を見守っているだけの消防士の姿があった。自分の家が燃えてしまいそうな住民たちは、「なぜ火を消さないんだ!？」と消防士に必死に聞いていた。燃えている建物が崩れた瞬間、一斉に消火活動が始まった。今思えば、これは少ない水でいかに災害を最小限に抑えようかという、消防士たちの考えだったと思う。その消火活動と同時に、北から南に吹いていた風の向きが突然逆へと変わった。おかげで私の家は燃えずに助かった。

- 帰宅 -

無事に家に帰ることが出来、再び部屋の片付けをすることにした。倒れたタンス、落ちたテレビ、割れた食器。足の踏み場もないほど散らかっていた。台所の床には、食べ物が散乱していた。今思い出すと、南北に置いていたタンスはすべて倒れていたと思う。私はテレビを見たかったがスイッチを押してもつかなかった。ライフラインはすべて遮断されていたのだ。

そんな家の中では食事もないので、庭にブルーシートを張り火を焚いて食事の支度をした。キャンプみたいだと思い、私は楽しかった。

- 遺骨 -

お葬式は全壊した木造の家の方で行っていたので、崩れた家の中には遺骨がまだ残っていた。みんな奥さんの遺骨を絶対取り出してあげたいという気持ちでいっぱいだったそうだ。その家は玄関だけが倒れずに残っていた状態で危なかったのが、取り壊すことになった。危険だということで私は車に避難した。玄関にロープをくくり、綱引きのようにみんなで引っ張っていた。崩れた瞬間、とても大きな音にビクッとした。

倒壊した家から遺骨を取り出す作業が始まった。瓦や瓦礫をひとつひとつ退けていくのは気の遠くなるような作業だったそうだ。数日後、瓦礫の中からはなんとか遺骨を取り出すことが出来た。

火が回って来なかったのは奥さんが守ってくれたからだ、父は今でもよく言っている。

- 誕生日 -

震災の日は姉の、18日は私の誕生日だった。こんな状態でケーキちょうだいなんて言えるわけもなかった。すると東京の知人の息子さんが「お誕生日おめでとう」と餡がいっぱい入った袋をくれた。私は大事そうに1日ひとつと決め食べていたそうだ。これが5歳になった私への誕生日プレゼントだった。

- 地域の様子 -

家の片付けもひと段落ついたので、私は姉と一緒に地域の様子を見に散歩に出かけた。周りの家は将棋倒しのようになっていて、電柱は道路をふさいでいた。一番衝撃的だったのは目の前でJRの高架が落ちたことだ。今考えると高架が落ちるなんてとんでもないことだと思う。大きな音にびっくりしたが、周りの人は誰も焦ってはいなかった。

上空には町の被害を撮るため、テレビ局のヘリコプターがばたばたと飛んでいた。お父さんは「人が大変な思いをしているのに…」と怒りを感じたそうだ。

- ライフライン -

やはり一番大変だったのはライフラインが切断されてしまったことだそうだ。震災直後、すぐにライフラインは止まったが、私の家だけは水が出ていた。なぜなら私の家は、周りよりも一番土地が低かつ

たからだ。すると近所の人たちが「お水を下さい」と家に集まって来た。どうぞどうぞとみんなにあげていたら、いつの間にか水は止まってしまっていた。

1週間ぐらいでまず電気が繋がり、テレビが映るようになった。テレビでは震災で亡くなった方の名前が流れていた。みんなで青い画面をずっと見ていた。その中に私たち姉妹と同じ名前の瞳さん、美幸さん姉妹と流れた。小さいながらも私はとても悲しい気持ちになったのを覚えている。

電気とは違って、水道とガスはなかなか復旧しなかった。水は小学校へ貰いに行った。それはほんの少しだったので、すべて飲み水として利用した。そのため、お風呂に1週間入れていなかったの、西神中央に住んでいる親戚の家に入れてもらえることになった。地下鉄は板宿からしか動いてなかったの、家から板宿まで歩き、西神中央まで行った。駅に着いてみると、長田とは違い、西神中央はきれいで別世界のようだったという。私たちは服も体も真っ黒に汚れていて、周りの人たちの目が気になったそうだ。お風呂に入って髪の毛を洗ったら、墨汁のように真っ黒い汚れが出てきた。洗濯もさせてもらい、申し訳ないという気持ちだったらしい。

2、3週間経ち、父が仕事に行きだしてからは毎日西宮から車で水を運んで来た。その水をまず洗濯や皿洗いに使い、その使った水を溜めておきトイレに使った。お風呂に入るため、電気ポットと電気釜とカセットコンロを使い、お湯を沸かした。浴槽にお湯を溜めるのに、何時間もかかったという。冬だったため、お湯はすぐに冷めてしまい、何度もお湯を沸かす作業をした。毎日のようにこのようなことは出来ないの、お風呂に入れるのは1週間ごとであった。

結局ライフラインの再開は電気、水道、ガスの順番だったが、水道とガスはとても長い間止まり大変だったそうだ。

- 助け合い -

やはり震災時は助け合いがあった。親戚の人がおにぎりとお茶を持って来てくれた。また、遠く離れた父の友人が、岡山から生活用具一式をトラックに積んで持って来てくれたり、大阪の知人が水をタンクに入れて持って来てくれたりしたそうだ。他にも、北海道から親戚夫婦が来てくれて、後片付けを手伝ってくれた。このようにたくさんの人たちが心配してくれ、たくさんの人たちが助けてくれたから、今日私たちは生きているのだと思った。

庭で祖母が七輪でお湯を沸かしていたら、赤ちゃんを抱えた女性が家の前を通りかかった。女性は「ミルクを溶かすためのお湯を下さい」と言った。祖母は「どうぞ使って下さい」とお湯をあげたそうだ。赤ちゃんや病人を抱えた人たちは、とても大変だったと思う。

- 父母の出勤 -

震災から2、3週間ほど経ち、父と母は会社へ行くようになった。父は車で通勤していたが、地下鉄で新神戸まで行っていた母は、まだ電車が動いていなかったため、最初の頃は自転車で通勤していた。道路もガタガタで瓦礫もまだたくさん散らばっていたので、毎日のように自転車はパンクしていたという。そのため、いつも修理道具を持っていたそうだ。

長田より東の地域には大きなビルが建ち並んでいた。父母は通勤途中に、大きなビルが倒れ道路を塞いでいるのを見て、震災の恐ろしさを改めて感じたという。

私に残っている小さいときの記憶は、この数日の震災体験だけだ。それほど震災は小さかった私にも強い印象を与えたということなのだろう。

- 環境防災科 -

私が環境防災科で学びたいと思ったのは、この震災体験があったからかもしれない。阪神・淡路大震災をきっかけに創られた学科と聞き、中学生のころ私はとても興味を持っていた。また、先輩方が豊岡にボランティアをしに行っているのをテレビで見て、私も被災地で何か役に立つことがしたいと思うようになり、この環境防災科を選んだ。

そして今、私はいろいろなボランティア活動や地域の行事に参加している。つい最近、石川県能登半島地震が起こり、私は被災地へボランティア活動をしに行った。そこには阪神・淡路大震災のときのように、倒れた家がたくさんあった。訪問した家のおばあさんに「みんなの顔を見るだけで私たちは元気になる。また来てね」と言っていただけで、人のあたたかさを知ることが出来た。

私は環境防災科に入ってよかったと、毎日のように思っている。

- 夢 -

そして今、私には夢がある。それはインテリアコーディネータになることだ。阪神・淡路大震災で亡くなった方の80%が、家屋の倒壊や家具の下敷きとなったことが原因だと学んだ。もしかしたら、この震災によって家は危険な場所だと思った人がいるかもしれない。しかし私は、地震も含めた災害が起こったとき、家は安全な場所であると思って欲しいのだ。

私はインテリアコーディネータになって、震災に強い家を造りたいと思っている。そして、また大きな地震が起こったとき、少しでも被害が少なくなるようにしたい。そのためにも今出来ることを一生懸命して、夢を実現するためにこの環境防災科で学んでいきたい。

- 語り継ぐ -

震災から12年が経つ。気付けば長田のまちはいつの間にかきれいになっていた。そして復興と同時に、人々の記憶も風化して来ているかもしれない。

この「語り継ぐ」を書くために、私は家族に震災のことを思い出してもらった。するとみんな、地震が起こってから3週間ぐらいまでの記憶はあるが、それから先はあまり思い出せないと言っていた。中には、4歳だった私しか覚えていない出来事もあったぐらいだ。私の家では、あの時の記憶は時間とともに風化されてしまっていたのだ。しかし今回、私が聞いたことによって、すこしは当時のことを思い出してもらえたと思う。

阪神・淡路大震災を覚えているのは、私たちの年齢ぐらいまでだろう。そして、震災を知らない子供たちが、これからどんどん増えてくる。だからと言って絶対に風化させてはいけないと思う。私自身少しの記憶しかないが、それでもこの文章を書くように語り継ぐことは出来るのだ。

これからも災害は起こり続けるだろう。もう2度とあの時のような悲しい出来事が起こらないように、私は震災を風化させない。そして語り継いでいきたい。

未来へ

神戸市垂水区星陵台
川原 弘之

地震発生！

《ガタガタガタガタ 》

<<ゴォー——！！！>>

1995年1月17日午前5時46分、激しい揺れが神戸を襲った。阪神・淡路大震災が発生した。あの震災は「阪神・淡路大震災」という禍々しく悲惨な出来事として、今でもたくさんの想いと共に僕の胸の中に痛烈なショックを残している。しかし当時僕は幼稚園の年中だったので、阪神・淡路大震災の記憶を辿るのは容易ではなかった。それでも僕はあの阪神・淡路大震災という鮮烈な出来事は忘れることができない。

震災直後

僕は当時、現在の住所とは違い垂水の星陵台に住んでいた。その住所にはまだ引っ越ししたてだったため、僕は毎日新しい友達と遊ぶのを心待ちに、幼稚園児として毎日ごく平凡な生活を送っていた。当然あんな激しい揺れが神戸の町を襲うとは全く思ってもいなかった……

僕は震災当日普段と同じように父、母、弟と寝ていた。すると、どこか遠くの方から「ゴォー」というような猛々しい地鳴りの音と「カタカタカタ…」という家具の揺れる音が起こり、普段なら一度寝付いてしまうと決して起きなかった僕でもあの激しい揺れと騒音で一瞬で目が覚めた。すると、次の瞬間急に父が僕に覆いかぶさってきた。ただただ僕は全く状況が分からず混乱していた。でも、どうやら父がダンスから僕をかばっていてくれていた。そうとは思っても僕は必死で抵抗した。当然たった5歳の子供が大人に敵うはずもなく目の前には父の大きな体しか見えなかった。あの長く激しい揺れの中、家具もたくさん倒れ、食器棚から食器やグラスがたくさん割れ落ち…特に食器やグラスが割れ落ちる「パッシャーン」という音は今でも鮮明に覚えているくらい、とても恐怖な記憶として胸に焼き付いている。

数十秒後、ようやく地震の揺れが収まり、周りのダンスや食器が割れているのを見て僕は何となくだけ状況が把握できた。「地震が起きたんだ！」と思った。しかし、当時の僕にとっては「地震が起きた！」と分かっても全く実感がなく、とても呆然としていた。けれどそんな僕にとってもあの揺れのなかでひとつ気がかりなことがあった！当時僕には2歳の弟と9ヶ月の弟がいた。中でも9ヶ月の弟は震災当時、僕たち家族4人が寝ている寝室とは違う部屋で寝ていたため、僕はとても心配していた。地震の揺れで弟の泣いている声が聞こえた。僕は急いで弟の元へ向かおうと思った。すると父が「ガラスの破片があるから動くな！」と怒鳴るような声で言った。代わりに母が弟の元へ向かった。弟は泣きじゃくっていたが無事で、すぐさままた眠りについた。僕は本当に家族全員無事でよかったと思った。もしあの地震で自分の家族、知り合いが亡くなっていたらと思うと……

地震の被害！

僕にとって地震後の生活というのは普段の生活と大きく変わっていた。ライフラインが止まったというのは非常につらかった。でも、当時の僕自身としては、ライフラインが止まったというとても重要な問題よりも、今日も幼稚園に行って普通にいつも通り友達と遊んだりする生活を送るんだと思っていたため、親に「今日は幼稚園を休みなさい」と言われたショックの方が大きかった気がする。今思うと僕はなんて無関心なんだと思う。

もちろんその日は幼稚園はなかった。でも、なんで今日は幼稚園がないんだろう？という疑問は当然あった。

幸い被害はほかの地域と比べて少なかったため、まさか長田、中央区の方があんな大災害になっているとは思ってもしなかった。そして僕は、阪神・淡路大震災によって当時の生活は水も出なく、あらゆる面において困難だという現実さえ気がつかなかった。

やはり明らかに周りの環境は違っていた。窓から外を見ると、いろんな人が外に出ていた。僕も親とともに外へ出た。僕はすぐさまいつも友達と遊んでいる近くの公園に行った。でも、やはり公園に友達は誰もいなかった。そこはいつも僕達が遊んでいた賑やかな光景と違い、冷たく殺風景な感じがしてとても異様な風景だった。僕は何故か少し不安になった。

帰り道、目に映るすべての光景が異様に感じた……

どこかいつもと違い、不意に気がついたことがひとつあった。自分の家の壁にひびが入っていた。あれほど地震について無意識だったのに、それを見て地震がもたらす被害の恐ろしさを僕は感じた。また、僕自身今までと違い、日常からとても離れていた地震という現象がよりリアルに感じられた。

僕は家に帰りまずテレビを見た。テレビは地震後も映っていたため地震の情報はテレビから得ていた。とはいっても、地震の情報でマグニチュード7.2とかいう数字は当時の僕にとってはとても難しく全然理解できなかった。けれど、当時の僕でも地震のニュースを見て唯一理解できたのは、災害時の映像が流された時だ。まさかこの地震であれほど多くの建物が倒壊し、燃焼しているなんて思いもしなかった。それだけに、白い煙が立ち上がり建物が何件も倒壊し、あらゆるものが壊れている映像というものは、とても印象的で今でも鮮明に覚えているくらいだ。当時は日に日に増えていく死者の数でさえあまり現実味がなく理解できなかった。あの日何気なく見ていたニュースで増えていく数字が、とても多くの尊い命が無くなったことを表していたなんてとても思いはしなかった。当時は今ほど命の尊さを分かっていたただけに、本当に今思えばとても悲惨な出来事だったのだと痛感できる。

それから、僕は朝食を食べた。その日の朝食はいつもの朝と違ってレトルトの食品だった。当時は食べ物がとても貴重なものだったため、その日から当分我慢しなくてはならないのも致しかたなかった。この大災害で、家が倒壊して朝食でさえまともにとれていない人たちのこと考えると、僕は幸いにも被害が少なかったのだから、当然我慢は仕方ないと思った。けれど、例え被害が少なかったとはいえ水が出なかったことにはとても困った。お風呂の水をトイレに使って節約したり、飲み水を確保するのにわざわざ車で定期的に六甲山まで行かなければならなかったことなど、とても「水」の面で苦労した。お風呂には毎日入れるわけでもなく、近くの温泉や銭湯はとても混んでいたため、車で有馬温泉の方まで行かなければならなかった。

地震後の生活は普段とは違いとても困難極まりない生活だった。その分ありふれた普段の生活というもの大切さが十分わかった期間だった。

あれから 11 年…

11 年前のあの日から沢山の思いと共に過ぎ去った 11 年間……

阪神・淡路大震災からあつという間に 11 年が経過した。僕はあれから 11 年たった今でも、当時の記憶は明らかに薄れてきてはいるが、あの阪神・淡路大震災の出来事は忘れることができない。また、阪神・淡路大震災で壊滅的な被害を受けた街も、今では元通り以上の活気があふれる街に復興している。けれどこの 11 年という長い年月の間には沢山のことがあった。今になって考えてみると、初めは、あれほどの災害からたった 11 年でよくもここまでの復興が……と思った。けれど、それもよくよく考えてみると神戸の人たちの努力の成果であり、たった 11 年でここまで復興するなんて、こんなに素晴らしいことはないと思う。自分たちで街を生き返らせ、自分たちの手で新しい街を作る。確かに阪神・淡路大震災で失ったものはとても大きく決して償えるものではない。

沢山の尊い命を失った。これは何よりも尊重しなければならないことだ。もう 2 度とあのような大災害で悲劇を引き起こしてはならないためにも、11 年前の阪神・淡路大震災から得た教訓をもとに、僕達は未来に繋がるものをこれからも残していかなければならないと思う。

環境防災科に入学して

僕は現在、環境防災科に入学して 3 年目を迎えている。思えばこの学科でとても貴重な体験とともに大切なものを教わった気がする。

この学科に入る前は、防災や災害を学ぶということはどんな事をするのだろうと思っていた。僕がこの学科を選んだ理由は、課外授業や消防学校やフィールドワークなど、普段決して体験できないことを

体験できるのだから、普通に高校生活を過ごすよりもきっといい経験ができるだろうと思ったからだ。だから、僕自身、本来は防災関係の事にはあまり興味がなかった。確かに阪神・淡路大震災の影響は大きかったが、まさか自分が専門的に防災関係のことを学ぶとは思ってもいなかった。だから、入学当初は、防災、災害を学んで何のためになるのかと思っていた。それどころか、こういうことを学んでも将来絶対意味ないなと思っていたぐらいだった。でも、今になって、この学科で防災を学んでこんな素晴らしい体験ができて本当によかったと思う。

僕がこの学科に初め持っていたイメージとしては、消防士になるための学科だとか、阪神・淡路大震災のことを学ぶことができる学科というものしかなかった。でも実際は僕が持っていたイメージと大きく異なっていた。阪神・淡路大震災のことを学ぶのはもちろんのこと、消防学校体験入校、課外授業、街歩き、総合防災訓練、出前授業など多方面にわたってさまざまなことが経験できた。中でも消防学校なんてこの先2度とできない体験なので、この学科で体験できてとてもよかったと思う。

また、防災、災害の専門知識だけではなく、この先生きていく中で大いに役に立つことを学ぶことができたのではないかと思う。普通学科では英語、数学、国語、日本史などの勉強をするだけだけれど、この学科はその分違うことをするので僕は本当にそれだけの価値があると思った。

また、この3年間の中で一番思い出に残った行事というと消防学校体験入校で、一番真剣に取り組めた気がする。普段体験できないことの連続で胸がドキドキしっぱなしの時間だった。消防学校ではリアルに命の尊さを感じ、普段市民に身近な消防という組織の偉大さを感じた。当然訓練内容は半端なく過酷でとてもきつかった。朝は早起きに始まり、早朝ランニング、訓練の連続ととても厳しく大変だった。また、僕たちが平和に生活している背景にはそんな訓練を毎日行う消防官のおかげであると感じ、本当に尊敬しなければならぬと感じた。消防学校は僕の環境防災科での3年間のなかで一番の思い出であり、この体験をこれからの防災につなげていきたいと思った。

僕はこの環境防災科の3年間を通して、予想以上のものを学べたと思う。最初防災に対して無関心だったのが嘘の様に、今では当然、防災に興味があり、これからもこのような体験をしたいと思う。

終わりに

今から11年前、阪神・淡路大震災の発生で神戸の街は壊滅状態になった。僕は当時、この阪神・淡路大震災は破壊を引き起こしてばかりで、何も得るものなんてないと思っていた。けれど、阪神・淡路大震災から11年たった今、僕はこの「語り継ぐ」を書いている。まさか、あの時の震災が今の自分の存在と大きく関係していたなんて当時の僕は全く思いもなかった。

そして今思うこと、「もうあのような災害を起こしてはいけない」ということだ。

そのためにも、阪神・淡路大震災を経験したといわれている最後の世代である僕達がこれから頑張っていかなければならない。日本に住んでいる以上、地震などという災害は付きものだ。だからこそ、いつどんな災害が起きてもそれに対応できる社会を築かなければならない。また、決して災害に負けないためにも1人1人が防災に対する意識を高めていかなければならない。実際に阪神・淡路大震災の時には防災に対する意識が少なかったためか、建物の耐震化の施しもままならず、災害が起こった後の社会としての対応も遅く、結果、あのような大災害にまで発展させてしまった。

僕たちはこのような課題を胸に焼きつけ、これからの災害に負けない社会を築いていくためにも絶対に改善しなくてはならない。かといって何をすべきか？僕自身正しい答えは見つからない。でも、僕の考えでは、防災を進めていくためには何よりも「気持ち」が大事であると思う。

まずは最後まで貫く「意志」が大事だ！

たとえきっかけはどれであれ、自分のためにも、誰かのためにも、命を守りたい。こう思うことができたなら自分が何をすべきか？そんなことは自分ができる範囲のことを十分頑張った後、自然と結果はついてくるものだ。

また、僕は環境防災科の3年間でたくさんのボランティア活動や防災を学んだ。これらの活動を通して、本当に誰かのためになっているのか？などという疑問は当然あった。募金活動でさえ、被災地の被害額と比べたら本当に微々たる金額だし、ただの自己満足ではないのかなど、思うところはたくさんあった。けれど、改めて考えてみると、そんなことを思って何もしないよりは、何か行動を起こしたほうが絶対満足がいくはずだ。そして、防災を学び、ボランティアを進めていく後々、僕たちの行動では

範囲も限られてはいるけれど、たとえ小さな行動でも、被災者の方やすべての人々が笑顔で笑っているように、僕は今できることを最大限頑張りたいと思う。

いつどのような災害が起きるかなんて決してわからない。台風などは予測できるものの、阪神・淡路大震災のように突如やってきて大災害をもたらし、取り返しのつかないケースも当然ある。そうならないためにも僕たちは今ある1日1日を精一杯頑張って生きていかなければならない。

この「語り継ぐ」を読んで、少しでも防災に対する気持ちが変わってくれととてもうれしく思う。

あの頃から今

加古川市西神吉町
神吉 大地

地震が起きるまで

ぼくは震源地の神戸から少し離れた加古川市に住んでいる。その頃のぼくは、保育園から幼稚園に入園して楽しい日々を送っていた。家に帰っては、近所の公園で友達と鬼ごっこをしたり、缶けりをしたりと毎日のように遊んでいた。小さい頃のことなのではっきりとは覚えていないが、ほとんどが新しいことばかりだった。新しい先生、新しい服、新しい友達など楽しいことばかりだった。早く次の日になってくれないかと夜は毎日わくわくしていた。でも、それはあの地震、阪神・淡路大震災の日までだった。その頃のぼくはあんな恐ろしいことが起こるとは想像もしてなかった。

地震が来た

その前の日は、幼稚園が休みということもあり友達と近所の公園で夜遅くまで遊んでいた。夜遅くといってもそのころはまだ幼稚園に通っていたので午後6時ぐらいだったと思う。母が公園まで迎えに来てくれ、母と一緒に家まで帰ったことを今も覚えている。

今ふと振り返ってみると、母が公園まで迎えに来てくれたのはあの日が最初で最後だったような気がする。空気もいつも以上に澄んでいて鳥の鳴き声もその日は聞こえず、母とぼくだけが今この世界にいるような感覚だった。

その日の夜も、早く明日になってくれないかとわくわくしていた。遊び疲れていたのかいつも以上にぐっすり眠っていた。そして、1月17日午前5時46分、今までに経験したことのないような揺れと恐怖がぼくや、ぼくの家族を襲った。それはまるでガス爆発でもしたのかと思うぐらいの音と揺れだった。「ゴォゴォゴォー」というような音と食器の割れる音、そして何よりすさまじい揺れで、一度寝たらなかなか目を覚まさないぼくが一発で目を覚ました。そのすさまじい音と揺れはこれからも経験することがないと言っているほどのすごい揺れだった。その時はいったい何が起こったのか分からず、父が「地震や！！」と叫んでいたが、その時のぼくは地震とはいったい何なのかさえわかっていなかった。この体験により地震とはこんな怖いものなのだと初めて実感した。

横で寝ていた父が、ぼくとまだとても幼かったぼくの妹をかばうかのように、ぼくと妹の上に覆いかぶさった。ぼくの寝ていた部屋には大きなタンスがあった。そのタンスが今にも倒れて来そうになっていた。父の、ぼくと妹を必死で守っていた姿が、今もとても印象深く残っている。さいわいタンスは倒れて来ずぼくたちは無傷で済んだ。もしあのタンスが倒れて来ていたらと思うと背筋が凍るように冷たくなる。

夜が明けてから

夜が明けて朝日がまぶしくなってきたころ、いつものように朝食を食べようと台所に行ったところ、食器棚は倒れていて中の食器はほとんど壊れてしまっていた。それは台所だけではなく家じゅうの物が傾いたりしていた。テレビも半分ほど台の上からはみ出していた。でも、ほとんどが傾いたりしていただけで壊れたりしてはしていなかった。今思ってみるとあれだけ家の中がぐしゃぐしゃになっていたにも関わらず、けが人が出なかった事は奇跡に近いと思う。

その日の朝は父と母で家の中の片付けを行っていた。そのときにおもしろいアニメでもやっていないかとテレビをつけたが、どのチャンネルにしても火事の映像や建物の崩れ落ちた映像しか出てこなかった。それは、神戸の方の映像であった。その頃のぼくにはただのつまらない映像にしか見えなかったし、神戸の街がどこにあるなんてことも知らなかった。その映像を見て祖父と祖母が「戦争のときみたいやなあ」と言っていた。それほど、神戸の街はひどい状況になっていたなんてことは、このころのぼくは想像もしていなかった。

そして、その日も何事もなかったかのようにぼくは幼稚園に行き、みんなと遊んだりしていた。でも何人かの友達は幼稚園を休んでいた。「風邪でも引いたのかな？」とその時は軽く考えていたのだが、その友達の祖母が神戸の方に住んでいたので、家族そろって迎えに行っていたと言っていた。でも、地震のせいで亡くなっていたそうだ。ぼくの住んでいる加古川の方ではライフラインも正常で目立った被害がなかったので、阪神・淡路大震災のことを深くは考えたりはしなかった。

1週間後

1週間もすれば加古川のほうは何ともなくなり平穩に1日を過ごしていたが、ニュースを見るといつも地震のことをやっていたので「神戸のほうはこっちと違ってかなり被害が大きいんだなあ！！」とか思っていた。僕の住んでいるところはあんなに大きな地震があったのにあまり被害もなく、ちょっとしか離れていない神戸はあんなに被害があって、こっちに住んでいて良かったとその時は思った。

1ヶ月後

1か月もすれば家の中も元通りになり、あの地震のことも忘れかけていた。でも毎日のようにニュースでその地震のことを知らせていたので、忘れようにも忘れられなかった。でも、日にちが経つにつれてニュースの本数も少なくなっていき、知らないうちにその地震のニュースは目に入らなくなっていた。それはどんどん被害が少なくなって元通りになっているのかなと思っていた。

小学生になって

小学生になるとまた新しいものがいっぱい増えた。買ってもらうのをとても楽しみにしていたランドセル。もちろん新しい友達も増えた。入学してなぜか気になったのが壁にできていた亀裂であった。先生に「なんでこんなにひび割れがあるの？」と聞いたら、2年前にあった大きな地震の時にこんな風になったと聞かされた。それを聞いて昔にあった大きな地震を思い出したが、あまり気にもしなかった。このときはもう楽しいことばかりで、そんな昔にあった楽しくない出来事は忘れていたと思う。でも、心のどこかであの地震のことを思い出して、(あんなこともあったな~)と思っていた。

入学して1年が経とうとしていた1月17日に、阪神・淡路大震災で亡くなった人たちに学校の生徒全員で黙とうを行なった。そのときに亡くなった人たちの人数を聞いて、あの地震の怖さがわかった。家に帰ってテレビをつけてみると、ニュースであの大きな地震についての特集をしていた。そのテレビを見て、阪神・淡路大震災のことを詳しく知った。5000人以上の人が亡くなり、火災で長田というところにとっても大きな被害が出たということ。大勢の人がボランティアとして神戸に訪れて多くの被災者の人たちを支えたこと。そしてそれをきっかけにボランティア元年と呼ばれるようになったこと。それまで知らなかった自分がとてもおろかなように、そのとき小学生だった自分は思った。そのときに全部を知ったわけではないが、毎年その頃になると阪神・淡路大震災の関連行事や特集をしているので、高学年になるにつれて理解を深めていった。母や父にその当時のことを聞いたりして当時のことを思い出したりもしていた。そのころから少しずつ、消防士や警察官などの姿を見て自分もこんな人たちになりたいと感じ始めた。それに友達のお父さんが消防士で、前の地震では救助活動を行っていたと聞き、自分も「大きくなったら絶対に人を助けたりする仕事に就くの！！」と思っていた。そしてこの地震についてももっと知りたいと感じた。

中学生になって

中学生になるとその当時のことはほとんど思い出せなくなっていた。勉強はするものの、自分がいっただいのような被害にあったなどは本当にうっすらとしか思い出せずにはいた。道徳の時間でも阪神・淡路大震災のことを勉強することもあり、毎年1月17日には追悼行事も行なわれていた。それは、三宮から命の火をもらってきて、それをこれからも絶やさずに、そして阪神・淡路大震災のことを風化させないために行なっている。僕の入学した神吉中学校も、阪神・淡路大震災の影響で当時はひび割れも激しく、水が上の階から降ってくるぐらいだったらしい。

その当時、神吉中学校で勤めていた教師が1人、地震のために亡くなったらしい。そのことがあったために、今も神吉中学校では追悼行事が行なわれたり、総合学習で阪神・淡路大震災のことを勉強した

りしている。やはり、あのとても大きな災害は絶対に風化させてはいけないのだと中学生の時に感じた。中学校で阪神・淡路大震災のことを知っていく中で、もっとたくさんを知りたいと思った。当時はどんな様子だったのか、どんな人たちがどのようなことを行っていたのかなどのたくさんを知りたいと感じた。そして、高校生になってもそういうことを学べる学校に行きたいと思っていた。

高校の事はほとんど兄から聞いていた。神戸に舞子高校という学校があり、今兄が通っている高校であり、消防体験を行ったり、防災について専門的に学んだりする学科だと聞いた。そのころは消防士になりたいと思っていたので、消防体験ができるその学校に行ってみたく強く思っていた。その学校では、ぼくが知りたがっていた阪神・淡路大震災のことも勉強して、防災のリーダーを作る学科だと聞き、絶対に行きたいと思っていた。

高校生になって

願いがかなって舞子高校に入学できた。中学の頃に考えていたのとは違って、とても専門的な防災のことに勉強をする学科だと思った。もちろん僕が学びたかった阪神・淡路大震災のことも学べた。というより、1年のころはおもに阪神・淡路大震災の体験談を聞くようなことをしていて、いろいろなお話を聞いてよかった。専門的に地震のことや、ほかのいろいろな災害についても学ぶことができた。その中で警察や消防士の方から、その当時の状況や、どんな活動を行っていたのかを聞くことができ、とてもうれしかった。同時にとても勉強になったし、自分もこんな活動をしたり人助けをしたりしたいと強く思った。阪神・淡路大震災のときには、警察官はもちろん、消防や自衛隊も救助活動を行っていた。そんな話を聞いていると、ますます僕も、警察官か消防士になって人助けをしてみんなの力になりたいと思った。

1年のときは、街歩きをして街の中にある防災器具や消火栓について調べたり、出前授業を行なって、小学生に防災の大切さや、ちょっとした災害のことなどを教えたりした。その中で、人前に立ってちゃんと発表し、年齢に合わせた発表の仕方を工夫しなければならないと感じた。プレゼンテーションなどは、この先もいろんな場面で行なわなければならないのでしっかり身につけておこうと思った。人前に立って発表するのはとても苦手だが、環境防災科ではたくさん発表する場面があるので、少しずつでも慣れていこうと思った。たくさんの人前でこれから、この環境防災科で学んでいくことを発表して、たくさんを知ってもらいたいと感じた。

ほかに、阪神・淡路大震災の話聞く授業があり、その当時にどのようなことがあったか、どういふことをしたかなどを、企業の人や消防士の人たちから話を聞くことができ、とてもいい勉強になったし、進路もこんな方向に進みたいと決め始めた。初めて消防学校に体験入校し、いろいろな体験をさせてもらって、消防士になって多くの人を助けたいと強く思うようになった。自分にはこんな人たちのようになれるのかと思ったりしたが、一度やると決めたことはやるという僕の信条に従って努力しようと思った。

そういう勉強をしていく中で、やっぱりあの震災のことを風化させてはいけないと思うし、阪神・淡路大震災のことを覚えている最後の世代と言われているぼくたちが、たくさんの人たちにあの頃の記憶を語り継いでいかなければいけないと感じた。あの地震を体験した人が、あの地震の後に語り部としていろいろなところで地震のことを語ったり、いろいろな活動をしたりしているけど、その人たちも地震が起きてから10歳以上も年をとっている。なので、体力的にも精神的にもしんどい思いをしていることが分かった。この人たちの代わりに、若い世代の僕たちやこの環境防災科の生徒たちが先駆けとなって阪神・淡路大震災のことを語って、風化させない努力をしていかなければならない。

高校2年にもなるともう進路の話が常に出てくるようになっていた。でもぼくは、もう警察官になると決めていたので、その進路に向かって突き進むだけだった。たくさん職業がある中で警察官になろうと思ったのは、環境防災科で警察の人の話を聞く機会があったり、ボランティア活動をしたりしてからだ。阪神・淡路大震災の教訓から、警察内部でも災害に対するエキスパートチームが作られるなどしている。そんな人になり少しでも災害の被害を軽減し、またあのような災害が起きても、次は先の地震の教訓を活かし、被害を小さくしてあのような被害をもたらしたくない。僕もこの環境防災科で学んだことや経験したことを災害の時に活かして、1人でも多くの人を救いたいと思っている。環境防災科を卒業するのだから僕は地域の防災リーダーとしても地域の防災力を高めていきたい。自分

がこの環境防災科で学んだことは決して無駄にはいけないと思うし、自分にできることは必死にやりたいと思う。

いま、そして未来

今の僕は、環境防災科に入学して本当によかったと思っている。阪神・淡路大震災のことやこれから重要になってくる防災のことをほかの人より詳しく知っていると思う。だけど、そのことを、ほかの知らない人たちに広めてこそ初めて意味のあることだと思う。これから僕がどれだけの人に語れるかはわからないけど語る場を与えられたり、機会があったりすれば積極的に語りたいと思う。その時に多くの人に語って災害の恐ろしさや、防災の大切さを知ってもらえてこそ、この環境防災科に入学した意味を持つと思う。

将来はやはり少しでも防災と関わりのある仕事をしたいと思っている。その職業は警察官だ。警察官は犯罪と闘うというとてもやりがいのある仕事だと思う。警察官になれたなら、犯罪と闘う傍ら防災のほうにも力を入れ、将来は警察の中にある災害時のエキスパートチームに入りたい。ここに入るためにはとても努力をしなければならぬ。でも、この環境防災科で身につけた知識をそこでたくさん発揮したいし、たくさんの人を救いたい。これからはどんどん災害の発生する数や規模も大きくなっていくかもしれない。そんな中で僕は少しでも災害での被害を軽減したいし、1人でも多くの人を救いたいと思う。

これから先には、南海・東南海・東海地震という大きな地震が来るといわれている。その脅威から僕たちは戦わなくてはならない。これらの地震は、阪神・淡路大震災とは違った地震なのでその災害に備えることがとても重要だ。津波の発生も警戒されている。津波と言え、過去に多くの被害を出している。最近起こった津波の被害と言え、スマトラ島沖地震で発生した津波だ。それらの地域の人々は津波というものは何なのかさえ知らなかった。だから津波がとても危険なことだとわからず、逃げずに見物したりしていた。危険なことに対しての知識を持つことはとても大切である。世界の人々にはもっと災害の知識をつけてもらいたいし、それに見合った防災に取り組んで欲しい。災害の被害を0にはできないけれどそれに近づけるように防災をしっかり行わなくてはならない。常に危険と隣り合わせで生きていることは、阪神・淡路大震災の時に分かっているはずだ。神戸には絶対に地震が来ないと言っていたにも関わらず、地震は僕たちを襲った。災害はいつ起きても不思議ではない。このことだけはわかっていてもらいたい。

この先、僕たちにそんな恐ろしい災害が襲ってくるかはまだ分からない。だけど、それに備えることは今からでもできる。今備えることで、将来大人になる今の子供たちにも防災の大切さが伝わると思う。今の子供たちを守るためにも防災が大切である。2度とあんな大きな被害をもたらしてはならない。阪神・淡路大震災のように多くの人々が亡くなり、多くの人たちが悲しむような災害を起こしてはいけない。阪神・淡路大震災での教訓は神戸の人たちや、今では世界の人たちに広まっている。これから先どんな大きな自然現象が発生しようとも、防災力を向上させてそれを災害にはしないで欲しいし、させない。これから先の未来はぼくたちの手によって変えなければならない。

未来への教訓

神戸市垂水区神陵台
北野 真也

当時はまだ5歳だったが地震直後の恐怖はいまだに覚えている。毎年1月17日になると、突然の地震で体が震えていたことや避難所で生活していたことを思い出す。幼いころは被災地の深刻さをあまり理解していなかったが、年を重ねるごとに震災によって幼い子供たちも亡くなったことや一瞬のうちにまちが破壊されたことを知り、改めて自然の力の恐ろしさを感じた。

阪神・淡路大震災の経験もあって将来は何か人の役に立てるようなことがしたいと思っていた。漠然とした夢だったが人の役に立つには何か特別な知識が必要だと思っていた。高校受験の時期になったとき、偶然テレビで舞子高校に環境防災科があることを知った。学習だけでなく、普通科にはない校外学習や体験学習など特色ある授業に魅力を感じた。自分が防災知識を身につければ、災害時には自分の命だけでなく他の多くの命を救うことができる。防災を人々に広めていくことができるなら、人を助けることにもつながっていくのだと考えた。また自分に大きな影響を与えた阪神・淡路大震災についても学び、全国の人に知ってもらいたいという思いもあり環境防災科への入学を決めた。

一瞬の出来事

いつものように母と姉との3人で一緒に寝ていた。ぐっすり眠っていたが、地響きのような音に気付き目を開けた瞬間大きな揺れが襲ってきた。あまりにも激しい揺れで危険を感じ急いで押入れの下にもぐりこんだが、恐怖で体がぶるぶる震えていたのを覚えている。身を隠しても寒さと暗さで一層恐怖が増していった。家の中の電気はもちろん、外の電気も止まっていたので本当に何も見えないくらいだった。寝ていた頭のうえには大きなタンスがあり倒れてはこなかったが、もし倒れてきて体に直撃していたらと考えると鳥肌がたった。当時リビングで金魚を飼っていて、大きな水槽がおいてあったが、もとの位置から離れた場所に落ちていたので驚いた。

家の中の家具が倒れ食器なども床に散乱し、足の踏み場もないくらいぐちゃぐちゃになっていた。もちろん電気は点かず、親が懐中電灯で照らしながら、足を怪我しないようにと靴を持ってきてくれた。自分の部屋を見るとやはり物が散乱し、今までここで生活していたのかと疑うほど荒れていた。ガラスの破片や家具が散乱している部屋の中で、何が起きたのかまったく理解できないままただ茫然としていた。まさに一瞬の出来事だった。

被害状況

家の中はぐちゃぐちゃになったが、建物自体も大きな被害を受けた。被災したのは現在も住んでいる10階建てのマンション。地震によりマンションの到る所にひびが入り、建物自体も変形し今も窓がちゃんと閉まらないほど傾いている。

地震によって電気・ガス・水道は完全にストップし、生活ができない状況になってしまった。当時は非常持ち出し袋のようなものは準備していなかったものの、家には少し食料があったので助かった。カップラーメンなども多くあったが、ライフラインがストップしてしまったので調理ができず結局無駄だった。水道が使えなかったので、家族でバケツを持って水をもらいに行ったこともあった。行ってみるとかなり大勢の人が駆けつけ、長い列をつくって並んでいた。食べ物を確保するにも、水を確保するにもなかなか手に入らず苦労したのを今でも思い出す。

自宅周辺の様子は自分が想像していた以上に激しく被害を受けていてびっくりした。いくら家が揺れて家具が倒れたとしても、地域に大きな被害は出ないだろうと思っていた。ところが外の様子は、マンションの壁が一部はがれていたり、道路に亀裂が走り盛り上がっていた。ひどい所では車が通れないほど亀裂のある道路もあり、被害の深刻さを物語っていた。近所の中学校のグラウンドにも大きな亀裂が深く入り、校舎も被害を受けていたと聞いた。校舎と校舎とのジョイント部分が、ダメージを受けて2つに分かれてしまっていたという。

神陵台周辺では火事はなかったが、あちこちで救急車のサイレンが異様に鳴り響いているのは印象に残っている。地域の被害の状況を自分の目で見て初めて、「神戸に異常な事態が起きている！」と感じた。変わり果てたまちを目の当りにして、自分なりにことの大きさを感じていた。

避難所生活

地震で片付けようもないくらい家の中がぐちゃぐちゃになってしまったので、とりあえず自宅からすぐの小学校に避難することになった。近所の人が多く避難してきていて、グラウンドは車だらけだった。体育館に入ると、段ボールが敷き詰められそこに大勢の人が休んでいた。もちろん各家族のスペースを区切るものは何もなく、すぐ隣には知らない人が寝ているという状況で生活していた。

そのころはまだ余震も続き、また大きな揺れが来るのではないかという不安があり、いつもとは全く違う環境での生活もあって、あまり休むことができなかつたように思う。水は止まっていて、食料も十分あったとは言えない。トイレに行こうと思っても、いつも行列ができていてなかなか行けなかつたのを覚えている。避難所で生活していたときにはよく以前の生活を思い出した。水・ガス・電気が当たり前のように使え、好きな時に好きなものが食べられる今までの普通の生活がどれだけ幸せだったかを思い知った。むしろ以前の生活が逆に特別なようにも感じた。話をする友達もいない、自由に遊ぶこともできない。こんな生活は早く終わって欲しい、早くもとの生活に戻って思いっきり自由にしたいと思っていた。不便な生活が続き徐々に避難者にストレスが溜まっていった。避難者同士での大きなトラブルはなかつたものの、大人の間にはピリピリした空気が流れているのは当時の僕にも感じ取れた。

激震地 新長田

地震が発生してから、すぐに家族そろって車で祖母の家に向かった。祖母の家は新長田だった。道は車だらけで渋滞していてなかなか進まなかつた。あまりはつきりと覚えていないが、長田のほうに近づくにつれてあちこちで火が上がり、消防のサイレンが慌ただしく鳴っていたような気がする。

長田区に入ると家屋もほとんどが倒壊していて、地震が起きたというよりも爆弾でも落とされたんじゃないかと思った。火事で焼け落ちた家屋やおもちゃのようにバラバラに壊れた木造家屋をあちこちで見かけた。今までに見たことのない光景は今でも目に焼き付いている。後で聞いた話だが、親によると道端には多くの毛布があったという。この毛布は、亡くなった方の遺体にかぶせていたと聞いた。家屋倒壊により助けが来る前に亡くなってしまった人が多く、もし自分のマンションが倒れていたらどうなっていたらと思うと恐ろしく怖くなった。長田の荒れ果てたまちを見ていると、自分が怪我もなく生き残れたのが奇跡のように思えてきた。

移動中の車の中では「おばあちゃんは大丈夫やろうか??」とずっと不安でいた。「家は潰れてないやろうか、火事になってないやろうか」と頭の中で色んな想像が駆け巡っていた。まちの様子を見る限りでは、祖母は100%大丈夫だという確信を持てなかつた。

やっと近くまで来ると、祖母の家の並びがほとんど倒壊しているのが見えてびっくりした。祖母の家も崩れ落ちていたので愕然としたが、祖母は何とか無事だったのでホッとした。祖母は1階で寝ていて、冷蔵庫の下敷きになっていたが、近所の人協力によって助け出されたのだと聞いた。近所の人々が駆け付けてくれたおかげで幸いにも助かったが、もしそのままだったら危険な状態になっていただろう。消防・警察よりも早く救出できたのは、普段からの付き合いがあり信頼関係があったからだと思う。地域のつながりの力を知り、助け合いの素晴らしさに気づくことができた。

ボランティア

ボランティアはいろんな場所で活躍していた。避難していた小学校でもボランティアの方が食料を配ったり、掃除をしてくれていた。避難所の掃除や食料の配布など一生懸命活動している姿を間近で見ていると、「ボランティアってかっこいいなあ」と思った。震災から少し経って落ち着いたころ、テレビで阪神・淡路大震災の番組を見ていると、そこにもボランティアが現地で活動している姿が映っていた。地元にはボランティアの方が活動していたが、神戸全体でかなりの数のボランティアが活動していることを知り、被災後の生活が苦しい状況にあるのだと感じた。地元の人だけでなく、全国からボランティアとして駆け付けてくれていることをその時初めて知った。今考えると、もしあの時にボランティアがいなかったら神戸は復興へと向かうことができなかつたかもしれない。また震災をきっかけにボランティア活動が全国的に広がっていった。地震は社会にダメージを与え、人々に悲しみを与えた。しかしそれと同時に、人のつながりの温かみやボランティアの重要性など、災害から学んだことも多かったのだと感じた。全国・全世界からボランティアが駆け付けてくれたことはとても心強かつたし、このことが刺激となって自分もいつかボランティアをしたいと強く思った。

高校に入ってから積極的に色んな活動に参加し、特に地域でボランティアを行なっている。まだ活

動には若者が少ないが、自分たちが先頭に立って地域の中心的存在となっていきたいと思う。活動を通してネットワークを築くと共に、ボランティアとしてのノウハウも身に付けていける。これからも様々な経験を積んで災害時に対応できるように、知識・知恵・行動力を養っていきたい。もし大災害が発生したときには、神戸に駆け付けてくださったボランティアの方のように現地で支援活動を行いたいと思う。恩返しとして、今度は自分たちが少しでも役に立つ支援をしていきたい。

環境防災科

環境防災科に入って、防災専門のいろんな授業がある。外部講師の方の講演や校外学習など、環境防災科ならではの学習は僕にとってとても新鮮だった。そんな学習を通して、阪神・淡路大震災について深く知ることができた。被災者としての自分の体験談だけでなく、当時支援していた方の目線から見た震災についてもお話していただき、阪神・淡路大震災を見つめ直すことができたと思う。僕の当時の記憶はあいまいで断片的だが、外部講師の講演を聞くたびに震災の恐ろしさを改めて感じた。今までに様々な人から体験談を聞くことができた。消防・警察などの行政が苦労しながら市民の支援にあたったことや、神戸の復興の陰にはボランティアの存在があったことを知った。

自分の体験・震災の学習を通して一番学んだことは、「人とのつながり」である。多くの人が大切なものを失い苦しんでいたが、お互いの支えあいがあったからこそ今の神戸があるのだ。どんな極限の状態に陥っていても、人間は助け合える強い存在だと気づいた。

いろんな人からネットワークの大切さについて学んでいくうちに、ボランティア活動や交流会などによく参加するようになった。好きでやっている活動が誰かに喜んでもらえることは、自分にとっても嬉しかった。活動することで様々な分野で活躍している方ともお話ができ、防災に関して考える視野を広げることができたと思う。また今までに多くの他県の学校と交流し、防災を発信してきた。同世代の仲間とともに自分たちの考えを出し合い、意見を共有できたのは貴重な体験だった。学習だけでなく、ボランティア活動を通して成長できたのは環境防災科のおかげだと思う。

1.17KOBE に明かりを in 長田

新長田で被災した祖母は現在も長田に住んでいて、僕もよく長田のまちに足を運ぶ。ずっと通っているので、今まで長田のまちの復興を見てきた。時間が経つにつれ道は整備され、商店街があった場所にはマンションが次々に建設されていった。震災前のまちと比べて建物の数も増え、だんぜんきれいになっている。そんな新長田で追悼行事が行われた。今年僕は初めて、震災の追悼行事にボランティアとして参加した。ボランティアには地域の人が集まっていて、他の地域から参加した人もいた。この追悼行事は夕方からスタートしたが、多くの人が駅前に集まっていた。

新長田は震災時に激震地だっただけに、やはり大勢の方がろうそくに火を灯しに来て下さった。幼い子供たちから高齢者の方までいろんな人が集まっていた。僕はボランティアとしてろうそくを交換するという仕事をしながら、追悼行事に参加していた方の顔を見ていた。ろうそくの灯りに手を合せ、涙を流している姿は鮮明に頭に残っている。それぞれの顔にはろうそくの灯りで光る涙が見えた。震災によって負った悲しみがまだまだあるのだということを強く感じさせられた。地震によって6434名の方が亡くなったが、その悲しみを背負っている人はもっと多いのだ。そしてその悲しみ・苦しみと闘い、互いに助け合っていかなければならないと思う。

復興に向かって

長田のまちは建物が増え、以前より便利になった。人間の住む場所が元の姿を取り戻すことは復興である。しかし物質的な回復だけが復興ではない。そこに住む人間の生活・心が回復してこそ、本当の復興があるのだと思う。今一番問題なのは、人の心の負担をどうやって和らげていくかということだと思う。この問題では、地域の人とのつながりをさらに強くしていくことがかぎになるだろう。

環境防災科の授業の一環として、以前に長田の商店街を歩き、店主の方に当時のことをお話ししていただいたことがある。震災前と後では生活が大きく変化し、地域のコミュニケーションが薄くなっていると話して下さった。ソフト面とハード面の復興のバランスが悪かったため、ハード面の復興が極端にスムーズに進んだのが原因だと感じた。震災からの教訓でもある「地域のつながり」が失われてしまっただけでは、再び同じ惨事が起きてしまうかもしれない。現在は高齢者の増加も問題となり、地域のつながりが絶対的に不可欠なものになっている。若者が中心となり、コミュニケーションがとれる機会を提供し

ていくことが重要である。さまざまな年代の人が交流することで、震災からの心の負担も少しでも和らぐに違いない。そして明るい地域で生活を送ることができ、外見以上にすばらしいまちへと発展していくのではないだろうか。

今年初めて追悼行事に参加して、身近な所にまだまだ心のケアを必要としている人々がいるのだと感じることができた。身近な所に目をやると、地域のネットワークや心の問題など解決できていないことがたくさんあると思う。地域住民同士が支えあい、問題を乗り越えていかなければならない。交流を深め、地域ネットワークを拡大していけば必ずつながりが強くなり、誰もが理想とするまちに近づいていくと思う。震災から長い月日が経ったが、本当の心の復興は「これから」である。

これから

震災から12年が経過した。時の流れる早さは人によって感じ方が違うが、自分にとって12年はあっという間に感じた。当時5歳だった僕の記憶は完全なものではない。しかしこの作文を書くにあたって、阪神・淡路大震災を振り返るうちにいろんな出来事を思い出した。地震直後の恐怖や不便な生活を送ったこと、ボランティアの活動している姿など強く印象に残っていることは多くあった。幼かった自分にも当時の記憶が頭に焼き付いているほど、震災の与えた影響は大きかったのだと実感した。

震災を振り返ることによって体験を思い出すだけでなく、改めて自然災害の脅威を思い知った。同時にかけがえのない命・未来のある子どもたちまでも一瞬にして奪った地震を憎く思った。いまだに心に大きな傷を抱えた人がいるのだ。自分の住んでいる地域や神戸のまちは、震災からみるみるうちに回復していった。しかし人の心の傷は時間とともに癒えるものではない。なぜ6434名もの命が奪われ、多くの人が悲しまなければならないのだろうか。もしわすかでも防災知識を持っていれば、あんな大惨事にはならなかったに違いない。人は社会にとって大きな存在だが、自然の前にはとても小さなものだ。自然の中に住まう人間が災害をコントロールすることはできないが、自然を理解した上でうまく対処すれば被害は軽減すると思う。大災害になってしまったのは市民の防災意識、自然に対する理解がなかったのが大きな原因である。

12年経った今、元の生活を取り戻したと同時に震災の教訓が忘れかけられているのではないかと思う。多くの人が地震があったことはもちろん覚えているが、災害の脅威、備えることの大切さなど震災から学んだ教訓を意識していないのかもしれない。新潟中越地震では、自衛隊・消防・警察の迅速な対応が評価され、阪神・淡路大震災の教訓が生かされたと報道された。迅速な救助により多くの命が救われたのは事実である。しかし市民の災害に対する防災意識はまだまだ低かったと思う。行政の対応が評価されたが、自衛隊などが救助に出動しなければならなかったのは市民の対策が甘かったからだとも言える。災害の教訓は神戸の人だけでなく、すべての人が忘れてはならない。惨事を繰り返さないためにも、全国・全世界が過去の災害からの教訓を共有していく必要があると思う。インド洋大津波では、災害に全く無知の人々が犠牲になった。「津波」とは何かと理解していれば犠牲者を出すことはなかったはずだ。わずかな防災知識でも助かる命があると世界中の人に知ってもらいたいと思う。そのためにも自分が環境防災科として3年間学んできたことを災害を経験していない人たちにも発信していきたい。

「教訓の風化」と言われるが、震災を経験した者にとって記憶の風化はないと思う。5歳だった自分にも記憶があるように、多くの人にとって阪神・淡路大震災は忘れることのできない衝撃的な出来事だった。地震の揺れ、当時のまちの風景、匂い、不便な生活は経験した者の頭に焼き付いている。しかしその経験を語り継いでいかなければ意味がない。つらかった過去から目をそらし、早く忘れてしまいたいと思う気持ちが「教訓の風化」につながると思う。災害から学んだことを自分のものとして心の奥にしまいこむのではなく、次の世代へと発信していこうという意味がなにより重要である。これから先は阪神・淡路大震災を経験していない世代になっていく。教訓を発信し続け、災害文化を次世代に伝えていけば、ひとり1人の防災意識も向上していくに違いない。阪神・淡路大震災を経験した者には教訓を語り継ぐ義務があると思う。自分も震災を体験した神戸の1人として、環境防災科で得た知識・知恵、教訓を発信していきたい。

使命

伊丹市南町
小池 真名美

この地震は、私にはとても受け入れがたい事態だった。阪神・淡路大震災が私にとって初めての地震体験だった。地震のメカニズムなど知るはずがなく、好奇心旺盛な私は疑問ばかり抱いていた。「何で人が死んだの?」「何が起こったの?」と。そんな状況の中で時間は足早に過ぎていき、そして私は大きな使命を背負った1人の旅人となった。

~そのとき~

私はものすごい圧迫感によって目が覚めた。最初に目に入ってきたものは、母の顔だ。母が私を守るように覆いかぶさり、その上に父が私と母を守るように覆いかぶさっていた。まだ寝ぼけていた私は、「何が起きたのだろう」と思った。こんな状況で目が覚めるのは、おそらくこれが最初で最後だろう。母の、「今の地震、大きかったね。」という一言で、やっと状況が掴めた。私はその体勢のまま外を見た。まだ真っ暗だ。当時住んでいたマンションはとても丈夫な造りだったため、家族全員、ペットも含め無事だった。地震のあとの部屋の中はすさまじいものだった。棚に乗っていたスピーカーが落ちている。それが落ちていた場所は、父が寝ていた布団の上だ。もし父が家族を守るために私たちの布団に移動していなかったら、父の足の上に重いスピーカーが落下し、おそらく骨を折っていただろう。まったくの偶然だったが、私は何かが父を守ってくれたように感じている。

地震直後に私が一番恐怖を感じたのは、家の中の雰囲気だ。父と母のいつもと違う顔。食器棚から滑り落ちて割れた食器。まだ当時の私にはどうしたらいいかわからず、ただその場でぬいぐるみを抱きながら座っていた。母は台所へ行き、食器を片付けだした。同時に、「危ないからこっち来ちゃだめだよ。」と私に言った。私は言われた通りにじっとしていた。外が明るくなりだした。これから1日が始まるようにしているのに、家の中は暗く、冷たかった。

少し経ったとき、突然電話が鳴った。母が電話を取り、少し話をして切った。その電話は祖母からだった。祖父と祖母はいつも早起きだ。その日も神戸が揺れた時、ちょうど起きていた。そしてテレビで地震のことを知り、すぐ電話をくれたようだ。その後回線が混み合ったのか、すぐに電話は通じなくなった。地震発生からまだ15分しか経っていない。母は関東生まれだったので、地震には慣れていたらしく、とても冷静だった。だが地震を知らない私にとっては、この15分がとてつもなく長く感じた。

それからどのくらいが経過したのだろうか。ある時母が「魚死んじゃうよ。」と父に言った。私の家では当時熱帯魚を飼っていたのだが、その水槽の水温調節ヒーターが動いていないらしい。地震の揺れで、水も半分くらいまで減ってしまっている。1月の早朝。一番寒い時期だ。何もしなければ、魚は弱っていつてしまう。だが父は「うん。」と答えたまま、煙草をくわえながら同じ場所をうろろしている。かなり動揺しているみたいだ。こんなに動揺した父は初めてだった。母がもう一度、「何とかしてあげなきゃ魚さん死んじゃうよ!」と言った。父はそれでもうろろしているばかりだ。とうとう痺れを切らした母が、古毛布を取り出して水槽の周りを覆った。父はそんな母を見ているだけだった。私は父と母のやり取りを見ながら、窓の外で鳴り響いている救急車のサイレンと自衛隊のヘリの音を聞いた。この音が、事態の大きさを物語っていた。

何かをしようとする気力はなかった。落ち着きを取り戻してきた私は、地震が発生した直後から続いていた、ちょっと変わった雰囲気にも慣れてきていた。父も母もほとんど私をかまってくれず、一人娘の私は少し退屈だった。だが遊ぶ気も起きず、しばらくは父と母の動きを見ていた。そうしているうちに時間は過ぎ、だんだんと家族の緊迫感も緩んでいった。それと同時に、家の中の雰囲気も温かさを取り戻していった。外は完全に朝を迎えていた。窓から光が差し込む。だがそれは、いつもの明るく暖かいものではなかった。空が暗い。いや、空だけではない。その時の世界はとても暗く、まるで色彩を失っているかのような感じだった。それに気づいていたが、家の中の雰囲気が戻ったことにより安心しきっていた。その時の私には、それだけで十分だった。他の地域がどうなっているかなんて知らなかったし、知らずともしなかった。

当時私たちが住んでいたマンションは、昼にはライフラインが復旧しだした。そしてテレビがついた。そこで見た光景は、現実離れしていた。高速道路が倒れている。しばらく家族全員がテレビに食いついていた。その中に阪急伊丹駅の映像があった。伊丹駅は、私たちがよく利用している駅だったので、みんな驚いた。驚きと同時に好奇心が芽生えた私は、母に「駅に行きたい。」と言った。母は、「まだ危ないから、いつか行こうね。」と優しく答えた。

～平穏な生活と地震報道～

そして夜になった。テレビでは相変わらず地震の報道ばかりだった。どの局に回しても「地震」。どれだけ時間が過ぎても「地震」。まだ幼かった私は、他のテレビが見たくてしかたがなかった。朝から「つまらない。」という思いばかりが頭に浮かんでくる。なんとなく聞こえてくるテレビの中のアナウンサーの声は、火事が起きていることや家が倒れていることを伝えていた。それは私にとってあまりに非現実だった。テレビから流れてくる映像は、どう考えても現実だとは思えなかった。まるで違う世界だ。私は映画の一場面を延々と見ているようだった。

このように私たち家族が割と落ち着いた夜を過ごせたのも、このマンションを設計した女性のおかげだった。このマンションの大家の娘であるその女性は、周りから「なんでそんなに」と疑問の声が飛ぶくらい、基礎工事を入念に行っていたらしい。偶然とはいえ、そのようなマンションに住めてよかったと、今は思える。あとで母から聞いた話だが、道1本隔てて隣に建っていたマンションは、屋上の水道タンクが破損し、水が出なかったそうだ。そのマンションの隣のアパートは、壁が壊れ、家全体が傾き、とても住めない状態だったそうだ。こんなに近いのに住んでいる建物が違うだけで、これだけの被害の差が出来ることを知り、建物の基礎の大切さ、建築士の心構えが大切だということを感じた。

次の日になった。私たちはいつもよりちょっと不便な朝を迎えた。相変わらずテレビでは地震の話題の嵐だった。「地震から1日が経過しました。」と、言葉が多少変わっただけである。外も相変わらず、ヘリが飛ぶ音や救急車のサイレンで忙しかった。私は不思議なくらい平穏な生活を送れていた。テレビで死者という文字が示す数字は、日に日に数を増していった。死んだ人がたくさんいるということは、頭では理解しているつもりだが、意味が把握できなかった。「なんでこんなに死んだのだろうか。」と、ずっと思っていた。「私はあまりいつもと変わらないのに、他の人は違うのだろうか。」と。その間もテレビ上の死者数は数を増した。私は、同じ映画の同じ場面を繰り返し見ているだけでなく、時間も一緒に繰り返し返しているようだった。テレビでは地震報道ばかり、外では忙しそうな音が鳴り響く。時計だけが、時間の経過を教えてくれた。

～助け合い～

当時、私の住んでいたマンションの1階は、ヤマザキのパン屋だった。伊丹でもライフラインがストップした家庭が多く、手軽に食べられるからという理由で、パンがとても人気だった。パンを運搬してくるトラックがマンションの前に到着すると、たくさんの人が集まってきて、パンを買い上げていった。あっという間に売り切れたのだが、その店員のおばさんが、「はい、小池さんの分！」と、普段からパンをよく買いに行く私たちのために、パンを取っておいてくれた。そのおかげで私たちは苦労なく生活できた。その時のパンは、いつもの何倍もおいしかったことを覚えている。困っている時は、ほんの小さな気遣いでも、とても大きな幸せに変わることを知った。母は、「普段から知り合いになっておくことで、困った時に助け合える。近所づきあいは本当に大切。」と話してくれた。

そのころ父は、須磨で被災した会社の同僚の元へと、よく車で水を運んでいた。私たちはすぐ水が使えるようになったが、震源に近い須磨は被害がひどく、まだ水が復旧していなかったらしい。伊丹から須磨まで車で行くには、かなりの時間が必要だった。だが父は嫌がらず、何の見返りも求めずに水を運んだ。その後父は、その家の人たちからとても感謝されたそうだ。私はそんな父を誇りに思い、いつか自分も、人の役に立てる人間になりたいと思う。

地震から数日後、テレビではいつもの報道に加え、避難所の様子も報道された。いつも報道される場所には救援物資が多々届いているみたいだが、私たちの地域に救援物資が入ってきたという情報は、まったく耳にしなかった。神戸に比べては遙かに少ないだろうが、伊丹にも避難者はいた。だがそこに物資は届かなかった。後になって、地域によっては、捨てるほど物資が余った場所もあったと聞いた。

ではなぜその余った物資を、私たちのように困っている地域に回してくれなかったのか、とても疑問に思う。結局、私たちの地域にボランティアの手はほとんど届かなかった。

～恐怖～

時間感覚が狂い、何日が過ぎて行ったのかわからなくなっていたある日。ほとんど電源をつけっぱなしでいたテレビの中に、再び伊丹駅が現れた。私は母に再度、「駅に行きたい」と言った。母は、「じゃあ行ってみる？」と私のわがままを聞き入れてくれた。私のその軽い好奇心が、私と母を恐怖に誘うなんて、予想もしなかった。

私と母は、手を繋いで出掛けた。今の私では考えられないことだが、幼かった私はとてもわくわくしていた。いいことでも悪いことでも、自分の知っている場所がテレビに映るなんて、今までなかったことだ。テレビに映った場所に自分が立つのだと考えると、とても誇らしく思えた。それくらい、私の心は余裕に満ちていた。

すぐに駅が見え始めた。駅を見つめながら歩く。遠目だが、駅が崩れている様子がわかる。だんだんと駅に近づくとつれ、好奇心は不安へと変わっていった。いつも見ていた駅が、まるで知らない建物のようだった。私は事態が飲み込めないまま進んだ。テレビに映っていた映像よりもそれは怖く、楽しさなんか全くなかった。さっきまで好奇心を抱いていた自分が嘘のようだ。私は頭の中がミックスジュースのような状態のまま、母に手を引かれ、そして駅に着いてしまった。

駅の真正面に立ったとき、母と私は硬直した。そして頭の中が真っ白になった。どのくらい思考が停止していたかはわからない。やっと思考が動き始めたとき、母の手が若干震えていたのがわかった。きっと私も震えていただろう。改めて見たものは、「受け入れることが難しい」というより、「受け入れることができない」現実だった。私たち人間が築いてきた社会は、自然の猛威に対してはあまりに脆く、まるで積み木が崩されたようだった。壊れた柱。崩れた天井。辺りに散らばった、その残骸。私は、ただ見ていることしかできなかった。母は、顔を見なくても雰囲気でもわかるくらい緊張していた。2人はしばらく棒のようにそこに立っていた。誰かが横から私たちを押せば、簡単に倒れてしまうだろうというくらい、茫然としていた。家に帰ってもその余韻はなくなり、しばらくはボーっとしていた。その後、私はそのときの記憶と恐怖を、無意識に頭から消し去った。

～悪夢再び～

震災から、あっという間に何年も過ぎて行ってしまった。当時全く違う世界へ行ったような不安や恐怖を一度に経験しすぎた私は、頭の中が整理できなかつたのかもしれない。その後数週間、どうやって復旧していったかなどのは、まだほとんど思い出せずにいる。

毎年1月17日近くになると、家族で震災の話をしている。同時に、「次に地震があったら」という話もする。それを話しているときは、「もう大きな地震なんてないだろう。」と考えていた。だが自然は、そんな私の甘い考えを馬鹿にするかのようだった。

私が中学3年生の10月22日。家庭の事情で中学2年生の夏に群馬へと引っ越した私は、近所の友達と近くの広場で話をしていた。そろそろ帰ろうとしたとき、空がいつもと違うことに気がついた。怖くなるほど真っ赤な夕焼けだった。そこに一直線に雲が並んでいる。その雲は、日本海側へ向かって続いていた。家へ帰り、家族で「さっきの雲、気持ち悪かったね。」と話をしていた次の日。親戚のおばさんが家へ遊びに来ていたため、家族そろって居間で話をしていた。日が沈み始め、話が盛り上がっていたその時。カタカタと小さな揺れ。関東ではよく地震があるため、すぐにおさまるだろうと考えていた。だが今回は違った。だんだんと揺れが大きくなり、そして悪夢は再び私たちを襲った。地面から突き上げるような衝撃。一瞬、心臓が跳ね上がったのがはっきりわかった。それと同時に大きな揺れと、それに対する恐怖が襲ってきた。祖父は玄関の戸を開けに、揺れの中を進んでいった。テーブルに置いてあったコーヒーはこぼれ、家は今にも崩れてしまいそうな音がしていた。2階では物が落下する音。私はその場で固まっていた。恐怖で頭の血管が切れそうだった。その間はかなり長く感じられたが、実際には数十秒ただだろう。揺れが小さくなったところで、私は2階へと駆け上がった。買ってもらったばかりのMDプレイヤーが、本棚の上にあったからだ。案の定それは落下していたが、電源をつけたら動い

たので、安心して居間へと戻ろうとしたその時。再び大きな揺れに襲われ、私はその場から動けなくなった。どうしていいかわからず、壁に張り付きながら「嫌だ！」と叫んでいた。1階から「大丈夫？」という声が聞こえるが、「大丈夫じゃない！」と答えることしかできなかった。しばらく家とともに揺られた。揺れが落ち着き、各々が散乱した物の片付けを助けたとき、テレビでは地震速報が流れていた。私たちの地域は震度5強あたりだろうか。母は「昨日の雲は地震雲だったんだね。」と言った。その時の光景を思い出した私は、背筋がぞっとした。

その日から数日は余震が絶えなかった。ずっと揺れていたため、余震が起きていなくても揺れているような感覚があった。それは新潟県中越地震と名付けられ、テレビでは電車が倒れている映像や、崖が崩れている映像が何度も流れた。同時に何回か阪神・淡路大震災の時の映像も流れた。そのたびに私は小さい頃に経験したあの恐ろしい地震のことを思い出していた。だがそれでも伊丹駅を見に行った時の記憶は、ゴミ箱に捨ててしまったかのように思い出せなかった。

～今を生きる～

それから私が伊丹駅を見たときの記憶を思い出したのは、つい最近になってからだ。地震からもうすぐ12年が経とうとしている今、私はこのように、環境防災科で専門的に防災について勉強させてもらっている。何回も震災のときの出来事を学んでいくうちに、いつのまにか思い出せるようになっていた。そしてこうやって震災体験を伝える立場になれて、とても嬉しく思う。

震災で失ったものはとても大きい。だが、震災から得たものはさらに大きいと私は思う。あの地震によって、たくさんの人が何かを知った。命の大切さを知った人、耐震の重要性を知った人、人間の小ささを知った人、自分の無力さを知った人。それら全ての思いが次に繋がり、未来をつくっていく。私は、命の大切さと、災害によって人々の幸せが乱されることを知った。だから今では、家族ぐるみで防災に取り組んでいる。このように積極的に防災に取り組めるのは、この地震を体験したおかげだと思う。あの地震がなければ、この学科はない。このメンバーと巡り合うこともなかっただろう。

阪神・淡路大震災や新潟県中越地震でたくさんのことを経験したおかげで、今の私がある。もしこれらの地震を経験しなければ、地震に興味など湧かなかっただろうし、防災に力を入れることもなかっただろう。そして何より、災害救助犬のトレーナーという夢とも出会ってなかっただろう。震災があったからこそ、夢を持てた。自分の経験に感謝するとともに、もう2度とあのような悲劇のない社会になって欲しいと思う。

神戸は今、震災以前より美しいまちになっている。建物はたくさん建設され、まるで震災などなかったかのように活気にあふれている。それは神戸だけではない。どこのまちも、震災の傷跡はほとんど見られない。それでもまだ、震災によって壊された家の跡地は空き地のままだ。道路にひびが入ったままの場所もある。1月17日付近になると、残された自分の人生を恨み、自殺する人もいると聞く。まだ私たちの戦いは終わったわけではないのだ。

～語り継ぐ～

震災からの一番大きなメッセージは、「命の尊さ」だと私は思う。人間だけでなく、動物たちも含め、たくさんの命がたった1回の地震によって奪われた。日本は、戦争を経験し、たくさんの災害を経験し、それによってどれだけたくさんの命が奪われてきたことだろう。そのたびに「命の尊さ」を学んできたはずなのに、どうして今、自殺者や殺人者がこんなにいるのだろうか。それは、戦争や震災からのメッセージが伝わりきっていないからだと思う。

時が経つにつれ、記憶は薄くなっていく。震災の時の記憶はほとんどないという人もたくさんいる。忘れてしまっても、生きていくうえで支障はない。それでも私たち被災者は、あの恐怖を覚えている。そしてこれからも、忘れることはないだろう。残された私たちに与えられた使命は、伝えていくということ。もう2度とあの恐怖を繰り返さないように。この記憶を後世に伝え、メッセージを受け取ってくれたことによって震災の教訓は活かされる。12年前、一瞬にして6,434人の命が奪われ、私たちが深い悲しみを味わったことを忘れてはならない。

語り継ぐ。1人でも多くの人に震災のことを知って欲しいから。命の尊さを知って欲しいから。そして簡単に命を捨ててしまうような人がいなくなって欲しいから。私たちは、永遠に終わらない使命を背負うことで、生きていくことを許された。たくさんの経験をしたからこそ、私たちは旅人になった。1人1人の経験が、私たちの武器になる。いずれまた災害という名の敵と会うことになるだろう。私たちから攻撃をすることはできない。防災を整えることで私たちは守られ、次に進めるのだ。目的地は、命が大切にされ、命が輝ける社会。終わりはない。世紀を超えた長い旅は、始まったばかりだ。

～ありがとう、私から～

神戸市垂水区五色山
齋木 章太

ありがとう

「ありがとう。」

阪神・淡路大震災で多く飛び交った言葉。あの時、たくさんの汗と涙があった。その、汗と涙を無駄にすることなく僕は語り継ぎたい。語り継ぐことが、今僕ができる最大の恩返しだと思うから。阪神・淡路大震災を忘れない...忘れてはいけない。絶対に...

環境防災科に入るまで、防災という分野には正直あまり興味がなかった。興味がなかったというよりも、防災に触れる機会があまりなかったと言ったほうがいいのかもわからない。そう考えると、今までは阪神・淡路大震災で経験したことを無駄にして生きていたと思う。そのような僕を変えてくれたのが環境防災科だ。震災を経験した人だからこそわかることがたくさんあると学んだ。生きるということは、ときにはとても楽しいことで、ときにはとても辛いこと。とても尊いことだと思う。

僕が過ごしてきた12年間。何不自由なく過ごせた12年間。それは、本当にいろんな人が、僕の知らないところでがんばってきたからだと思う。僕は、みんなに「ありがとう」を言いたい。

震災で失ったものは多いが、得たものも多い。人の温かさを感じることができた。知り合いだとか関係なく、助け合えたあのひと時があったからこそ今の僕たちがいる。

僕が知らないところで「震災」という重みを感じて生きている人が確実にたくさんいるということを知った。僕は、そんなに人たちに何をしてあげられるだろうか。僕は、その答えにようやくたどり着いた。僕たちは震災を経験してわずかではあるが記憶に残っている最後の世代と言われているからこそ、子供の目から見た阪神・淡路大震災。この事実を語り継げるのは僕しかいないと気付いた。だからこそ、語り継いでいきたいと思う...

地震発生前

僕は普段通りの生活をしていました。朝は幼稚園に行き、地震が起こるとも知らず、友達とワイワイはしゃいで、楽しくおしゃべりしていました。幼稚園から帰ってきて、戦隊もののビデオを見ていた。午後7時に晩御飯を食べ、父と一緒に風呂に入り、そしていつも通り午後10時頃に就寝した。地震が発生する約10分前、5つ離れた兄は偶然にも目が覚めたらしい。いつもはそんな時間に起きるはずがないのにと、本人も不思議そうに言っていた。赤黒い色をした月がとても印象深く、また地震発生直前、空が七色に光ったと言っていた。その後、すぐに悪魔はやってきた。これらの怪奇現象は何かを知らせるための予兆だったのかもしれない...

地震発生直後

1995年1月17日午前5時46分...あの約15秒間の揺れで僕の目の前の世界が一気に大きく変わった。「ドーン!!」と下から突き上げてくる大きな揺れ、「ガシャーン!!」と大きな音をたててお皿が何枚も割れ、色んな音と揺れが混ざって、僕はとても怖くなった。ずっと泣いていた。泣き続けることしか僕にはできなかった。この時の自分を思うと、本当に無力だなと思う。揺れ始めてすぐに、兄は家族全員に布団を被せてくれた。そのおかげで、物が落ちてきてもケガをしなかった。今ではよくケンカをする兄だが、あの時は本当に頼りがいがあり、格好よく見えた。

朝になりベランダから家の前の公園を見てみると、すごいことになっていた。昨日まで、楽しく遊んでいたあのブランコやすべり台は元の形をとどめていない。一瞬、時が止まっているように感じた。子供ながらに、無性に寂しくなったのを覚えている。僕の家は幸いなことに被害はそんなにひどくなく、皿が割れ、タンスやテレビが倒れていたぐらいだった。家族の命が失われなくて本当によかったと今でも思う。

地震がおさまってから、母がすぐに玄関のドアを開けに行った。その当時は何をしているかよくわからなかったけれど、ドアが変形して開かなくなるのを防いでいたのだと知った。どこでそのことを聞いたのかと尋ねると、古くからの友人から聞いたと言っていた。先人の知恵はすごいのだと感じた。

地震発生後

何回も何回も来る余震におびえながら毎日を過ごしていた。地震が発生して間もない頃、近くの友達の家で電話をかけさせてもらいに行った。西宮に住んでいるおばあちゃんのところだった。電話をかけていたのは母だったので、その時の詳しい話はわからないが、家の中はぐちゃぐちゃになったけど、何とか命を取り留めたという風に聞いた。幼かったので状況をあまり読み込めないでいる自分がいた。

しばらくして、父親の仕事の都合で長田の大橋9丁目へと向かった。長田へと向かう車から見える景色は想像を絶するもので、今もその光景・音・においが体に焼き付いている。長田のまちはいつもの“あのまち”とは違い、火の海に飲み込まれていた。道端で座り込んでいる人や、毛布をかけて寝ている人もたくさんいた。すべての光景が新鮮だった。また、音もすごかった。人の泣き叫ぶ声、救急車や消防車のサイレン、車の騒音などすべての音が重なって僕に襲いかかってきた。ずっと耳をふさいでいた。そのくらいすごかった。車は火事のせいかススだらけになっていた。火の手がおさまる気配はない。それどころか、どんどん広がっていついていないか。幼心に歯を食いしばる思いだった。

しばらくすると、いろいろな面で不備が出てきた。水が出ない。蛇口をいくらひねっても、ひねっても水が出ない。コップ1杯の水すら満足に飲めない。お風呂にも入れない。トイレも流せない。今まで、生活のなかで、当たり前のモノのようにあった水。その時“水”の大事さを悟った。水が出ないので、垂水区の水道局にペットボトルとタンクを持って行った。小さい体で、2リットルのペットボトルはとても重かった。また、場所は正確には覚えていないが、“亀石”という岩があって、そこから水がわき出ている、祖父母と家族全員とで水を汲みに行った。

母からとても感動的な話を聞いた。西区の公園に避難しているとき、西区の人が家から水を持ってきてくれたという。今まで話したこともない人が水を分けてくれた。「大変やったねえ。これちょっとやけど持って行って。“お互い様”やから。」と。お互い様と言い合える。“人っていいな”と思った。とても温かい。この人に巡り合えてよかった。人の良さを気付かせてくれたから。今はどこで何をしているかわからないけど、いつかどこかで会えたらいいなと思う。会って一言、「あの時は、本当にありがとうございました。」とお礼を言いたい。

12年目を迎えた今

あれから月日が経つのは早い。12年前までは、ぐちゃぐちゃだったまちも、刻々と復興していつている。あの神戸のまちに“光”が見えてきた。神戸のまちは生まれ変わろうとしている。生まれ変わるのと同時に、震災の爪痕までも無くなっている。復興が進み、まちがキレイになっていくのはうれしいけど、何か寂しい。言葉として残すのも大切だと思う。けれども、形で残すということも大切であると思う。

僕たちは震災を経験して記憶に残っている最後の世代と言われている。僕たちにはやらなければならない使命がたくさんある。子供の目から見た阪神・淡路大震災を語り継げるのは僕たちしかいない。今、僕たちがやらなければ。そう思う。阪神・淡路大震災から12年目を迎えた今、自分にできることを考えた。震災を風化させないために語り継いでいくこと。これが最も大きなテーマになると思う。

日本では阪神・淡路大震災について知っている人も多いが、海外ではまだまだ無知な状態である。僕たちが、震災を語り継いでいくことによって救われる命があるかもしれない。希望を与えることができるかもしれない。災害や防災に興味を持ってくれるかもしれない。計りきれないほどの期待を秘めたこの活動を卒業後も続けていきたいと思う。

僕はあの当時5歳だった。震災から12年目を迎え、今では17歳になった。震災から12年経った神戸の子供たちは、今はこのような形で防災を勉強している。阪神・淡路大震災を語り継ごうとしている。僕たちのこのような姿を見て、ほんの少しでいいから何かを感じ取ってもらえたらうれしい。12年前は助けられる側だったが、これからは助ける側の立場にたって、率先して行っていきたいと思う。あのときの教訓を活かして。

気付かせてくれたこと

- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 尊い命の大切さ
- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 防災の大切さ
- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 人と人とのつながりの大切さ
- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 自然の脅威
- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 人間の無力さ
- 阪神・淡路大震災が気付かせてくれたこと 人の温かさ

決して良いことばかりではなかった。たくさんの尊い命を奪った。しかし、だからこそ命の大切さにたくさんの人が気付くことができた。これは、震災で亡くなった方々からのメッセージとして僕は心に受けとめる。無駄にはいけない、たくさんの教訓、たくさんの尊い命を。

これらの教訓を次にどう活かして行くか。このことこそが、僕たちに与えられた使命であり、本当に気付かせてくれたことなのだろう。これを1人1人がどう受け止めるかによってこの世界が大きく変わってくるのだと思う。

当たり前の日々

水が出ない。お風呂に入れない。トイレにも気を使わなければならない。おかしも食べられない。安心して寝られない。今まで当たり前で過ごしてきた日々。すべてがあって当たり前。こう思うようになったのはいつごろからだったのだろう。しかし、この“当たり前”は地震と共に砕け散った。当たり前などない。このことも地震から学んだ大きな1つの教訓である。

今あるすべてのモノ。衣・食・住だけでなく、一瞬一瞬を刻んでいる時間も一瞬一瞬を生きている人も、すべてのものが貴重であり、今しかないのだ。当たり前などない。毎日が偶然の繰り返しではないのかとも思うほどだ。一瞬一瞬を大切に、大事に生きて行きたいと思う。そのことが、震災で亡くなった方々にできる最高の弔いだと思うから。

スリランカで見たもの、感じたこと

2004年12月26日。スマトラ島沖地震発生。このことにより、インドネシアやスリランカ、インドやタイなどを襲い、死者約13万人、行方不明者約9万人という膨大な被害が出た。そして2006年、学校の国際交流事業でスリランカに行く機会があったので、是非行きたいと思い参加した。

僕が行った頃は、津波からちょうど1年半ぐらい経っていた。ある程度は復興しているのかなと思い、スリランカに旅立った。スリランカの町を見て驚いた。海岸線沿いの町は、いまだにほとんどの家がつぶれた状態のまま残っていたからだ。津波によってえぐられた家や潰れた家の残骸を見て、津波の恐ろしさを再確認した。口では津波は本当に恐ろしいものであるとは何とでも言える。しかし、実際に自分の目で見ると言葉を失った。自分の目で見て改めて分かる恐ろしさというものがあるのだ。そんな中、スリランカの人々の笑顔はまぶしかった。その一方で、津波のせいで心にトラウマを抱えた子供たちもたくさんいる。そういった子供たちの心のケアの重要性を感じた。

現地の学校の先生を対象に行ったトラウマカウンセリングセミナーを開いたときに、自分の被災体験を英語で話した。自分の思いは伝わっているのかなと少し不安だった。しかし、その不安はセミナーが終わった後、ある1人の女性の方の、「ありがとう。」という言葉によって吹き飛んだ。とてもうれしかった。地震から12年経った子供たちは今、このような形で防災を勉強し、毎日を大切に生きているという姿勢を見せることができた。暗い気持ちも、希望を持つことによって少しでも明るくなってくれた。そう思えた瞬間は充実感でいっぱいだった。

スリランカでの1週間は本当に濃いものだった。また、この訪問ではたくさんのことを学ばせていただいた。現地の人々の生の声を聞くことによってわかることがたくさんあるということもわかった。スリランカの今の状態を僕が伝えることによって、少しでも関心を持ってくれたら嬉しい。阪神・淡路大震災と同様、絶対に風化させてはならない。そう、強く意気込んでいる。

ボランティア

環境防災科に入学してからたくさんのボランティア活動に参加させてもらってきた。その中でも特に印象に残っているのが、新潟県中越地震での災害ボランティアである。現地へは、昨年、一昨年と2年間行かせてもらっている。現地では雪かきをしたり、クリスマス会をしたり、他にもたくさんの活動を行ってきた。その中でも、仮設住宅の中の集会所でクリスマス会を行いクリスマスカードを渡し、“しあわせ運べるように”を歌ったときのことが今でも忘れられない。思い出しただけでも涙が出てくるほどだ。僕たちは歌を歌ったり、手紙を書いたりしただけなのに、新潟の人々は涙を流しながら歌を聴いてくれた。そして、何回も何回も「ありがとう」と言ってくれた。その言葉は、僕の胸にジワジワとしみ込んだ。と同時に、自然と涙があふれてきた。そのときのとても温かい気持ちは一生忘れることはないだろう。いや、忘れることなどできないだろう。この「ありがとう」のパワーがボランティアをすることのエネルギーにつながっているのだと思う。また、今年も新潟へのボランティア活動に参加したいと思っている。

ボランティアは心を温かくしてくれる。自分を成長させてくれる。僕は、これからもずっとボランティア活動を続けていこうと思っている。人と人がもっと密着したボランティア活動を。ボランティアと人々との間に信頼関係を築けるボランティアを...

将来

将来、僕は国際協力の分野に携わっていきたいと思っている。詳しくは、海外へ防災を発信していきたいと思っている。僕が、このような夢を持つようになったきっかけは、中学生の頃から、国際交流という分野に興味があり、さらに環境防災科での授業を通して“海外への防災発信”という新しい課題を見つけることができたからだ。また、この夢は2年生の夏に行ったスリランカで、現地で実際に働いている滝さんという、日本人のUNV(国連ボランティア計画)の方と話し、UNVの重要性・やりがいを知ることによって、自分の中で“こうなりたい”と明確な夢へと変わった。海外で防災発信をするという夢がかなわなくても、なんらかの形で防災とは付き合っていきたいと思う。

僕にはもう1つ夢がある。それは教師になることだ。教師になり、環境防災科に戻ってきたい。僕がこの3年間で学んだ事、日々のボランティア活動など環境防災科の後輩たちに教師としてだけでなく、先輩として伝えたい。

30年後には80%の確率で、東海・東南海・南海沖地震が発生すると言われている。このような現実を踏まえて、もっと“防災文化”というものを根付かせる必要があるのではないかと。世の中が、社会がもっと防災に関して興味を持ち実践していかなければならないのではないかと。思う。

世界では今もどこかで災害によって苦しんでいる人たちがたくさんいる。ちょっとした知識と知恵があるだけでも救われる命、失われずにすむ命がたくさんある。だからこそ僕はこの夢を絶対に実現させようと思う。尊い命を、失われずにすむ命を守るために。

しあわせ運べるように

「地震にも負けない 強い心をもって 亡くなった方々の分も 毎日を大切に生きてゆこう」

この歌を聴くといつも胸が熱くなる。そして、震災のことを思い出す。1月17日に近づくにつれよく耳にする。自分が挫けそうになったとき、いつもこの歌を思い出す。自分には命がある。それだけで幸せなことなのだと気付かせてくれる。だから、僕はこの歌がとても好きだ。

この前、テレビで芦屋市の精道小学校の子どもたちが「しあわせ運べるように」を歌っている放送を見た。僕は、その子供たちの姿を見て涙があふれて止まらなかった。しっかりこの子たちまで震災は“生き続けている”。そう感じた。震災を直接的に体験していなくても、伝わる気持ちというものはあるのだとつくづく感じた。この歌も震災体験と同時に語り継いでいきたい。

世界中にしあわせ運べるように...

メッセージ

阪神・淡路大震災を境に、地震は活動期に入ったと言われている。そこで意欲的に活動していくのが環境防災科であると思う。ここで防災について学べるのは、あと1年もない。環境防災科の授業では本当にいろんなことを学ばせてもらった。防災について無知だった僕を、防災漬けにしてくれた。消防学校への体験入校やスリランカ訪問。他にも、様々な防災に関するセミナーやフォーラムにも参加した。そして様々な場所で発表を行ってきた。本当に貴重な経験ばかりだったと今更ながらに思う。僕の人生の中に、“防災”という新しい道を切り開いてくれた。僕は、環境防災科に入っていなければこのようなことを考えることもなかっただろうと思う。そう思えば、この環境防災科に出会えたことは本当に“運命”のように感じる。阪神・淡路大震災を経験したから、兵庫県に住んでいたから、神戸の垂水に住んでいたからとあらゆる偶然が重なり、この環境防災科に入学できたのだと思う。僕はこの文章を読んでいる人たちに伝えたい。防災を学ぶことの大切さを。防災は私たちの尊い命を守ってくれるということ。だからこそ、ほんの少しでいい。防災という分野に触れてみてはどうだろうか。ほんの少し触れることによって僕同様、あなたの人生を、世界を大きく変えてくれるかもしれない。僕はこれからも防災に携わっていきたい。災害大国である日本が、防災大国と呼ばれる日が来ることを胸に抱いて...

Memory ~ 記憶 ~

神戸市垂水区本多聞
境 豊

夢の中での5時46分

午前5時46分ゴーツという音と共に目覚めたのは僕の父と母。
そんな時間に起きているはずのない僕は夢の中にいた。その時の夢を今でもはっきり覚えている。
“薄暗く車の音の跳ね返りでゴーツと鳴るトンネル...車で揺られている...”
今思うと地震を違う形で感じ取っていたのかもしれない。
僕の親が感じたのは長時間の揺れや不安。親は平然と寝ている僕を抱きかかえまだ薄暗く寒い外に出た。
地震が起きてどれくらい経ったのだろう...
地震が起きたことさえ知らない僕は車の中にいた。行き先を聞いても「おとなしく座るとき」と怒られた。
その時の僕は地震というものをほとんど理解してなかった。どうして急いでいるの？ どうして焦っているの？...そんな感じだった。

炎のまちと祖母の家

車は祖母のいる新長田に向かっていた。
長田へ向かう途中だんだん景色が変わり周りは炎に包まれていった。
そこにはいつも行っていた商店街や新長田の姿はなく炎だけが辺りを照らしていた。
不安と恐怖を感じながら祖母の住むマンションに着いた。
祖母はマンションの2階に住んでいたが、あの日だけは地面の上に部屋があった。
まるでダルマ落とし。
1階部分は完全に潰れ2階から上がそのまま真下に落ちていた。
幼い僕の目に映ったその光景をどう表現したらいいのだろう。異様？ 不思議？ 夢？ 何とも言えない感じだった。
祖母のマンションは1階部分が駐車場で柱が少なく強度がなかったため倒壊した。

もし他のところも強度がなかったら...。
もし落ちた衝撃で潰れていたら...。
もし上の階の重みで2階部分も潰れていたら...。

祖母は恐怖の中で死んでいたかもしれない。
祖母が生きていたのは、その“もし”がたまたまなかっただけで。“偶然”“運が良かった”
ただそれだけで助かった。

祖母は復興したマンションの抽選にも当たり、元いた所に戻る事が出来た。
新しくなったマンションは昔住んでいたマンションとは違い、部屋数も少なくなりちゃんと別の場所に駐車場が設けられていた。たぶん地震対策もきちんとされているのだろう。

高い天井の下は...広く狭い

祖母や親戚の安否を確認した後、何処かの学校へ向かった。入ったのは人と物で覆い尽くされた体育館だった。保育園とは比べものにならないくらい高く広い天井。でもその床は狭かった。不思議な感じがした。
僕たちは人や物に当たらないように居場所を探した。でも何処を見ても、人...人...人...。
偶然空いている場所を見つけた。と、いうよりは少ししか空いていなかったが周りの人が少しずつ荷物をずらしてスペースを作ってくれたのだった。
空けてもらった小さいスペースにシートを広げ家族で座った。足を伸ばすことも寝転がることも出来

ずにただただ座っているだけの日々。正直、窮屈で暇だった。

お腹は減るがご飯がない。喉が渴いても水がない。

保育園児...いや、全ての人にとって苦痛だっただろう。何を言ったからといってご飯が出てくるわけもなく...黙って過ごすしかなかった。母に怒られるのも嫌だったし...

久々の我が家は...

しばらくしてから僕たちは自分たちの家へ帰った。

家の中はというと引き出しは全て外へ飛び出し食器棚も全部扉は開いていた。食器は割れないものばかりだったので食器が割れることはなかった。

でも、床は食器や文房具、雑誌などで覆い尽くされていた。

たぶん、5時46分の地震発生の時点でこうなっていたのだろうが、あの時僕は寝ていたし起きていたとしても暗くてどうなっているのかわからなかつただろう。

運が良かったことに2段になっている食器棚とTVボードが倒れていなかった。どちらも固定されてなかったし、扉はガラスだった。もし2つとも倒れていたら足の踏み場どころではなかつただろう。

とにかく片付けないと何もできない、ということで1つずつ片付けていった。

全部片付け終わってひと段落し、TVを見ようと思ったがやはりつかない。ライフラインはダメになっていた。

しばらくしたら電気だけはすぐに回復したらしい。

しかし水道は断水状態が続いていたためポリタンクを車につめて水を取りに行った。

水道の周りにはたくさんの人がいた。最後がどこかわからないほどの長い列、たくさんの人が入り乱れていたが僕の記憶ではみんながちゃんと順番を並んで待っていた。

今思うと不思議なことだ。バスの順番すら並んで待てない人間もいるのに、その時だけは誰もがきちんと列を作って並んでいた。

やっと僕たちの順番がきた。水でいっぱいになったポリタンクを僕は1つ抱えて車まで戻った。

頑張って運んだ僕はちょっと満足気だった。

ブレハブの家

祖母の家は潰れてしまったので仮設住宅に移った。僕は何度か祖母の住む仮設住宅に行った。

部屋は1部屋だけで少し狭い気がしたが祖母はそれほどでもないような感じだった。

他にも多くの仮設住宅があったが、その中でもおじいちゃんやおばあちゃんがたくさんいたような気がする。たぶん、祖母と同じマンションの人だろう。

意外にもみなさん明るく話しかけてきてくれる。

「僕、怖かったでしょ？怪我はなかった？」と優しく尋ねてくれお菓子をくれた。

坂を少し上ったところに公園があることも教えてもらいボールを借りて公園に行った。が子供の姿は全くなかった。

結局、遊ぶ子がいなかったのですぐに仮設住宅の方へ戻った。坂を下りる途中仮設住宅が目にとまった。たくさん花が植えられていた。

黄色、赤、紫、色とりどりの花。

普段、保育園に花が植えられていても気にしない僕が初めて花を眺めたかもしれない。

知らず知らずのうちに心は疲れきっていたのだろう。少し心が癒され楽になった。

おじいちゃんやおばあちゃんが花を植えている理由がその時初めてわかった気がした。

伝えていかなければならない

あの地震からもう12年経つ。

神戸は地震の傷跡を完全に消してしまうほどきれいなまちに変わった。

地震があったことを忘れてしまうほど。

記憶というのは忘れないでおこうと思っても消えていく。

地震の記憶が消えていくのも当然なのかもしれない。

毎日毎日新しい記憶が作られていく中で12年前の記憶だけを正確に残すなんてほとんどの人が無理

だと思う。

僕は正直あの地震の全ては覚えていない。この『語り継ぐ』も記憶と記憶を繋ぎ合わせたちぐはぐのモノで全てが正確なものではないかもしれない。

僕はこの『語り継ぐ』を書いていく中で記憶というのは本当に曖昧なものなのだと思った。

嫌な記憶は簡単に消され、人によっては完全に封印される。

地震は体験した者のみが伝えることができる。しかしこれでは伝わらない。

今、地震を体験した事のない子がどんどん増えてくる。その子たちはどうやって地震を知る？たぶん学校で教えてもらえるのは紙の上に書かれたただの数字や写真。これでは本当の地震の恐怖なんかは伝わらないと思う。

今後また大きな地震が発生するだろう。その時は1人1人、地震を知らない子にどんな形でも地震を伝えていって欲しいと思う。

現在...そして未来へ

今、防災が日本で広まってきている。

耐震や防災グッズなども注目され始めた。また今の日本の防災技術は世界でもトップクラスのものを持っている。

これは日本にとっていい方向に向かっていると思う。しかしこれは地震大国日本にとってごく当たり前のことなのかもしれない。逆を言えば今までこうならなかったのがおかしい。

阪神・淡路大震災のときは神戸の人たちは口をそろえて「神戸に地震は来ない」と言っていたそうだ。僕の母もそう言っていた。でも実際は地震が起きた。当たり前のことだろう。南海地震など定期的に地震が起こっているにも関わらず地震が起これないと思っている時点で日本、神戸に住む人間として防災意識が足りていなかったのかもしれない。

「地震は来ない」という勝手な思い込み。その安心感が神戸の人たちの防災意識を低下させていた結果あれほどの死者を生んだのだと思う。

今の日本は耐震の家などに囲まれて生活している。でもこれで安心していたら結局前と同じになってしまう。安心だと思うなど言うわけではなく、日本に住む以上防災意識は常に持って欲しいと思う。

1人1人の防災意識を高めることが地震が起きても耐えられる強い国になる近道だと思う。

環境防災科に入って

この環境防災科に入って防災のこと、地震のこと、ボランティアのことなど普通では学べないたくさんのことを学ぶことが出来た。

昔は阪神・淡路大震災を経験したものの、地震に対する意識も全くなくて中学校や小学校で地震についての勉強やビデオを見ても「凄かったなあ」で終わっていた。でも、地震のメカニズムを詳しく勉強したり、地震が起こった時に実際に色々なところで働いていた人や、阪神・淡路大震災だけでなく他の津波や地震を体験した人の話を聞いたりして少しずつ地震や津波などの災害に対して興味を持って意識するようになってきた。

ボランティアも初めは「めんどくさいもの、他の人がやっている」という気持ちで見向きもしなかった。

話を聞いたり色々勉強していく中でちょっとは関心を持つようにはなったが、それでもやっぱり恥ずかしさがあつたり休みの日までボランティアに行くのはめんどくさいと思ってなかなか行くことが出来なかった。

でも、そんな僕の気持が変わったのが石川県の能登半島地震の時の募金活動だった。

募金活動に行こうと思った動機は正直「推薦入試を受けるときの点数が欲しかった」からだった。そんな気持ちだったから何回もめんどくさくなり「何か理由作って休もう」とも思ったりもした。

けど初めてだと思いボランティアに行った。募金活動はわかってはいたけど駅前で大きな声で募金を呼びかけるのはとても恥ずかしかった。でも、他の子も頑張っていたので僕も頑張るしかなかった。募金活動をやっていると色々な人が「頑張ってるね」と言ってくれてとても嬉しかった。募金活動が終わって募金箱にたくさんのお金が入っていて頑張った甲斐があったと思った。

実際、募金活動をやってみると今までのボランティアのイメージとは全く違うもので少し恥ずかしさはあったもののめんどくさくなかった。むしろ逆で友達と一緒にボランティアをして楽しかったし終

わった後はとても清々しくて嬉しさもあった。

僕は環境防災科に入ってなかったらボランティアなんかは強制でもない限り絶対に行っていなかっただろう。ボランティアの楽しさや嬉しさに気付けたのは環境防災科に入ったお陰だと思う。

環境防災科は色々な面で色々な事を気付かせてくれた。普通科では決して出来ないこの経験はこれから先もずっと僕の支えになると思う。

また、僕は環境防災科でもうひとつ学んだことがあった。それは“夢”だ。

環境防災科に入って夢について考える機会が多くなった。僕は中学の時は全く夢もなく将来何になりたいかも考えたことがなかった。でもこの環境防災科に入って、夢とまで言えるかはわからないが、将来こんなものになってみたいと思えるものを見つけた。勿論、環境防災科に入っていきなりに見つけたのではない。少しずつ防災だけでなくいろんなことを聞いたり体験したりしていく中で少しずつ目標を見つけたり、パソコンを使う授業も多いので自分でいろいろな職業を探したりしている内に“夢や将来の目標”を見つけることが出来た。

他にも友達の影響も大きかった。ここに入っている人たちはみんな自分を持っていたり積極的に何かに向かって動いていたりにしている。そんな人たちに囲まれている中で少しの焦りもあったが自然と自分を高めることが出来た。

環境防災科に入っていなかったら“夢や将来の目標”なんかもないまま大学選びなんかも適当になっていたと思う。

この環境防災科は色々な面で僕を変えてくれた。僕だけでなく環境防災科に入った人はみんな入る前と後では自分自身を高め大きく変わったと思う。

最後に

環境防災科に入ってたった3年間でたくさんのことを学ぶことが出来た。地震のデータやメカニズムなど目に見えることだけでなく、心の部分も多く勉強することが出来たし自分を見つけることが出来た。

ボランティアについてもそうだしこの語り継ぐも1つの勉強となった。

今まで地震体験を始めから書くことがなく、今回これを書きながら「このときの自分は何を思っていたのだろう」「親はどうしてこんなことをしたのだろう」といろいろ考えることが出来たし、“現在...そして未来へ”などは地震体験を書いている内に考えが今までと変わった部分がたくさんあった。阪神・淡路大震災についてただ書くだけでなく、自分の気持ちや親、周りの人たちの気持ちを考えて書くことで新たな自分の考えを発見することが出来た。

この冊子を読んでいる人もこの冊子を読みながら自分のことを見つめ直して欲しいと思う。また、機会があれば自分自身も“語り継ぐ”を作ってみて欲しいと思う。

記憶

神戸市長田区苅藻通
梶月 麻衣

私は、生まれた時から長田区に住んでいる。住み慣れた地域にとっても恐ろしいことが起きた。それが阪神・淡路大震災である。当時私は5歳。今から12年も前のこと。

1995年1月16日。何をしていたのか、何を考えていたのか。特別変わったことをしていたのか、まったく覚えていない。毎日、毎日と同じように、繰り返すようにして過ごしていたのだと思う。冬休みが終わり、幼稚園に行っていたのだと思う。その時、地震が起きて、大騒ぎするなんか誰も考えていなかったらう。

次の日の17日。母と父と姉、そして私。いつものように、同じ部屋に4人並んで寝ていた。5時46分地震発生。地震の揺れを感じた記憶はもう無い。母の悲鳴で私と姉は目を覚まし、気がつけば何も無かったかのように静かだった。もしかしたら、大騒ぎになっていたのかもしれない。けれど、寝ぼけていたのだらう。私にはとても静かな朝に思えた。たくさんのたんすに囲まれ寝ていたにもかかわらず、その部屋は奇跡的に何の被害もなかった。何も無かったかのようにいつもと変わらない様子だった。だから私は、朝っぱらからうるさい母を笑いながら、もう一度眠りに入ろうと思った。しかし、母は私を寝かしてはくれず、パニックになった様子で何か父に問いかけていた。

母は電気をつけようとしたが、つかなかった。停電していた。私も姉も何かなんだか分からず、父や母は薄暗い中その部屋を出ようとして、ふすまを開けた。悲惨なことになっていると言った。私と姉はやじうまのように後ろから覗いた。足の踏み場もないほどグチャグチャになっていた。それが地震だった。地震が何かなんてよくわからなかった。食器は割れ落ち、散乱し、水槽の水はこぼれ落ちていた。小さな家具は壊れ、大きな家具は倒れていた。見るのでさえ無残な光景だった。今までにまったく見たことのない光景だった。どこか違う部屋の様子を見ているようだった。その中でもなぜか印象に残っているのが、冷蔵庫を買い替えたばかりで、古い冷蔵庫はベランダに置いていたが、その冷蔵庫が倒れている様子だった。いつ見たのか、よく覚えてはいないのだけれど、家の中の様子で私のなかの記憶として一番残っている。たいして悲惨な光景ではないのだけれど、今になっても忘れることはない。

私たちの部屋にあった、たんすはなぜ倒れなかったのだらうか、と少し疑問に思ったが、おかげで私たち家族はけが1つなく無事だった。私が寝ていたちょうど真上にあった電灯がもし落ちてきたら、間違いなくけがをしていたらう。そう考えると今でもすごく怖くなる。

揺れもおさまったようで、少し安心したころだらうか、私は姉と共に母に連れ添ってもらいトイレに行った。母は懐中電灯を持っていた。いつの間に取り出したのか。少し驚いた。周りの状況がおかしいのは分かったし、私たちは今、危険な立場にあるということが何となくわかった。けれども私は、いつもと違う状況で朝を迎えたとしか思わなかった。恐怖はあまり無かった。しかし、私とは違い母と姉は何かに脅えたように震えていた気がする。

水も流れなかった。お風呂に張ったままであった水をトイレのタンクに移し、何とか流した。水道は地震発生から約1カ月止まったままだった。部屋に戻ろうとしたとき、電気がついた。電気がつく。電気がつくだけで家族は安心したようだった。私たちがトイレに行くと同時に父はベランダに出て外の様子を確認していた。あちこちで火が燃え上がり、煙が蔓延していると言った。火事はそう遠くないところで起きていたそうだ。火事になったらどうなるかぐらいは私でも理解出来た。その時私は、初めて不安になった。怖かった。何かとてつもなく悪いことが起きたのだと思った。父は火事にはならないと言った。その一言ですごく安心した。部屋へ戻り、父がテレビ台から落ちたテレビをもとに戻し、電源を入れた。私たちは何の情報も得ていなかった。朝早いにも関わらず、大騒ぎになっていた。今でもテレビや写真でよく見るあの様子だった。私たちの住んでいる神戸が大騒ぎになっていた。もちろん幼い私には理解出来ないことがたくさんあった。テレビで大騒ぎになっている様子が、今、私の家の周りで起こっているとは想像もつかなかった。

父が言った通り幸い火事にはならず、しばらくして父は近くに住んでいる祖父と祖母を車で迎えに

行った。祖父と祖母もけが1つなく無事だった。次の日、はとこの家族も家に来た。普段から交流があるわけではないので少し驚いた。初めて見る人もいた。私は人見知り激しかったので、そのはとこの家族と慣れ親しむには少し時間がかかった。広くもない家に10人も人が集まった。祖父や祖母の家は、家以上に物が散乱していて、はとこの家は少し傾いたらしい、どちらも住める状況ではなかったため、しばらくの間一緒に住むようになった。大家族のように賑やかになった。

それからは、グチャグチャに散らかった部屋を片付けるのが大変だった。祖父や祖母の家、はとこの家も片付けなければいけない、みんな毎日忙しそうだった。私は、何も出来ず、危ないからといって、被害のあまり無かった部屋か、なんとか片付けられた部屋でボーッとする毎日を送った。小言ばかり言われる毎日を送った。何をしようとしても邪魔もの扱いされた。すごくつまらなかった。私はしばらくするまで、家の中から一步も外へ出させてもらえなかったため、外がどんな風になっていたのかは、まったく見当もつかない。後になって、焼け跡を見たぐらいだった。

地震当時、一番困ったのがライフラインの切断。普段私たちは、なにげなくライフラインを使っている。蛇口をひねれば水が出るし、コンセントをさせばあらゆる電気器具が使える。私はそれが当たり前だと思っていた。ライフラインを使用するのにお金がかかっているともよく分かっていなかったぐらいだ。地震で、ライフラインが切断され、電気は10分ほどたってから幸い使用することが出来たものの、水道やガスは1カ月以上止まったままだった。ガスの代用は電気で何とか出来たけれども、水はすごく困った。お風呂にも入れない、トイレの水も流せない、もちろん飲み水として使用出来ない。すごく大変だった。近くの小学校に、水をもらいに行く日々が続いた。それでなんとか、私たちは生活していた。ガスが使えないので、お風呂に入れない。電気が使えたので水を電磁調理器を使って沸かし、浴槽に移しお風呂に入ったことや、今までに行ったことのない近所の銭湯に家族で行ったりしたらしいが、私は全く覚えていなかった。

市営住宅に住んでいたため、毎日それぞれの家に管理人やボランティアの方が救援物資を持ってきてくれた。だから、食べ物にはたいして困らなかった。カロリーメイトやインスタント食品など日持ちする食物がほとんどだったが、他に習字道具や鉛筆、ノートなど勉強に使うためのものまで配給されたことにすごく驚いた。そういったものも救援物資になるのだと勉強になった。

数日たって、幼稚園が火事で全焼したこと、幼稚園の友達の家も火事の被害にあったことを知った。長田区は火事があちこちで発生した。誰も被害に遭わないということは無理なことだった。地震からずいぶん経って母から、同じ幼稚園に通っていた1つ下の子の両親が、その子を抱きかかえたまま押しつぶされて亡くなったこと、姉の通っていた小学校の先生が、住んでいたマンションがつぶれ、その被害に遭い、亡くなったことを聞いた。すごく衝撃的だった。私の身内は、被害が割と大きかった地域にたくさん住んでいたにも関わらず、命は誰1人失うことはなかった。なので、その話を聞いたときは驚いた。すごくショックを受けた。私たちは本当に運が良かったのだと思った。地震が恐ろしいことなのだ痛感した。もし私が地震で両親を亡くしてしまっていたら、生きることさえ辛い運命となっていただろう。家族が助かって本当によかったと心から思った。地震は6千人を超える死者を出した。6千人という数字が身にしみた。6千人という数字がとても大きな数字なのだ実感した。

それからの記憶はところどころ、大まかにしか覚えていないし、年齢を重ねるにつれ忘れていっているような気がする。それが当たり前なのかもしれない。しかし地震直後の記憶は今でも鮮明に覚えている。私にとってはものすごく辛い思い出にはならなかったが、やはり衝撃的であったのだ。

けれど、地震直後の記憶でも忘れていっていることがある、それは音や匂いの記憶。耳や鼻から伝わった記憶。地震はものすごい音で町を揺らしたろうし、家の中は食器が割れる音、棚が倒れる音、たくさんの音が飛び交っていただろう。外は火事の煙の独特な匂いで充満し、家の中は水槽からこぼれ落ちた水のせいでいやな匂いがしたのかも知れない。でも今の私にその記憶は残っていない。もしかしたら段々と目から入る記憶も忘れてしまうのかもしれない。あれほど衝撃的であったのに。阪神・淡路大震災はたくさんの方が嫌な思い出としか残っていないだろう。もちろん私も。もう2度と経験したくないし、一生で1回でも経験したくないことである。嫌な、辛い思い出ならたくさんの方が忘れたいと思うのが当然だと思う。けれどやはり、震災での嫌な、辛い思い出は忘れてはいけない。すべてを忘れてしまえば、何も残らない。また同じ過ちを繰り返してしまう。それでは、犠牲になった命やまちに対し

て何の償いも出来ない。

震災はたくさんの大切なものを私たちから奪った。しかし、必ずしも奪われたままではない。私たち家族の場合は、親戚、はとこととの交流が深まったこと。震災前まではもちろん親戚なのだから、法事や結婚式などで顔を合わすことはあった。しかし、震災で一緒に住むようになって、親同士、子同士、仲良くなるきっかけとなった。親戚だけではない、母や父は友人にも助けられた。そして地域は一致団結し、1つのことを成し遂げあうために助け合った。助け合う素晴らしさを学んだ。

私自身としては、震災体験があったからこそ、今こうして文章を書き、誰かに伝えたいと思えるようになった。「語り継ぐ」ということの素晴らしさを学んだ。阪神・淡路大震災という同じ震災を体験していても、体験した私たちそれぞれが違う状況で、違う思いを抱え込み生活してきた。私たち家族の中でも、それぞれ違う体験となる。当時生まれていなかった妹は、震災のことすら知らない。そのそれぞれの震災体験を私たちは語り継がなければいけない。そう思うことが出来た。12年という月日があつという間に流れ、同じ神戸に住んでいても地震を体験していない人は今ではもうたくさんいる。小学生ぐらいの年齢になると阪神・淡路大震災を知らない子がたくさんいると思う。阪神・淡路大震災だけに関わらず、あらゆる災害が日本では起きていて、これからも必ず起こるということを私たちは伝えなければいけない。それが「語り継ぐ」の素晴らしさである。「語り継ぐ」ことは、私たちがこれから生きていくために必要なことである。こう思えるようになったのも震災から得たものである。失ったものに対して私たちが得たものはほんの小さなことなのかもしれない。そんなことで犠牲になったものに償えることは出来ないと言う人もいるだろう。しかし、起きたことをいつまでも悔やんでいては、仕方がない。どうしようもない。私は被害者になったけれども、軽くすんだから簡単にこんなことを言えるのかもしれないが、私たちは前に進まなければいけない。前に進まなければ、私たちはどうしようも出来ない。

地震で大きな被害に遭った長田は12年経った今、もうその面影はほとんどない。私が幼稚園へ行くまでの通り道であった商店街は、当初、火事でアーケードは真っ黒になり、何もかもボロボロだった。長い年月をかけて、今では、すっかり元通りとなり、華やかになっている。以前の私は、その道を通りながら、焼け跡を見るたび地震を思い出していた。しかし、元通りになった商店街を通ると、何も思い出さなくなった。これは、ごくごく自然なこと。まちはどんどん時代とともに姿を変えてきている。元通りになること、今までのように生活することが出来るようになることが復興である。復興のために12年もの間たくさんの方が阪神・淡路大震災に関わってきた。地震や火事で被害に遭ったわけではないのに、新しい建物に変わっている。地震の傷跡は記念館などの展示にまかせ、まちはどんどん開発されている。まちが変わってしまったからといって、私たちの気持ちまでも変わって、忘れ去ってしまっはいけないのだ。私たちが体験した、私たちだからこそ伝えられる教訓を忘れ去ってしまっはいけない。

周りの風景が震災の面影を残さないのであれば、記録として、そして私たちの心の中の記憶としていつまでも、震災から与えられたたくさんの教訓を残さなければいけない。それが、たくさんの犠牲者に対する最大の償いではないだろうか。この先同じような規模の災害が起きてしまったとき、同じ被害者、犠牲者を出さないようにしなければいけない。私たちは同じ過ちを繰り返してはいけない。

私は、阪神・淡路大震災を体験して、様々なことを学んだ。数え上げればきりがないほどではないだろうか。震災を体験していなかったら、こんなにも命が大切で、防災が必要であることには気付かず過ごしていたのだと思う。今と同じ考えを持って生きてこなかっただろう。安易に考えていたボランティアがすごく大切で、まだボランティアという言葉も世間に浸透していないとき、阪神・淡路大震災で多くの方がボランティアをして私たちを助けてくれたこと。ボランティアの大切さを学び、今でもその活動をしている人が大勢いること。たくさんのことを私は知らず過ごしていたのだろう。地震、災害と聞くと悪いことばかりを考えがちになってしまう。たくさんの死者を出した震災。それが当たり前なのだけれど、それだけではない、たくさんの素晴らしいきっかけを得る機会となったことを学んだ。

今まで私は、たくさんの方から、あらゆる震災体験を聞いた。私が、呑気に少しいつもと違う朝を迎え、変わった毎日を過ごしている間、外では、たくさんの方が亡くなり、まちは壊れ、火事になり、その中でも震災時家族よりも仕事を優先していた大人たちが、救助したり、避難所の運営をしたり、自分自身被災者でありながら、被災者を助けていたということを知った。すごいことだと思った。人はこんなにも他人を思いやる事が出来るのだと思った。中には今の私と同じ年ぐらいの若者が、一生懸命ボ

ランティアをしていたということも聞いた。話を聞いていくなかで、辛いこともたくさん聞いた。6千人を超える死者が出たことは頭の中では分かっているけど、人の体験談で聞くと、その数字の重さと、6千人を超える死者を出したことは6千を超えるそれぞれの死があり、その状況はそれぞれ違うことを感じる事が出来た。話を聞いていく中で、今の私はどうすればいいのか、何をすればいいのか考えられるきっかけとなった。

幼かった私は、家族に大変迷惑をかけてきたのだと思う。被災者だとも知らずに、わがままばかり言っていたのだろう。12年経った今、たくさんのことを学んだ。もし今後、大きな災害に出くわしてしまったら、今度は私が両親を今まで学んだ知識をもとに助けていこうと思う。

地震はいつ起こるか分からない。今も世界中で地震は起こり続けている。地震だけではない。自然災害に私たちは逆らうことが出来ないのだ。現実には、自然災害の被害に遭う訳がないと思っている人がたくさんいる。地球規模で考えると、これらの出来事なんて本当に些細なことなのだと思う。しかし、私たちに命がある限り、それを失ってはいけない。災害に遭うはずがないと思っている人こそ、この先被害に遭ってしまうのだ。犯罪、テロ、事故など毎日、悪いニュースでいっぱいだ。自然災害だけでなく、そういった被害に遭ってもいけない。

自分の命は自分で守るということ、大切な人の命を守るということ。それは、簡単なように思えて、難しい。難しいからといって、投げ出してはいけない。これまでのあらゆる教訓、経験、知識を生かして私たちは生きていかなければいけない。たった一度きりの人生を無駄にしてはいけない。

私たちは1人では生きていけないのだから。

「人」という字

加東市東条町
柴田 葵

はじめに

当時私は東条町という神戸から少し遠い場所に暮らしていた。そして、近所の保育園に通っていた。私の記憶はすごく断片的で、家族に震災当時の話を聞いても、全く覚えていない出来事がたくさんあった。この文章は、自分の記憶と家族に教えてもらったことをまとめたものである。

1月16日の夜～17日

震災前日、いつもなら明日保育園があるから早く寝ているはずだった。しかし、その日は昼寝をよくしていたせいか、なかなか寝付けなかった。

私は、兄と一緒に2段ベッドの上で寝る時間にも、目が冴えていた。だから、ビデオを見たらそのうち眠るだろう、ということで、テレビに一番近い場所で、こたつに入ってビデオを見ていた。その時見ていたアンパンマンの記憶は全くない。

しばらくするとやはり、私は寝てしまっていたらしい。電気が消えた感覚はなぜだかわからないが覚えている。

私は、急に目が覚めた。こたつで寝ていたから、寝苦しかったのかもしれない。しかし、当時からこたつでうたた寝はよくしていたし、実際寝苦しかったわけでもない。わけもなく、目が覚めたのだ。

夜中に起きてしまったので、私は闇が怖くてしかたなかった。私は父と母が寝ているベッドに行った。近くに安心できる人がいてほしかったからだ。しかし大人2人が寝ている隙間にうまく入り込むことができなかった。

諦めてまたこたつに戻った。兄のいるベッドには戻らなかった。暗闇の中のこたつの光が温かく感じたからだ。それでもまだ恐怖は残っていた。2才年下の妹もこたつで寝ていたので、テレビに近いこたつの端から、少し妹に近い位置に移動して寝てみることにした。

こたつの光のぬくもりと、人がいる安心感のおかげで恐怖心は消えた。安心したら、寝やすくなるだろう、と思っていたが、余計目が覚め、1人で暗闇にいるのが楽しくなりだした。

何をしていたわけでもない。ただぼんやり、何かを考えていた。しかし、これじゃあ明日絶対起きれないなと思い、明日起こるかもしれない出来事を考えた。それは、朝母に起こされる様子だ。ただでさえ夜寝付けなく遅くまで起きていたのに、今またこうして暗闇の中でぼんやりしていると、朝起きるときなかなか起きれない。絶対叩き起こされるはずだ。それはまずい、と思った。無理にでも寝なくてはいいないと、幼いながらも焦りだした。しかし早く寝なくては、と焦りだす気持ちと裏腹にさらに寝付けなくなってしまった。

そこで、以前教えてもらっていたヒツジ数えを試してみることにした。[ヒツジが1匹。ヒツジが2匹。ヒツジが...]と数えていた。

その時、突然「ドーン！！」という揺れを感じた。波うっているかのような揺れが続いたのは覚えている。しかし、私が住んでいた地域は目立った被害はなかったため、最初の「ドーン！！」という揺れは、実際は体験していないかもしれない。

しばらくすると、というよりすぐ父が起きた。そして千鳥足になりながら私のすぐ近くにあるたんすまで来て、必死に抑えていた。この時私は恐怖を感じていなかった。しっかりした記憶の中にある激しい揺れに驚いていたのだ。そして、父が起きて来てくれた喜びによって恐怖は消えてしまったのだ。

気がつくと母がすぐ近くにいた。食器棚のお皿が音を立てて割れ、床に落ちた。「ビクッ」としたのを覚えている。寒気が立った。

母によると、兄も起きて来ていたらしい。しかし私は覚えていない。3つ年下の妹はまだ同じ場所で寝ていた。よくこんな状況で眠れるな、と考えていた。

揺れは十数秒と実際は短かったと学校で学んだことがある。しかし、記憶の中の揺れはすごく長く感じた。それは、少し船酔いをしてしまうような感じだ。

そんなことを思いながら揺れていたその時、「ガッシャーーン！！」とも「ガタッ」とも言い表せない音がした。振り返るとブラウン管のテレビが下に落ちていた。ちょうど、私が最初に寝ていた場所だ。葵危なかったなあ、という言葉聞き、自分が危なかったことに気がついた。そうすると急に、背筋がゾクゾクした。もしあのままテレビの近くで眠り続けていたら、テレビが頭直撃だった。つまり、今の

私はここに存在しなかっただろう。そう考えると今でも、自分の身に起こった奇跡としか言えない出来事に驚いてしまう。

私たちは、こんなことを体験しながら 17 日の朝を迎えた。私は安心したのか、知らないうちに眠ってしまっていた。

震災後の出来事

私たちの家族は、阪神・淡路大震災で誰にも被害は出なかった。そして父は地震が起きてすぐに自分の両親に安否確認の電話をしたらしい。父の親戚は全員無事だった。しかし、母の親戚では、母と祖父と叔父を除く家族全員が被災した。電話は、この父の電話を最後に私たちからは一度もつながらなくなったそうだ。私たちの家族が経験した被害は電話が繋がらないことだけであった。

● 母方の祖母と叔母の体験

母の実家は家島町という小さな島にある。叔母は病気を患って、長田区の市民病院で入院していた。祖母はその身辺整理のため病院の近くのアパートで暮らしていた。

叔母が入院していたその病院は、5 階部分が潰れたそうだ。叔母は当時 5 階で入院していた。しかし、地震が起きる少し前の日に急患が入って、6 階に移った。それで叔母は助かった。病院のベッドには患者を運ぶためにキャスターが付いている。地震が起きて揺れている間、きっと病院のベッドのほう揺れただろう。叔母は、「地震が起きた時ほんまにジェットコースターに乗ってるみたいやった。壁が近付いたり離れたりするのを自分の目で見たのが一番怖かった」と、言っていたのだから。しかし、叔母は奇跡的に何も被害がなく無事だった。病院の電気は地震で一気につかなくなったらしい。真っ暗な病院内はすごく気味が悪かったそうだ。

祖母も、被災した。しかしまた奇跡的に無傷だったそうだ。祖母はまず、入院している叔母が気になったそうだ。だから一番に叔母のもとに行った。壊れた病院を外から見た時、もうだめだ、とショックを受け、そこに立ちすくんでしまったらしい。しかし、2 人は出会い、しばらくの間祖母の家で暮らしていたそうだ。もちろん水は出ない。水がないことが一番困ったそうだ。

祖母はどこからかわからないけど、私の家に電話をいれてきた。そして、水も何も無いことが父に伝えられた。そこで、父と母は、2 人を家に招くため、病院まで迎えに行った。病院には車で 10 時間ぐらいかかったらしく、とても疲れた、と言っていた。祖母と叔母が来てすぐに、準備していたお風呂に入れてあげたらしい。2 人はお風呂に入れた時、すごく感謝したそうだ。この話を聞いて、震災時にいつも何気なく使っているライフラインが止まるのは大変なのだなぁ、と思った。

叔母は家に来るまでの間に三木の市民病院へ移れる、招待状みたいなものをもらっていたらしい。そこで、2 人は私たちの家にしばらくいたが、叔母は入院を続けたいといけな体だったので、病院に逆戻りした。祖母も付いて行った。病院生活がまた始まって、時々私たちの家にお風呂に入りに来ていたらしい。

そんな生活が半年ちょっと続いた。叔母と祖母は仮設住宅に入れることになった。私たちも、お見舞いとして仮設住宅を訪れたことがある。ところどころだが、私もそれは覚えている。私が覚えていることは、夏が近かったのか、中は狭く、暑かったことだ。そして祖母から棒アイスももらい、近くのコンクリートの上に座ってアイスを食べたことだ。更地みたいなところに突如出来た白いいくつもの小さい建物の集合に、私は圧迫感を感じた。そして、仮設住宅は新築独特のあまり好きでない匂いがした。

これが、母と父から聞いた、叔母と祖母の体験だ。

● 震災地神戸への引っ越し

私は、小学校 1 年生の 3 学期に神戸の北区に引っ越して来た。阪神・淡路大震災が起きて 1 年後のことだ。神戸に引っ越して来たけど、昔テレビ越しに見た神戸とは全然違っていたので、「被災地神戸」という印象はなく、普通に引っ越し先の場所、という感じだった。そして、防災教育もされた記憶がない。ただ、覚えていることと言ったら、引っ越して来てすぐの 1 月 17 日の日に、運動場に全校生徒が集まり、黙とうをしたことだ。黙とうの意味も知らなかったの、私はただ静かにその場が過ぎるのを

待っていた。みんなが目をつむっている間に見た、空の様子は薄暗く、今にも雨が降って来そうだった。肌寒く、ブルッ、と寒気もした。

小学校4年生の時に、私たち一家はまた引っ越しをした。今度は同じ神戸でも垂水区だった。そこで行った防災教育は覚えている。5年生の時は図工の時間に、小さい紙に絵を描き、メッセージを書いた。先生が、「地震の時に世話になった小学校に感謝の気持ちを書いてください」とおっしゃっていた。小学校6年生の防災教育では、くじ引きにあたり、地震の時の記憶を校内のテレビ放送で発表しなくてはならなかった。この時初めて阪神・淡路大震災の自分の記憶を整理した。と言っても、たいしたことは話してない。

私は、同じ神戸といっても防災意識に差があるのに気がついた。被害が大きいところでは記憶は鮮明に残っているし、少なかったところは風化されやすい。当たり前といえば当たり前だ。それでも地震の時はみんなが支えあい、励ましながら、被災者を応援していたのだから、人間の本来持っている、助け合いの精神には感動する。

1.17 追悼式

私は高校2年になって初めて1.17追悼式に参加した。追悼式には、いろいろな方が来ていた。私たちは、夜からボランティアとして参加した。その日は雨だった。1.17の日はだいたい雨だと誰かから聞いた。まるで亡くなってしまった方が、まだ生きたかった、と泣いているかのようだった。

たくさんのローソクに炎が灯された。その度に雨で火は消えていく。それをつけ直す。

ふと、回りを見回すと炎をつける作業をしながら、涙ぐんでいる方がいる。授業で言っていた「6400人の死ではなく、6400人分の死」ということを実感した。そして胸がきりきりと締め付けられている感覚がした。

追悼の瞬間、あたりは急に静まり返った。みんな、あの日のこと、あの瞬間のことを思い返しているのだろう。私は自分のことは考えていなかった。かわりに周りにいる人のことを考えていた。隣にいる見ず知らずのおじさん。若いお兄さんや妊婦さん。その1人1人にドラマがある。なにを思ってその場にいたかはわからない。

人の死や傷は簡単に拭い去ることはできない。消え去ることのできないものだと思っている。震災から今年で12年経った。「まだ12年」か「もう12年」かは、人それぞれだ。地震で亡くなってしまった方と、偶然にも生き残った方。両者の間は本当に少しの差だったと思う。私は「しあわせ運べるように」の中にある「亡くなった方々のぶんも毎日を大切に生きていこう」という部分が昔から好きだった。少しの差で生き残っただけかも知れないが、歌詞通り1日1日を大切に生きなければならない。辛いときは支えあい、励ましあいながら生きていきたい、そう前向きになれるからだ。

最後に

私はこの「語り継ぐ」をまとめていくうちに、思い出した言葉がある。それはこんな言葉だ。「人という漢字は、左はらいと右はらいの、たった2画で簡単な漢字だ。でも、もしも左はらいが少しでも動いたら、右はらいは、たちまち倒れてしまう。また、右はらいが勝手に動いても、同じように左はらいは倒れてしまう。」これは、小学校の時に世話になった先生に最後に教わった言葉である。先生は続けて、「あなたは今、どんな人を支えているのだろう。誰も支えていないよ、と思うかもしれない。しかし、家の中では家族みんなで支えあって生きている。学校でも友達と支えあって生活しているのだよ。そう考えたとき、初めて家族を、そして友達を大切にすることの意味が、あなたたちにもわかるでしょう。」と。私は先生が最後に伝えてくれた、この言葉が好きだった。人の命には限りがあり、その、ひとつひとつはかけがえのない存在で、ひとつの命にもちゃんと意味がある。しかし、地震や災害という危険はそのかけがえのない命に被害をもたらすおそれがある。それを少しでも防ぎ、守るために、1人1人と支えあい、協力しながらこれから起きるどんな災害にも乗り越えていきたい、とこの文集をまとめて改めて思った。

「あの日から12年」

神戸市西区伊川谷町
柴田 隆広

「阪神・淡路大震災」この出来事は12年前から片時も忘れることが無かった。

僕は12年前のあの出来事をきっかけに、現在舞子高校の環境防災科に入学している。もしあの出来事を体験していなかったらこの学科に入っていなかったと思う。だから今では、あの出来事は僕の中で一生の内で必ず体験する運命だったのだと思っている。

そしてこの学科で地震のことを勉強するにつれて、震災とは誰でもが体験できることではない貴重なことだとだんだん思い始めた。もしかしたら一度も体験をせずこの世を去っていく人だってそう少なくはないだろう。だからこの貴重な震災で体験したことや、学んだことを日本人だけでなく、世界中の人々に語り継いでいきたいと思っている。

「地震が起こった！！」

初めて震災とはこんなに恐ろしいものなのだということを知ったのは、わずか5歳の時だった。夢の中で「起きろ、早く逃げるぞ！」という声は何回もこだました。その時あんなに大きな地震だったのにもかかわらず、父に起こされるまで気がつくことなくずっと寝ていた。そしてようやく目を覚ますと、下から突き上げてくるようなものすごい揺れで体の自由が利かなかった。あたりはまだ夜明け前で薄暗かったが、月明かりに本棚やテレビなどが倒れているのがぼんやりと見えた。その様子はまるで家が真逆さまになって転がった様な感じだった。まだ幼稚園児で地震の「じ」も知らなかった僕は、何が起きているのかがさっぱりわからず、夢の続きでも見ているのだと思っていた。そう思っているまま父に抱きかかえられ外に避難させられた。僕は父の腕の中でもまだ何が起きたのかさっぱり分からず、寝ぼけていた。

「被害状況からその日の晩まで」

外には近所の人々が大勢避難していたが、その大勢の中に母と兄の姿が見当たらなかった。父が僕を腕から降ろしもう一度家の方へ戻って行った。僕はそのとき地震とかの恐怖よりも、まだ薄暗い暗闇の中に自分がひとりにされることのほうがよっぽど怖かった。母と兄もすでに外に避難していたからすぐに父は戻ってきてくれたが、半泣きになっていた自分を今でも覚えている。

大勢の人の中には、トイレへ行きたくてもこの地震の中で行くことができなくて泣いている子供や、家や車がめちゃくちゃになっているのを見て放心状態になっている人もいた。そんな中普段は挨拶程度の付き合いしかない人同士がお互いを励まし合い、ほかに逃げ遅れている人はいないのか探しに行ったりして、近所の人々がみんな協力していた。普段何気ない挨拶が、目には見えないコミュニケーションという心の絆を築いているのだと実感した。

みんなが避難している中で携帯電話を持ってきている人がいた。今ではお年寄りから小学生の子供たちまで、ほとんどの人が持っている携帯電話。普段何気なく連絡を取り合ったり、時にはくだらない話で盛り上がりたりするために使用されている携帯電話が、震災当時ではほとんど普及されていなくてとても貴重なものだったそうだ。もちろんメールやテレビ電話などと言った便利な機能も付いていなかった。

他にもラジオを持ってきている人がいて、それらを頼りに他のいろんな地域の状況を聞くことができた。そのとき初めて長田では火災が起きていると言うことを父から聞かされたが、「長田とは神戸市にあるのか？」や、「長田がどこの地域にあってどんな場所にあるのか？」など、長田が何かも分からず、いろいろな疑問があった。他にもラジオからはノイズ混じりの声で、震度やマグニチュードなどの話をたくさんしていたが、長田のことでさえ全くわからない自分には当然理解できるわけが無かった。ただ自分たちの住んでいる場所以外では、まったく想像もつかない程大きな被害が起きているということだけはわかった。

そしてようやく日が昇り、太陽が辺りを明るく照らした。このときの太陽はいつもよりも一段と明るく照らしているように感じられた。それは辺りが明るくなるまでたった1、2時間しかなかったが、不安や恐怖との隣りあわせで何十時間ものようにとても長く感じていたからだ。明るくなっても両親や近所の人たちは「長田の方で起こっている火災が、自分たちの住んでいるところにも起こらないのだろうか。」や、「また大きな地震がやってきたらどうしようか。」などいろんな不安や恐怖があったそうだ。

家に入ってみると思った以上に家具や食器など、あらゆるものが倒れていたり壊れていたりしていた。まるで地震が嵐のようにやってきて、自分の家を荒らし去って行ったかのようだった。幸い食器棚は引き戸だったから、食器棚の食器はあまり割れていなかったが、洗い物が終わって乾燥させていた食器や、机に残っていた食器などはすべて床に落ちて割れていた。広い範囲に食器の残骸が残っていたから、おそらくただ床に落ちただけでなく地震の揺れで食器がふっとんでいたのだと思う。そのような様子を見ると、震災の威力の壮大さを改めて実感した。

次に自分の部屋へ行ってみると、タンスの上に積み重ねていたおもちゃの箱が全部落ちて、床に散らばっていた。おもちゃだけでなく他にも金魚の水槽が床に落ちて割れていた。水槽のガラスの破片にまぎれて、何匹もの金魚が悲しそうに息を引き取っていた。この金魚達は地震が起こったときには何を思っていたのだろうか。恐怖を感じず気づけば命を失っていたのだろうか？それとも地震の恐怖を感じていたが狭い水槽の中で逃げ場が失われ、嘆かわしい気持ちになっていたのだろうか？などいろいろな疑問が頭の中をよぎった。

少しでも部屋の片付けをしようと思うが、どこから片付けていけば良いのかわからなかった。ちょうど部屋を片付けるときに散らかしすぎて、どこから手をつければいいのかわからなくなるような感じと同じ気分である。

最後に自分が寝ていた部屋へ行ってみると、夢の続きであって欲しい世界が現実の世界になっていた。数時間前までは薄暗く、地震の時の状況がよくわからなかったが、もうこのときには既に辺りが明るくなっていてから、本棚やテレビが倒れているのがはっきりとわかった。言葉だけでは表しきれないほどの状態だった。タンスやテレビなどがこんな状況になるほどの大きな揺れだったのに、父に起こされるまで気づかなかったとは不思議に思えるぐらいだった。今となっては自分が数時間前にあんなところで夢を見ていたなんて想像をするだけで鳥肌が立つぐらいだが、こんなに悲惨な状態になっているにもかかわらず僕や兄、そして近所のほとんどの子供たちはあの時に直面していた状況の中で、追いかけてこや探検ごっこなどをしたりして遊んでいた。僕たち子供には地震がどのようなもので、どれくらい恐ろしいのかということをおそらく理解していなかったのだろう。おそらく家にまったく住めないほどの大損害だったり、自分や家族の誰かが重傷だったり、亡くなってしまうという状況の被害に直面していたら、あの時はもっと違う気持ちになっていただろう。幸い自分たちや近所の人たちはそのような状況を直視していなかったから、僕たち子供の心の中では恐れや不安をかき消すほどの安心感が、心のどこかに存在していたのかもしれない。しかし今ではその時自分自身が何を思っていたのかまったく覚えていない。追いかけてこや探検ごっこなどをして遊んでいたと言う話は、この文章を書くときにあたって父から初めて聞かされたことだった。とにかく、自分の部屋の中がめちゃくちゃになっていたのだけは今でもしっかりと覚えている。

お昼前には父や母が家を片付け始めて、片付けている途中でまた地震が起こったら危ないから、近所の子供たちは近くに止めてあった車の中に避難させられていた。車の中には暖房がなく、家から持ってきた毛布しかなかったからとても寒かった。さらにテレビやゲームが無い所に何時間も過ごすことは小さな子供たちにとってはとても厳しいことだった。車の中ではいろんな楽しみがあった。それはみんながお菓子を持ってきて一緒に食べたことだった。普段はみんなと車でお菓子を食べられることなんて無かったからとても楽しかった。今となっては車でお菓子が食べられるからどうしたのだと思うが、小さい頃は普段と違った場所で友達とお菓子を食べられることは、遠足に行ったような気分がしてとても楽しかったのだ。このときに食べたお菓子は、6時前から地震に起こされて、お昼まで何も食べていなかったからいつもより何十倍もおいしく感じた。こんな状況だったがみんな話とかをして車で避難していると、テレビやゲームが無くてとても楽しく過ごせた。今でもこういった車の中での生活が、震災のときに経験した中で一番印象に残っている。

僕たちが車で避難しているときに僕の家ガレージの水道から水が出て、その水を近所の人に自由に

使ってもらえるように開放したそうだ。他の家はまったく水が止まっていたから、こんなことは奇跡的なことだったそうだ。しかしみんなに分けすぎて、気づいた頃には自分の家の分が無くなってしまったらしいが、母が「自分の家の分は無くなったけど、みんなが喜んでくれたからそれでいい。困ったときはお互い様やから。」と言っていたその言葉が今でもとても印象に残っている。

この日の夕方にはほとんど家は片付き、家で寝られるぐらいになった。しかしラジオの天気予報からは震災のあった日から2日後には雨が降ると流れていた。僕の家や近所の家がほとんど落ちていたからビニールシートを掛けないといけなかったが、家には屋根を覆うほどのビニールシートは無く、買いに行かないといけなかった。しかし近所のホームセンターに行ったが、当然のようにビニールシートは売り切れていた。ビニールシートが無いと雨が家にしみこんで大変なことになるから、仕方なく被害をほとんど受けていなかった加古川や高砂の辺まで車をとばしてビニールシートを買いに行った。しかし加古川や高砂、そしてそこまで行く道のりのホームセンターでもビニールシートは売り切れていた。やっぱりみんな考えていることは同じなのだと思う。仕方なく水を分けてもらい、食料を買って帰ったが、コンビニやスーパーの商品もほとんど売り切れていてほとんど何も残っていなかった。何件もお店をまわってようやく買えたのはお茶などの飲み物だけだった。

その日の晩御飯は買ってきたカセットコンロを使って、家に残っていたインスタントラーメンやパンなどを食べた。父から「インスタントラーメンやパンでも、こんな状況で食べ物を食べられることはとても幸せなことなのだよ」と聞かされた。避難所では冷たいものしか食べることができない人や、何も食べることができない人がいることを思えば、温かい食べ物を食べられる幸せさの裏側で、申し訳ないと思う罪悪感もわいてきた。

御飯も食べ終わるといつもならテレビでやっているアニメを見ているか、兄と一緒に遊んでいるか、とにかく楽しい時間をすごしているはずだった。しかしご飯を食べ終わっても地震の影響でライフラインが止まってしまっていて、電気がまったくつかない状況だった。(後々の話で、水道・電気・ガスの内何故かガスだけは使えていたが、ガス屋さんに使ってはいけないと言われていたそうだ)5歳児には暗闇の中で何もできない状況はとても退屈でつらかった。退屈だけならばいいものの、さらに追い討ちを掛けるかのように「バババババババ」とヘリコプターの音が一晩中鳴りやまなく、不安だけを与え続けていた。須磨や長田の方ではもっと大変な状況が続いているのだと想像できたからだ。そんなもどかしい気持ちが続く中、気づいた時には既に深い眠りについていた。

「2日目」

2日目になってもぼろぼろになった半壊の家と、ヘリコプターの鳴り止まない音だけは依然として変わり映えがなかった。しかし1つだけ1日目とは違った大きな変化が起こっていた。それは近所の人たちが協力して復旧作業を行ないだしたということだった。

父はその当時建築関係の仕事をしていたから、1日目にはビニールシートが手に入らなかったけど、被害の少なかった知り合いの家を訪ねるとブルーシートを分けてもらえた。おまけに食べ物や飲み物も分けてもらい、ビニールシートを掛けるためのはしごまでも借りることができた。その時父は、「食べ物やシートを貰えてとてもうれしいが、それ以上に自分たちを助けてくれようと思う気持ちがうれしかった」そうだ。

そして家に帰り屋根にビニールシートを張ると、他の家の人達もビニールシートはあったけどはしごが無くてシートを掛けられずに困っていたから、みんなで協力してシートを掛ける作業を行っていた。この出来事をきっかけに、普段あまり話をしない人同士もお互いが話し合い協力をし始めたそうだ。こんな悲惨な状況だと、どうしても自己中心的な考えになってしまうのに、こんなささやかな出来事から協力し合える心が生まれるなんて不思議なことだと思った。

ビニールシートを掛け終わる頃には、あたりは既に暗くなっていた。その日の晩御飯は父の知り合いから食べ物や飲み物を貰っていたから、1日目よりも良い食事ができた。家族みんなは、感謝の気持ちをかみ締めながら晩御飯を食べていた。相変わらず電気やガスが使えない状況は続いてしたが、この日の晩は温度とはまた違った人の温かさによって、昨日よりも少しだけ温かくなっていた気がした。こうして2日目が終わっていった。

「幼稚園の変化」

こうしたいろんな出来事が何日も続き、ようやく幼稚園に通えるようになっていた。不思議なことに幼稚園へ行っても友達や他のみんなも震災の話はほとんどしていなかった。多分みんな僕と同じで震災の恐ろしさをあまり理解していなかったのだと思う。

大きな変化と言えば2つだけあった。1つ目は、ボランティアの人々が来てくれて劇をやってくれ、お菓子作りなども一緒にしてくれたことだ。もう1つの変化は、震災の影響で友達が親戚の家やおじいちゃんの家に住むようになって、他の幼稚園に行ってしまったということだ。仲のよかった友達も他の幼稚園に行ってしまうととても悲しかったが、今となってはそれ以上に友達は自分の家に住むことができないほどの状況で、もっと悲しい思いをしていたのだと思う。

幼稚園の生活ではこの2つぐらいが大きな変化で、他はそんなに大きな変化は無く震災前と同じ状況だった。

「両親の話」

両親から震災後に聞かされた話だが、長田では火災が起こって大変だった上に、夜になると泥棒がたくさん出たそうだ。ほとんどの家が全壊状態で、大半の人が避難所で生活している状況だから、夜になると誰もいない倒壊した家に泥棒は侵入して貴重品や家具などいろいろな物を盗んでいたそうだ。だから地域の被災者同士で、夜になると寝ずに交代で巡回していたそうだ。その話を聞くと、地震の被害で困っている被災者に平気でそんなことができる神経に、同じ人間としてとても情けない気持ちになった。

仮設住宅では、見知らぬ人同士とのコミュニケーションに困ったり、碌な生活ができなかったりしてとても困ったそうだ。それがきっかけで、病気にかかって部屋で倒れているのに気づいてもらえず亡くなってしまった人や、自分から命を絶つ人もいたそうだ。そんな人たちは何を思いながらこの世を去っていったのかと思う。

他にも経済的に大きなダメージを受けた人たちや、お互いの気持ちが食い違い、それがきっかけで離婚した家庭も多かったそうだ。この他にも数え切れないほどたくさんの出来事が起こっていて、神戸市民の生活に大きな変化を与えていたそうだ。

「これからは...」

今回この文章を書くときに父や母からいろんな話を聞いたが、まだまだ知らないことが山ほどあり、自分自身が体験したことを忘れていたこともあったから、語り継ぐ立場として少し情けないと思った。しかしあのときの話を聞き、いろんなことを思い出せたから、お互いが協力し合うことがどれだけ大切なことが改めて実感することができた。当然ライフラインや食料などももちろん大切であるが、お互いが協力し合うことで自分が本当に困った時には必ず違った形で自分の助けになると思う。自分の助けになるからと言って協力し合うのではなく、この広い世界に同じ人間として存在する限りお互いが協力し合うのが当たり前になるべきだと思う。もしこのような体験をしていなければ、協力し合うことの大切さを見逃して生きていたかもしれない。少し大げさな表現かもしれないが、実際にあんな状況に直面したのだからこそ、このようなことが言えるのだと思う。

あれから12年、スマトラ島沖地震や現在も新潟県中越地震、能登半島沖地震など日本や日本以外の世界各国でさまざまな地震が起こり続けている。地震だけでなく台風や噴火、そしてそのほかにもさまざまな自然災害が起こり続けているのが今の世界の現状である。そういった災害から少しでも多くの被害を出さないためにも、「自分が住んでいる所には絶対に地震は起こらない。」や、「もし地震が起こっても家が潰れたりするほどの地震は起こらないだろう。」と言った考え方は捨てて、「いつ地震が起こっても大丈夫。」のような地震に対する備えを持った考え方にしていかなければならないと思う。ただ思うだけでなく実際に非常食を買い置きしたり、普段から近所の人同士でコミュニケーションを取り合ったりするなど、自分たちでできる防災対策はいろいろと実践しないといけないと思う。

地震とはこの世に産まれてからこの世を去るまでに一度は必ず体験することだと思っているから、コミュニケーションの大切さや協力し合うことの大切さなど、自分が体験したさまざまな出来事、そしてこう言った考え方を日本中の人々だけでなく、世界中の人々にも語り継いでいきたいと思っている。

阪神・淡路大震災を経験して

神戸市垂水区清水が丘
清水 麻莉菜

あれから 12 年

12 年前の 1 月 17 日、阪神・淡路大震災が起こった。当時の私はまだ幼かったため記憶がはっきりとは残ってないがこの「語り継ぐ」を通して親に震災体験を聞く機会も増えた。初めて知ったことや地震の恐ろしさを改めて感じる事が出来、自分自身の成長にもこれから生きていく上にも繋がっていくだろうと思った。

前日の夜

当時私が住んでいたマンションは築 8 年の 10 階建てで 3 階に住んでいた。震災の前日市内の高校に勤めている父が丁度修学旅行の引率で北海道へ行っていたため、家では和室に母と妹と私の 3 人で寝ていた。

地震の揺れ

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分突然の揺れと母の声で私は目を覚ました。低いタンスの上に置いてあったおままとセットがひっくり返って布団の上に落ち、家が激しく揺れる中私は何が起きたのか全く理解出来なかった。頭の中はまだ睡眠状態のままで母の声を頼りにふらふらと歩いたのを覚えている。母は既に妹を覆うようにして必死に私を呼んでいた。私より幼い妹は今にも泣きそうでとても怖がっているような表情だったことを今もはっきり憶えている。私と妹は母の元へ行き頭に枕を被せてうつ伏せになって、その上から母が 2 人を覆うようにして守ってくれていた。母はその時どこから何が落ちてくるのだろうとひやひやしていたらしい。その数秒後部屋の端に立っていたタンスの一部が落ちてきたが、母の背中に怪我は無く地震の恐ろしさでどきどきしていたため痛みも感じなかったと話していた。和室の戸を開けるとリビングは悲惨な状態だった。食器棚の扉が開いて数えきれない程の食器がめちゃくちゃに散りばめられていた。水槽の水が零れて床に投げ出された金魚がぴちぴち跳ねていたことも覚えている。私はこのとき初めて地震というものを経験した。揺れを肌で感じ、地震というものの大きさを目で見てあの生々しい光景が今でも頭の中に焼き付けられている。

近所付き合いの大切さ

私は垂水区住まいだったのでそれ程大きな被害は出なかったけど、部屋の扉を開けると、台所は食器棚から何十枚もの食器が床に散りばめられていて、水槽からは金魚が飛び出し床で跳ねていた。初めての光景で状況を把握することも難しく、私たちの家族はどうすればいいのか、何から手をつけていいのか分からず戸惑っていた。でもそんなとき助け舟を出してくださったのは近所の方々だ。揺れが収まり、地震の大きさを肌と目で感じたころ外から玄関のドアを強く叩く音が聞こえた。家の中は滅茶苦茶で足の踏み場も無く、我が家の大黒柱である父は仕事の都合で不在だった為本当に怖かった。こんなときに誰だろうと思い、母がゆっくりドアを開いた。ドアの向こう側に立っていたのは近所に住む幼馴染のお父さんだった。数日前、母は幼馴染のお母さんにこの日は父が仕事で不在だということを話していたそう。そのことを思い出した幼馴染のお母さんがお父さんに「心配やから行ってあげて。」と声を掛け、急いで来て下さったらしい。幼馴染のお父さんは散らかった台所の片付けを手伝ってくれたり金魚を水槽に戻してくれたりした。床に落ちた金魚を幼馴染のお父さんは素手で掴んでいた。水槽に戻った金魚は何も無かったかのようにまた元気に泳いでいた。頼れる父もいなく困っていた私たちにとって、その時の幼馴染のお父さんは本当の家族のようだった。リビングの悲惨な姿を見たとき、私は“地震”というものを改めて知ることが出来た。そして地震の恐ろしさを目で見て肌で感じた。

幼馴染のお父さんが帰った後、母は 1 人で滅茶苦茶になった家の中を片付けていた。私と妹は家の中にも下手に怪我をする恐れがあるため、同じマンションに住んでいた友達のお母さんに誘われ、車の中に居させてもらっていた。パジャマの上から上着を着ていただけでかなり薄着だったが、車の中は外より何倍も暖かく感じた。車の中で過ごしていると、また別の友達のお母さんがマンションのベラン

ダから「おにぎり作ったから食べにおいで。」と誘ってくれたらしい。私は車の中に居たことは今もはっきり憶えているがおにぎりを誘われたことはあまり覚えていない。私と妹はおにぎりを作ってくれた友達のお母さんからの誘いを断りずっと車の中で過ごしていたらしいが、今考えると地震が起きてそれぞれの家庭で片付けや子供の世話をすることで大変だっただろうのに、近所の方がこんなに気遣って下さっていたことを本当に有難いと感じる。震災当時の自分はとても幼く地震という災害を理解することも難しかったが、12年経った今では、あのとき沢山の方々からの支えがあったからこそ人と触れ合う大切さも学べたし、近所同士の助け合いがどれだけ必要でどんなに大切かということも痛感出来る。

避難

私の家族は地震が起きた数日後から避難するため明石に住む祖父母の家へ行った。私が住んでいたマンションはライフラインが止まっていたため、とてもじゃないけれど生活出来る状態じゃなかった。電気は数時間後についたが水道とガスは止まったままで復旧するのに少し時間が掛かった。明石はまだ被害が少なく地震の揺れもそんなに大きくなかったため、ライフラインの復旧も早かったと母が話していた。ガスがなかなか復旧しなかったので、お風呂のお湯のガスコンロで沸かすことがとても大変だったようだ。

母にとって避難所で一番印象に残っていることは、テレビで長田区が激しく燃え上がる映像を見たことと、ニュースを見るたび死者の数が増えていたことだと話していた。

修学旅行の引率として出ていた父から母の元に電話が掛かってきていた。ニュースを見て慌てて掛けてきたらしい。母は家の状態と今祖父母の家にいるということを説明していた。親戚の多くが神戸付近に住んでいたが全員無事だった。後から聞いた話だが、修学旅行で北海道へ行っていた生徒の親は全員無事だったようだ。しかし何人かの生徒は祖父母を震災で亡くされたという家もあったらしい。私たちの家族は親戚の家に避難していたため、食の苦労やライフラインに関して大きい困難に遭うことは無かったけれど、外では人が人を助けるといったボランティア活動がさかんに行われ、テレビではよく炊き出しをしている地域も映っていた。また、遠くの地域や国から沢山の物資や資金が送られてきていたことをニュースや新聞で見たときは、自分自身が幼すぎてどう感じたか憶えていないけど、今思うと向こうの人達から見れば全然知らない地域のはずなのに、沢山の方の協力しようという気持ちが本当に有難いと思う。今こうして何不自由なく普通に過ごしている自分はひとりで育ったわけではなく、いろいろな状況で沢山の支えがあったからこそだと、震災を振り返ると共に痛感出来た。

復旧

ライフラインが復旧するまでの間私たちの家族は祖父母の家で過ごしていた。我が家へ戻りぐちゃぐちゃに散らかった家の中は2日程度で片付けることが出来た。私が通っていた幼稚園は2月の半ば頃から再開したそうだ。テレビをつけると、被害の大きかった長田のまちが綺麗に片付けられている光景が映っていたのを覚えている。後から聞いた話だが私の家のライフラインは電気と水道は1週目にはもう復旧したが、特にガスの復旧は遅れていたため料理の他に風呂のお湯もガスコンロで沸かしていたらしい。風呂のお湯を沸かすのは時間も掛かるし本当に大変だったということの後から知った。

環境防災科と私

私は12年前の阪神・淡路大震災のことをあまり細かくは覚えていない。中学3年の春、震災の教訓を踏まえて自然現象の事や地震の原因となるプレートの動き、そして日本だけでなく世界各地で起こる主な災害について事細かく様々な知識を得たいと考え、環境防災科に進学することを決意した。実際に環境防災科へ入学して私が最初に感じたことは「震災はもう大分前に起こって、まちも建物も綺麗になって復旧も復興も終わっているように見えるけど、災害が起こるということは復旧・復興をして終わりなのではなく、その災害を踏まえて次のステップへ行かなければならないのだ。」ということである。様々な災害を経て失ったものは数多くあるけれど、次同じような災害が起こったときにどう対応すれば良いのかということや、家の耐震や家具の固定など災害が起こる前に出来る災害の備えも身に付けた。

1年生のとき、環境と科学の授業では主にプレートの動きや地震の波について詳しく教わった。六甲山のフィールドワークで専門の先生に火山岩や地震の起こり方などを実際に目で見て教えて頂いた。普段は観光地として訪れている六甲山だが、この校外学習を経験し今までと見方がすごく変わった。この環境防災科に入れたからこそ普段見ているものも違うように見えてくるのだろう。今まで全く知らな

かった自然内での現象や、災害が起きてまわりでどのようなことが起きているのかということも様々な経験によってより考えることが出来たと思う。

この学科に入り今まで全く縁の無かったことを経験出来る機会も沢山増えた。例えば1、2年生の冬に新潟県を訪れ、新潟県中越地震のときのお話を聞いたり、いろんな施設を回り現地の方々と一緒にクリスマスパーティを楽しませて頂くなど、貴重な体験も沢山させて頂けたのだ。私がこの環境防災科に入り地震のことやボランティア活動のことに対して興味を持ったということの他にこんな気持ちもあった。それは、私の地域には自治会が無いということだ。これは環境防災科へ入学するための入学試験のときにも書いたことだが、学科の説明会へ行ったとき前で話をしてくださった先生が「この学科は主に地域の防災リーダーを育てる」とおっしゃっていたことを今もはっきり覚えている。自治会の無い地域に住み、他より近所同士の強い絆やコミュニケーションが薄れている中、災害が起こっても隣近所の人々を助けることが出来ないのではないかと。自治会を立てることは全く簡単なことではなく、手続きもしないといけないし時間も費用分のお金も掛かる。一度近所の方と協力して同じ地域に住んでいる方々へアンケートを出してみたのだが、手元に返ってきたアンケート用紙は少なく、ちゃんと返して下さった中でも「家族構成を他人に報告するのはプライバシーの侵害になるのではないか。」という答えを書いている方もいた。もちろん、地域の人とあまり親しくない方や他人に自分のことを話すのはちょっと...と考える人の中にはプライバシーの侵害と考える方もいるだろうと思う。いろんな考え方の人がいる中で全員が上手く一致して納得出来るプランを考えていきたい。この学科で学んだことを生かして自分のやりたいことや進みたい道へと繋げていきたいと思っている。

私の将来

私は将来幼稚園教諭になりたいと考えている。この職業に興味を抱いた主なきっかけは毎朝登校時に見かける園児の姿と幼稚園バスである。私は昔から年下の子と話したり面倒を見たりすることが大好きだ。私には2つ離れた妹が1人いる。どんなに偉そうな口調で指図をされても、自分のわがままを突き通そうと睨んできても、やっぱり妹だからということもあるのかもしれないが、妹が困っているときや猫の手も借りたいという状態のときでは自分も力を貸して面倒を見ることがしばしばある。この環境防災科で学んだことを幼稚園教諭とどう結びつけるのか。私は幼稚園教諭が出来る防災学習を考えた。

今、幼稚園では先生が園児に正しい防災を教えているのだろうか。私が幼稚園児の頃、先生から防災に関する話や防災訓練をされたことも全く記憶に無い。もし私が幼稚園教諭になればまずは園内の安全を確かめたい。万が一平日の午前中に災害が起こったら…。教室内に置いてあるタンスやピアノ、重いや軽いは関係無く近くに園児が座っていても危険ではないか。家具を置く場所を考えたりL型金属を使用して家具の固定も行えたらと思っている。それから災害が起こったときこの道を通って安全な場所へ逃げれば良いかも理解していきたい。一通りのことは自分がしっかり理解した上で同じ職場で働いている人へと自分の考えを伝えていきたい。小さな子どもは“防災”という言葉の意味もしっかり理解出来ない子がほとんどだと思う。ただ先生が園児の前に立って話をするのではなく、災害を防ぐことの大切さや12年前に起きた阪神・淡路大震災のこと、当時幼稚園児だった自分が経験した災害体験を紙芝居にして自分より下の世代に伝えていきたい。また、私が通っていた幼稚園では月ごとにその月に誕生日を迎える園児とその親がお遊戯室に集まり、ご飯を食べながら先生方が人形劇をしてくれるという行事があった。この行事は1人1年に1回なので2年保育だった私は2回しか経験出来なかったけど凄く印象に残っている。自分の楽しかった思い出を利用して子どもたちに伝えていくのも良いと思う。

防災をしっかり学んでよく理解出来ている親御さんがどれほどいるだろうか。親から子へ正しい防災を伝えられない家庭があるのなら、この3年間しっかり学んだことをまだ柔らかい頭を持った園児へと親の代わりになって伝えていきたい。小さな子どもだって家族の中では立派な一員なのだから、もしものことがあったとき自分が家族を引っ張り、的確な行動を取れる人材になれるよう園児を養う手助けをしたい。

一瞬考えるだけでは、幼稚園教諭と防災がどう繋がるの？と疑問に思う方も多いと思うけれど、じっくり考えれば幼稚園教諭と防災はすぐ手の届く範囲にあるはずだ。幼稚園教諭にしか出来ない防災が沢山あると思う。また、自分の命を守るだけでなく、幼稚園というものはその地域との絆がとても強いと思っている。コミュニケーションの必要性や地域での助け合いの大切さがよく分かる立場の職業ではないだろうか。自助だけではなく共助の大切さもよく理解出来る。大きくなってから初めて防災を学ぶより小さい頃に教育として学んでいれば今後にも役立つだろうし、知識もすぐ吸収出来ると思う。

私が大人になって子どもができたなら頻繁にこのような話を話題に出したい。子どもが暇にならないように面白おかしく雑談として防災を話に取り入れたい。幼稚園教諭という職業は防災のこと、阪神・淡

路大震災のこと、今までに起こった災害のこと、そして災害に対する取り組みを次世代に語り継いでいける最高の職業だと思っている。私が持っている知識だけでは不十分すぎて、語り継いでいくためにはまだまだ学習も経験も足りないことだらけだけど、この高校生活を通して今まで学んできたことを復習し卒業してからもその時やらなければならぬことをしっかり進めていきつつ、防災に対して自分の知識も深めていきたいと考えている。

これからの自分

この「語り継ぐ」を機会に私は震災当時のことをいろいろ思い出すことが出来た。覚えていないことは親から聞いて学ぶことも多かったと思う。12年前の私は地震というものを経験するのも初めてで、大人に頼って自分1人では考えて行動することも出来なかったけど、今なら自分で考えることも出来るし大人に頼るだけではなく状況を理解して自分1人で行動することも難しいことではないだろうと感じる。この学科に入るまで防災というものに関しては右も左も分らない状態だった。この3年間防災に関して様々な体験をさせて頂いたり講義を聞かせて頂いたりしたことで“防災”という存在が自分自身の中で大きくなっていくように感じられる。「環境防災科と私」の項にも書いたが私の地域には自治会が無い。今の私では地域の方々の意見をまとめるにも地域の安全を考えるにもまだまだ知識が不十分だと思う。だからこれからは自分がもっと災害や防災、災害による被害のことを知っていきたい。

私たちの世代は震災を知る最後の世代だと言われている。地震の存在を知り、その当時は何も分らなかったことが今では毎日の勉強を積み重ねることで学ぶことも多くなってきた。今年の1月17日5時46分、私は三宮の東遊園地にいた。阪神・淡路大震災で命を落とされた6434名の追悼式に参加させて頂いたのである。地下へ降りると壁に亡くなった方の名前が彫られていた。震災で亡くなられた方は本当に苦しただろうし痛ただろうし何より生きたかったと思う。地震の怖さや恐ろしさ、震災を知らない他方の人や次世代に伝えたくても伝えられない。震災で怖い思いをしてその思いを人に伝えられない分、代わりになって伝えていかなければならないのは今生きている私たちなのではないだろうか。無残に残されたまちの風景も綺麗に片付き、現代の人の心から阪神・淡路大震災の記憶も消えつつあるかもしれない。けれど震災を体験し苦しい思いをした人、家族や友人を亡くした人、家や財産を失って避難所で生活した人など、自分の中で震災が大きく存在している人にとって12年前のあの地震とは切っても切れない関係なのだ。震災を経験していない子供たちや他方の住民の人々に命の大切さ、人と助け合うことの重要性を伝えていくこと、これが阪神・淡路大震災から学べたことだ。

今後大きな災害が起こったとき同じ被害を繰り返さないように、そのときの状況を把握し家族や地域の人々を引っ張っていけるような災害に強い人間になりたい。この「語り継ぐ」を読んで震災のことを多くの人に知ってもらい、災害を防ぐために今自分の出来ることを考える人が増えれば良いと思う。

私と地震と神戸。

尼崎市武庫之荘
住友 香織

私のお墓の前には立たなくてもいいのですよ。
涙を流さなくてもいいのです。
私はそこにはいないから、
そこに眠ってなんかいないから。

私は、大地の上を流れる千の風です。
私は、きらめく雪のダイヤモンドの輝きです。
私は、たわわに実る穀物の上に降り注ぐ太陽です。
私は、穏やかな秋の風です。

あなたが朝の静けさのなかで目覚めたとき、
私は、勢いよく飛び出して行きます。
大空をゆうゆうと飛びまわろうと高く舞い上がる鳥のように...。
私は、夜空を彩る星のやわらかい光です。

私のお墓の前には立たなくてもいいのですよ。
泣かなくてもいいのです。
私はそこにはいないから。
私は死んでなんかいないから。

これは 18 歳の誕生日に友達からもらった「千の風 神戸から」という本のなかに書いてある詩である。

この詩を初めて読んだとき、心の中にすーっとさわやかな風が吹いたように感じた。だいぶ記憶が曖昧になりかけている今、もう一度 12 年前のことを思い出した。出来ることなら思い出したくないと思っている部分もある。しかしあの時間は確かにあった。自分がどう逃げようが避けようがあの時間があったことはまぎれもない事実である。同じ時間なら忘れて風化させるより、前を向いてこれからの震災を知らない世代に伝えていこうと思う。この詩のように人の心に風を吹かしたいと思った。伝えることが今の私たちに出来ることだと信じて。

私は当時 5 歳で幼稚園の年中だった。家の近所の家族で運営している小さいがとっても暖かい幼稚園に通っていた。今のように進路に悩まされることはなく毎日大好きな幼稚園に行き、友達や、先生と大好きだったお絵かきをしていたことを覚えている。その時、その時が楽しければよかったのだ。5 歳児の記憶などやはり限界があり、幼稚園で友達と遊んでいることと、家族で過ごした時間と、震災のことほどしか覚えていない。それぐらい当時は幼くそれほど時間が経ったのかと思われる。

その大好きだった幼稚園から歩いて 10 分ほどのマンションに父、母、兄、弟の家族 5 人で暮らしていた。決して大きいとは言えないが、まだ幼い子供 3 人のいる家族 5 人で暮らすにはちょうどいいぐらいの家だった。父は大阪の会社に。兄は小学校に。母はまだ幼い私と弟の育児に追われるいつもと同じ毎日が過ぎて行った。

16 日の夜私は父と一緒に寝ていた。そのころ私は大の父親好きでいつも「お父さん、お父さん」と言っただけで父の背中にくっついていて記憶がある。その日もいつものように父の隣で深い眠りについていてふと目を覚ました。隣の父はまだ寝ている。辺りを見回しても真っ暗だった。部屋には朝日が出るのを待っている目覚まし時計がゆっくりと、でも確かに時を刻んでいる音だけが静かな部屋に響いていた。私はもう一度夢の中に戻ろうとまぶたを閉じた。その時部屋がゆれた。カタカタカタと部屋中が小さく動いた。当時の私は地震などという言葉ももちろん知らなく、マンションの上の階で人が暴れているのだと思った。それが初期微動というものだと知るのはいくら経たずとも数年後だということはいくら経たずともない。今思えばまだ日も昇っていない早朝から上の階の人が暴れるなどありえないことだ。しかし 5 歳の私はそれ以外が思いつかなかったのだ。「うるさいなあ」などと眠りを妨げられたことに少しイライラしながら私は寝返りを打ち、今度こそとまぶたを閉じた。明日はどんな事をして遊ぼうかなどと考えながら

…しかし又もや私の睡眠は何者かによって邪魔をされた。しかし今度の邪魔者はさっきとは何かが違う。ゴゴゴゴという地面がうなっているような音が聞こえた。なんの音が考える余裕もなく私の布団が下からドーンと突き上げられた。いや、私の布団だけではない。隣の父も部屋に置いてあった本棚も部屋のもの全てが動いた。「危ない！」と隣で寝ていた父に布団をかぶせられた。何が起こったのかわからず考える余裕すら無くなっていた。私は何が起こったのか全く分からず今まで体験したことの無い揺れにただただ戸惑い目をぎゅっと閉じ、揺れがおさまるのを待つしかなかった。聞こえるのはガラスが割れる音と物が落ちる音だけだった。とても長い時間を感じられた。揺れが止まり怖いぐらい静まり返っている。恐る恐る布団から頭を出すと部屋中の物という物がすべて倒れていた。幼いながら何か大変なことが起こったのだと理解した。父の上には本棚が倒れており私の上にはたくさんの本が落ちていた。父がそれを除けてくれた。「みんな大丈夫か？」父の声に母が答える「大丈夫！」その声を聞き私は父に抱えられ隣の母が寝ている部屋に移動した。

直後は電気がつかず、慌てて父が懐中電灯を引き出しから引っ張りだそうとした。しかし、その懐中電灯やろうそくが入っている棚は倒れ、引き出しごと飛んでいってしまい、懐中電灯を探し出すことが出来なかった。

暗くて周りが見えなかったが、母の布団の周りはガラスの破片がたくさん飛び散っていた。子供達が歩き回って怪我をしないかととても心配したと母から聞いたのはここ最近だった。

何とかろうそくを探し出し、火をつけた。その時、父は割れた食器の破片が何かで手を切ったらしく血が出ていた。こんな状況の中で救急箱など探しに行けるはずもなくティッシュで血を止めていたことを覚えている。いつもは休日どこに連れて行ってくれるわけでもなく家でゴロゴロしてお世辞にも素敵なお父さんとはいえない父だが、このときばかりはいつもより父が大きく見えた。よく「父の背中は大きい」という言葉を聞くが、ほんとうにその言葉通りだった。

前日にお菓子を沢山箱の中に詰めて置いていた。その箱がたまたま母の枕元に飛んできて、動き回る子供たちにその箱の中のお菓子を食べさせて、動かないようにと母が言った。その箱の中にお菓子が入っていたことも偶然だし、枕もとに飛んできたのも偶然だった。その偶然のおかげで子供達がウロウロしなくて、誰も怪我をしなくて済んだという。いつもは部屋の端に置いてある机がたまたま真ん中にあったこと、前日にスリッパを枕もとにおいていたこと。偶然が重なりあって今の幸せな生活に繋がっていると母が言っていた。

それからすぐ、今度は玄関の扉をたたく音が聞こえてきた。「大丈夫ですか？怪我はありませんか？」すぐ外に出ることのできたマンションの人だろう。大声で一軒一軒回っているようだった。父が「大丈夫です。」というとその人は「わかりました。」と行って隣の家に行ったようだった。声をかけてくれた人は未だに誰かわからない。

母の布団に兄弟3人で入り母のぬくもりに安心したのか私はまた眠りについてしまった。早く朝が来るのを待っていた。

どれくらい経ったのだろうか。辺りも明るくなり私は目を覚ました。しかし目に映るのは物が倒れ食器は砕け、多くのものが壊れた、見たことのない我が家の風景だった。やっぱり先ほどの出来事は夢じゃなかったのだ…。胸のどこかでは全部夢だったのだ、悪夢を見ていたのだ。と思いたかったのだろう。しかし目の前の現実には5歳の私には衝撃的過ぎた。ふと母の姿を探すが母がいない。父も兄の姿もない。隣には2歳の弟がすやすやと寝ているだけ。弟は先ほどの揺れでタンスの上に置いてあった大きいプラスチックの衣装ケースが体の上に落ちてきた。しかしあんなに激しい揺れと飛び交う食器類の爆音にも関わらず、眠り続けていた。さすがだ。

私と弟以外はみんな片付けに追われていた。隣で寝ている弟を置いてみんなのもとへ駆け寄った。家具を一切止めていなかったのが食器棚から、本棚、テレビまで全てが倒れていた。一番ひどかったのは食器棚だった。かろうじて冷蔵庫にもたれかかって倒れはしなかったが中身は全部床に落ちて粉々になっていた。大切な記念のお皿や、めったに使わない高級なお皿も全て壊れてしまい、残ったのはプラスチック製の子供用の食器だけだった。

前日の残りのカレーとぜんざいが入った鍋をコンロのところに置いていた。鍋ごと床に落ちて割れた食器の上にカレーとぜんざいがこぼれていた。

祖母は昔から、次の日起きたら断水で水が出ないことがあるかもしれないから、寝る前にやかん1杯の水を入れておいておけと言っており、震災の前日の夜もやかんに水を入れておいたが、ひっくり返ってしまい逆に片付けが大変だった。

家具も止めてなくて、たんずの上にも荷物を沢山おいていた。何かあったら倒れると思っていたが、まさか神戸に地震が来ると思っていなかった。

危ないから向こうの部屋で弟を見といてと言われて仕方なくテレビをつけた。当時住んでいたマン

ションは水道とガスはまだ止まったままだったが、電気は17日の朝に復旧した。ほかのマンションは停電したままだったが、なぜかうちのマンションだけ電気が戻っていた。テレビがついたので情報も割りりと早く入手できた。

テレビをつけ、昨日の夜から今朝までのことを思い返した。今までに味わったことのない揺れと片付けに没頭する家族の様子を見て、夢でないのだ、これが現実なのだと思知らされた。

そういえば玄関に置いていた魚の入った水槽はどうなったのかという話が出て早速兄と玄関に走った。見ると靴と傘が散乱している間に何か動いている。「あっ！生きている。」顔を見合わせて喜んだ。まだ息があり玄関のタイルの上で跳ねまわっている。急いで風呂場から洗面器にわずかに残っていたお風呂の残り水を汲んで魚を洗面器の中に入れてやった。するとみるみる活気を取り戻し元気に泳ぎだした。しかし水槽は割れてしまい、いつまでもこんな狭い洗面器の中に入れておく訳にはいかず、裸足で兄とマンションの近くに流れている川に逃がしに行った。「ごめんね。ばいばい。」と魚に最後の別れを告げ川に逃がした。

困ったのは食事だ。いくらこんな非常事態といってもお腹は減る。こんな時ぐらいお腹も減らない仕組みだったらいいのになどと言っても仕方がない。水道はまだ復旧しておらず、子供用のプラスチックのお皿にラップをして使っていた。

お昼ごろになった。父と兄が近くのコンビニまで御飯を買いに行った。店にはほとんど品物は残っておらず、あるものを買って来ていた。

昼ごろになり、外に出てみたら近くのマンションの2階部分がつぶれていたのに驚いた。

幸いマンションだったため屋上に給水タンクというものが設置されており、マンションの住民みんなで分けて飲み水はそれを使っていた。

電話はまだ通じなかった。近くに住んでいた祖父母が心配して様子を見に来てくれた。祖父母の家はたいした被害は無かったらしい。祖父母の家の庭にある水道が2、3日で出たので水を分けてもらった。

阪急電車が梅田から西宮北口までは動いていると聞いて父は仕事へ行った。地震があったのに仕事があるのかと聞くと大阪は大した被害はないからあるのだと言って出て行ってしまった。こんな大変な時に何が仕事だと思ったが父も必死だったのだと思う。残った母は家の片付けと3人の子供の世話をしなくてはならぬ相当大変だったのだと思う。

私の住んでいた武庫之荘ではあまり食料が買えなかったため、父がリュックを背負って大阪までお米を買いに行った。

何日か経ってから、西宮あたりは被害がすごいと聞いたのでみんなで様子を見に行くことにした。武庫川より東はあまり被害がなかったが、武庫川を越えた西に行くと、多くの家の屋根が地面にあった。

梅田まで行くとみんな綺麗な服を着て、ハイヒールを履いて今までとなら変わらない普通の生活をしていた。ちょっとしか離れていない神戸は、こんなにも大変なことになっているのに、この差にショックを受けたと言っていた。

私の通っていた幼稚園は尼崎市で唯一全壊した幼稚園だった。だから、とても長いこと幼稚園が始まらなかった。2つある園舎の1つが全壊したので残りのもう1つの建物の保育室を真ん中で区切って2クラスで使っていた。トイレも壊れ、初めて仮設トイレというものを使った。

兄の小学校はすぐ再開されたが、しばらくの間は給食が水や火を使わないで作る簡易給食だった。

母は実家の神戸に住んでいる祖母を心配して様子を見に行った。垂水もそんなに被害はなく祖母の家も瓦が数枚落ちて割れていたり、仏壇が倒れたぐらいで済んだという。

祖母は一人暮らしをしており、ちょうど震災の前の年に曾祖母が亡くなった。曾祖母は寝たきりであった。もし震災の時に曾祖母が生きていたらどうなっていたのだろうと祖母と話をしたことがある。「地震が来るのがわかっていたから神様が迎えに来たんやろうね。」と祖母は言っていた。なんだかすこし寂しい気持ちになった。

震災の年の4月に曾祖母の法事を垂水の実家で行うことになった。電車を乗り継ぎ、途中歩いたりして垂水まで行ったが帰りはJRが復旧していて、垂水から尼崎の近くまで通っていた。今まで当たり前に使っていた電車がどれだけ便利なものが改めて思い知らされたという。

住んでいた尼崎のマンションは見た目はひびが入っているぐらいだったが、詳しく調べてみると傾いていることがわかった。傾いているし、大きい車がマンションの前を通るとマンションが揺れるようになっていた。それがきっかけとなって次の年、垂水に祖母が1人で住んでいるので、そっちに引っ越す

ことになった。

あの阪神・淡路大震災から家族で防災を意識し始めた。引き出しの中に懐中電灯を大事にしまっ
ても、引き出しごと飛んでいってしまったら意味がないので、今は枕元に懐中電灯を置き、足元にはス
リッパを揃えるようにしている。携帯電話にも笛をつけるようにしている。

もう一つわかったことは、食器など数多くあればいいというものではないということだ。少ない数で
どう大事に使うかが大切だと考えるようになった。

今では、家の裏にある倉庫に水とか、保存がきく食料や生活に必要なお鍋、食器、トイレトペーパー
などの生活必需品や、災害時あればよさそうなラジオや笛などを備えるようになった。もし家が全壊に
なっても家の裏にある倉庫からなら取り出しやすいだろうという理由から置くようにしている。毎年1
月17日が近くなると、食料品を新しいものと変えている。

ボランティアや福祉に力を入れているというのもあったが、やっぱり阪神・淡路大震災の経験が私が
高校をこの環境防災科に決めた大きな理由の1つにある。人間は一生のうちに大きな自然災害にあうこ
とは多くない。珍しいことだと思う。それを経験した私たちだからこそ、伝えなくてはいけない事があ
る。途切らしてはいけない風化させてはいけないのだ。

1月17日。神戸の人間なら誰もが知っている日だろう。1月17日が近づくと神戸はどこか町の色を
変える。

今までなんとなく過ごしていた1月17日だったが高校に入ってから1月17日は今まで以上に大切な
日になった。

きっかけは三宮の東遊園地で行われている追悼式のボランティアに参加したこと。追悼式の存在はテ
レビや新聞でももちろん知っていたが高校になって初めて参加しようと思った。

竹の中にろうそくをいれて暗闇の中浮かび上がる1.17に灯りをともす。時を告げる時報が響き渡り
手を合わせる。柔らかい灯を見つめ心に誓う。空を見上げ朝の光を待つ。こうしてまた時が流れている
のだと感じさせられる。

毎年1月17日は決まって雨が降るのだという。去年も今年も雨が降っていた。この雨は被災者の涙
だと聞いたことがある。

東遊園地に行くと必ず、亡くなった方の名前が刻まれている慰霊と復興のモニュメントに足を運ぶ。
モニュメントの中は静かで尊くて、でもどこか儚くて、そこだけ時間が止まっているように感じさせら
れる。1つ1つ丁寧に名前を心の中で呟いて1人1人の存在を確かめる。そして静かに手を合わせ生か
された意味を問う。

あの震災で一瞬にして多くの方が亡くなった。私は今まで表面上の数値ばかり見て、震災を知った気
でいた。でもそれは違ったのである。6434人が亡くなった阪神・淡路大震災ではなく、1人の人が亡く
なった6434通りの阪神・淡路大震災なのだ。

当たり前のように朝が来て、食事ができ、友達と笑いあえる。そして当たり前のように次の朝日を待
つ。でもそれは当たり前のように当たり前ではないのだと気づかされる。当たり前のことにもっと感謝
の心を持たなければいけない。自分につながる全ての人に感謝しなくてはいけない。もっとこの町、神
戸を好きになろう。復興という名の旅は終わることはないだろう。私はずっとこの大好きな神戸で生き
ていきたい。

そう思いながら私は今日も一生懸命生きる。

一瞬

神戸市垂水区西舞子
高峰 里佳

緩やかな川の流れが、時間の流れを感じさせる。築6年の4階建ての小さな建物。当時は、西舞子の山田川沿いのマンションに住んでいた。父に母、兄に私、そして妹の5人暮らし。まだ新築であったが、地震に対する備えは特にしておらず、していることと言えば通路に消火栓が備え付けてあるぐらいだった。このマンションは1階部分が駐車場になっており、地震に弱いピロティ方式になっていた。今考えると、震災当時もし、あのマンションで火災が発生していたら誰か消火器を使うことができていたのだろうか。備え付けられている消火器は、その役割を果たすことができたのだろうか。使用期限は大丈夫だったのだろうか。さまざまな疑問が生まれる。

何気ない会話の中での晩ご飯。今日1日の出来事を話しながらの楽しいひと時。父も、母も、兄も、妹もみんな笑っている。1日を一緒に過ごす家族にとっては大事な時間。どこの家庭でもおこなわれているやりとり。テレビを見ながらするしょうもない会話。当時は父や兄、妹とお風呂へ入っていた。温かいお風呂の中で騒ぎ、幼稚園で習ってきた歌を披露する。お風呂からあがると、母が用意してくれている冷たい飲み物を飲むのが日課だった。歯磨きをすませ、明日も幼稚園があるからと言って眠りについた16日の夜。いつもと変わらない布団で、いつもと同じように眠りについた。いつもと同じはずなのに、まさかこんなことが起こるなんて…。

大きな揺れと母の声で目が覚めた。私の布団は一番壁より。5歳になる私と6歳の兄は1つの布団にのせられて、これ以上は行けないというぐらいまで壁側に寄せられていた。そして母の手にはもうすぐ1歳になる妹が抱かれていた。いつもとは違う母の必死な雰囲気は今でも覚えている。父は家族みんなを守るために端から手を伸ばし、抱え込んでいたような状態だった。私とは、一番離れた一番危ない場所にいた。幼稚園児の私は、一度目を覚ましたもののなぜ、こんな状況になっているのかわからないまま再び眠りについた。地震発生時刻は5時46分。

家の中が少し落ち着いたぐらいの時間に私は目を覚ました。私にとっては2度目の朝。目を覚ますと、家の中が怪物にでも荒らされたようにぐちゃぐちゃになっていた。それはまるで、アニメの中の世界だった。現実ではありえないような現状が目の前に広がっていた。兄の寝ていた頭の真上にはテレビが落ちてきていた。そのテレビは落下時に食器棚にぶつかったのであろう、食器棚に大きな穴をあけた。開けられた大きな穴は、まるで震災を忘れてはいけないと言っているようだった。父と母の足の上にもテレビが載っていた。もしこの震災が冬に起こっていなければ、父の足も母の足も確実に折れていたであろう。父と母は布団の分厚さに助けられたのだ。ほんの少しの違いが、命を救うか落とすか大きな問題になっている。今、生きている私たち家族は偶然助かった。人じゃなく、ものによって命を救われた。たとえ相手がものであると、何かによって生かされたことに変わりはないのだと思う。

助かったことに対する喜びよりも「なんでゆれたの？」という疑問の方が強かった。地震で人が亡くなるということも、当時は理解できなかった。この震災は、人が亡くなるほどの大きな揺れだったことは後から知った。

震災が起きたその日、父は祖父母の安否を確認するために家を出た。待っている時の母の心境は私には想像がつかない。きっとどんなに暗い夜道を1人で歩くよりも心細かっただろうと思う。また、1人で祖父母の安否を確認しに行った父も同じ気持ちだったのではないかと思う。祖父母が100%無事であるとは言い切れない状況の中、悪い考えが全く浮かばなかったわけではないと思う。「大丈夫」いつもなら安心感を与えてくれる母のこの言葉も、この日ばかりは少し違った。「大丈夫」、言葉ではそう言ってる母から何か違う空気を感じていたのかもしれない。結果的には母の言葉通り、祖父母はみんな無事だった。大好きな祖父母が全員無事で、本当に嬉しかった。

この日のご飯はインスタント。買い置きしていたインスタントのご飯をレンジで温め、ラーメンやうどんにはお湯を入れて食べた。震災による大きな揺れにも関わらず、ポットは倒れずに残っていた。お湯を使うことができたこと、電子レンジが壊れていなくてご飯を温めることができたこと。あの時は何気なく食べていたが、今考えるとあの日、ご飯が普通に食べられていたことが本当に幸せなことだったのだと思った。幼かった妹のご飯はミルク。ミルクを飲むためには、ミルクを作るための水が必要だった。私の家には、そのための水が少なかった。困っていた我が家に水をくれたのは近所に住む人だった。

そんなに親しくもなく、普段から深い付き合いをしてきたわけではない近隣の人。同じマンションに住んでいて、ただあいさつを交わすぐらいの関係。当時の妹には一番必要だった水。あの日あの時の妹にとっては、命だったろう。母はこの話を12年たった今でもしてくれる。これは母が一生忘れることのない出来事である。また、当時は幼くて何も知らなかった妹も、震災から12年たった今聞いてみて忘れられない話として記憶されているだろうと思う。電気やガス、幸い私の家のライフラインはすぐに復旧した。一番復旧が遅かったのは水道。お風呂は祖母の家まで行って入っていた。

慣れない環境の中、テレビではなくラジオでの生活。色のない世界。ラジオから聞こえてくる声。ラジオから聞こえてきたニュースについてはあまり覚えていないが、テレビが映った時のことは覚えている。テレビに映っていた光景は私の知っている神戸の姿ではなかった。ネオン輝くどんなきれいな街より、ごみ溜めにされたどんな汚れた街よりもインパクトのある光景。この先も忘れることはないと思う。規模は違うけれど、家の中でも家の外でも同じようなことが起こっていたのだ。一瞬にして街をぐちゃぐちゃにした大きな怪獣は、約6400人ももの尊い命を奪っていった。

震災で一番困ったことはトイレ。いつもはレバーを引けば勝手に流れるはずの水が流れてこない。トイレが終わるたびに父か母を呼び、水を流してもらった。いちいち父や母に声をかけるのが嫌で、極力トイレは我慢した。流すための水は、お風呂のはり湯を利用した。

1日何をしたわけでもなく、ただただ布団の上で過ごした。寝ていた部屋が一番安全だからと言って、部屋から出してもらえなかったことを覚えている。閉められた扉を少し開けて、父や母の状況を兄と一緒にのぞいたりもした。落ちてきた食器を片付ける父と母。父は落ちて割れた食器で足を切っていた。父の足からは血が流れていた。小さな傷だったけれど、とても痛そうに見えた。私がこの震災で実際に見た血は、父のこの怪我だけである。周りに大怪我をした人がいなかったことは、こんなに大きな震災にも関わらず幸せなことだと思う。この日ほかにしたことと言えば、幼かった妹の面倒を見たこと。面倒を見たというよりは、寝ている幼い妹のそばで座っていただけだった。私にできたことはきっとこれぐらいだったのだと思う。それでも幼い妹を1人にしておくことなんてできない状況では、少しは力になれていたのではないかと思う。

17日の夜は、また地震があると危ないからと言ってみんなで固まって寝た。寒い季節のはずなのに、みんなくっついて寝て温かった。一度揺れを体験していたから怖さがまったくなかったわけではない。テレビに映った状況だって見ていたし、いつ自分たちがその状況になってもおかしくはなかった。怖さはあったけど、睡魔には勝てない。不安感を持ったまま眠りについた17日の夜だった。

18日。本来ならあるはずの幼稚園もこの日は休みだった。子どもにとって急な休みほど嬉しいものはないが、この日の休みは全く嬉しくなっていなかった。近所に住んでいる友達はおらず、生きていたのか死んでしまったのか全くわからなかった。外に出て走り回る元気はあるのに、外へ出ることを許されない状況。苦痛以外の何ものでもなかった。いつもより少し早く目が覚めたこの日は、北舞子に住む祖母の家、名谷に住む祖父母の家へ行った。祖父も祖母も、私たちの安否を気にしてくれていた。大丈夫だったと言葉で聞いても、やっぱり実際に見て「大丈夫だったのだ」と確認するのは安心感が全然違っていった。私も、祖父や祖母の元気そうな顔を見ることができて嬉しかった。この震災が起こってから見る人の顔は、家族以外では最初だった。私の家では一番復旧が遅かった水道。祖父母の家では、水がいつも通りに出ていた。家では出ていない水が、祖父母の家では何事もなかったように出ている。なにか不思議だった。家で使えるように水をタンクに入れてもらって帰った。

帰りの車の中から見える景色は、死んでしまった草木が多かった。まっすぐ伸びていた草木はほとんどなく、へにゃと曲がってしまっているものが多かった。家の前の川に生える草は水に押しつぶされていた。一昨日までは仲が良かった草と水は、まるで喧嘩をしてしまったみたいだった。川を流れる水の色は薄いコーヒーみたいで、悲しみや怒り、疲れを感じさせる色だった。ヒビの入った道路が震災の被害の大きさを表していた。

家に帰るとまた昨日と同じ生活が待っていた。昨日と同じと言っても、家の中だけならうろろしてもいいと言われた。昨日あんなに散らかっていた家の中は、もうほとんど片付いていた。父と兄と一緒に食器棚の穴の修復作業を行った。とりあえず危なくないようにガムテープで穴をふさいだ。見た目は汚かったけど穴は見えなくなった。それが終わると、兄と2人おもちゃをひっぱり出してきて遊んでいた。父と母は2人でお墓が無事かどうかの確認へ出かけて行った。父と母の口から話された墓園の状況はひどいものだった。父の実家の西神墓園は新しかったために被害はなかった。しかし、母の実家の舞子墓園は、ほとんどすべてのお墓が倒れていたと聞いた。住んでいる家の周りでは被害がそんなに目に付かなかったが、墓園だけは違っていたようだ。テレビで見ている光景を目の当たりにした。家からすぐ離れていたわけではない墓園が、本当に悲惨な状況になっていた。倒れて、お墓の中から骨壺が見

えているところもあったと言う。

テレビには昨日よりもひどいまちの姿が映っていた。時々鳴る「ピピピ、ピピピ」というニュース速報は、余震を知らせていた。大雨洪水警報以外でこの「ピピピ」という音を聞くのは初めてだった。変な感じもした。今までは、ニュース速報で「兵庫県」という字を見ることはほとんどなかったけれど、この日は「またか…」そう思ってしまうほどに、見る字、見る字が兵庫県だった。自分の大好きなまちがつぶれ続けていた。

3週間ぐらい経ってから家族5人と母の方の祖父母と、東須磨に住む母の叔母の家を訪ねた。叔母の家は、震災から3週間経っていても被災直後のような状況が続いていた。叔母の家は道路からぐっと後ろにずれ、隣の家は道路側に突き出し道がふさがれていた。向かいの家の2階が落ち、叔母の家の玄関はふさがれている状態だった。それを見たとき、母は、「自分の住んでいるところと少ししか変わらない場所なのに被害にはこんなにも違いが出るのか」と驚いたと話している。ちょっとした違いが大きな被害を生むこともあるのだと言うことを実感したようだ。

阪神・淡路大震災のことを思い出しながら書くこの作文。12年前の話。自分がどんな状況でどういう風な生活をしていたのかは、体験した人にしかわからない。12年たった今では、この震災を体験していない人は、阪神・淡路大震災という震災があったことすら忘れてしまっているのではないかと思う。こんな大きな震災にも関わらず、忘れられている。これは本当に悲しいことだと思う。大きな震災だから忘れない、小さかったから忘れてしまうというのはおかしな話。震災の被害にあった人からすると、小さいも大きいもないのだから…。震災の規模に関わらず、重みは一緒。阪神・淡路大震災という1つの災害が起こったことを、決して忘れてはいけない。忘れないために語り継ぎ続けなければならないと思っている。

私の家族は震災時を振り返り、本当に一瞬の出来事だったと話している。父は、当たり前前のが当たり前前にできなくなるときが一瞬で来るのだと言うことを知ったと話している。今何気なくできていることが、どんなにすばらしいことなのかを、あの阪神・淡路大震災から学んだと言う。母は、震災でたくさんの方が命を落とし、「明日が急になくなってしまうものなのだ」と言うことを感じた話す。「今日できることは、今日しよう。明日があるからと言って、物事を先伸ばしにすることはしないようにしましょう」。これは震災から母が守り続けていることだと話してくれた。確かに、「今日できることは、今しかない」と母は幼いときから私たちに言っていた。母がどんな思いでこの言葉をかけていたのか、12年経った今知ることができた。兄は、震災時のトイレ体験が印象的だったことを話している。兄は震災を境に、少しの間1人でトイレに行くことができなくなっていた。揺れに対する恐怖から、1人で行動することが怖くなっていたのである。そして、当時まだ1歳に満たなかった妹は震災のことは覚えていない。それでもみんなからの話を聞くなかで、震災とはどういうものなのかということを学んでいる。

「震災は体験でしか語れない」、私はこの言葉をよく聞く。実際に体験した人でなければ分からないこと。どんな気持ちで1日を過ごしたのか。どんな考えを持って行動していたのか。あの日、あの震災で何を感じたのか…。1人1人感じ方は違う。思ったことも違う。体験した内容も違う。震災が語る内容は、震災を経験した人の分だけある。

阪神・淡路大震災から学んだことは本当に多い。「命の大切さを学んだ」。これは震災を体験した人の多くが口にする言葉。もちろん私も阪神・淡路大震災から、命の大切さを学んだなかの1人である。でも、命の大切さは震災前から教えてもらっていたような気がする。私がこの震災から学んだほかのこと。それは人間の弱さであり、強さだと思う。最愛の人をなくし悲しみにくれる人。財産をなくし落ち込む人。いくら悲しんでも、いくら落ち込んででも還ってはこない。予想外に起こったことでなんの対応もできなかった人もいる。それでも今はみんな前を向いて歩いている。12年経った今実感する人の強さである。今、私の住む神戸のまちはきれいである。高速道路は元通りにつながり、倒壊家屋やビルがあった場所には新しい建物ができている。堂々と並ぶその建造物は、人が震災に負けず作り上げたまちであり、これからも作り続けるであろうまちである。これは人間が震災と向き合った証だと思う。今も復旧・復興は続けられている。どんなに時間がかかっても、私たちはこの震災を乗り越えていく必要がある。と同時に、この震災から学んだことを次に伝えていかなければならないのである。阪神・淡路大震災ではうまくいかなかったことを、次起こる災害に対して備え、対策を立てておかなければならないのである。

高校生になった私は環境防災科へ入学した。環境防災科では、様々な災害についてふれた。日本で起

こった災害以外にも、海外で発生した災害についても学んだ。メカニズムについても学習した。阪神・淡路大震災については、私の体験した角度とはまた違った角度から知った。国や行政が行った対応、地域住民が行った対応。その他、県外の対応や海外の対応。まったく知らなかったことを知ることができた。「いのち」について災害や防災の面から学び、自分の将来の夢への思いが強くなった。

私は将来、看護師になりたいと思っている。私が看護師になりたいと思ったきっかけは阪神・淡路大震災ではないが、この震災を体験することで人の命についてより考えるようになった。阪神・淡路大震災では、病院は野戦病院となり、怪我をした人に十分な対応をすることができなかった。被災した人が多すぎたため、怪我の程度にあった対応ができなかったことは事実である。震災が発生した時、他府県と連携できる環境を持っておくことは大切なことだと感じた。被災した地域自体での対応だけでは困ることもたくさんある。阪神・淡路大震災の体験から、病院と看護師、災害について考えてみた。看護師が普段勤務している病院は、いざという時のために防災対策を立てておかななくてはいけない場所である。看護師には、療養中の患者の世話をするという仕事がある。病気を治すために入院している患者にとっては、いつ起こるかかわからない災害ほど怖いものはないのではないかと思う。怪我や手術後で体を自由に動かすことのできない患者にとって、病院は絶対に安全であると言い切れる場所でなければならない。いつ壊れてしまうかわからない病院では、落ち着いて療養することなどできないはずである。災害が起こる前に病院がしておくべき防災には、ハードの面での耐震性や免震性、ソフトな面での防災訓練などがある。阪神・淡路大震災当時では、耐震工事が行き届いておらず倒壊した病院もあった。医師や看護師は命を救うべき仕事であるからこそ、働く場所となる病院は命を守ってくれる場所であればならない。災害が起きたときの一般的な知識から、消火器の使い方や非常口の場所を載せておくといったこともしておくことが必要なのではないか。阪神・淡路大震災当時はわからなかった対策も、震災の教訓から今ならわかる。普段から防災訓練を行い、実践的に消火器の使い方を学んだり、実際に自分の目で非常口の場所を確認しておく。震災当時はこうした活動は行われていなかった。震災での教訓を得て、こういった対策を事前に行うことにより、頭で考えなくても体が自然に動くようになるのだと思う。時には、自衛隊や消防と共に防災訓練を行い、より実践的な訓練を積んでおくことも必要であると思う。この震災では、被災した人の処置を行うための医療器具や薬品が足りなかったことにも問題が出た。次の災害では、医療器具や薬品を守る対策を立てることもしておくべきだと思う。これらの対策を立てておくことにより、災害による2次的な被害を減らすことができるのではないかと感じた。

阪神・淡路大震災では、安全であるはずの病院が壊れ、たくさんの尊い命が失われた。繰り返しになるが、病院は強くなくてはならない場所である。阪神・淡路大震災により、このことがはっきりとわかった。震災から学んだ人のつながりの大切さも、当時の病院ではなかった。災害が起こる前に信頼関係を作り上げておくことも必要だと思う。病院内のレクリエーションを利用して、患者に消火器の使い方を教えたり、非常口の場所を教えることでつながりもできていくのではないだろうか。レクリエーションの中で、震災について話すことで患者自身、災害に対する意識も高くなっていくと思う。レクリエーションを通し、震災を身近に感じ忘れることなく伝えていくこともできると思う。

阪神・淡路大震災が12年前に出した課題に、私たちは今でも取り組み続けている。この震災が教えてくれた教訓は体験した人だけのものではない。これから先、いつ起こるかかわからない災害の対策として、この課題に取り組みたい。あの一瞬で崩れていった私たちのまち。12年間かけて取り戻してきたもの。この「語り継ぐ」を書くことにより、12年前に起こった震災と向き合えた。私は、あの未曾有の大震災から生かされた1人として語り継ぐ。

12年前はわからなかった消火器の使い方、今ならわかる。今の私にできることは、まだまだ限られているけれど、作文を書くことでまた新たな課題を発見できた。私がこれからすべきことはもうすでに用意されている。12年前の1月17日、5時46分に起こったあの一瞬の出来事。私は忘れない。教訓を語り継ぎ生かすことで、救える命が増えるのだから...

私が語り継ぐ理由

神戸市垂水区五色山
丹羽 成美

初めに、実際の私の震災体験は数日間しかない。それは、その約1か月後に母が出産予定だったため、家族で香川に住んでいる祖父母の家へ行ったからである。正直、当時幼稚園の年中だった私は、地震のことはよく覚えていない。みんな、すごい音がしたとか、激しい揺れだったとか言うけれど、まったく記憶にない。なので、父の震災体験をもとに、今から話していきたい。

1月17日

私は息苦しくなり、目が覚める。気がつけば海苔巻のように、父と母によって布団でくるりとくるまれているのだ。私は何が起こったのか全く分からなかった。もともと寝相の悪い私は、音も揺れさえも感じなかったのだ。

揺れがおさまり、私たち家族は海岸に近いところに住んでいたため、父はまず津波のことが気になり、とにかく情報が欲しかったようだ。しかし、停電のために、テレビはつかなかった。そこで、車のカーラジオを思い出し、すぐに駐車場にとめてある車のところへ行ったようだ。そのとき、隣の家の屋根がへこんでいるのが見え、その地震はただものではないということがわかった。また、近所の人を外に出て、ガス臭いから、懐中電灯もつけないように、と叫んでいたのが、エンジンはかけずにラジオだけ聞こえる状態にしたようだ。そしてそこで、震源地が淡路だということと、津波の心配はないということを知る。しかし、淡路は垂水のすぐ目の前にあるし、垂水の状況からは長田から三宮、また芦屋にかけての惨状は想像できなかったようだ。

私の家族はマンションの1階に住んでいたため、3階に住んでいた知り合いは無事かと、声をかけに行った。「大丈夫ですが、ガラスや食器が散らばって、玄関まで行けません。」という返事が返ってきた。私の住む1階では、おもちゃの棚に置いてあった植木鉢が床に落ち、散らばったくらいしか、被害はなかったのに、3階では全く違い、ひどい状況であったので、とても驚いた。

幼かった私は何が起こったのか分かっていなかったからか、なんとなく外へ出たのを覚えている。がしかし、近所のおじさんに危ないからといって、家に帰るように言われた。その時の空はまだ早朝だったからか、雨の日のように薄暗く、灰色だった。

当時、父は大阪の現場まで通勤していたので、携帯電話で「今日は行くのが遅れるかも知れない。」という電話をした。この時点ではまだ携帯電話は繋がった。しかし有線の電話は通じてなかった。大阪の現場には行けないとわかり、9時頃に父は自転車で垂水漁港にある現場事業所まで行った。途中で石垣が崩れていて、自転車をかついで通った場所もあったようだ。事業所では、テレビが映っていて、そこで横倒しになった阪神高速道路が映っていた。そして、電話での社員の安否確認が始まった。確認のとれない人が何人もいたようだ。

私の住む垂水区は実際、死者は数人であり、そんなに大きな被害は受けなかった。そのため、私の家では電気は当日中に復旧したので、テレビを見た。画面にたくさんの人の名前が流されていた。死亡の確認がとれた人の名前だった。幼稚園の先生が須磨区に住んでいたため、先生は大丈夫かと、先生の名前がないか、母と一緒に探し、なかったことにホッとしたことを覚えている。また、何も残っておらず、ただ建物のがらくたでいっぱいになり、埃や煙が舞い、まるで戦後の白黒写真かと思われるほど、灰色に染まった灘区や東灘区の映像、炎で真赤に染まった長田区の映像もそのときに流れていたことも覚えている。地震によって一瞬で街が変貌してしまったのだ。私はどこか遠いところで起こっているものだと感じていた。それほど垂水区は、被害が少なかったということだ。それでも、水やガスは電気とは違って、その日のうちに復旧しなかったため、水はマンションのタンクに溜めてあった水をマンション住民や近所の人と分け合ったようだ。

祖父母の住んでいる地域も震度4ほどの揺れが起こったようだ。起きて外を見てみたら、瀬戸大橋が大きく揺れていたようだ。自分の住んでいる地域が震源地だと思ったほどの揺れが起こった地域もあったようだが、ライフラインなどに影響は出なかったようだ。だから、祖父母は何度も私の家に電話をしてくれていたそうだが、なかなか繋がらず、とても心配したようだ。

18日

父は、自転車で垂水の自宅から兵庫区の会社へ向かったようだ。垂水駅から2号線を通り、JR山陽本線の須磨駅西で線路上に普通列車が止まっていたのを見た。また、消火活動の続く長田は、水で膨ら

んだホースが道路のあちこちを渡っているの、自転車を降りて、ホースをまたいで通過したそうだ。会社につくと、すぐに阪神高速のハーバーランド前から、元町にかけて崩れかけているのを支える工事を行った。

夕刻より、西宮神社前へ支える工事をするために向かう。大渋滞の中、パトカーを先導に会社のライトバン、支柱材料を積んだ大型トレーラー3台で現地へ向かった。

仕事にひと段落つき、再び自転車で帰宅する。

19日

朝からハーバーハイウェイの調査に自転車で向う。阪神高速の人命救助のため、倒壊した高架道路で犠牲になった人の運び出しに2名の社員が動員された。

ポートアイランドへの神戸大橋、六甲アイランドへの六甲大橋の応急復旧作業に参加をした。また、二次災害を防ぐため、壊れた高架橋を手撤去する方法の検討も行ったそうだ。

20日

渋滞で車が動けない。そこでバイクを12台用意した。走ると目にゴミが入り、痛いのでゴーグルとマスクが必要であることがわかり、準備する。

六甲大橋の復興に行くのに和田岬から船を使えるよう手配した。

父は連日、昼夜の作業となったため、会社の会議室に布団を用意して、水は大阪から200Lの大型タンクを使って運んだ。神戸の西のほう、大久保あたりは、水道ガスが復旧していたから、その方面の家の人から、おにぎりを毎日供給してもらっていた。また、大阪周辺の工事現場からは作業員に復旧工事に来てもらったそうだ。

21日

倒れそうになっているビルの上の広告灯の撤去の要請をする。また、阪神高速のとり壊しを急ぎ、国道2号線の通行確保も行った。

作業員監督の休憩用にワンボックスカーを用意した。本当はマイクロバスを用意したかったがすでに全部出てしまっていた。

作業のためのクレーン、大型重機が不足。高所作業車は1台を確保し、父がずっと乗っていたようだ。

22日

母が妊娠中だったため、母と私と妹は父の運転で香川の祖父母の家へ向かった。いつもなら2時間半から3時間くらいで着くはずが、他の人たちも早く神戸から出ようとしていたため、ものすごい渋滞で、神戸を出るだけで2時間半かかり、合計で5時間くらいかかったそうだ。

1か月後

気がつけば阪神・淡路大震災から約1か月後の2月19日、母は無事出産し、私に新しい家族ができた。もちろんのこと、その時生まれた弟は阪神・淡路大震災を体験していない。しかし、弟は母のお腹のなかで感じた阪神・淡路大震災の揺れを思い出したのか、2歳か3歳の時にほんの小さな地震が起こった時、泣き出したそうだ。地震というものは怖いというのが彼にはわかっていたのかもしれない。

神戸

1995年の12月から始まった神戸ルミナリエ。阪神・淡路大震災犠牲者の魂をなぐさめ、しずめる、鎮魂の意味を込めると共に、神戸の復興・再生への夢と希望を託し、震災の起こった年に初めて開催された。震災で大きな傷を受けた神戸のまちや、市民に希望と勇気を与えるものになったそうだ。

1998年には、被災者を中心に結成されたボランティアグループ「神戸・市民交流会」を主として、災害時避難所であった、中央区の旧吾妻小学校、現コミスタ神戸において、震災3周年を機に、「1.17のつどい」が始まった。それには、追悼のほかに、これからの神戸の復興に祈りが込められているそうだ。

私は神戸ルミナリエにも、追悼式にも行ったことがある。神戸ルミナリエは幼稚園児や小学生のころから何度も行ったことがある。初めはルミナリエの背景にこんなものがあるとは知らなかった。高校生になって初めて行った神戸ルミナリエでは、キラキラ光る輝きを見て、涙があふれそうになった。阪神・淡路大震災のことを昔以上に知って見た、神戸ルミナリエは今まで見ていたものと違って見えたからだ。亡くなった方々の分もしっかり生きなければいけないことを感じた。

高校生になり、追悼式にも参加するようになった。5時46分にみんなで竹の中でブカブカ浮いた火の前で黙とうをした。周りにいる人の目から涙がこぼれていた。6434人という、たくさんの人を苦しめた阪神・淡路大震災を私は許せなかった。しかし、私にはこうして、追悼式に参加して、黙とうをささげることしかできない。そこに参加している人たちは、もちろんのことだがみんな生き残れた人たちだ。中には、大切な人を亡くした人だって多いはずだ。生き残った人たちが生き残れたもの同士で支えあい、励ましあい、生きていければいいと思う。

(神戸ルミナリエ HP、阪神・淡路大震災 1.17 のつどい HP 参照)

平成 18、19 年 1 月 17 日

震災から 11 年目、生まれて初めて「1.17 のつどい」に参加した。黙とうをささげた後、「慰霊と復興のモニュメント」前で追悼の集いという行事が行われる。震災で辛い思いをした方が自分の思いを私たちに伝えてくれる。震災で生き残れたことへの、ありがたさや人の大切さ、支え合うことの大切さなど、たくさんのことを学んだ。

同じ年の 12 月、私は神戸ルミナリエにも行った。多くの人が見に来ていた。これはもう、神戸の文化になるだろうな、と思った。神戸ルミナリエは阪神・淡路大震災と大きな関わりがある。神戸ルミナリエが続けられるということは、震災も受け継がれているように思う。これからも、続けて欲しいと強く願う。

今年行われた 12 年目の追悼式にも参加した。どんどん他のニュースなどで阪神・淡路大震災のことは忘れてしまい、新たな事柄に人の頭の中が塗り替えていかれているこの世の中で、世代を超えてたくさんの人に阪神・淡路大震災を語り継ぎ、「命の大切さ」や「助け合いの心」を語り継いで行きたいと思った。

私は阪神・淡路大震災で命を落としてしまった人の話を聞くといつも不思議に思うことがある。どうして私は生き残れたのだろうか。生と死の境目とは、いったい何だったのであろうか。いつも考える。ただ、運がよかったのだろうか。私は阪神・淡路大震災によって家族や友達、知人を亡くされた方の話を聞くといつも、申し訳ないなあ、と思う。生きていれば私と同じ歳くらいの人や、私よりも若い人も亡くなっている。私は特別な人間でもないし、そんなに良い子でもない。もしかして、亡くなられた方の中には、ものすごい才能を持っていたかもしれない子や、私なんかよりも大分良い子だったかもしれない。それなのに私が生き残ってしまって、本当に申し訳ない。この考え方はおかしいかもしれないが、いつも私が考えることである。亡くなった方々だって、きっと死にたくて死んだ人はいないはずだ。私だって同じだ。まだ死にたくない。死にたくなくて死んでしまった人の分も私は一生懸命生きなければならない。それは子供だけでなく、大人の人へも同じ気持ちだ。その人たちが築き上げてきてくれた社会で私は生きている。感謝の気持ちを持たなければならない。そして、生き残った私たちでその社会を守り、さらにそれを土台に新たな社会を作っていく。それが生き残されたものへの使命だと考える。

家族

この「語り継ぐ」を書くにあたって初めて、父の震災体験を聞いた。父は、家族を大切にしてくれる。母も、震災時、妊娠中だったにも関わらず、父が仕事に出ている間、1人で幼い私と妹の世話をしてくれた。震災で家族がみんな無事だったことに感謝したい。私にとって家族というものは、なくてはならないものだ。何よりも大切な存在だということをも改めて実感した。

今

震災から 11 年後の春、私は舞子高校の環境防災科に入学した。私が環境防災科に入った理由は、人の役に立ちたかったから。人のために尽くしたかったから。震災を知り、それを語り継ぎたいという思いはまだこんなにも強くはなかった。むしろ、過去の災害なんか知って、何も変わらない、これからの日本にあった防災は何なのかを提議したほうがいいと思っていた。しかし、授業に幅広く多く専門家の方や行政の方が来てくれて話を聞いた。それぞれの面から見た阪神・淡路大震災を知った。個人的にも色んなボランティアやセミナーに参加して、阪神・淡路大震災で、被害が大きくなった原因や震災によってできた教訓などを学び、考えさせられた。そこで、過去の災害を知ることの大切さを実感した。過去があるから今があり、今があるから未来があるのだ。過去の教訓を生かし、生きていくことが賢い生き方だということがわかった。私は環境防災科に入って、自分のものの考え方や伝わり方などが変わったと思う。

きっと環境防災科に入っていなかったら、普段の生活では阪神・淡路大震災のことは頭にはなく、そ

のうち忘れてしまい、毎年1月17日にニュースや新聞で、阪神・淡路大震災の追悼式などの記事を見て、「ああ～、あんなこともあったんやなあ。」と、くらいにしか思い返せなかっただろう。実際、専門家や環境防災科以外の人達は、災害や防災を普段の生活の中で考える人は、そうないと思う。私だって、普段の生活24時間すべての時間に災害や防災のことを考えているかといったら、そうではない。普段の生活では災害や防災のことを考える機会がないという人たちのために私は、今後、日常のなかで少しでも考えて、思い出してもらえるためのきっかけになりたいと思う。

そのために大切なのは、人づきあいだと考える。震災を覚えている人が忘れてしまった人と関わることで、忘れた人は思い出せる。震災の体験をしてなくて、震災を知っている人が知らない人と関わることで、知らない人は震災を知り、そして頭の中に何かが残る。

実際私の家族はそうである。私が環境防災科に入るまでは、家で阪神・淡路大震災の話をする機会はなかった。しかし私が環境防災科に入ってから、私が学校でその日学んだことを話す。そして、そこで、うちでは阪神・淡路大震災のときあんなことがあったとか、今うちで危険な場所はどこそこだなとか、災害時家族はどこで集合するかの話し合いなど、災害や防災についての話を普段の生活の中ですることができるようになった。震災を体験していない弟も、その話に参加しているから、阪神・淡路大震災のことを少しは知っているだろうし、災害が起こったときどうするべきかも知っているはずだ。

私が小学生や中学生のころ、年に数回行う避難訓練がすごく無駄なことだと感じていた。訓練なんかしたって、何の役にも立たない。いざと言うとき、私は大丈夫だ、とあっていい加減に訓練していた。どうしてあんな風に思ってしまったのかな、と今考えると、きっと地震なんかめったに起こらないし、起こったって、自分は死なないし、自分の家族だって友人だって死なない、と勝手に思い込んでいたような気がする。

では、あの当時どんなことをしていたら興味を持てたのだろうか。どのようにしていたら、ふざけずまじめに取り組めていたのだろうか。自分の経験を踏まえて、暇な訓練にするのではなく、阪神・淡路大震災での資料を見せたり、防災や災害をクイズ形式にしたりして楽しんで防災に取り組むべきだと考える。

阪神・淡路大震災を体験していない人が増えていっているなかで、私は幼かった上に、わずかではあるが、震災を体験した。私は阪神・淡路大震災を体験した本当に最後の世代なのだ。そのうち、阪神・淡路大震災を体験した人はどんどん減っていく。だから、私たち環境防災科が阪神・淡路大震災での出来事や、そのときできた教訓を未体験者に発信していかなければならない。過去の災害からの教訓を学ばず、同じ過ちを繰り返すほどの愚かなものにはなりたくない。みんなにもなってほしくない。過去の災害を知り、教訓を作り、それを知り、訓練することによって、災害時の被害は防げることをみんなにも、もっとちゃんと知ってもらいたい。

また、震災を知ると同時に、防災についても知ってもらいたい。どうしたらその災害から逃れることができるのか、どうしたら少しでも被害を小さくできるのか。防災によって災害から逃れたり、被害をゼロにしたりすることはできないかもしれない。しかし減らすためにできることはいくらでもある。どれだけ減らせるかは、日本に住む人たちの努力次第だと考える。もし、阪神・淡路大震災当時、神戸には地震なんて来ない、なんて言わずに、災害への危機感や防災の大切さや防災意識をみんなが持っていれば、きっとこんなに多くの犠牲者を出すことには繋がらなかったと思う。

私は防災について、みんなに考えてもらえるように、日本の防災への考え方を文化的に見てもらえるようになったら良いと思っている。災害大国や地震大国と呼ばれる日本だからこそ、防災についての意識をもっと高めてもいいはずだ。むしろ、高めるべきだ。災害や防災がもっと身近なもののように考えてもらいたい。

阪神・淡路大震災と同じ過ちを起こしてはいけない。起こさせない。6434人という多くの犠牲者を出し、生き残った多くの人の心に傷を残し、悲しませ、苦しめた阪神・淡路大震災を私たちは忘れてはいけない。忘れない。辛い過去もきちんと受け止めることは大切だ。みんなにもこのことをもう一度よく考えてもらいたい。そのために私は阪神・淡路大震災を語り継ぐ。

記憶の力

神戸市垂水区
橋本 陵

1、当時

どこかで母の声が聞こえる、何を言っているのかもわからない。次の瞬間「ゴー」と突き上げられる様な揺れに目を覚ました。隣には父がいて、すぐに僕を抱き上げ、姉がいる2段ベッドの1段目に下ろした。「そこでじっとしてるんやで。」と言われ、僕は姉にずっと「地震やで、地震やで」と言い続けていたことを覚えている。

揺れがなくなると、母と父が僕と姉を連れて外に出る。玄関の前の靴箱から靴が全部出ている、足の踏み場もないし、自分の靴を探すこともできなかった。外に出るとたくさんの人が外に出ていて何かざわざわ話している。僕はすぐに車に乗せられどこから持ってきたかもわからない毛布を被され、ちょっと寝ていなさいと言われて記憶が途切れる。

それから何日経っただろうか？自分にはわからないが、目を覚ますと、そこには瓦礫の山だ。僕が親にここはどこかと聞くと、「昔、住んでいた、板宿のあたりやで」と言われた。僕はこのとき子供ながらにいろんなことを察していた。窓を開けて外を見ると、どこからともなく女の人が泣いているような声や、家の前で立ちすくんでいる人など、僕は声も出なかった。そうしているうちに、昔、住んでいた家の前に着いた。僕はそこに住んでいた記憶は全くなく、近所の人とかも知らなかったから、その時の目の前の状況がよく理解できていなかった。そこには瓦礫が広がっていて、見る影もなかったそうだ。その記憶はあまりはっきりしていない。

それから、僕の家族は避難所へ行くことはなく、三木市にあるおじいちゃんの家に行った。おじいちゃんの家も揺れの被害で家の中のタンスなどが倒れたりしていたが、ほかに被害はなかった。おじいちゃんの家で何日か過ごしている間に、父と母は僕の家を片付けに行ったりしていたんだと思う。僕はずっとテレビを見ていた。長田の燃えている映像や避難所で物資が足りていないとか、たくさんさんの情報が流れている中で、一際目についたのが、亡くなった方々の名前が発表されていくところだ。その時は、自分がそこに載らなくてよかったな。なんて思ったりもしていた。

数日すると、僕は家に帰ることができた。家は食器類が何もないだけで、テレビも使えなし、電子レンジも使えたような気がする。姉の学校も被害が少なかったので、すぐに始まった。何にも変わりのない生活がそこから始まった。

2、小学校

小学校に入学してから、普通の日々が流れる中、誰もが地震の話なんてしなかった。今思えば、どこかみんな避けていた部分があったのかもしれない。

小学校1年生の時の1月17日、体育館で阪神・淡路大震災の追悼行事が行われた。僕はこんなことをしていても意味があるのだろうか？とダルそうに参加していた。

そんなある時、小学校5年生ぐらいの時の追悼行事のときに校長先生が、震災当時の話をしていた。それは、体育館に鍋を持って立ち尽くしている少女と、警察のお話だったと記憶している。その話を聞きながら、僕はずっと泣いていた。僕は、震災当時には、テレビの亡くなった方々の名前を見ながら、僕たちの名前が載らなくてよかったなんて思っていたのが本当に恥ずかしくて。その追悼式の後に、その話を聞いた感想を学校で書いた。僕は学校では書ききれなくて、家に持って帰って書いていた。その時から、母とは震災当時の話をよくするようになった。今までは、その話には触れちゃいけないとどこかで思っていたのか、親も、僕もそんな話は一度もしたことがなかった。親と、震災当時の話をして、わかったことは、僕の5歳の時の記憶なんてほんとに一部に過ぎないのだなということだ。それに、親は仕事をしているから、母親の仕事場での話など、すごくリアルな話が聞けた。それを聞いて、そのときの作文にこう書いたことを覚えている。「僕たちの街、神戸は、どんどん復興をしているが、僕たちの知っている町ではなくなった。」今思い返すと、自分は意味をわかって書いていたのか、すごくあやしく思える。母や、父の話を聞いていると、そう思わざるを得なかったのだろう。

小学校6年生の時、初めて神戸のルミナリエへ行った。僕は、阪神・淡路大震災の犠牲者への鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望を託し、みたいなことを知っていたから、それまでは一度も行ったことがなかった。そこで見たものは、たくさんの光と、1人のおじさん。その人は泣きながらルミナリエの光の粒、1つ1つを見るように回っていた。その時は、震災で身内の方が亡く

なったのかなぐらいしか思わなかったが、そういう人がほかにもたくさんいて、ルミナリエを見て回っていた。それを見ていると僕もなぜだか1人で泣いていて、気がつくと親とはぐれていて、迷ったのを覚えている。幸いすぐに見つかって、家に帰ったのだが、その時何を思ったかとかはもうほとんど覚えていない。

3、中学校

阪神・淡路大震災が発生して、長い年月が経ち、僕たち中学生は、被災なんてしていないかのように、毎日をただ淡々と過ごしている。震災のことを忘れていくわけではない、頭のどこか隅で覚えているが、口に出すことはほとんどなくなった。このころでは、どこの中学も、1月17日になれば、追悼行事を行っていたという。僕も毎年の如く参加していたが、あまり具体的に何かを思ったかなんてなかったと思う。毎年言われることは、あの、阪神・淡路大震災を忘れないようにしよう、ということだ。忘れたほうがみんな楽じゃないのかな、なんて思っていた。僕たちは被害が少なかったから、思い出しても大して何も思うことがないが、家族や、身内の方を亡くしている人たちにとっては、思い出すということほどつらいことはないのではないか、と思っていた。

そんなある日、学校の先生が震災当時の話をしていたのを覚えている。その内容こそ正確には覚えていないが、教師の立場から、避難所になった学校にいたのでとても大変だったということをおっしゃっていた。僕は、避難所に行っていなかったのだから、避難所がどういう状況だったとか、物資がどのように届いていたかとかは、テレビの阪神・淡路大震災の特番などでしか見たことがなかったのだから、先生の話聞いて、教師側の意見というのを聞いてすごく納得したのを覚えている。テレビで見ていたのは、物資を配っている自衛隊や、疲れてもうやつれている被災者の方々だったので、その裏にはやはり、教師の方々の努力があったのを忘れてはいけないのだなと思った。

中学3年になって、僕は進路についてすごく迷っていた。昔から本当になりたい職業や、夢というものがあったから。学校では、友達がどんどん目指す高校などを決めて勉強し始めているのに、自分だけ取り残されていた。どんな高校を調べても、全く興味もわかない。だからといって中学を卒業したら就職するなんていうことも考えることができなかった。そんなとき、舞子高校には環境防災科という新しい学科があるよと先生に言われて、いろいろ調べてみた。そうすると、僕が今まで阪神・淡路大震災のことなどについて考えてきたことが活かせると思ったので、ここに行こうと決めた。消防士や警察官を目指そうとかではなくて、この環境防災科で何か新しいものを、新しい自分を見つけようと思って決めた。

僕はこれを決めてから、阪神・淡路大震災のことを調べたり、新聞の投書のところを切り抜いたり、いろいろ調べた。いろいろ調べているうちに、自分は被災しているのにも関わらず震災のことはなんにもわかっていないということがわかった。神戸の街はあの時一度消え去ってしまった。写真や言葉でたくさんの情報を頭に入れるとふと思ったのが、被災した人の中でもやはり全然感じ方が違う。僕は、被災しているといってもやはり被害は少ない。一方、被害のひどかった地域では、毎日つらい日々を過ごしているというウェブもあった。この感じ方の違いというのも、自分が震災のことを勉強すれば、また変わってくるのかなと思ったりもした。

そんな中、僕は舞子高校環境防災科に入学することができた。

4、父の仕事場

当時の父の仕事場は、神戸の製油所であった。僕は、震災が起きた後すぐに三木市にあるおじいちゃんの家で避難して自分が何をしていたのかはほとんど覚えていないので、父が何をしていたのかわかちとも覚えていなかった。だからこの「語り継ぐ」を書くにあたって、父に震災当時の話を聞いてみた。

父は、地震が起きているときは、無我夢中で僕らの上に覆いかぶさっていたそうだ。地震がおさまったあと、僕らを連れて外に出て、数時間はその家の前でみんなといろいろ話していた。そのあと僕らを連れて三木市にあるおじいちゃんの家に行った。その次の日か、その次の次の日ぐらいには、仕事場がどうなっているかを見に行ってみた。見に行ってみると、製油所なので火が出たらすごく危ないことになっていたのだが、幸い火は出ていなかった。しかし、ドラム缶などはそこら中に散乱していて、初めは、何から手をつけていいかわからないほどの状況だった。そういった感じで、おじいちゃんの家と、製油所や、家などに通って片付けなどをして、すごく大変だったそうだ。そんななか、父は僕ら兄弟のことを気遣って何かいろいろ心配していたそうだが、当の本人の僕らは、特に何か感じてい

るわけでもなかった。

父の仕事場の製油所自体がちゃんと機能し始めたのはそれから結構先だったそうだ。

5、母の話

僕の震災当時の記憶というのはかなり曖昧なものだ。それは、当時僕がまだ小さかったことと、この震災があったということに重大視していなかったからだと思う。そんななか、母は結構いろいろなことを覚えていて、僕の記憶の間違っているところや、順番が逆のところなどをいろいろ教えてくれた。

震災当時、母は台所にいて、何かしていたそうだ。そんな中、地震が起きたので、火を止めて、食器棚を押さえるので必死だった。地震がおさまると僕らを外に連れ出し、数時間そこで周りの人たちと話して、その後三木にあるおじいちゃんの家に向かったそうだ。僕の記憶では地震の後にすぐ板宿の辺りに行ったような気がしていたが、それは間違いで、姉の小学校が始まる、地震から1週間後までおじいちゃんの家でのんびりしていたそうだ。おじいちゃんの家のところはほとんど被害が出ていなかったの、そこで水を入れるポリタンクや、家でこれから使いそうな物や、お米などを貰って帰った。家に帰ると、姉の小学校は始まっているが、僕の幼稚園はまだ始まっていなかった。そこで、暇な僕を連れていろいろな所に行っていたのだと言う。僕はもうその時の記憶がない。

6、環境防災科に入って

舞子高校に来てからもう3年になる。今思えば、一瞬で通り過ぎて行ったようで、かなり中身の濃い3年間だった。

入学してから早々に驚いたことは、やはりこういう学科に入ってきているほかの仲間たちは、その時点で今やりたいことや、夢があった。僕は、そういうことを全く考えずに入ってきてしまったので、初めのうちは、その皆についていくことができなかった。しかし、環境防災の授業を受けて行くうちに、いろいろなことが自分の中で変わってきていることがわかる。授業などでは、地震の起きるメカニズムや、阪神・淡路大震災の時の、ライフラインの会社の方々や消防、警察などの多方面の視点からの復旧・復興を学んだり、地球の環境問題などに目を向けて勉強したりした。他にもたくさんの校外学習に出かけ実践的にも学んできた。こういうことをしていると、今までは「災害などで被災した人は、僕じゃない誰かが支援して、なんとか復興していくのだろう。」と考えていたが、そんなことはもう全く思えない。

僕は、この環境防災科に入ってから、いろいろな所に行くようになった。それは、ボランティアであったり、防災のセミナーであったり、学生同士の交流などである。その経験は自分を成長させてくれたと思う。その中でも、2007年1月17日の阪神・淡路大震災の追悼行事に参加したことは特に印象に残っている。

2007年1月16日、その日はあいにくの曇りで、雨も降りそうだった。僕と、友達2人で、夜の11時30分ごろに東遊園地に向かった。雨も降ってきたので、傘を買い、東遊園地についてから、受付をした。それから17日の朝早くの準備まで暇だからぶらぶらしておいて下さいと言われ、慰霊碑のところへ行った。僕は、そこに行ったのは初めてで、どこか重く冷たい空気に圧倒されていた。そこには、阪神・淡路大震災で亡くなった方々のほとんどの名前が書いてある。僕はその名前を全部読んでいこうと決めていた。あ行の人から最後の人まで、何時間かかっただろうか？わからないけど、聞こえるのは水が流れている音と、かすかに外の足音だけで、自分は涙を流しながら人の名前を1人1人頭に入れていって、周りにはもう友達もどこかへ行っていた。名前を読んでいる間は、心が締め付けられているようなそんな感じだった。その時感じたことは、家族で亡くなっている人、関連死で亡くなっている人、いろいろなけど、6000人以上が亡くなった阪神・淡路大震災という風にはまとめられないと思った。1人1人が、いろんな思いや考えを残して亡くなっていったのだなと感じた。外に出ると雨が降っており、重苦しい雰囲気から解放されたようだった。東遊園地の広場のほうへもどると、環境防災科の先輩たちがいて、ボランティアの時間までかなりの時間があつたので、控え室というかみんなが集まっているテントで話していた。そうすると、やっぱり追悼式のボランティアをしようという人たちなので、何かしらボランティア団体に所属していたり、個人だけでも来ていたり、環境防災科の先輩たち以外とも、お話しすることができた。その中には、いろんな災害ボランティアに行っている方なんかいて、そういったこともお話ししてもらった。ボランティアに来ているというだけで、たくさんの経験ができたという感じだった。明け方まだ暗い中、追悼式のボランティアが始まり、

雨が降り続けている中、5時46分に黙禱をした。僕はその時、「なぜ自分はこの場にいるのか？」というのを考えていた。それは、僕がこの舞子高校環境防災科に入っていなければここにはいなかったんだろうなと思ったからである。

今まで、こういったボランティアやいろんな防災関係の人や学生とも防災という大きなくりの中で交流してきたことを思い返すと、自分はこの舞子高校環境防災科に入って本当に成長できたと思う。

7、地震

最近では、新潟県や石川県、三重県などで地震が起きているが、自分は三重県で起きた地震の揺れを体感した。自分が地震のことを学んでからの初めての体感地震だった。地震なんて小さい時から何回も起こっているから、全く怖いものじゃないと思っていたけど、実際に揺れを感じると本当に怖かった。東南海地震が起きたのか！？と本気で思った。2007年に入ってからすでに2回も揺れを感じていて、ほんとうにもう日本は地震によって崩壊してしまうのではないかと考えている。今現在、東南海地震は今世紀前半に起きるとされているが、明日起こっても不思議ではない状況だ。明日、大きな地震が来たら...と思うとぞっとする。僕たちは環境防災科で、阪神・淡路大震災の裏側や、他の国の災害のことなどを学んできたが、明日地震が起きると僕はたぶん何もできないと思う。それは、いろいろな災害や地震を学んできて、今の自分では何もすることはできないなと思ったからである。ただ僕らにはまだ時間がある。この日本に大きな災害が来るまでに自分は何か社会に役立てるような人間になりたい。

8、これから...

この先の進路はまだ決まったわけじゃないけど進学しようと思う。僕はもともと、夢というものがない。それは小学生の時からで、文集などの裏に書いてある夢の欄を見ると、「100歳まで生きる」などと書いていた。昔からやりたい職業とかがなかったんやなあをつくづく思う。そんな感じで、高校3年生になってしまったわけだが、僕は今、なりたい職業がある。それは建築士だ。今もよく考えてみるとこれが自分の夢なのかというと、違うような気もするし、これでいいような気もする。しかし、今自分ができることという考え方でいろいろ考えてみると、建築士という方面が自分にはあっているのかなと思った。自分は、この環境防災科に入って、いろいろな面で成長できたと思う。その成長できた過程では、絶対防災が関わってきている。だから、これからも、どんな形であれ防災に関わりたいと思い、こういう方向を選んだ。

今年、舞子高校環境防災科を卒業する。僕たちが学んできたことは、どんな小さなことでも、自分たちが体験したこと、感じたことを語り継いでいかなければならないということ。しかし、僕は、まだ何を伝えていけるかは分かっていない。記憶もどんどん曖昧になる。しかし、僕らが学んだこと、聞いたことなど1つ1つ僕らの言葉で伝えていければいいと思う。この伝えていくということに大変意味があることなのだと思う。僕たちが、阪神・淡路大震災を体験したのが幼稚園の年中の時だったので、僕らですら、ほとんど覚えていないものも多いから、僕らより下の子たちは完全に地震のことなんて忘れていだろう。ましてや震災が起きた後に生まれた子なんて全く震災のことなんて知らないわけだ。僕たちや、僕たちの上の世代が震災のことを伝えていかないと、震災のことが全く分からないまま育ってしまうのだ。僕たちみたいなやつが伝えなくてどうするんだ。そんなにいい話ではないから聞きたくないかもしれないけど、この伝えるということがやはり一番大事だ。

9、語り継ぐ

僕はこの「語り継ぐ」を書くにあたって、いろいろなことを考えた。語り継ぐというのは辞書で調べてみると“次々に語って伝える。”ということだそう。文字で並べると案外簡単そうだが、実際やってみるとすごく難しいことだ。阪神・淡路大震災が起きたあの日から、どれだけの人が震災について語り継いできただろうか。僕もその一部になれたらいいなと思い、自分の記憶を掘り返して、親の話を書いて、できるだけ多くの情報を書き入れたつもりだ。こうやって振り返るという作業をすると、今までより少し違う視点で物事を見られるようになったりする。記憶なんてものは曖昧で、何度も振り返らないと忘れてしまう。これが「語り継ぐ」という作業につながるのなら、これからたくさんしていきたい。

助け合いの大切さ ～阪神・淡路大震災～

宝塚市逆瀬川
畑中 翔太

震災の前日

震災の前日は同じ社宅の人たち（3家族ぐらい）で神鍋スキーに行っていて、地震が発生したのは、やっとの思いで帰ってきた翌朝だった。僕たちが行っていた時の神鍋は何十年ぶりかの大雪で車がすっぽりと埋まるほどの異様な積雪量だったそうだ。大量の雪だったからその時住んでいた宝塚に帰るか迷ったほどだった。この時、宝塚に戻らずに神鍋で被災していたらどうなっていたらだろうか？

僕はスキーから帰って疲れて、これから起こる阪神・淡路大震災など知るよしもなく、家に帰るとすぐに眠りについたと思う。

震災発生

地震が発生したとき、僕はまだ4歳だった。その時は社宅の4階に住んでいた。

1月17日5時46分、今まで聞いたことのない地面が割れるような音で目が覚めた。目が覚めたとき、今何が起きているのかわからないし、これから僕がどうなるのかもまったくわからなかった。

ゴォォォという音の中僕はゆっくりと目を開いた。暗くてまわりの様子は何もわからない。部屋の中が揺れている、今まで体験したことのない出来事に恐怖、不安、焦りの中で、訳も分からず、ただただ天井を見るしかなかった。僕が見ていた電灯は左右に大きく振られ、今にもちぎれそうな勢いだった。このときの光景は現実とは思えないほど常識離れしていた。夢のようだった。そのときいきなり目の前が真っ暗になり、何かが僕の体の上に乗ってきた。重くて、暗くて、非常に怖かったので目をつぶった。この時誰かの声が聞こえたようだったが、はっきりわからず何をしていたか分からないのでそのまま僕はもう一度眠りについたと思う。ちょっとして起きたときに、僕の上には何も乗っていなかった。あとで母に聞くと親父が僕をかばって覆い被さってくれていたらしい。地震の中みんなパニックなのにとっさの行動ができる親父はすごいなと今でも思う。揺れがおさまり、家族全員の顔を見たとき内心かなり安心した。家族は無事だったけど、家の中はグチャグチャで食器棚は傾き、中に置いていた食器は落ちていて床で割れ、飼っていた金魚の水槽も倒れて割れ、中の水は飛び出し、床で金魚がピチピチと跳ねていた。この金魚は少しして水に入ると動きだした。小さい金魚でも水の中で動き出したときは感動した。部屋の中だというのに、工事現場みたいにガラスの破片など、本、水槽の水、と床にはたくさんものが散らばり裸足で歩くのは危険過ぎるほどだった。

地震発生後

住んでいた家にはあまり被害がなくて、どこかに避難したわけでもなくて、家に居ようと思えば居れるぐらいだった。でもすぐに水道は使えなくなり、ガスも止まった。電気は大丈夫だった。とりあえず、母はテレビをつけたそうだ。そのテレビには信じられない映像が流れていたのだ。阪神高速道路が倒れており、阪神・淡路大震災の威力の強さを知った。と同時に親父は阪神高速道路公団に勤めていたので、会社からの招集があり、すぐに会社へ出てしまった。社宅に残されたのは僕と妹と母だけだった。親父がいなくてもかなり不安になり怖かったことを覚えている。

社宅に住んでいたので近所の人とは仲がよく、いろんなことを協力してできた。僕の家は4階にありもし強い余震が来たりしたら怖いので、5家族が集まって2階に住んでいる人の家に行ったのを覚えている。集まって暮らしていると給水担当、子守担当、買い出し担当と役割が決められて動きやすかったらしい。夜は、すぐに逃げられるようにと服を着たままで、枕もとには、靴と工具を置き、電気はつけっぱなしでテレビもつけて寝ていた。その時、テレビでは長田が火で真っ赤になっている様子も映っていて、こんなすごい火事が起きている所もあるんだなあと恐ろしかった。もし地震が来てドアが開かなくなってしまった場合は2階から下に布団投げから布団の上に向かって飛ぶんやで！と無茶なことを言っていた。

僕たち子供は友達とずっと一緒に家に居れることで、地震のことなんか関係なしに楽しく遊んでいたと思う。

困ったことはやっぱり水が出ないことだった。水が出ないと一番困るのはトイレだと思う。トイレにバケツを置きバケツの水で流していたことを覚えている。その水は配給車が僕たちの住んでいる社宅に運んできてくれた。親と一緒に寒い中ポリタンクを持って長い行列の中にならんでいた。

おじいちゃん・おばあちゃんの家

おじいちゃんの家は震災発生当時、東灘にあった。揺れがおさまってから、母がおじいちゃんの家へ電話をかけた。呼び出し音は鳴り続けていたらしいが、電話には出ない。なぜ出ないのだろう、被害にあったのだろうか、嫌な想像しかできなかった。でももし家が壊れているのなら、電話も鳴るわけがないと思い、避難していることを信じた。その日の夜に親父が仕事を一段落つかせてからおじいちゃんの家を見に行ってくれた。「全壊や、でも避難所で全員無事」と言う親父の言葉に母は、全壊というのはショックだが、全員無事で何よりよかったと言っていた。その週末母はおじいちゃんの家に向かった。電車で行くのも無理、車で行くのも無理だったので、バイクで行った。母が言うには、道はガタガタで、亀裂が入り、頭上からは切れた電線がぶら下がっているというかなり悲惨な状況だったそうだ。やっとの思いで着いた時、家を見て唖然としたそうだ。2階建ての木造文化住宅だったのに見事に1階がなくなり平屋建てのようだったらしい。僕もあとあと見に行ったのだが、本当に信じられない崩れ方だった。1階が地下1階になっており、2階が1階になっていた。これを見たときに阪神・淡路大震災がかなりすごい地震だったのだと感じた。おじいちゃんの家近所の人に話を聞くと、おじいちゃん、おばあちゃん、叔父の3人で住んでおり、3人は4時間近く生き埋めになっていたらしい。文化住宅だったので、近所の人たちはみんな仲がよくて、地震発生後住人同士でみんなの安否確認をしてくれたそうだ。そこで、おじいちゃん、おばあちゃん、叔父の3人がまだ出てきていないことが分かり、声をかけて、居場所を見つけて、掘り出してもらえたそうだ。この話を聞いた時に学校の授業でも学んだ地域のコミュニティーは本当に大切だと思った。もしこれが、隣の顔も名前も知らないようなマンションだったら3人は助かってないと思うし、もし家が木造でなかったら、住民だけでの救出も無理だったと思う。奇跡が重なった結果だと思う。

ちょっとしてから、「魚崎のガスタンクが漏れている」との連絡が入り避難命令が出た。おじいちゃんの家は避難命令が出たところの近くだったので避難しろと言ったけど、おばあちゃんが「ここには避難命令は出ていないし、泥棒が出たし家に大事な物が埋まったままだから、ここを動かない」と言った。僕はこの言葉を聞いた時、心が痛かったし、唖然とした。こんな大きな災害が起きて、たくさんの被害が出て、これからみんなで助け合っていかなければいけない、こんな時だというのに人の物を盗む人がいるとは思っていなかった。ショックだった。

久し振りのお風呂

1週間ぐらいしてからやっと隣の池田市にある事務所のお風呂を借りることができた。昼間に行くのは渋滞するだろうと予想はついていたので、夜に出発した。久し振りのお風呂だったのでかなり楽しみだった。いつもなら車で30分もあれば着くところを4時間もかけて行った。この時の風呂は天国のように気持ちよかったことを覚えている。僕たちは被災しているのに、帰り道に見えたファミリーレストランの光景はあまりに普通すぎて僕のいる立場がみじめになっていった。

この時大阪では普通に映画を観に行ったりもしていたと聞いた。お風呂にもまともに入れられないというのに、震災を受けた地域によって、被害は本当に変わるのだなあと思った。

宝塚での被害

宝塚市でも地域によって、被災状況はいろいろだった。死者が出たところもあれば、家も無事で全然被害がなかったところなど様々だった。僕たちが住んでいた千種（阪急逆瀬川駅を川沿いに上流に行ったところ）はそれほど被害はなかった。物資はすぐに届き、特に生協はすぐに来てくれたらしい。無料で食料を置いて行ってくれたりした。震災発生の翌々日ぐらいにスーパーに行ったけど、店の中には何もないし、生協が置いて行ってくれた食料を大切に使っていた。また、ガスボンベの支給もあったらしい。災害が発生したら、様々なものが支給されたりして、いろんな人に助けられているのだなあと思った。

地震発生後の週末

地震が発生して少しして落ち着き出してきたら、社宅に住んでいた人たちが減り始めた。みんな地方の実家へ帰り始めたのだ。でも僕たち家族は実家に帰りたくても帰れない状況だったので、社宅に残った。60世帯いた社宅も一時期は僕たち家族だけになり不安と恐怖でいっぱいだった。

親父は1ヶ月後ぐらいに1回帰ってきたけど、またすぐに出かけていった。当時はなんでおってくれんのやろ、と思っていたけど、今となっては仕事だからしかたないと分った。家族を養っていくというのはこんな非常事態でも仕事に行かないとあかんのやと思った。

地震が残した傷

阪神・淡路大震災では多くの家屋、道路などの建物が倒壊した。それと、人の命というかけがえのないものを多く奪い去っていった。あの悪魔のような出来事からもう12年目を迎えた。神戸の街は12年前のように活気を取り戻し、阪神・淡路大震災で倒壊した建物はほとんどが新しくなり、回復しているなかで、震災の恐怖、教訓、助け合うことの大切さを忘れていっていると思う。阪神・淡路大震災が起こったこと、たくさんの人の命が亡くなったこと、絶対に忘れてはならない。12年という長い歳月が過ぎていく中で、震災を体験していない人たちがかなり増えた。阪神・淡路大震災を体験していない子供たちは地震の恐ろしさ、助け合いの大切さなど何も知らない。そのような子供たちにも震災の話をしてあげて、当時のことを鮮明に教えてあげたい。そのためには、僕たち、少しでも震災を体験している人たちがもっとたくさんのことを知ることが大切である。震災が残した目に見える傷は町の復興とともに癒されてきていると思う。しかし目に見える傷だけ癒したところで傷がなくなったとは言えない。大切なのは目に見えない傷の方だと思う。人々は目に見えないたくさんの傷を負ったと思う。大切な人の命が奪われたり、両親の命が奪われたり、子供の命が奪われたり、そのような体験をした人たちには心に大きな傷ができたと思う。

阪神・淡路大震災が残した傷は目に見えないものと目に見えるものの2つだと僕は考えている。目に見える傷はお金があれば治せるけど、目に見えない傷はお金があっても治せるわけではない。目に見えない傷というのは心の傷だと考えた方がいいと思う。この心の傷を癒すするには心のケアが必要である。12年という長い月日が経ったけど、心の傷が消えてない人もいると思うので、災害が発生したあとは教訓、記憶を忘れないこと、語り継ぐこと、そして『心のケア』が大切だと思う。

心のケアについて

ここでは僕が本を読んだ時に書いてあった心のケアについて話したいと思う。心の傷は災害や事故等で、命にかかわるような極度のショックをもたらず体験をした場合、この体験が記憶の中に残り、精神的な影響を与え続けることがある。このような精神的後遺症をトラウマ(心的外傷)という。こうした心の反応は、「異常」な事態に直面した際に起こる、極めて「正常」な反応であり、適切な時期に適切な対応をすれば、大半は収束するといわれている。しかし、適切な対応がなされなければ、PTSD(心的外傷後ストレス障害)等になって生涯にわたり大きな心の傷を残したりすることになる。このため、学校(園)においては、児童等の心のケア対策を学校防災の一環として位置付け、日ごろから心の健康教育や相談活動の充実を図るとともに、災害発生時における心のケア対策を充実することが望まれる。

この本を読んだときに感じたのは心の傷(心的外傷)は正常な反応ということと、心の傷を負っても適切な時期に適切な対応をすれば、心の傷は治まるということにびっくりした。この事が本当なら心の傷を負った人が沢山いるなら、それに負けないぐらい心のケアができる人間がいればいいと思うから、僕も将来ある程度心のケアについて学んで、心に傷を持っている人と話して、その人たちの心の傷を少しでもボランティアで癒せたらいいと思う。僕が思うに心のケアは難しいようで簡単だと思う。完璧にその人たちの心の傷を取り除くことは難しいが、傷を負った人の話を聞いてあげるだけで、ちょっとでもその人が楽になればそれも心のケアだと思うので、ある意味簡単だし、話を聞いてあげることで誰でもできることだと思う。

阪神・淡路大震災発生からの課題

阪神・淡路大震災では多くの人の命が亡くなったことが印象深いと思う。これは地域のコミュニティーが原因だと思う。神戸という都会で起きたことにより近所付き合いなども浅く、隣に誰が住んでいて、何人家族で、だとか、そのような近所の人たちの情報を全然知らなかったため、救助をして全員

無事か確認をしようとしても、近所の情報をみんな持ってないから、何人救助したらいいかわからず、救助するのが遅くなり、多くの犠牲者を出したと思う。

もう1つの問題は災害が起こったとき、阪神・淡路大震災の時でも同じだと思うけど、自分で自分の身を守れない人たち「災害時要救護者」(お年寄り、障害者、病人、けが人、妊婦、幼児、外国人)と呼ばれる人たちをどのように救出するかが課題だと思う。

この課題をどう乗り越えていくか。ここで僕は要救護者リストみたいなのを作って、消防や自衛隊などの救出を行う部隊に持ってしてもらい、災害が発生したら、その人たちを優先に助けたらいいと思った。

しかし、近年できた「個人情報保護法」を理由に、要救護者の住んでいる所などをリストにすることすら難しくなっているのが現状である。このように口だけ言っているのではなく行政は行動して欲しいと思う。

環境防災科に入って

僕は中学3年生のときに、環境問題に興味を持ちだした。なぜなら、その当時は新聞でも雑誌でもなにかと温暖化や酸性雨といった話題でいっぱいだったからである。環境問題について深く学びたくて環境防災科に入学した。入学したら環境問題もちろん学んだが防災についても深く学んでいった。

なんといっても阪神・淡路大震災のすごさを実感した。阪神・淡路大震災で失ったものはたくさんある、しかし、得たものもたくさんあると思う。人の命の大切さ、助け合いの大切さ、いろいろなことを教えてくれた阪神・淡路大震災に感謝して、僕たちは教訓を語り継ぎ、このことは忘れてはいけないと思う。

この学科に入学していなければ、学べないことがたくさんあったと思うし、この学科に入学して本当によかったと思う。

~未来~

将来は防災とは関係のない職業についていると思うけど、この学科で学んだことは忘れずに、毎日を生きていきたいと思う。

記憶をたどって

神戸市須磨区
林 優子

震災当時

今から12年前。家族構成は母・父・妹（年少）・自分（年中）で、11階建てマンションの9階に住んでいた。生まれたときは長田に住んでいたが、4歳くらいのときに須磨へ引っ越した。マンションの周辺には区役所や消防署、電車や高速道路があった。休日には長田の祖父母の家へ行って一緒に御飯を食べた。保育所も長田区にあるため、そこまで市バスで通っていた。地震の前日（月曜日）は普段通り保育園までバス通園。夜は妹と母と同じ部屋で、父は1人別の部屋で寝る。いつもと変わらない日常だった。

地震発生・そのとき

突然、「ドーン！」という大きな音がした。それは何かが爆発したような音だった。自分は起きたばかりだったから意識が薄かった。状況が理解できず、ぼんやりとその音をずっと聞いていた。すると、「ゴゴゴゴ...」「ガタガタ...」と今度は何かが騒いでいるような音がした。その直後、「ドーン！！」ともう一度大きな音がすると部屋全体が激しく揺れ始めた。台所の食器棚が倒れ、中の食器が「ガシャン...ガタガタ...」と大きな音とともに割れていく。その揺れと音で起きた母は「地震や！！」と叫び、自分と妹を抱きしめた。暗闇の中、大きな音がいろんなものを壊しながらあちこちに飛び交う。体と部屋を揺らす大きな衝撃に恐怖を感じた自分は何が何だか分からず泣き出してしまった。今でもあの地震の激しい揺れ、その時の自分のことはうっすらと覚えている。

揺れがおさまるまで部屋でじっとしていた。母はすぐ電気をつけようとしたが、地震でライフラインが切断されたため使えなかった。家中のものがすべて倒れ、何から何までぐちゃぐちゃになっていた。父が「大丈夫か?!」と部屋に駆け込んできた。父は部屋に閉じ込められていた。扉がなかなか開かず、倒れてきた机やタンスの下敷きになるところだったが、自力で抜け出したそうだ。その後すぐに下の階へと走った。

外へ出て

父と母は自分と妹の体を毛布で包み、抱きかかえて階段を降りた。エレベーターは地震の衝撃によって停止していた。「ジリリリリリリ...」とずっと鳴り続けている非常ベルの音がうるさくてたまらなかった。自分はその時何が起きているのかわからなかった。マンションから外へ出てやっと何が起こったのか分かった。ひび割れている地面、不気味な色をした空、ざわめく人達。鷹取方面の方角では火が上がっている。非常ベルと消防車のサイレンがあちこちで同時に鳴り響いている。その光景を見てなぜだかたがたと震えあがった。いつもと違う風景を見て、まるで自分達は異世界にいるような感覚だった。「これはオレンジ色なのだろうか？それとも赤色なのだろうか...？」まじ全体が濃い赤色に染まっていた。そのせいか建物などは焼け焦げてしまったように、すべて黒色に見えた。

その後、近くの消防署に避難した。消防署は自分たちと同じように避難してきた人が集まっていた。がたがたと震え毛布で身を包みこんでいる人、けがをして血を流している人...。中は人が集まりすぎてもう入りきれない状態だった。その時1人の男性が「火事や！来てくれ！」と大声で叫んでいたが消防隊員はいなかった。その男性は状況が把握できたのか「燃え尽きるまでほっておくしかないか...」と言っていた。

「他のみんなは大丈夫なのだろうか？」地震発生から1時間くらい経ったとき、長田に住む祖父母が車で自分たちのもとへやってきた。祖父の話で長田は須磨よりもかなりの被害が出ていることを知った。回復するまで祖父母とともに住むことになり、長田へ向かった。道路はぐちゃぐちゃになっていたから車と体がかなり揺れた。現実を受け止められないままでぼんやりと車から景色を見ていた。いつも通る道を初めて通っている感覚になった。いつも通っている道がどこかわからない。家は潰れ、人通りは少ない。あたりは砂埃のような霧と煙がうっすらたちこめている。車に乗り込んで、状況のひどさを知った。

長田・祖父母の家

長田に着き、いったん祖父母の家へ行った。地面には亀裂が大きいものから小さいものまで入っていた。亀裂は深くなっていて段差になっていた。祖父母の家は2階建ての木造住宅。昔火事で焼失してしまったりしく、前の家より少し丈夫に建てたそうだ。引き戸を開けて中を見るとがく然として言葉が出なかった。2階はどうなっていたのかわからないけれど、1階は部屋と呼べない状態まで散らかっていた。大きな本棚は手前の卓袱台に寄りかかり、テレビは何かにつづかって画面が割れていた。台所は食器棚から食器が飛び出していて、床一面破片だらけ。それよりも恐ろしく感じたのは粉々に砕け散ったガラスの破片。部屋の戸はガラス張りなので、地震の衝撃で棚のガラスよりもあちこちに破片が散らばったはずだ。祖父の話によると、テレビと本棚の近くで寝ていたそうだ。地震の揺れで目が覚め、ガラスが上から降りかかってきたという。幸い大きなケガはなかったが、祖父の手に大きめのガラスの破片が突き刺さった。もし本棚の下敷きになって、ガラスの破片が刺さっていたら…。想像しただけでゾッとす。

長田・避難所生活

まだ余震も多く、祖父母の家は散らかり人が住めない状態。自分たちの家は長田から距離があったし、どうなっているかもわからない。回復するまで避難所で生活することになった。避難先は三ツ星ベルトの体育館。ここで3、4日間暮らした。入口はすんなり入れたが、体育館は多くの人で埋め尽くされていた。毛布やラジオ、懐中電灯が目立つ。避難所生活は子供の自分にとって退屈なものだった。館内は人がいっぱいざわついている。いつも見ているアニメが見られない。外で遊べない。ラジオしか聴けなかったから「ラジオなんておもんない。早くアニメが見たい。」と言っていた。

退屈だらけだった避難所生活。でも1つだけ楽しみがあった。それは食事だった。中でも避難所内の女性たちが大量のおにぎりを作っていたことは今でも記憶に残っている。母はおにぎりを作った一員だったそうだ。1人1人が協力して助け合う。避難所内で人のつながりあいや助け合いがあったのではないだろうか。初めて避難所から外へ出た時、長田区役所まで母と配給を取りに行った。避難所から歩いて15～20分くらいの距離があった。長田は火事の被害がひどかったため、家は焼けて道路も亀裂が入って段差ができていたと思う。区役所へ着くとたくさんの配給を積んだ車があった。その後ろには「どれだけ長いのだろう」と思うほどの行列ができていた。確か、もらったものはジュースと乾パンだったはずだ。祖母・父達はタンクを持ち、給水車があるところまで水をくみに行ったそうだ。配給をもらったときは本当に嬉しかった。

西明石・従妹の家

西明石に住む従妹の家族が心配して避難所にやって来た。自分たちはしばらく西明石の従妹の家で住むことになり、避難所生活を終えた。従妹の家はほとんど散らかかっていなかった。西明石は須磨や長田より建物の被害は少なかったし、電気と水道も使えた。「これでアニメが見られる！」と思っていたがテレビは映らなかった。夜に机を囲んで話し合っていたとき、突然「ガタガタガタガタ…」と音が響いた。またあの揺れだ。家具がカチャカチャと音を立てる。電灯がゆらゆら揺れる。不安になったけれど揺れは須磨で起こった時より強くなって、小刻みに揺れただけだった。そのときは余震を知らなくて、西明石にも大きな地震が来ると思っていた。

その後（母の話）

その後のことは記憶がないので、ここは母から聞いたことをまとめる。

西明石へ来て3日目、両親は自宅が心配だったため昼間は須磨へ戻り片付けをしていた。このときまだ余震が続いていたため、私と妹は祖父母の家に置いて行った。生活が回復するまでみんなで一緒にいようということで、祖父母とともに暮らした。保育所は閉鎖していたが、しばらくしてから再開。しかし、自分達はまだ行ける状態ではなかったののでしばらく休んだ。

話を聞き、母は震災をこう振り返った。「災害はいつ起こるか分からない。たくさんの人達が亡くなり、たくさん孤独者も増えた。震災はとても辛いことだらけだ。でも、やさしい人達にも出会えた。私たちにできることは日頃の防災設備を含め、災害の被害をできるだけ小さく抑えること。また、震災で助かった命もたくさんあったはず。震災を忘れず、思い出して振り返ってみることも防災の予備になる1つの方法だと思う。」

高校生・環境防災科に入って

今から3~4年前。自分が受験生だったとき、新聞を通して環境防災科のことを知った。環境防災科の先輩が新潟県中越地震のボランティアをしていた時の姿がすごく立派に見え、その先輩に憧れを抱いた。「自分もこの先輩のようにボランティアに参加してみたい...!」という気持ちがこの学科に入ろうと思ったきっかけだった。

この環境防災科に入って、阪神・淡路大震災のことを深く考えさせられた。授業では外部講師の方の講義を聞いたり、校外学習へ行ったりした。小学生には自分たちが防災教育を行い、語り継いでいくことの大切さを知った。災害のことだけではなく、心のケアについて学んだ。震災当時に自分の目や身体で触れることで、12年前の忘れかけていた記憶が1つ、また1つと蘇っていった。1月17日になると学校では震災メモリアル行事が行われる。テレビでは阪神・淡路大震災の特集が放送されている。震災メモリアル行事では外部講師による講義、大学生や教授の発表など様々な角度から見た震災当時が語られる。語り継いでいくことは本当に大切だと感じるし、語り継いでいくことから防災は始まるのではないかと思う。また、防災の知識だけでなく、自分自身の心も育ったと感じる。自分には積極性がないから、あまり行事に参加しなかった。でも行事に参加して、様々な年代の人と接することができ、防災を教えたり、教えられたりと勉強になった。小学生の防災教育、防災訓練...。今年の春の石川県能登半島地震の街頭募金活動にはたくさんの人が自分たちの声に足を止め、「気持ちだけだけど...」「がんばってね」と募金してくれた。からっぽだった募金箱がどんどん重くなっていった。募金してくれた人の助け合いの心・温かさが実感できた。その後、石川県へ自身初めてとなるボランティア活動に参加した。実際に被災地に行き、災害の傷跡や人との交流で心の温もりに触れることができた。

「もしこの環境防災科に入っていなかったら？」とそう考えるときがある。もしそうだったとすると災害や防災について興味を持っていないだろう。震災を体験した者同士の話を聞けなかっただろう。震災のことなんて少しも考えてもないだろうし、震災のことを「ああ、そういうことがあったなあ」と単なる過去の経験として当時の記憶を風化させていだろう。それに、忘れてはならないことに気付かないままでいだろう。また、街頭募金・ボランティア活動など、普段ではめったにできない貴重な体験に積極的に参加していないだろう。それに、環境防災科に入ったおかげで、夢を見つけられた。少し防災と離れてしまうかもしれないけれど、アニマルセラピストになってみたい。人が傷つき悲しむ姿なんて見たくない。自分は傷ついた人たちを癒しながら減らしていきたいという気持ちからだった。今たくさん動物が人間の勝手な行動によって殺されている。動物問題も深刻化している。人の心のケアだけでなく、こういったたくさんの動物の命や心の傷を癒したい。心のケアなど人の防災だけでなく、動物保護や救出活動など動物側の防災を努めたいと考えている。

震災を振り返って

これが自分の震災の記憶のすべてである。文章を書きながら震災の記憶を思い出そうとするけれど、頭が痛くなるほどなかなか思い出せない。時間の流れとともに記憶も流れていった感覚だ。12年前の自分にとって、震災は「恐怖」とか「たくさんの命が失われた不幸」というようなイメージしかなかった。幼かった自分にはまだわからなかったこと、震災で学んだ大切なことが授業を通して明らかになっていった。震災は辛いことだらけだった。癒えないかもしれない心の傷を負った人もたくさんいる。その中に教えられたことがある。それは震災の教訓、助けあい大切さ、災害の備え...。自分が当時知っていた面、知らなかった面...。高校生に成長してから、わからなかったことを気付かされた。

小さいころの記憶なんてほとんど残っていなかったから、記憶を探りながらこの「語り継ぐ」を書くのにとっても苦労した。覚えている限りのことをまとめ、親にも震災の話聞いてみたけれど、親も私と同じく震災の記憶はあまり覚えていない状態だった。時間の流れとともに記憶はどんどん薄れてなくなっていく。「こうやって震災のこともいづれなくなっていくのかなあ...?」と感じる。

今は長田に住んでいる。長田は火災の被害が大きかったところ。大正筋では震災を風化させないために展示や行事を行っている。色々なところが震災を風化させないために、語り継いでいくために様々な取り組みをしている。こういった取り組みを見て、震災は風化させてはいけないと強く感じた。それぞれの震災体験が書かれたこの「語り継ぐ」を後輩や震災を知らない人など、多くの人に読んで欲しいと思う。震災のことが少しでも記憶にある人は、手探りでもいいから少しでも記憶をたどって欲しい。結構昔のことを思い出すのは少し難しいかもしれない。でもその中に教わったこと・大切なことが

きっとあるはずだから。

家族がいて、友達がいて、まちがあって、自分がいる。それがあって当たり前を感じるけれど、大切なものがあって、今を生きている。そんな当たり前がある日常を大切に生きていかなければならないと思う。震災を乗り越えて、自分たちは今生きている。「しあわせ運べるように」の歌詞にあるように亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていきたい。でも、災害はいつ起こるか分からない。大切なものを守るために、命を守るために災害の備えをしなければならない。大切なものを失ってからでは遅い。そう考えると防災はこれから必要なもの。防災は自分たちと切っても切れない関係。自分たちにできることは語り継いでいくことだけではなく、母が言っていたように、日頃の防災設備を含め、災害の被害をできるだけ抑えるのも大切であると考え。私は大切なものを守っていきたい。自分にできることを考え、これから進んでいく道の中で、環境防災科で学んだことを夢に反映させるだけではなく、少しでも多くの人に伝えて行けたらいいと思う。

あの日の記憶

西宮市川西町
速水 絵理

「1995年1月17日」あの日のことは、震災から12年経った今でも忘れたことはない。震災当時、5歳だった私ももう18歳である。月日が経つのは本当にあっという間で、街並みはあの頃の面影をほとんどなくしてしまっている。そして街の変化とともに、徐々に人々の記憶の中から震災というものが薄れてしまっている。あの日のことを思い出すのは正直つらいが、今私にできることはあの日のことを語り継いでいくことなので、あの日の記憶をたどっていこうと思う。

前日

当時私の家族は父、母、小学校2年生の姉、幼稚園年中の私の4人暮らしだった。私が通っていた松秀幼稚園は、阪急夙川駅の近くにある自然にあふれた幼稚園だった。私は絵を描くことやおにごっこをするのが大好きで、毎日幼稚園に通うのを楽しみにしていた。

前日に何をして過ごしていたかまでは覚えていないが、母から「明日は用事があって幼稚園に迎えに行っておられない。」と言われ、落ち込んでいたのを覚えている。私の通っていた幼稚園は、地区ごとに集まってみんなで登下校していた。私は友達も一緒にいるのに、母と一緒に帰れないと思うととても寂しかった。その日の夜は、家族4人同じ部屋で横になって寝た。私は明日のことで頭がいっぱいだったため、なかなか寝付くことができなかった。「明日幼稚園が休みになればいいのに…」皮肉にもそんなことを思っていた。

あの日

なかなか寝付けなかった私は、布団の中で寝がえりをうっていた。そしてふと目を覚ました瞬間、ガタガタと大きな音が聞こえたかと思うと、急に天井がグルグルと回りだした。お皿が割れるような音や何かが倒れる音が家のあちこちで聞こえた。母が「地震だ!」と言い、私はその声を聞いて布団にもぐり込んだ。その時、横で寝ていた姉の上にタンスが倒れかかってきたのだが、父が姉をかばってタンスを背中であげた。もし父が姉をかばってタンスを受けていなかったら、確実に姉はタンスの下敷きになっていた。もしかしたら死んでいたかもしれない。私は横でそんな事態が起こっているのも気づかず、布団の中で揺れが収まるのをひたすら待っていた。

揺れが収まってしばらくしてから、家族みんなでリビングの方へ行って見た。食器棚も本棚も全て倒れ、床には皿や食器が散乱していた。家族は全員無事だったが、家の中はひどい状況であった。家の外に出ようとした時、ドアが開かなかったのだが、外からマンションの人がドアを開けてくれ、「大丈夫ですか」と声を掛けてくれた。外はまだ薄暗く、マンションの下にはすでに多くの人が集まっていた。マンションにはあちこちに亀裂が走り、地面は地割れをしていた。私達家族は同じマンションの人が点けていたラジオを一緒に聴いたが、その時ラジオは名古屋で大きな地震があったと報道していた。しばらくして、近くのマンションから火災が発生し、消防車が駆けつけてきた。そのマンションの1階はつぶれており、後から多数の住人が亡くなったことを聞いた。私が住んでいたマンションは、全壊だったが、幸いにも犠牲者は出なかった。それから数時間後、一旦家に帰り、父は市内に住む祖父に急いで電話を掛けた。その時はまだ地震発生後すぐだったので、電話が通じていた。祖父の家は、半壊状態で家具や食器が散乱していたが、ケガは打撲程度で助かった。隣家は全壊で、祖父の家に屋根が接触して傾いた状態であった。その後、父は余震の合間をぬって転倒している家具を片付け終えると、一人暮らしであった祖父を心配し、祖父の家へと急いだ。この時、43号線を通って行ったのだが、車内から見た街の様子は、ほとんどの家が倒壊しており、過去に例のない光景であつたらしい。母と姉と私の3人は、余震も頻繁に起こっていたため、家の中にいるのは危険と思い、家の近くの姉が通っていた香柵園小学校へと避難した。

避難所での生活

小学校にはすでに多くの人々が避難していて、初めて大きな地震であることがわかった。私たちは家から持ってきた毛布と小学校で支給してくれた毛布を敷き、寝るスペースを確保した。そして母が家に荷

物を取りに行っている間、姉や友達とトランプやゲームボーイなどをして遊んでいた。

ご飯はコンビニに買いに行ったが食べ物は何も置いてなかった。また、お店には多くの人が買い出しに来ていた。仕方なく冷蔵庫や家にあったものを持ってきて避難所で食べた。そんな生活が何日間か続いた頃、避難所で配給が配られ始めた。お弁当やパン・牛乳といった火を使わなくても食べられるものが多かった。

避難所生活で一番困ったことはトイレだった。トイレに行っても水が流れないので、校庭でする人もいた。水が流れないもどかしさとトイレと水は大きく関係していることに初めて気づいた。数日後、バキュームカーが来てトイレをきれいにしてくれた。また、簡易トイレも設置され避難所生活はほんの少し楽になった。

三木での生活

避難所で1週間ほど過ごした頃、母から「従妹のおばちゃんの家に行くよ」と言われ、久しぶりに従妹に会えるのが嬉しかった。従妹は三木市に住んでおり、家が遠いこともあってなかなか会うことができなかった。三木は震災の被害が少なく、従妹の家も大きな揺れは受けたがタンスが多少ずれる程度であまり被害はなかった。

このとき、叔父が車で迎えに来てくれることになったが、昼間は阪神高速道路が倒壊した影響もあってか大渋滞だったため、夜中に迎えに来てくれた。三木から神戸に入ると、急に風景が変わり家や建物が倒壊していたり、電柱が斜めに傾いたりしている様子や、夜中にも関わらずリュックサックを背負った人が大勢で駅に向かって歩いているのを見て、地震の進路が少し離れただけでこれほど被害に差が出ることに驚いたと言っていた。普段なら三木から西宮までは車で1時間ほどの距離だが、交通渋滞に巻き込まれて結局2時間以上もかかって避難所に着いた。姉と私は母に見送られ、西宮を後にした。帰りは行きよりもさらに時間がかかり、三木に着いたのは明け方の4時頃だった。

三木では、テレビで震災の映像を見ても怯えたり悲しんだりする様子もなく、普通にしていたようだ。ただ、口には出さないが、父と母に会えなくて寂しそうにしていたこともあったらしい。そうして、2週間ほど毎日遊んで過ごした後、姉の学校が再開するのを機に西宮に戻った。

ライフライン

西宮に戻ってくると、家の中は片付いていたが水道とガスは止まったままだった。特に、私の住んでいた地域は水の復旧が遅かったため、普段通り水を使えるようになったのは4月に入ってからだった。そのため、朝早く起きて給水タンクに水をもらいに行くのが毎日の日課となっていた。このとき、ポリタンクに水を入れてキャリアで運ぶのだが、水は思ったよりも重く、少し運んだだけで疲れてしまうほど大変だった。しかし、水はトイレ、調理に必ず必要なものだったので、みんな頑張って運んでいた。

ガスが使えない間は、カセットコンロで調理をしていた。食事をするときには、お皿にラップをひいてなるべく水を使わなくていいように工夫していた。

お風呂は、尼崎の銭湯まで通っていたが、避難所に自衛隊のお風呂が設置されてからはこっちに通うようになった。このお風呂は、自衛隊が普段海外で活動する時に使っていたものであり、一度に10人ほど入れるとても大きな組み立て式のテント風呂であった。そして、お風呂から上がると外ではボランティアの人が豚汁やうどんの炊き出しをしてくれたので、それを食べて家に帰っていた。この頃は特に寒い時期だったので本当にありがたかった。

父の出勤

父は六甲アイランドの中にある会社で働いており、震災直後橋が閉鎖されたため、1週間程会社に行けなかった。会社の建物の周辺は、大きな被害を受け、敷地のいたる所では液状化現象により地盤沈下が発生し、ひどい所では1m80cmも沈下していた。普段なら車で20分ほどの距離なのだが、道路が家屋の倒壊で狭まっており、車の大渋滞で半日かかって会社に着いた。その翌日からは、出勤するのに西宮から六甲山を縦走し、六甲トンネルを抜けて3時間かけて出勤していた。当時、父は経理の仕事を担当

当しており、社員の給料日が近づいていたため給料計算をしようとしたのだが、コンピューターが故障していたので、金融機関と交渉し、便宜扱いで社員の口座に給料を振り込んでもらったという思い出話を聞いた。

姉の学校再開

姉の学校は、震災発生から2週間後の1月30日に再開された。この時、小学校にはまだ多くの被災者が避難所生活を送っていたため、近くの香杣園幼稚園を借りて授業を行っていた。香杣園小学校では6人の生徒が亡くなり、その中には姉のクラスメートもいた。集会の時に涙ながらに黙祷をしたと言っていた。クラスには、1人1つずつヘルメットが配られ、授業では余震に備えた防災訓練も頻繁に行った。

給食は、給食を作る工場が倒壊してしまったため、調理したものは出なかった。しかし、毎日いろいろな種類の菓子パンやチーズケーキを味わって食べることができていい思い出になったと言っている。

りんごの木

西宮市の幼稚園、小・中学校には、西宮並木後援会から寄贈されたりんごの木が中庭や校舎の横に植えられている。この運動は、後援会の方が「何か震災復興の象徴にする運動がしたい」と思い、市内の亡くなった生徒の数だけりんごの木を植えることを思いつき、知人に呼びかけたことから始まった。「りんごの木を見た時、ふと由来を思い出し、亡くなった先輩たちの命にそっと心の中で手を合わせてくれれば...。」そんな思いが詰まっている。

今、そしてこれから

阪神・淡路大震災から12年経った今、私は環境防災科に入学し、多くのことを学んできた。環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、いくつかあるがやはり一番は阪神・淡路大震災だ。阪神・淡路大震災で多くの方に助けていただき、今私は生きている。環境防災科で災害や防災について学ぶことで、何か恩返しをしたいと思ったからだ。この学科に入らなければ、阪神・淡路大震災はただつらい体験としか記憶に残らなかっただろうし、災害や防災について興味を持つこともなかっただろう。そもそも、阪神・淡路大震災が起こらなければ、環境防災科は設立されなかったと思う。

環境防災科で多くのことを学んできたが、その中でも2つのことが印象に残っている。

1つはボランティアについてだ。環境防災科では、授業以外にもセミナーやボランティア活動に参加する機会があり、普通に生活していたらできないような活動にも多く参加することができた。淡路青少年の家で行われたボランティアスキルアップに参加して、ボランティアとは見返りを求めるものではなく、無償な行為であることを知ることができた。

パキスタン地震やレイテ島の地すべり災害、ジャワ島中部地震の募金活動では、小さな子供からお年寄りの方々までたくさんの方が立ち止まり、募金してくれたことにとても感動した。そして、「頑張ってるね」と優しい声を掛けてくださり、自分が集めたお金が少しでも被災者の方の役に立つと思うととても嬉しかった。そして、募金活動に参加することで、お金を無駄使いしないきっかけにもなった。

石川県能登半島地震のニーズ聞き取り調査では、生まれて初めて被災地に赴いてのボランティアをして、日頃から地域の人々と交流を持ち、いざというときに助け合える関係を築くことがどれだけ大切かということを実感した。このようなことは、実際に自分がしなければわからないことなので、これからもボランティア活動には積極的に参加していきたい。

2つ目は、防災についてだ。防災とは、事前に備えておくことであり、これを行ったか行っていないかで、被害の大きさは変わる。私の家では、震災前は少し食料を備蓄していただけで、家具の固定も非常持ち出し袋の用意もしていなかった。今思うと、こんな状態で家族全員無事に助かったのは奇跡に近い。震災後は、タンスや本棚は金具で固定し、非常持ち出し袋も玄関に一番近い部屋に置いている。そして、家の中では常にスリッパをはく生活を心掛けており、枕元には懐中電灯と靴下が入った箱を置いて寝ている。しかし、これでいつ災害が起きてても安心というわけではない。防

災に終わりはないからだ。これからも、常に防災について考えていきたい。

環境防災科で多くのことを学ぶとともに、将来の夢を見つけることもできた。それは、警察官になることだ。幼い頃から漠然と警察官になりたいとは思っていたが、環境防災科で災害や防災について学んでいく上で、災害や防災とも関わった仕事がしたいと思い、警察官になろうと決めた。警察官となり、市民を犯罪や事件、災害から守り、平和で安全な社会を築いていきたい。

阪神・淡路大震災を経験して、助け合いの素晴らしさやライフラインの大切さ、命の尊さを学ぶことができた。この「語り継ぐ」が、多くの人に阪神・淡路大震災のことを考えてもらうきっかけとなれば嬉しい。そして、この「語り継ぐ」を環境防災科の伝統としていつまでも後輩たちに引き継いでいてもらいたい。

これから先、あの日の記憶を少しでも忘れないためにも多くの人に震災体験を語り継いでいかなければならない。それが阪神・淡路大震災を経験した私に与えられた使命だから…。

生きてこそ

神戸市須磨区高倉台
袋田 理歩

...記憶...

当時、私は5歳で震災の記憶はほとんどない。記憶に残っているのは、震災後、長田のまちを見て母が泣いていたこと、本庄保育所のアヒルがどうしても気になって父と見に行ったこと、母も父も忙しそうにしていたこと。このような記憶も所々しかなく、当時5歳だった私はどのように感じたのか思い出せない。

しかし、この12年間、小学校、中学校、高校と震災について学び、神戸が悲惨な状況だったこと、お互いが支えあったこと、そして、今もなお、震災で苦しんでいる人がいることを知った。

...震災当時...

1995年1月17日 5:46

私たち家族は全員寝ていて、下から突き上げられるような衝撃で目が覚めた。真っ暗で何がなんだか全くわからない状況が何分か続いていた。そのあと、母が手探りで懐中電灯を探し、やっと身の回りが見えるようになった。ガラスのコップが1つ割れているだけだった。あと、当時、金魚を飼っていたが、水槽から水が漏れたりしただけで大きな被害は全くなかった。

懐中電灯にラジオが付いていたので情報を得ることができた。初めは「兵庫県で地震がありました」というだけのあやふやな情報だったが、死者の数、行方不明者の数が増えていくにつれ、事の重大さがわかった。時間の経過とともに悲惨さが増していった。

...長田のまち...

父の会社は震災の被害が非常に大きかったといわれる長田にあった。

震災から3、4日経って少し落ち着いた頃に父の会社を見に家族で長田へ行った。長田にあった多くの工場やビルがほとんどなくなっていた。そのため、異様なほどに遠くまで見えた。普通なら途中に障害となる建物が建っていて絶対に見えないくらい遠い場所まで見えていた。

『焼け野原』

その言葉がびったりだった。

ふと横を見ると母が泣いていた。小さかった私はなぜ泣いているのかわからず不思議に思った。そして、初めて見る景色とあまりの静かさがとても奇妙だった。

今、あの光景を見たら私も母と同じように泣いているだろう。

「ここが本当に毎日通っていた長田？」

「ここはもともと道路？いや、家だったのか？」

「父の会社はどこへ消えてしまったんだ？」

父の会社は倒壊し建物の原型を留めていなかった。父の会社だけではない。周りにあった建物は何もなかった。

父は長田の被害の大きさを聞いて一番に従業員の方の安否が心配になり、必死で連絡したらしい。このとき、連絡がなかなかとれなく、ライフラインの大切さを改めて実感したという。幸い、従業員のほとんどの方は避難所で生活をして、何人かは親戚の所へ行ったりしていた。しかし、会社に朝早くから来ていたビルの管理人さんは狭い管理人室の椅子に座ったまま亡くなっていたそう。

...震災後の数日間...

私の住んでいた高倉台では被害はほとんどなかった。ライフラインや電気までもがすぐに回復した。しかし、高倉中学の校区内である離宮公園・須磨寺側は建物が倒壊したり、道路がぐちゃぐちゃになったり、大きな被害があった。

須磨寺に住んでいた親戚が何日間もお風呂に入りに来ていた。私は、毎日お客さんが来てくれて楽しかった。父の会社も倒壊し仕事に行けないので、昼間、父や母も家にいた。普段は仕事で家に昼間いることがなかったので私はとてもうれしかった。小さかった私にとってはうれしいことも多々あった。し

かし、それは、何も知らなくて、状況のわからない私だけであり、両親はとても苦労していただろうと今になってやっとわかった。

避難所に知り合いがいたというのもあって、震災から数日間は、ほとんど毎日、朝から昼にかけて母がおにぎりを作ったり、ペットボトルに水を入れたりして、それを父がバイクで長田の避難所まで持って行っていた。

父は、会社が倒壊したため、会社にあった機械もすべて使えなくなり、仕事をする場所もない。従業員の方たちもいつから働けるのかもわからない状況で、経済的にも精神的にも苦しただろう。母も、自分たちの生活がこの先どうなるのか不安ただらう。この状況で、ボランティアをしていた両親をすごいと思う。まさに被災者が被災者を助けていた。しかし、震災時、困っている人を助けるのは当たり前であり、自分に余裕があるかないかなんて関係なかったらしい。ボランティアをボランティアと認識せず、助け合っていたそう。

父は、「阪神・淡路大震災のとき神戸の人々の絆は素晴らしいといわれていたが、あんな大きな地震が起こって、被害が大きかったら、人間として誰もが助け合うだろう。」と言う。私も、その話を聞いて、「そうだったらいいな。」と思った。

...本庄保育所だったみんな元気ですか？...

当時、両親が長田で働いていたため、私は長田の本庄保育所に通っていた。震災で父の会社が倒壊した影響で私は家の近くの保育所に移ることになった。当時は、保育所を移る理由なんてわからなかったが、とても嫌がっていて、母に「1カ月だけだから」と言われて、やっと通い始めたそう。嫌がっていたわりに、すぐに新しい保育所にも慣れ、友達ができた。

震災発生日から本庄保育所には一度も行っていなかった。私はどうしても本庄保育所で飼っていたアヒルが気になり父に連れて行ってもらった。そして、家にいた母に「ママ、アヒル元気だったよ」と伝えた記憶が薄っすらとある。母はそんな私を見てなぜかホッとして笑えたと言う。

本庄保育所での写真は家にたくさんある。小さい頃、とても泣き虫だったようで、私は目に涙をためて、先生に抱っこされている写真が多い。その写真の中には友達がたくさん写っている。今考えるとその頃の友達はどうしているのだろうか。

「みんな元気ですか？」

...仮設住宅...

私は、震災から約1年後に小学校に入学した。小学校にはメイングラウンドとサブグラウンドと2つあった。メイングラウンドはとても広かった。そのグラウンドの半分以上に仮設住宅が建っていた。入学当時から仮設住宅があり、5、6年のときにやっとすべての仮設住宅がなくなった。正直、私たちにとって仮設住宅は学校の一部となっていたので、逆になくなったとき違和感があった。

仮設住宅に住んでいる人たちと交流もあった。運動会ときには、たくさんの人が見に来てくれた。しかし、仮設住宅がなくなるにつれ、グラウンドは広くなるが、運動会を見に来る人は減っていった。行事以外にも交流はあった。小学生の私たちにとても優しいおばあちゃんがいて、時々そのおばあちゃんのところ放課後会いに行ったりしていた。そのおばあちゃんが急にいなくなったときはとてもさみしく感じた。でも、これが復興なんだと思った。

...今、現在...

今、私はこうやって舞子高校環境防災科で防災について学んでいる。震災がなかったら環境防災科はなかったらう。私にとって募金やボランティアというのは特別なものただらう。市民の人たちが改めて防災を見直すこともなかったらう。このように私は震災によって多くのことを学んだ。学んだこと以上に失ったものや、悲しみのほうが大きいのかもかもしれない。しかし、悲しみを繰り返さないためにも震災で多くのことを学んだという事実を認め、震災の教訓を語り継がなくてははいけないと思う。

震災から12年が経って、今もなお震災が残した大きな傷に苦しんでいる人たちがいる半面、被害の少なかった人たちもいるし、震災を知らない子供たちも増えてきた。その間で温度差が生まれているのではないらうか。

しかし、震災の教訓は決して風化させてはならない。「もう、地震は来ないだろう」と思っている人も多いと思うが、今後、また地震が起こるといのは確実である。それが遅かろうと早かろうと、震災を経験した私たちが最先端に立って行かなくてはならないと思う。

私たちができることは語り継ぐということ。そして、舞子高校で学んだ防災を広めることである。だから、どんな状況であっても人との交流を大切にしたい。「どのようにして伝えるの?」「交流の場は?」というように課題もたくさんあるだろうと思うが、何事にも積極的に取り組むことで、人との接点は増えると思う。小さいことのように思うが、このようなことを積み重ねることによって地域の防災力とながっていくのだと思う。

...これからのわたし...

学生の間

高校卒業後、大学へ行き、大学でもボランティア活動や海外の交流に積極的に参加したいと思う。環境防災科ほど防災について活発に活動している学校はなかなかないと思うが、できる限りいろんな活動に参加したい。防災を広げるためにも、震災を語り継ぐためにも、いろんな経験があるほうがリアルに伝えることができる。そして、防災はすべての人と関わりがあるので、学んだことはどんな形であれ将来役立つことは確かである。

シューズデザイナー

私の夢はシューズデザイナーになり、自分のメーカーを持つことだ。震災と直接関わる仕事ではないかもしれないが、防災という点ではつながると思う。

途上国では、今もまだ、靴を履く習慣のない国が多くある。普段履いたら傷んでしまうという考えがあったりするそうだ。だから、まず、靴の大切さを知ってもらいたい。貧しくて、戦争のある地域だからこそ靴は大切である。靴は私たち人を飾るという役目以外に、私たちの体の一部を守るという役目がある。むしろそっちのほうが重要である。このことを途上国の人にどのようにして知らせることができるだろうか。途上国でも靴の生産はしている。途上国で靴を生産している会社と交流を持ち、何らかの形で関わっていきたい。そして、私がメーカーを持つことができれば、ファッションとして使用する靴を生産するだけでなく、途上国で身を守るために使用する靴を生産していきたいと思っている。

家庭を持って

まず、家族に防災の大切さを伝え、防災に関心を持ってもらいたい。環境防災科で学んだ「家具の固定」や「非常用持ち出し袋」など多くのことを日常生活に取り入れ、そして、阪神・淡路大震災という大きな被害をもたらした震災によって、市民や政府は多くのものを失い同時に多くのことを学んだことなどを語り継いでいきたい。

家庭を持ってもボランティアなどには参加したいと思っている。家族連れでもボランティアはできるし、もし現地へ行けなくても、支援物資の調達や、募金活動を行うなど、できることはたくさんある。このような活動を家族でできたら、防災を身近に感じることができ、防災意識を常に高く維持できる。そんな災害に強い家庭を作っていきたい。

振り返るあの日、あの時

神戸市垂水区狩口台
船橋 悠

ゴゴゴゴォー！！！！

激しく迫ってくる音、飛行機が落ちてきたような突き上げる揺れ、ゆりかごを激しく揺らされているような左右の揺れ。それが「阪神・淡路大震災」である。

5歳であった私が地震発生後の記憶をこれほど覚えているのは珍しいと感じるほど、覚えているあの日、あの時。好奇心旺盛であらゆることに興味を持つ性格であったため1つ1つにいろんな感情を働かせていたのかもしれない。そして、あの地震が私に忘れさせないほど衝撃的なものだったといえるだろう。母から聞いた話も加えながら記憶をたどっていこうと思う。

父、母、姉(7歳)、弟(1歳8ヵ月)の5人家族。当時、私は5歳で幼稚園に通っていた。幼稚園は毎日が楽しく今でも鮮明に覚えている出来事が多い。

そんな平凡な日々を送っているとき、凍るような寒さの季節にあの大地震は起きたのだ。

前兆なんてあったのだろうか。人々は、あの雲は地震の前に起こるものではないか？16日の晩の月の色が赤かったのも関係があるんじゃないか？とさまざまな変化を口にするが、私にはそんな記憶はない。確かに、自分のことしか考えず遊びまわっていた毎日の中で、小さな私が周りの変化に気づいていたとはとうてい思えないのだが。

震災前日、母は今まで体験したことのない変な地震を体験したらしい。「ストン」と落ちるような地震。しかしその揺れは観測されなかったのか、テレビには流れなかったそうだ。

その晩、私と姉と弟は玄関から一番遠い部屋で敷布団を敷いて並んで寝ていた。

~ 1995年1月17日 ~

父の仕事は家の設計や施工で毎日忙しく、帰りはいつも真夜中で泊まりになる日も多かった。この日も帰ってきたのは朝の3時頃だった。父が帰ってきてすぐ母も一緒に眠りについたそうだ。

午前5時46分。寝ぼけていたのか地震の揺れは全く覚えていない。

何が起きたか全く理解できないまま目を覚ました。父と母が私たち兄弟の名前を呼んでいる。私の周りには何かに囲まれているように狭く、とにかく真っ暗だ。私の名前を呼び続けている父の姿はもちろん見えない。しかしそれほど怖いとは感じなかった。自分がどうなっているのか、周りがどんな状況なのか全くつかめなかったからだと思う。ただ、父と母が短い言葉で交わす会話から何だか大変そうだと人事のように感じたのを覚えている。

まだ父が私を呼び続けている。ガサゴソ物を動かしている音もする。

「悠～！かくれんぼじゃか！」

父は早く私を見つきたいのだから小さな私に恐怖心を持たせないようにと『かくれんぼ』という言葉を選んだそうだ。

何度かやりとりをして、父に周りに何があるのかを聞かれた。やはり狭く真っ暗としか分からない。私は自分の周りを取り囲んでいるものを触った。サラサラしている。『...木？』

少し考えた結果「藍(姉)の机の下におるで～」と答えた。...父が来ない。私は父の呼びかけにひたすら返事をした。「悠！」私を見つけた父がその暗闇から引っ張り出してくれた。

父、母に連れられて外に出た。玄関に行くまでに通った台所には食器が割れ、破片が一面に散乱していた。私を見つけている間、母は姉と弟と一緒にリビングの中心で身を寄せ合っていたそうだ。

後から聞いたのだが、私がいたあの真っ暗な場所はタンスが倒れて傾いた真下だったらしい。タンスの角が倒れる途中でふすまに引っ掛かり、それによってできた隙間に私はいたのだ。もしふすまがなかったら...もしふすまに引っ掛かっていなかったら...と考えると恐ろしい。小さな私があの大きく、重たいタンスの下敷きになっていたら私は今確実に生きていないだろう。

当時住んでいた団地は割と近所付き合いが多く、仲が良い地域だった。私たち家族が住んでいる1つ

下の階(2階)にはいつも優しく声をかけてくれるおじいさんとおばあさんの老夫婦が住んでいた。父は私たち家族を一番安全だと思われる車の中に避難させてから、まず最初にその家のドアを叩いた。そして無事を確認するやいなや近所の家にも安全を確認しに走っていった。父が階段を走り回っている姿は今でも覚えている。

その後で父は家から徒歩5分くらいの場所に住んでいる祖父母の安否を確認しに行った。何かが引っ掛かっていたのかドアがなかなか開かなかったが、中から「大丈夫や!」という祖父母の声がし、とりあえず一安心したそうだ。あの大きさの地震の中で家族や近所の知り合いが全員無事だったのは不幸中の幸いだったと思う。

何度か大きな余震が続いていた。私たち兄弟は父と母が見守る中もう一度車の中で眠った。この状況で寝れたのも状況の深刻さを全く知らなかったからだと思う。

目覚めると、母が家から持ってきたリンゴをむいてくれた。「食べるもんあって良かったなあ。」などと話しながら食べていた。母がにぎってくれたラップに包まれたおにぎりも食べることができた。

朝食を終え、私は地震後初めて家の中に入った。父母に言われ土足のまま中に入った。私と姉は普段土足で家に入るなどよく叱られていたため、家の床に足を踏み入れるのを少しためらったような気がする。家に入って、私が印象に残っているのはやはり台所だ。食器が割れた破片は散らばり、テーブルの上に置いてあったものはほとんど下に落ちていた。私たちが寝ていた子供部屋では本棚から飛び出した多くの本が散らばっていた。つまり、足元はぐちゃぐちゃだった…。

父と車の外に出て周りを見渡すと家屋の倒壊はなかったのだが、すぐ横の道にはあちこちに亀裂が入っていた。地面が割れ、隆起していたところも少なくない。そんな地面の上を車が通るたびにコンクリートの破片がガタガタと大きな音をたてていた。通りかかる車の運転手が「ここ通れますかね?」と苦笑いで父に聞いていたのを覚えている。

神戸には今まで父が設計してきた家がたくさんある。父は一生懸命に造り上げた大切な家やそこに住んでいる家族の方がどうなっているのか心配だと言い、車を走らせた。ちょうど昼過ぎ頃だったそうだ。家族全員で車に乗って、垂水区はもちろん西区の辺りにも行った。道路の状況が悪いため、時間をかけつつもいくつかの家を順番に回っていった。父が建てた家は多少瓦が落ちていたりはしたものの、あの大地震に負けず、すべての家が無事だった。そして、家の住人の方も全員が無事だったのだ。住民の方が父に頭を下げて感謝している。それらの人の中には、私たち家族がまだ水が復旧しておらず、洗濯やお風呂に困っていると聞き、家族を家に招いて下さった方もいた。今でもたまに連絡を取って食事したりと付き合いを続けている家庭もある。記憶には残っていないが、その話を聞いた今でも人の命を救い、助け合いができるほどの人間関係を作り上げた父の仕事は本当にすごいと感じている。

夕方になった頃だろうか。東の空がいやに黒かったのを覚えている。その黒い空の下では長田や東灘のまちが誰に止められるでもなくただひたすら燃え続けていたと後にわかることになる。あの時、家、財産、そして命までもがたくさん消えていったのだろう。泣き叫ぶ人々、絶望し茫然と立ちつくす人、崩れた家の前に座り込む人。ただ「何か黒くて変な空やなあ。」としか感じていなかった私だが、後から考えるととても恐ろしく、胸が詰まった。

～地震後の日常生活～

水、電気、ガスのライフラインは全て停止。情報の入手は車のラジオだけだった。この地震が起きたと同時に私たちの生活は今までの日常とは全く変わっていった。

まず、私の大好きだった幼稚園が休園した。再開したのは1月末だったらしい。休園中に自分の組の担当だった先生が家庭訪問をしに来てくれ、とてもはしゃいで喜んでいたので。

電気は地震当日の晩に使えるようになった。料理をすることも、寒さを和らげることもできる電気が使えるようになったのはとてもありがたかったという。しかし、ガスは全く使えないため調理するのにホットプレートやカセットコンロが大活躍したらしい。

水は毎日来てくれる給水車にもらいに行った。姉と私は2Lのペットボトルを1本ずつ持ち、母はポリタンクを持って並んだ。そこには近所の人もたくさんいた。順番が来るのを待っている間、母が親しかった人やそうでなかった人とも会話している様子を覚えている。水をいっぱいに入れてもらい、「あ

りがとう」と言うと笑顔で答えてくれたお兄さん。小さい私たちは「重たい～！」と叫びながらも一生懸命 3 階の家まで持って上がった。それくらいしかできることがなかったのだろう。「お手伝いは水運び」というくらい毎日階段を往復した。

並んで待っているとき、母が「すごいなあ、あの人。」と言った。母が感心して見ていたのはキレイにお化粧をしている人だった。私は何がすごいのか理解できなかったと思う。「うちは水を飲むことも遠慮しているのに、中にはお化粧を流すのに水を使う人もおるんやなあ。もったいない気するけど。」と言ったそうだ。つまり、人にはそれぞれの考え方や優先順位があって、して欲しいと思う要求も違うのだろうと感じた。

～地震から月日が経って...～

地震から月日が経った頃、私と姉は母に連れられて仮設住宅にも時々足を運んでいた。寒い冬には窓の隙間に新聞紙を貼りつけ、畳の下にも新聞紙を敷いて寒さを和らげる工夫をしている家もあったそうだ。

ある時、仮設で一人暮らしのおばあちゃんの家へ話をしに行った。この訪問は私の記憶にも途切れ途切れだが残っている。初夏のころだったように思う。クーラーもつけずに暑く、むわ～とした空気に包まれた仮設住宅にそのおばあさんは住んでいた。私たちが行くと嫌がることなく嬉しそうに迎えてくれた。今思えば、姉と私が孫の年齢くらいだったからだろうかと思う。部屋に入ると左手側に小さなキッチン、目の前には畳に 1 つの丸いテーブルが置かれていた。何日かそのおばあさんの家に行った。時々母が多めに作っておいたおかずを持って行くこともあった。何度か母と接するうちに、おばあさんは話しながら涙を流すようになった。私はその仮設住宅の様子や母がおばあさんの背中をさすっている姿を今でも思い出すことができる。当時の私はそれらを見て何かを感じていたのだろう。

母と私たちは仮設にお弁当を作ったり、届けたりする手伝いもした。お弁当を配って回るとみんな笑顔で「ありがとう」と受け取ってくれたそうだ。時には子どもである私たちにあめやジュースを頂いたこともあったそうだ。

仮設の人たちと焼き芋パーティーや地域の福祉センターを借りてコンサートもした。そのコンサートで私たちは母のギターに合わせて「しあわせ運べるように」を歌った。一番前の席に座っていたおじいさんやおばあさんはみんな涙を流してくれていた。音楽はやはり心の癒しになるものだと私は思う。

笑顔の少なかった人たちがどんどん笑顔になっていく。母はボランティアをやっている日々の中でそんな柔らかな表情を見るたびに、疲れが一気に吹っ飛んでいくような気分になったそうだ。小さな私は母に引っ付き虫のように付いて回っていた。ボランティアを楽しく感じていたのだろうか、私たち兄弟は母の行く先に喜んで付いて来たという。

すぐ近くの地域である須磨区ではたくさんの家屋倒壊が見られたが、震源に近かった割に比較的被害が少なかった私たちの地域でもだんだんと新しい影響が出始めてきた。父の仕事は建築関係であったため今まで以上に仕事が忙しくなったのは言うまでもない。多くの地域で家が崩れていたため、全壊、半壊、一部損壊という判定をしに毎日あちこちを走り回っていたそうだ。その判定が終わってからは、家を失ったたくさんの人たちが家を建てて欲しいという依頼を寄せてくる。その数は想像を絶するものだったと思う。そんな仕事に追われる毎日地震後の父は仕事場に泊まり込むことが一段と増えたそうだ。

父が学んだこと、それは「家は私たちに生活を与えてくれ、私たちがいるんなものから守ってくれるものだが、時に多くの命やものを一瞬にして消し去ってしまう。」ということである。災害に強い家を設計し続けること、それが父の新たな目標となった。

～「語り継ぐ」の制作を通して～

地震直後、避難、家族の行動、ボランティア…。私はこんなにたくさんの事を目の当たりにしてきている。本当に貴重な経験だと思う。しかし、これらの出来事の中で私の記憶に残っているのはほんの一部であった。この「語り継ぐ」の制作を通して、私自身今まで知らなかったことを母からたくさん聞かせてもらった。私が覚えている記憶と家族の記憶を合わせることでより細かく当時を振り返ることができたと思う。

人間は自分が経験してきたことでもいつかは忘れてしまう生き物だ。だからこそ後世へ語り継ぐべき大切な事柄は人から人へと情報を交換し合い、いろんな観点からの知識を増やし、伝えていくことが大

切だと感じた。

私が「語り継ぐ」を制作して震災を思い出したように市民の人にも思い出すきっかけを与えることが重要だと感じた。今そのような役割を果たしているのが有名な「神戸ルミナリエ」である。神戸の周辺に住んでいれば行ったことがある人も多いと思う。あのイルミネーションは震災で傷ついた神戸のまちに元気や活気を与えようという意味と震災で亡くなった方への追悼の意をこめて1995年から開催されたものである。その言葉の通り、ルミナリエには毎年あふれかえるほどの人々が神戸を訪れるようになっている。今、このルミナリエをなくすという話を何度か聞いたことがある。神戸のまちを暖かく照らしてくれ、今でもなお人々に震災を思い出させることができるこの行事をなくしてはいけないと私は思う。

～環境防災科4期生、これからの私～

私はこの環境防災科の4期生として舞子高校に入学した。入学のきっかけとなったのは姉の存在が大きかったように思う。環境防災科2期生である姉から環境防災科の活発な行動力、授業内容を聞いてこの学科のカリキュラムに興味を持つようになっていたのだ。実際に環境防災科の生徒として過ごしてきて、本当に多くの知識を得ることができた。あらゆる方面で活躍している講師の方々の講義では現実味のある、私たちにとって無知であることをたくさん教えていただいた。これらはやはり全てが「命」を軸とした学習であったと思う。特に消防学校では消防士の方が市民の命を守るために本当に厳しい訓練を行っている姿を見て、命の重みや尊さを改めて実感した。

今までの学習で一番大切だと感じたのは「人と人とのつながり」である。自分の命、自分と関わるたくさんの命を守るために、そして豊かな命を生きるために人とのつながりは一番強い力になると感じている。私たち人間は絶対に1人では生きられない。誰かに支えられて、誰かを支えながら生きていく。それをしっかりと頭に入れてこれからの人生を歩んでいきたい。

私の将来の夢は作業療法士である。福祉と防災は一見何の接点もないように思うかもしれない。しかし、環境防災科での授業を受けていく中で福祉は防災と切っても切れない関係にあることがわかった。災害弱者というのは自分だけでは災害に十分な対応ができない人であるため、その人の家族や家、部屋など周りの環境を整えていく必要があると思う。

災害弱者である多くの患者さんと関わる職業。環境防災科に入ってから強く興味を持つようになった「心のケア」も取り入れながら働いていきたい。私が作業療法士になることができたなら、まず施設利用者の方々の支えになりたい。最終的には患者さんにとって災害に強い環境をつくれるよう行動していきたいと思う。それがこの環境防災科で学んだ阪神・淡路大震災の教訓を生かすことや、防災を広めることにつながると考えたから。

阪神・淡路大震災。失われた6434名の命。それを6434の命としてひとまとまりに終わらせるのではなく、6434名1人1人の命をみて防災や命のはかなさ、尊さについて考えを深めていきたい。私が知っているあの震災を被災者の責任として、環境防災科の生徒として語り継ぐこと。それが、私にできる最大の役割であると思う。

「歩」

高砂市北浜町
楨野 翔太

ふと、目が覚めたあの時。隣には父がいた。家が揺れていた。これが地震だと知ったのはもっと先のことだった。何も知らなかった。この地震が 6434 人もの犠牲者を出したこと、火災があったこと、ライフライン停止、避難、ボランティア…。自分には、この日もいつもと同じ日常生活が用意されていた。何に困ることもなく、いつもと変わらない 1 月 17 日だった。

『1 月 16 日月曜日』

僕は生まれたときからずっと高砂に住んでいる。当時は、祖父・祖母・父・母・自分(5歳)・妹・弟の 7 人で住んでいた。家は市街地から離れていたため近くには田んぼや畑があったり、川があったり、山を越えれば海もあった。毎日保育園に行ったら友達と遊んで、帰ってきてからは公園で野球や鬼ごっこ、かくれんぼをして遊ぶのが何よりも楽しかった。1 月 16 日もそうやって過ごしていた。そして、夜の 8 時にはいつものように布団に入り、2 階の寝室で妹、弟と一緒に眠った。

『1 月 17 日火曜日』

午前 5 時 46 分すぎ。本当に突然だった。「ゴォォー」という音は記憶にはないが、今まで体験したどの地震よりも大きな揺れ。何かのアトラクションに乗っている感じだった。恐怖までは感じさせるものではなかった。僕はその揺れで目を覚ましたが、父が隣にいて安心したせいか、すぐに寝てしまった。妹も弟もこの揺れに全く気付かずに寝ていたという。揺れが収まるとすぐに、父と母が 1 階で寝ていた祖父母の無事と家の中の被害はないか確認したが、祖父母は無事で僕の家には全くと言っていいほど被害はなかった。

再び起きたのは 7 時ごろだった。テレビをつけると、朝から晩までずっとこの地震のニュースが報道されていた。阪神高速が横倒しになり、長田で同時多発火災が起こり、ビルや家の倒壊…。最初は両親も何があったのかわからなかったらしい。神戸と高砂。たった数十 km 違うだけなのに、被害はまったく違った。別世界だった。祖母は、あわてて神戸のハーバーランドに住んでいる親戚に電話したが、繋がらなかった。しかし、社の親戚の方に電話してみると、ハーバーランドに住んでいる親戚は誰も怪我なく無事だということを知ることができた。無事を確認した後、父は市内にある職場へ、僕は母に連れられ車で保育園へと向かった。

『あの日から数日後』

親戚がハーバーランドに行くと言ったので、缶のジュースとカセットコンロのガスを持って行ってもらうことにした。カセットコンロのガスは高砂や姫路でも売り切れている店が多かった。ハーバーランドに住んでいる親戚はマンションの 5 階に住んでいた。地震で大きく揺れ、窓ガラスは割れて破片がその辺り一面に飛び散っていた。ライフラインが寸断されてしまったため、エレベーターはもちろん止まってしまい、水も出なかった。そのため、1 階まで階段で降りて水をくみ、それを 5 階まで持って上がってこなければならなかった。ライフラインが復旧するまで毎日そんな生活をしていたなんて、想像できなかった。普段の何気ない生活がどれほど便利なものだったかを思い知らされたと言っていた。

『北浜小学校』

小学生になり、阪神・淡路大震災があったということはほとんど忘れかけていた。学校では毎年 1 月 17 日になると避難訓練が行われた。地震を想定したもので、たまに消防官の方が来てくださるときもあった。どの年もだいたい 10 時くらいに警報が鳴り、避難した後校長先生の号令により、あの震災で犠牲になった方々に黙とうを捧げていた。この日だけは阪神・淡路大震災があったことを必然的に思い出していた。また、小学 2 年の時に阪神・淡路大震災をモチーフとした映画を見たことがある。震災によってマンションの 1 階部分だけが潰れて、小学生の女の子とその子の家族が死んでしまうというものだった。僕は、震災の時神戸がどんな状況にあったのかよく知らなかったのだから、映画を見て小学生なり

に衝撃を受けたことを覚えている。

『鹿島中学校』

中学校に入学し、技術という授業が始まった。ある日のその授業中、担当の先生が唐突に「先生、阪神・淡路大震災が起こったとき、ボランティアに行ったんですよ」と言い、そのときにボランティアで何をしたかを話してくださった。その先生は同僚の先生と一緒に、当時の生徒とたくさんのおにぎりを作り、避難所であった神戸市内の中学校へ持って行ったという。ここではボランティアをしている方々がたくさんいたことに驚き、中学生、高校生といった若者も大人に混ざり受付や救援物資を配るなどのボランティアをしていたことに感心した。その学校で先生はボランティアで仮設トイレの掃除をした。言葉にできないくらい汚れていて、そんなトイレを見るのは初めてだった。そして、溜まっていた汚物の処理をし、便器を磨いたとおっしゃっていた。小学生の時から人の役に立つことがしたいと思っていた僕は、ボランティアの話聞いて興味を持ったし、実際に自分もボランティアを試してみたいと思うようになった。

また、中学校になっても同じく1月17日には毎年震災のことを忘れないために、犠牲になった方々のことを思い出すために、避難訓練が行われた。しかし、震災から約10年経っていたせいか、震災を体験した人もいないせいなのか、いつもダラダラとした雰囲気で行われていて先生方や消防官の方が怒鳴っていたのをよく覚えている。阪神・淡路大震災に対する意識がこっちはほとんどないような気がした。今になり神戸との意識の差がはっきりとわかった。

舞子高校環境防災科の存在を知ったのは、中学3年になるうとしていた春で、本当に偶然だった。通っていた塾で模試があり、初めて志望校を記入することになった。それを書くために志望校一覧という紙が配られ、その中に「舞子高校 環境防災科」と書かれていておもしろそうな学科だと思い、夏休みに体験入学に参加させてもらった。面白半分で行ったはずだったのに、「災害と人間」や「環境と科学」などの授業を受けてこの学科に興味を持つようになった。それが始まりだった。環境防災科は阪神・淡路大震災について本当に震災を経験した人から講義してもらったり、ボランティアや環境問題について勉強したり、また実際に地域に出て行き多くの人に防災を伝えているということを新聞紙上やホームページで知った。僕自身、このような活動にとっても興味があった。この年、2004年は新潟県中越地震が起こった年で、自分も募金活動を校内で行うことになった。国内で災害が起こったということもあるのか、本当に多くの生徒や学校周辺の方々が協力してくれ、たくさんの募金が集まり嬉しかったことを今でも忘れられない。そんな活動もありボランティアには特に興味があった。そして、僕も環境防災科の先輩方みたいに現地に行きボランティアがしたいと思い「この学科に入りたい」と強く望むようになった。このことが最終的な進路を決めた動機となった。

『舞子高校環境防災科』

環境防災科に入学してからは、毎日がこれまでの生活とは違い、遠くかけ離れた場所に来たみたいでとても新鮮だった。授業がある度に外部講師の方が阪神・淡路大震災について話して下さったり、地震や温暖化について学んだり、実際に淡路島の野島断層保存館や消防学校に足を運んで勉強したり、体験し身体で覚えたりとその1つ1つがおもしろく毎日が充実していた。

入学してから、あっという間に3年間が過ぎようとしている。3年間いろんなことがあった。いろんな場所にも行った。東京に環境防災科の活動発表をしに行ったり、徳島や高知では現地の高校生と交流をした。また、新潟県長岡市、石川県輪島市に行きボランティアをした。環境防災科でいろんな人と出会い、防災・災害について多くの知識をつけることができた。そのような活動の中で「消防官になる」という目標を見つけることができた。環境防災科は自分の人生で欠かせない存在になった。僕はこの環境防災科を誇りに思う。

『未来に...』

都市が発達し災害が進化している今日、日本に住んでいる限りどこにいても災害は起こる。そのため、防災は僕たちの生活から切っても切れない存在になりつつある。今後予想されている東海・東南海・南海地震。それらの災害に対応するために早急に備えをしていかなければならない。阪神・淡路大震災が

ら学んだことは多い。だからこそ、環境防災科が中心となり阪神・淡路大震災の教訓をたくさんの人に伝え、防災を全国、世界へと発信していかなければならないと思う。そして、災害から1人でも多くの命を救うこと。それが僕たち環境防災科に課せられた使命だと思う。

「高砂市に住んでいた友人の体験談」

『1月16日』

家族4人(父、母、自分(5歳)、妹)で高砂市内に住んでいた。家は2階建てだった。この日は家族全員インフルエンザにかかっていたので家で過ごしていた。その日の夜はいつもより早く1階の寝室で眠りに就いた。

『あの瞬間』

1月17日午前5時46分。僕は寝ていて覚えていないが、母の話によると「ゴォー」という音がしたという。その音はまるで新幹線のような音だった。すぐに両親が起きて、自分と妹に布団をかぶせ、その上に母親が覆いかぶさってきた。そして、その上から父が覆いかぶさるような形になり揺れが収まるのを待った。揺れが収まるのを待っている間、天井から吊るしている電気や2階の底が今にも抜け落ちてきそうでもとも怖かった。この体験は両親にとって、人生でもっとも怖かったものだったと言っていた。揺れが収まると父が起き上がり、家の中に被害はないか状況の確認をしに行った。まずは玄関。靴箱の上に置いていた人形が倒れていた。キッチンではタイルが割れていた。風呂場、洗面所は特に異常なし。階段を上り2階へ。異常なし。家の中はそれ以外に目に見える被害はなかった。その後はラジオで被害状況の情報を聴きながら家族全員でもう一度寝ることになった。

『祖母の家へ』

朝になると、稲美町に住んでいる祖母の家に電話をした。しかし、なかなか電話が繋がらなかったことを覚えている。何度か電話をかけていると繋がった。祖母は無事だった。家の中が多少散らかっていたり、近くの家に被害が出ているということだったので、心配になりこの日は祖母の家へ行くことになった。朝ごはんを食べた後、すぐに車に乗り込み稲美町へ向かった。普段であれば45分しかかからない道のりだったが、上りの方面は混んでいて、その上高速道路も使えなかったため、いつもの倍以上の時間がかかった。また、行く途中パトカーや救急車の無数のサイレンが頻りに聞こえてきた。外を見ると高速道路ではパトカーや消防車、救急車が走り、下の道では普通の車が走っているような形だった。

昼前には祖母の家に着いた。周りの家を見渡してみると瓦が落ちていてビニールシートをかぶせてある家がたくさんあった。家の中が散らかっていると聞いていたのだが、ほとんど片付いていた。祖母の家で初めてこの地震による被害をテレビで見ることができた。というのも、僕の家にはテレビがなかった。チャンネルを変えても変えても地震のニュースしかしていなかった。そんな中、長田区が火災で包まれている光景が流れてきた。昼間なのに空は暗く黒っぽい灰色で、地上は真っ赤かだった。僕自身は「怖い」という感情よりも、被災地にいなかったから言えることだと思うのだが、映画やアニメを見ているような気持ちで「おもしろい」という感情の方が大きかった。

夕方には祖母の家を出た。帰り道は行きの時とは違い全然混んでいなかった。車の中では地震の情報をラジオで聴きながら自宅へ。ラジオを聴いていると、犠牲者の数は最初200名くらいだったのに、時間が経つことに比例しながら段々と増えていった。子供ながら、このことはとても驚いた。

『数日経って』

それから数日経ったのだが、余震は未だに続いていた。母は土山の職場で余震にあったとき恐怖を感じたという。そんなこともあったせいか、家族で地震の時どうするかということ話し合うことになった。例えば地震が起きたときに逃げる場所は家の近くの駐車場にする。非常用持ち出し袋は玄関に置いておく。もし地震があったら「171」の災害伝言ダイヤルに電話するなどということだった。この地震

で家族内の防災に対する意識が変わった。その約1週間後、地震対策としてタンスは固定して、高いところにものを置かなくなったし、寝る部屋にはタンスを置かないようにした。今まで1階で寝ていたが、2階で寝るようにした。また、市のボランティアが物資や募金を集めていたので、少しでも困っている方たちの役に立ちたいと思い、僕達家族は要らなくなった毛布やタオルを寄付することにした。

『最後に』

阪神・淡路大震災で印象に残っているのは、テレビで見た長田区の火災やアパートが崩れて自衛隊やレスキュー隊が救助作業にあたっていたことの2つだ。同じ兵庫県内なのにこれ程の被害の差があったことにとても驚いた。また、中学校のときに友人に「阪神・淡路大震災っていつあったか覚えとぉ？」と質問したことがあった。が、その人は知らなかった。その人だけではなかった。知っている人の方が少なかったように思う。意識の低さを知った。僕は、阪神・淡路大震災を直接的に体験したわけではない。しかし、このことをきっかけに被災地から見た震災でなく、被災地の周りから見た震災を伝えていけたらと思う。

「神戸市中央区に住んでいた友人の体験談」

1月17日5時46分。「ゴオオオオオ」という音で目を覚ました瞬間、部屋が大きく揺れた。「起きろ！！布団かぶれ！！」と父が隣で叫んだ。寝起きだったので、自分自身も両親も最初は何が起こったのか全然わからなかった。私は布団の中で揺れが収まるのをビクビクしながら待っていた。すると突然、揺れにより「ドンッ！！」と鈍い音を立てて弟が寝ていたところへタンスが倒れた。弟が下敷きになった。と一瞬そう思ったが、父が弟を抱き寄せていた。父の行動が早かったおかげでタンスの下敷きにならずに済んだ。もし、父の助けがなくそのまま寝ていれば間違いなく弟は死んでいただろう。揺れが収まり、家の中を見ると机や棚の引き出しは開き中のものはグチャグチャに散乱していたり、キッチンではほとんどの食器が割れて床に散らばっていたり、家の中の見える範囲での被害はひどかったが家自体には被害はなかったようだった。その数分後、外へ避難することにした。外は道路がズバーと割れていた。辺りを見渡すとあちこちで家が崩れていて、道路にはみ出しているものもあった。これが現実に起きていることだとは全く思えなかった。日も出ていなくどうしたらいいのかわからなかったので、とりあえず近所の人たちと話し合っで車で太陽が昇るまで待機することにした。私は車に乗るとすぐに寝てしまった。

日が昇り明るくなると、「さんとこのおばあさんが亡くなった」や「あそこの家の子どもが家の中に取り残されとった」などの情報が飛び交うようになっていた。また、水、電気、ガスのライフラインが寸断されギャーギャーと騒がしかったことを覚えている。そのため一度家へ戻り、インスタント類の食べられるもの、飲めるもの、カセットコンロなど使えるものを探した。家にあったものを持ち近くの公園へ。公園の地面は波打つようにグチャグチャだったことを今でもよく覚えている。そして、家にあったものを近所の人たちと分けて食べることにした。女性、子供を優先して分けることになった。「とりあえず元気出して頑張ろう」とお互いに励ましあった。

水道は数日間使えなかった。だが、近所の人が車で2、3日に一度水を取りに行ってくれ、それを分けてもらうことができた。もちろん、トイレは使うことはできなかった。みんな外ですることになった。家が全壊、半壊した方たちは水が復旧すると家へ戻り、使えるものを全部外へ出してきてそれぞれ親戚のところへ行ったり、「ここに残るんや」と言って残ったりする人もいた。私の家は大した被害がなかった。地震が起こった日から家へ戻ることができた。家で過ごすという普段当たり前だと思って生活していることだが、今考えてみるとその生活がとても幸せだったんだということを感じることができた。

この地震で多くの方々の尊い命が失われた。あの日から13年が経とうとしている現在、記憶が風化しつつある。だから阪神・淡路大震災を経験した私たちが、震災を知らない人たちに伝えていかなければならない。2度とこのような災害を起こさないために。

「震災、そして夢の実現へ」

神戸市北区小倉台
政田 達彦

「はじめに」

1995年1月17日、12年前のあの日、あの出来事を境に、今環境防災科で地震のメカニズムや、ボランティア、人の命の大切さを学び、発信している。そして夢の実現に向け日々努力している。あの阪神・淡路大震災がなければ...誰もが思うことである。しかし、その現実を受け止め、未来に向け発信し、語り継いでいくことが大事なのではないか。あの日が忘れ去られることがないように、風化してしまうことがないように、そして、あの日を未来の子供たちへと伝えていくことができるように。

「地震発生」

震災から12年、あの頃のことは正直あまり覚えていない。ドーン！という今まで聞いたことのない音がした。あの頃は揺れよりも、音のほうが印象に残っている。僕はその音で目を覚ました。恐くて動けず布団の中にもぐっていた。すると、上に大きくて重いものがどっしりと覆いかぶさるのを感じた。タンスカな、本棚かなと考えているうちに父の声がした。“大丈夫か！”この言葉に僕は返答できなかった。しかし、とてつもない轟音のなか、普段聞き慣れた大声にとても安心したのを覚えている。

しばらくし、少し揺れがおさまった。ここぞとばかりに父が立ち上った。父に手をひかれ、急いで1階へと向かった。途中で姉の上に父と同じように、覆いかぶさる祖母の姿がちらっと見えた。1階は真っ暗で、何が起きたのか分からずキョトンとした1歳と2歳の弟を抱く母が座っていた。母も何が起こったのか分かっていない様子だった。僕は、母にしゃべりかける余裕もなく、全くしゃべらなかつた気がする。真っ暗なりピングはとにかく寒かった。このとき初めて電気・ガス・水道のライフラインが完全にストップしているのを思い知らされた。暗闇の中、父がろうそくに灯をともし、祖母と姉のもとへ向かっていった。けがをしたのは誰もいなかった。不幸中の幸いとはこのことだろうか。全員が揃う頃には、外は少し明るくなっていた。この時初めて、これが早朝の出来事だと知った。

父がまず外へ様子を確認しに行った。そのとき僕たち家族は、すぐにでも外へ避難できるように玄関で待機していた。とにかく寒さと恐怖で落ち着かなかつたのを覚えている。外には数人の人たちが集まり、地震の揺れの話やお互いの家族の安否確認をしていた。無事の確認が済むと、余震で万が一のことを考え荷物をまとめておこうという話になり解散した。

小さい揺れが続いていた。家族で身を寄せ合い、揺れがおさまるのを待った。寒さをしのぐため、毛布にくるまり1時間ほどじっとしていた。しばらくして、揺れがやんだ。ふと余震の恐怖から気がそれると、ある程度のスペースを確保し、みんなで布団に入ることになった。端に大人、真ん中に子どもというふうに並んだ。温かかった。布団のおかげもあつただろうが、家族の温かさというものを実感した。

父がラジオをつけ、そこで神戸で地震が起きているのを知った。神戸に住む父の知り合いに電話することになった。家の電話は北区同士ということもあって、すんなり繋がつたらしい。会社に連絡しても繋がらない、交通機関が完全にストップしているという情報を得た。会社へ出勤するという考えはこの時点でなくなつたらしい。

2時間後ぐらいにまずテレビがついた。最初のほうは字幕で地震の発生を知らせているだけだった。怖くて眠気も完全に覚めていた。ふと窓を見ると、いつもと変わらない空が広がっていた気がする。小学校や中学校で習った神戸の悲惨な様子、燃え盛る炎も、真っ黒な煙も見えなかつた。後で聞いたことだが、幸い北区ではそれほど被害は無かつたそうだ。部屋の中を見回すと、本、おもちゃ、食器の破片がほんの少しだけ散らかつていた。あれ程の地震でこれだけで済んだのは少し疑問に思う。神戸の他の地域では、ガラス片が飛び散り家自体も潰れている所があるというのに。今では震災に対する温度差を、想いの差をとても感じている。だからこそ、防災を学び、語り継ぐということの大切さを実感しているのかも知れない。

昼ごろになり、テレビの映像が映った。画面にはヘリコプターからの中継の様子が映し出されていた。

ビルや高速道路は倒壊し、変わり果てた神戸のまちにただただ言葉が出なかった。夢じゃない現実に驚き以上のものが込み上げてきた。

ありあわせの食材で昼食をとることになった。外にあるガスの元栓を開けるとガスも通ったので、ライフラインはこの時点で復活した。何を作り、何を食べたのかは全く覚えていない。昼食を終えると、家の中を細かく調べることになった。1階、2階の順に調べまわった。家に穴があいていたり、ヒビが入るということはなく、扉が少し開きにくくなっていただけだった。

「祖母の家」

当時、父、母、小学校1年の姉、2歳と1歳の弟の6人家族だった。この日はたまたま、当時夙川に住む祖母も来ていた。祖母は自宅の様子がとても気になっていた。自宅や仕事先に電話し、いろいろ試したが繋がらなかった。家の中がだいぶ落ち着いた頃、車で夙川まで行くことになった。

新神戸トンネルを通り夙川を目指した。三宮に抜けると道が盛り上がり、信号も故障し、車が渋滞し、めちゃくちゃという表現が、まさにぴったりだった。東へ東へと向かうにつれ、車の量もさらに増えた。道沿いの家や建物は倒れ、JRの高架も倒れ、北区の景色とは比べものにならない。2時間ほど走ると、ようやく夙川教会の近くまでたどり着いた。そこで、警察に“これ以上は車では行けない”と言われ、残りは歩くことにした。車を降りると煙のにおいが鼻に入った。火はどこからも出ていなかった。ガスが漏れているとすぐに分かった。

当時、祖母は夙川教会の中に住んでいた。教会の人の無事を確認すると、祖母を残し自宅へ帰ることになった。いつもならぐっすり眠りについてはいる帰りの車も、変わり果てた神戸のまちに、眠ることはできなかった。もう2度と三宮やハーバーランドへは遊びに行けないのかもと感じた。

家に着いてから、祖母から電話があった。家の中はめちゃくちゃだったらしい。そして、ベッドの枕に大きなガラス片がささっていたらしい。もしも、あの日神戸の僕の家に来てなかったら、祖母には今こうして会うこともできてないのかもしれない…。震災はこうした奇跡が数えきれないほどあるんだと思う。

「ライフライン」

家のライフラインが復活したのはそんなに時間はかからなかった。最初に電気が回復した。ほんのわずかな時間なのに、なんだかとても懐かしく、明るい光だった。次に水道、ガスという順に回復した。そして地震当日の夜、お風呂に入ることができた。父と入った気がする。体がきれいになったとかじゃなく、心が落ち着いて、幸せな気分だったことを覚えている。そのときは神戸のどの人もこうしてお風呂には入れているのだと思っていた。しかし、実際は僕のように1日目から、なんの不自由もなく入れているのは凄く少数だと後から知った。なんだか申し訳ない。そんな思いになっている。このライフラインの回復の早さは当時思わなかったが、今思うととても早く驚いている。ライフラインが無い生活は短かったが、光と水を奪われた生活はとても苦しく、人間はライフライン無しでは生きていけないと実感した。

「幼稚園」

当時幼稚園に通っていた僕は、12年前のあの日、須磨の水族館へ遠足に行く予定だった。前日から用意し、とても楽しみにしていた。しかし震災で中止になってしまった。当たり前なのだが、あの時はとても悔しかった。でも、地震が朝ではなく昼に発生していたら、須磨水族館で被災していたら、そう考えると今でも背筋がぞっとする。また僕らだけでなく、もっと被害が拡大していたのはいうまでもない。幼稚園が再開したのは、地震発生から数週間後だった。あまりに久し振りだったので、僕は制服を着るのにだいぶ時間がかかった。幼稚園の送迎バスに乗り、先生とした挨拶がとても新鮮に感じた。教室に入り、友達と再会した。さすがに全員とまでいかなかったが、かなりの人数がいた気がする。家ではかなり退屈していたので、幼稚園で過ごした時間はとても楽しく、とても早かった。そして、震災という出来事を忘れられる空間でもあった。そんな幼稚園のある日のこと、先生が震災で消火・救助活動にあたった消防士のかたの話をしてくれた。水も少なく、道具も少なく、そんな中でも必死に助けてくれた

そうだ。その話を聞いてからというもの、幼稚園のみんなの話題は消防士でもちきりだった。5歳児の僕の心には、仮面ライダーやウルトラマンのようなみんなのヒーローとして、強く憧れが焼きついた。それからというもの、消防車や救急車を見るたびに“消防車や”と声をあげるようにまでなっていた。

「中学校・高校」

そんな僕も中学3年生になった。部活も引退し、いよいよ進路を決めるときが近づいていた。それまでは塾に通い、それなりに頑張っていたつもりだ。ただ漠然とレベルの高い高校を目指していただけだった。しかし、僕は震災体験をきっかけに、災害や防災に少し興味を持つようになっていた。震災のとき活躍した消防士に憧れていたからだ。将来の夢は“消防士”と決めていた。だから、環境防災科を知ったとき迷わず試験を受けようと思った。震災の話をお親に聞いたり、当時起こった新潟県中越地震について調べたりと、できる限りのことをした。そして試験当日面接で震災に対する、消防士に対する思いを語り、合格することができた。とても嬉しかったが同時に、震災を語り継ぐという責任を実感した。

そして環境防災科に入学した。この学科で多くのことを学んだ。震災のことを色々な外部講師の方々から当時の貴重な体験談を聞き、現在の災害対策を学ぶことはもちろん、地震のメカニズムを学んだり、校外学習に出かけたりした。中でも、消防学校の体験入校は中学生の頃から楽しみにしていたものだ。規律訓練、搬送法、救助訓練、消火訓練などはもちろんのこと、避難所を想定した避難訓練はとても印象に残っている。より一層、消防士への思いが強まった。そしてその体験のおかげで、今自分が将来の夢に向かって頑張れていると思う。

環境防災科で学んだそのすべてが、将来どんな道に進むとしても、自分の人生の大きな糧になるものばかりだ。

「震災から」

阪神・淡路大震災は本当に多くの命を奪った。その原因は様々にあると思う。たとえば、古い木造の家屋が多かったこと、消防の最大の武器である水が使えなかったことや、救出用の道具が足りなかったなどだ。しかし、僕が思う最大の原因は、神戸の人々の防災に対する意識の希薄さだと思う。神戸の人々は“神戸に地震など来るはずがない”、そう思っていた。実際、神戸にはずっと長い間地震はなかった。そのせいもあり、地震が来たときの備えとか、家族で避難場所を決めたりはしなかったんだと思う。もしも、現在のように防災の意識が高まり備えができていたとすれば、確実に被害はもっと少なくできたはずだ。人間は、一度震災を体験しなければ、震災の知識を得、防災に努めようとしめないのか、不思議に思う。だからこそ、震災を語り継ぎ防災の大切さを発信しなければならない。

「夢を実現し、やりたいこと」

僕の夢は消防士になることだ。消防士になることで終わりではなく、消防士として災害や防災の最前線に立ち一般の人々はもちろんのこと、障害者やお年寄りなど災害弱者と呼ばれる人たちのために活動したいと思っている。

阪神・淡路大震災で人や財産を守ってくれた消防士に、小さい頃から憧れていた。最初のうちはカッコイイとか、自分もやってみたくてしか思ってなかった。震災や火事で人を助ける。人に感謝される。なんて素晴らしい仕事なのだと感動した。父や母に相談すると、とても賛成してくれた。“消防士になるなら防災を考えたり震災の勉強もしないと、なってからじゃ遅いよ”と言われた。確かにそうだと思う、防災に興味を持つきっかけになった。そうして、環境防災科に入学した。ここで、防災というものを0から考えなおした。今までは、消防の活動だけが防災だと思い込んでいた。しかし、1人1人が防災について学び、知る。家族で家具の配置を考える。避難訓練に参加する。そんな小さなことでも立派な防災なのだということを学んだ。その学んだことを消防士として発信していきたいと思ったからだ。

防災とは何か、それを知らない人や子供たちもたくさんいると思う。そんな人たちに防災を広めるにはどうすればいいのか。ボランティアに参加する、何人かで発表するなど、いろいろあると思う。地域の防災活動にも参加していきたいと思っている。そして、自分が体験した貴重なことを世の中に発信していけるような消防士になりたい。

環境防災科で、3年間色々なことを学んできた。その学び、体験したことを100%出し切り、自分の財産、武器として消防活動に励みたいと思っている。そして、消防士として防災を広めていきたいと思っている。なぜなら、消防士なら災害の最前線で、消防士でしかわからないこと、伝えなくてはならない体験があるからだ。

具体的にどんな活動をするのかというと、消防で得た知識（消防目線）経験と環境防災科で学んだこと（防災を学ぶ高校生目線）を結集させて、消防士という立場から多くの人に防災の大切さを、発信していきたいと思っている。そして将来は、災害に強いまちづくり、人を市民の皆さんと共に目指して活動できる、そんな消防士になろうと思う。

「震災を風化させないために」

阪神・淡路大震災...それは神戸のまちに、人々の心に本当に大きな傷を残した。中には、思い出したくもない方も大勢いるだろう。でも、絶対に忘れてはいけない。そして、震災を知らない子どもたちに語り継いでいかなければならない。防災の大切さ、命の大切さを伝えるために。

阪神・淡路大震災からの教訓

神戸市須磨区菅の台
増田 理香

16日

16日の夜は、父が仕事の関係で茨城県の筑波市へと1週間の出張に出かけるということで夕食は家族4人でカレーを食べてごく普通の生活を送り、まさかあんな阪神・淡路大震災なんか起こるとは誰も想像することなく父を送り出しました。そして、神戸の家にいる家族は母、6歳年上の兄、私と愛犬だけとなってしまいました。

地震発生

とうとう、あの阪神・淡路大震災が起きる17日を迎えてしまいました。地震が起こる数分前に、いつもはおとなしく寝ている我が家の愛犬ビーグルが鳴き出しました。なぜだろうと疑問に思い、母がカーテンを開けて外を見ると空の色がピンク色だったと言っていました。

5時46分、私の家にダンプカーが突っ込んで来ました。ガーン！どっかん！グラ！という揺れと、揺れのせいで窓ガラスがガタガタ音をたて、食器の割れる音がして、私たちに恐怖が襲って来ました。幼かったので、あまりよく揺れの感覚を覚えていないのですが、真っ暗闇の中何かをじっとこらえる気持ちだったことはよく覚えています。母が言うには、揺れているときに隣の家とぶつかるのではないかとこのほど家は歪みながら揺れていたそうです。実際には、ダンプカーというのは間違いだったのですが、私の家では初めダンプカーが突っ込んで来たのだと思い込んでしまっていました。私の家の被害の状況は、幸いなことに食器棚からお皿が飛び出しガラスの破片が飛び散り、棚などに飾っている置物などが位置を変えたぐらいですみました。

また、犬が地震の恐怖からなのかエサの時刻になっても、散歩の時間になっても小屋から一步も出て来ない日が何日か続きました。あの時、地震の直前に鳴いていたのは、地震が起きるということを事前にわかっていたのでしょうか。

6時ぐらいになると1本の電話がかかって来ました。相手は、京都に住む母の姉からの電話で、内容はもちろんお互いの無事の確認でした。その後、地震についての話に入りました。京都の方もすごく揺れたそうでした。このとき、母の実家が全壊していたとは思いませんでした。電話中にキャッチフォンが入りました。相手は祖母からでした。母が電話に出た瞬間に祖母は「あんた、家なくなってもうたで。」という衝撃的な言葉を発したそうです。母は、嘘？冗談やる？という気持ちでいっぱいになっていました。そう思うのも当たり前ほど私たちが住んでいる地区は被害なんかがなく信じることができなかったそうです。しばらくするとラジオが流れ「阪神高速道路が倒れた」という信じられない情報を耳にし、祖父母の家がなくなったという真実を受け入れたそうです。

祖父母は小学校に避難しており、迎えに行きました。火の中、煙の中、今までと逆転してしまった町の中、車を走らせました。衝撃的な光景で、壊れた家が立ち並び、まるで、色がなくなってしまったような町並みになっていたあの光景は今でも目に焼きついています。当時は、私の家で運転できたのは父だけで、あいにく出張中で誰一人運転することができなかったのです。そんなときに、日ごろから親しくしている近所の方が車を祖父母のもとまで走らせてくれたのです。

無事に祖父母を私の家へと避難させることができ一安心かと思っていたのですが、さらに大変な日々を地震は私たちに与えて来たのです。

ライフライン

水道の蛇口を開いても水は出て来ないし、夜になると真っ暗な状態で、何をすることも懐中電灯で照らす生活になりました。ライフラインが使えなくなったのです。

このときに役に立ったのが石油ストーブです。石油ストーブの上には、昨夜に食べたカレーの残りの鍋を置きもう一度温めることができました。また、1月だったので私の家にはお正月の餅が冷凍保存でたくさんあり、焼いて食べることができました。石油ストーブは火で暖までも取ることができ、大変よく活躍してくれました。ここで私は、暖を取りながら祖父母の地震の時の様子を聞いたことをよく覚えています。揺れたときの状況や、脱出の状況、火がすぐそばまでやって来ていたという信じられない現実を幼いながらも受け止め、あの複雑な感情は今でも忘れていません。

ライフラインで一番困ったのは水でした。1丁違いの隣の6丁目では、水は出ていましたが、私の住む地域では長い間断水に襲われました。私たちは、隣の6丁目の方から水をもらうことができ感謝しま

した。また、しばらくすると神戸市の方から給水車が近くの公園へやって来るようになりました。給水車が来るとポリバケツやタンクを持ってみんなで水を汲みに駆けつけました。私も、給水車から水をもらいに行くことを手伝いました。当時の私でも持てるほどの小さなポリタンクを持って、家から給水車、給水車から家までの道を何度も往復しました。行きは、まだポリタンクに水が空っぽなので簡単に給水車までたどり着きました。給水車からは、透明なきれいな水が蛇口から出てきて幼かった私は単なる普通の水ではないと思い、給水車から水をもらうことを珍しく思い興味津々でした。しかし、一番大変だったのが水をもらって家に持って帰る時でした。行きは、片手で持てるくらい軽いタンクだったのに水が入るととても重たくなりました。給水車から家までは目と鼻の先の距離なのに何度も休憩をはさんで、痛くなった持つ手を休めることを繰り返したことで、なかなか家にたどり着くことができませんでした。

電気がついたのは、いつごろだったのかはあまりよく覚えていないのですが、テレビがいきなり着いたことは覚えています。地震後初めてのテレビではニュース番組をやっていました。ニュース番組では、アナウンサーの男の人が原稿を読んでいる姿が映されました。テレビがついた瞬間、家族みんなで「電気ついたぁ！」と喜びました。それと同時に、インターフォンが「キンコーン」という音があちらこちらで聞こえ始めました。近所の方が、電気がついた合図としてインターフォンでお知らせしに来てくれたのです。

近所の人の支え

震災当時、近所の方がとても支えてくれました。先にも書いたのですが、祖父母を迎えに行くとき車を走らせてもらったり、他にも、常に保存食料を蓄えていた幼馴染の家では食料を分けていただいたり、震災後初めてパンを焼き始めたパン屋さんがあるという情報から、駆けつけてパンを買って来ていただいたりもしました。また、地震後何日かして洗濯物がたくさん溜まってくると、母の友達が私たちの家族を招いて洗濯物を洗わせていただくこともありました。

あのとき、近所の方や優しい人たちがいなければ大変困っていた問題がたくさんあったらと思います。だから、大きな困難に立ち向かうこともなく生活を送れたのは近所の方がいてくれたからで本当に感謝しています。今から思うと、地域の中でのコミュニケーションがいかに大切であるかが改めてわかります。

被災地

地震の1ヵ月後、再び祖父母の住んでいた須磨区太田町へ足を運びました。

同じ須磨区内だというのに、被害状況は私の家の地域とはまったく違った世界でした。今まで訪れていた祖父母の家とは一変して、地面が窪んでしまいトイレがなくなって、窓の外を見れば隣の家の屋根が私でも手が届くくらいまでの高さまでも落ちてしまっていました。また、床にはガラスの破片が飛び散っていたり、タンスが扉を開けて倒れていました。また、郵便受けをのぞくと1月17日と示された新聞が入っていました。おそらく、地震が起きる数分前に配達の人が入れてくれていて、17日の朝刊の内容は、阪神・淡路大震災という文字のかけらもなく、印刷をしたときはいつもと変わらない社会だったのだらうと思います。まさか、次からの内容が地震のニュースで一面を飾ることになるとは誰もが思っていなかったらうと思います。

祖父母の近所の家も見わたす限り、同じように全壊になった家が並んでいて今までの町と違っていたり、自衛隊の方が活動していて、いつもと違う風景に戸惑いました。

母から聞いた話なのですが、母の卒業証書や卒業アルバム、思い出の写真がすべて埋まってしまい見つけ出すことができなかったそうです。

また、私は祖父母の家に行ったら必ずといっていいほどの銭湯へ行っていました。その銭湯は、入り口にたぬきの大きな置物が待ち構えており、「たぬきのお風呂やさん」と呼んで、行くことをとても楽しみにしていた大好きな銭湯でした。

しかし、そんな大好きだった銭湯も地震により壊れてしまい、もう2度と入ることができなくなりました。

被災地では、家が倒壊するだけでなく火事まで起きていました。祖父母の住む家のすぐ近くまで火は襲って来ていたようで、幸いなことに数件違ただけで、火事によって家は焼けることはなかったのです。しかし、家の近所には火事に覆われたり、亡くなった方が何人もいたみたいで、ちょっとした位置の違いによって被害が異なり、運というものを実感しました。私の家族、親戚には少しくゲガは負ったものの、命を落とした人は誰一人いなくて本当によかったなと思います。家に被害があったり、思い出の品が埋まってしまったりすることはとても悲しいことだと思いますが、やっぱり命あってこそその幸せだと思います。

仮設住宅から復興住宅へ

私の近所に住む友達はみんな、地震が起きる前から祖父母と住んでいて、私はそうやって祖父母と一緒に暮らせる友達を前から羨ましく思っていました。祖父母が地震の関係で、家がなくなった大変な状況だということは分かってはいましたが、私の家に来て常に一緒に過ごせるということがどんなに嬉しかったかを今でも覚えています。そんな嬉しかった日々も半年ほど続き、とうとう終わりを迎えました。

それは、仮設住宅への移動でした。3月ごろから仮設住宅の抽選が始まり、祖父母は何通も応募をしたのですが抽選に応募するたび、当選から外れることばかりでした。8月ごろになり、やっとことで仮設住宅が決まりました。場所は私の家から歩いてほんの数分の所で私1人でも行ける範囲でした。幼稚園生になると、リュックサックの中にトランプカードだけを入れて、自転車に乗って毎日のように祖父母の住む仮設住宅へ行きました。祖父母の家ではトランプでババ抜きや七並べをして遊んでもらったり、アイスももらったり、近くの公園の滑り台に行ったり、夏祭りの日に浴衣を祖父母に披露しに行ったりと仮設住宅での楽しかった日々の思い出がたくさんあります。だから、あの仮設住宅が私の第2の家のようで、行くと祖父母が遊んでくれて大好きな場所でもありました。

仮設住宅での生活は私が小学校3年生になった頃まで続いたので、約4年間ほどの生活でした。それから、祖父母は復興住宅という新しい住居へと引越しをしました。その後、復興住宅で祖父母は新しい環境に慣れていき、今では近所の方との交流が深くて何の問題もなく過ごせていて私は安心してます。

茨城県筑波市

当時の、筑波の様子は全く地震の面影もなく、テレビでは震度の情報が流れるほどで実際の映像はまだ流れていなかったそうです。まだ大きなニュースにはなっておらず実際の映像が流れ出したのは次の日の朝だったそうです。映像では、阪神高速道路が倒れている映像が流れました。

筑波からの帰り方は、新幹線は当時京都までしか走っておらず父は実家である大阪で1泊し、もう一度神戸の家へと帰り出しました。大阪と神戸間を結ぶ当時だけの船の整理券が配られ、三宮まで帰って来ました。三宮から板宿までは歩いて帰り、板宿からは地下鉄に乗って名谷まで帰って来ました。

父の会社は大阪にあり、いつもは電車で行くところを電車がまだ走り出していないところもあったので、歩きとバスの交通手段で行ったそうです。神戸の家から会社までの経路が通行可能になるまでは実家に1ヶ月ほど泊まり通勤したそうです。

すずらんの花

祖母は昔から、お花を育てることが大好きで庭にはたくさんのお花が元気に咲いていました。地震の後に家具を整理すると同時に、庭に咲いているすずらんの花だけを持って帰って来ました。そして、私の家の庭で育てることにしました。すずらんの花は4月、5月を迎えると小さな蕾を付けいくつも白い花を咲かせます。その花は、阪神・淡路大震災が起きてから12年目を迎えた今でも、4月、5月になると私の家の庭で元気に花を開かせます。すずらんの花が咲くたびに地震のことを振り返らせ、母と「今年も咲いたなあ。」とって震災の起きた日のことを思い出します。これからも、すずらんの花は私が大人になったときでも咲き続けると思います。このすずらんの花は、地震の時、辛かったこと、大変だったこと、人の優しさが満ち溢れていた日々の思い出を振り返ることのできる大切な花なので絶対に枯らすことはできません。これからも、毎年この時期に白い花が咲くことを楽しみにしています。

阪神・淡路大震災を思い返して

阪神・淡路大震災が起きた当時は4歳ぐらいではっきりとしたことは覚えていません。しかし、このように当時のことを思い返したり、聞いたりすることで薄れていた記憶が少しずつ埋まって来ました。あのとき、近所の方との交流が薄かったらどうなっていたのでしょうか。考えてみると、祖父母を迎えに行くことができず、あの時よりももっと不安な日々があったのかもしれない。食料不足に襲われ、イライラした日があったり、あの非日常な状態でお腹が空いたとわがままを言って母を困らせていたかもしれない。また、洗濯ができずに何度か着た服をまた着なければならぬ日があったのかもしれない。家をなくした人、命を落とした人なんかと比べると私のいる状況はすごく幸せなものです。ですが、ここまで日常生活に近づけたのは地域の近所の方がいてくれ、困ったことを解消していただいたおかげだと思えます。本当に感謝しています。環境防災科でも、地域の人とのコミュニケーションが大事だと言われていますが、本当にそのとおりだと身をもって感じます。

また、思い返すことの大切さを改めて実感させられる機会となりました。やっぱり、人間というものはだんだんと記憶が薄れてきます。今では、スイッチを押すとすぐに電気がつき明るい部屋で生活ができます。食べたいときにご飯が食べられます、しかも温かいご飯です。お風呂も思う存分に水道水を使

うことができ、蛇口をひねると水は当たり前のように出てきます。こんなこと、12年前の震災当時にありえたのでしょうか。今、普通に何も不自由なしに生活ができるということが一番の幸せなのではないかと思います。なにげない毎日を大切にすることも震災からの教訓なのではないかと考えさせられました。

環境防災科で見つけたこと

そもそも、環境防災科ができたのは阪神・淡路大震災がきっかけですが、私がこの環境防災科に入ったきっかけは、将来の夢が消防官になることだからです。環境防災科では、行事として消防学校体験入校や垂水消防署体験など消防に関することがいくつかあり、少しでも消防官の位置に近づきたいという思いで入学しました。ところが、授業を受け始めると「防災」について深く学ぶことになりました。今まで消防という道しか頭になかったのですが防災に興味を持つことができました。消防と防災は切っても切り離せないほど深く関係しています。私は、この環境防災科では消防官となつてからの目標まで見つけることができました。

阪神・淡路大震災をきっかけに防災福祉コミュニティができたものの、防災訓練などの参加者はいつもお決まりのメンバーで、お年寄りの方が多いのです。私は、もっと色々な方に防災を知ってもらいたいと思っています。だから、消防官となつてもっともっと、防災のほうへ力を入れたいと思っています。そして、「防災なんて当たり前」という観念になるように広げていきたいです。

また、このように防災訓練に来てもらうには市民と消防官との距離が縮まる必要があるのではないかと思います。だから、今よりももっと身近に感じ取られる消防官になりたいと思っています。

環境防災科では、心のケアについても勉強をしました。このようなことは普通ではなかなか勉強できないことだと思います。被害を受けた方に対して、女性らしい気配りと柔らかさを生かしつつ、消防官としてキビキビとした行動を取って、少しでも落ち着いてもらえるような活動ができる消防官になりたいです。

卒業研究「語り継ぐ4」

神戸市垂水区南多聞台
元生 裕也

1995年

私と父と母が同じ部屋で寝ていて、姉だけが別の部屋で寝ていた。「ドンッ！」という、突き上げるような衝撃で目を覚ました。そして、揺れが数秒間続いた。私は突然の出来事で、何が起こったのか分からず、その場でじっと揺れがおさまるのを待った。

父は「地震や！」と言い、タンスが自分たちの方に倒れてこないように押さえて、母は揺れの中、父に指示されて、這いながらガスの元栓を閉めに行った。

揺れがおさまり、姉はどうしているのかということになり、様子を見に行くと、すごい揺れだったにも関わらず、ぐっすりと寝ていた。姉を起こして、部屋に集まり、夜が明けるのを待った。

被害はというと、家具の固定などの防災対策は一切していなかったのに、背の高い食器棚やタンス、食器などが何1つ倒れなかった。被害が小さい地域で、家具のバランスや置く向きなどが良かったから倒れなかったのだと思う。

不便な生活

電気・ガス・水道が止まり、いつもと違う少し不便な生活になった。電気はすぐに復旧したので、テレビをつけた。テレビをつけたときに、神戸のまちを映し出した映像を見た記憶がある。まちが炎で赤く染まり、黒い煙が立ちのぼる映像や道路の崩壊で落ちそうになっているバスの映像などを見て、唖然とした。

水は出なかったため、車で水を公園まで汲みに行ったり、列に並んで、水を貰ったりした。その水は、トイレの水を流したりすることに使った。ガスも止まっていたので、家にあったカセットコンロを使って、調理などをした。電気・ガス・水が、何とか普段通りではないが、使うことができたので、さほど困らなかった。私は小さかったので困らなかったと思うが、母は大変だったと思う。水が出ないと洗濯や洗い物も普段どおりにできないからである。

食器は水が出なくて洗えないので、キャンプ用においていた紙皿を使ってご飯を食べた。他にも、水の節約のために、近くの公園の公衆トイレを使うなどした。このようにして、ライフラインが復旧するまでの間、こういう生活が続いた。

全壊になった家

私の家は小さいひびが入った程度の被害で無事だったが、須磨に住んでいた祖父母の家が地震で全壊となってしまった。全壊になってしまったが、倒壊まではいかなかったので、全員無事で済んだ。

震災後、祖父に連れられて、その家の中に入ったときのことを微かにだが、覚えている。昔ながらの木造の一軒家であった。土壁に、所々ひびが入り、戸は歪んで、開きづらかった。また、2階は危険なので、のぼれなかった。離宮公園や水族館が近くにあり、小さい頃に従兄弟と、よく遊んだ家だった。その時は、小さかったので、なんとなく全壊になった家を見ていただけだった。

その後、家を取り壊したが、建築基準が震災と同時に変わってしまい、狭い土地には家を建てられなくなってしまいとても困っていた。隣の家の方の土地と合わせて家を建てるとか売るとかという話を震災後にずっとしていた。家を取り壊したところに、雑草抜きに何度か連れられて行ったが、「ここがトイレで、ここにお風呂があってんで。」ととても懐かしそうに僕に話してくれた。その家の話は最近聞かなくなったので、今現在はどうなっているのかはわからない。

祖父母の生活

いつ倒壊するかもわからない家に住むことはできないということで、震災直後は私の家で生活していたこともあった。生活をしていた時のことは、正直なところ、あまり覚えていない。

震災直後は私の家で生活し、その後、四国の方で暮らすことになった。四国の方の家へは何回も遊びに行ったので、よく覚えている。震災から何年かが過ぎて、西区の復興住宅に入居することになった。現在もそこに住んでいる。

私の家

小さいひびが入った家は外見では大丈夫そうに思うが、内面は震災によってできた溝をコーキング剤

で埋めたりし、かなりダメージを受けている様子だった。震災から少し落ち着いた頃に、団地の建て替えをするという案が出たが、反対する人が出て、中止された。反対の理由は、この団地はお年寄りが多かったために、建て替えとなるとお金も掛かるし、時間も掛かるし、引越するような体力がないので難しいからである。これによって、建て替えはしないだろうと思い、ただでさえ古く、兵庫県南部地震の影響を受けている家なので、次の大地震が来たときに心配であることや祖父母の家が近くて便利ということもあり、震災後に建てた西区のマンションに引越しをした。

環境防災科を知って

環境防災科という学科があり、推薦で入れることを中学3年の初めの頃に学校のクラス掲示板に貼ってあったパンフレットで知った。私は昔から人の役に立てる仕事がしたいと思っていたのと体力に自信があったので、将来は自衛官や消防官のような身体を使う仕事に就こうと思っていた。受験の時期に、消防官になりたいという思いが強かったので、ここに行きたいなと思い、この環境防災科を目指した。環境防災科に入ったからといって、消防官になれるということではないが、せっかく消防官になるのだから、人と違うすごい消防官になってやろうと思ってこの学科を目指した。早速、先生に言うと、去年のクラス担任の時に、環境防災科に受かった生徒がいるということもあって、後押ししてくれた。自分でも、インターネットなどを使って、舞子高校のことをもっと調べると、いろんな活動を行っていることに驚いた。その中でも一番興味を持ったのは台風23号で被害を受けた豊岡市へ、災害ボランティアとしてボランティア活動に行ったということだった。こんなことはほかの高校ではできないなと思った。自分も入ることができたら、ボランティアをやりたいと思い、より一層環境防災科への思いが深まった。

初対面の人と話すのが苦手だったので、面接が試験内容に含まれていることを知って、大丈夫かなと不安で一杯だった。面接や論文の練習を何度も行なった。そして、試験日の当日。面接の時に思っていたことを練習のときのように、十分話せなかったので、不合格かもしれないと内心は思っていた。合格とわかった時、嬉しさと同時に、こんなにすごい先輩達の中で、本当にここでやっていけるのかという不安もあった。でも、環境防災科への期待の方が大きかったので、入学するのが楽しみであった。

環境防災科に入る前に、知識を深めようと思い、いろんな場所へと行った。環境については中学校の総合学習などの時間に学習していたが、防災については避難訓練ぐらいと意外に学習が少なかった。防災の知識を深めておきたいと思ったので、消防学校の見学や人と防災未来センター、国連防災世界会議の展示の見学などに行った。阪神・淡路大震災について、知らなかったことがたくさんあった。

環境防災科で学んだこと

この学科に入るまで、防災のことをまったくといって良いほど、知らなかった。この学科に入って、教諭のお話や外部講師の方のお話や授業を受けるにつれて、防災の大切さがよくわかった。

阪神・淡路大震災では多くの人の命が奪われた。その中の亡くなった方の多くが、家屋の倒壊や倒れてきた家具の下敷きによる圧死が原因だった。震災当時、私の家は家具の固定をしていないので、とても危険だったということがわかった。タンスだけではなく、タンスの上に衣装ケースを積んでいたのも、下手をすると落ちてきていたかも知れなかった。

今までは防災のことを考えて生活していなかったのに、環境防災科に入り、防災を学んでから今まで見ていた物の考え方が大きく変わった。例えば、部屋の模様替えをするときに、この机が倒れても大丈夫なように、ベッドを置こうなどといったことを常に考えるようになった。また、学んで行くうちに、家具の固定だけが防災ではないということもわかった。どういうことかということ、例えば、家具は倒れるものだと考えて、倒れても大丈夫なように、背の低い家具を置くといったことなどである。家具の固定も正しくて重要なことだが、危険を避ける方法として考えると、それ以外にも様々な方法がある。

授業の中で、何回か阪神・淡路大震災のときの被害の様子を映し出したビデオを見るがあった。そういった映像を見たときは、あの時はこんなだったなとテレビを見たときのように思えた。

私は間違ったイメージを持っていた。私の中で、長田のまちは阪神・淡路大震災で、とても大きな被害があり、避難所で避難生活をしていたというイメージが大きかった。しかし、実際に長田に住んでいる生徒の話聞いて、避難生活はしていないという人や少しだけしか避難所にいなかったという人ばかりだったので、とても意外であった。

授業を受けていく中で、防災はこれが正しいというのは言い切れない分野であると思った。家具を固定しないといけないということだけではなく、災害が起こることを考え、その災害からこういった危険が自分に降りかかってくるのかを考えて、その危険をどうやって防げば、一番いいのかを自分なりに考えて実行することだと思う。

ボランティア

私は高校に入ってから現地に行っ行って行なうボランティアに2回行くことができた。1回目は新潟県中越地震で被災した方が暮らしている仮設住宅の雪かきと集会所の掃除のボランティアで、2回目は石川県能登半島地震の災害ボランティアだった。

新潟県でのボランティアはとても大変な作業だった。私は雪かきをしたことがなかったので、これがボランティアとしても雪かきとしても初めてのことだった。大量の雪を次々と運んでいく作業でとても体力を使うボランティアだったが、とてもやりがいがあった。また、ボランティアをしているときに仮設住宅に住んでいる方から嬉しい言葉をいただいた。また、とても歓迎してくれてよかった。このボランティアでボランティアのやりがいを実感できてよかった。

石川県能登半島地震の災害ボランティアは地震が起こってからそれほど経っていなかったもので、被災地に入ると、ガラッと雰囲気が変わった。自衛隊がテントを張って援助していたり、道路が、がたがたになっていたりしていた。また、家には家の状態を書いた紙が貼ってあったりもしていた。そこで、私たちは何に困っておられるのかというのを聞き込み調査するボランティアをやらせていただいた。一軒一軒まわっていくと、「大丈夫です。」といわれる方がほとんどだった。「ここは大丈夫だから他の地域を回ってあげて」と言われる方もいて、心の温かさを感じることができてよかった。また、調査をしているときに、ユキワリソウという花を貰ったことはとても嬉しかった。

ボランティアは何かを貰うためにやるのではなく、ボランティアを行なうことで、何かを貰うというのはとても嬉しいことだというのがわかった。

これから...

私は将来、消防士になりたいと思っているが、この先に何が起こるのか、何をするのかはわからない。でも、人の役に立てるようなことをしていきたいと思う。それが、ボランティアとして、であろうと仕事として、であろうとこの思いを持って生きていきたいと思っている。

また、私が阪神・淡路大震災のことをあまり覚えていないようにこの先、震災を覚えていない、あるいは震災を体験していない人が多くなっていってしまう。だから、私たちが震災を語り継いでいかないといけないと思う。語り継ぐことが一番の防災だと思う。この先、環境防災科で学んだことを出来る限り伝えていきたい。

阪神・淡路大震災

加古川市東神吉町
安政 友晴

私は加古川市に住んでいます。加古川は震災による被害はあまりありませんでした。幼かったのと被害があまりなかったせいかな阪神・淡路大震災の恐い記憶や困った記憶がほとんどありません。けれどできるだけ思い出し、家族や近所の方の話聞いて、私なりに阪神・淡路大震災を語り継いでいきたいです。

地震の前触れ

父から聞いたことですが、地震が発生する前に家で飼っている犬が普段よりもうるさく、ずっと吠えていたそうです。環境防災科に入って地震の前触れや、その時の動物の異常行動について勉強して、実際これがそうだったのだと思いました。

地震発生

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生しました。当時、幼稚園に通っていた私は大きなベッドで両親と一緒に、2人の兄は別室で寝ていました。地震の揺れや音ではなく父が私の上に覆いかぶさったことにより目が覚めました。苦しい思いながらも何かに揺られているような感覚がしたのを覚えています。

阪神・淡路大震災が発生するまで、何度か小さな地震の揺れを感じたことがありました。それまで感じたことがあった地震は恐怖するようなものではありませんでした。そのせいか私は不謹慎にもこの今までよりも大きな揺れの感覚を楽しんでいました。

兄から聞いた話ではだいが揺れの強い地震だったと言っていました。

地震が発生して目が覚めたのは父と母と5つ年上の兄だけで、私と3つ年上の兄は揺れだけでは起きなかったそうです。

部屋の状況

ももとの部屋の状況は、父がごちゃごちゃしたのが嫌いな性格なので、ベッドから離れたところに大きめのテレビと数点の服とタンスが置いてあるだけでした。そのおかげでテレビが倒れたり、服が散乱したぐらいで物が体の上に落ちてくるような被害がありませんでした。

今思うと自分の家はいつ地震が起きてても怪我しにくいように物が置かれていると思いました。これからもそういう物の配置にしていこうと思います。

記憶

父が覆いかぶさってくれたことと揺れを楽しんでしまっていたせいかな地震に対する恐怖の記憶がほとんどありません。自分の家の被害が少なかったのも理由の1つだと思います。唯一鮮明に覚えている記憶は、1階にある祖母の部屋がテレビやタンスが倒れてグチャグチャになっていたことと、ニュースで見た神戸や長田の街の悲惨な状況と、向かいの家の瓦が数枚落ちていたことだけです。

私の地域では阪神・淡路大震災によって亡くなった人はいないと聞きました。

小さな被害

揺れがおさまると私と両親は兄たちを起こしに行きました。2人が寝ていた部屋にはタンスのような大きくて重いものや、倒れてきて危険な物はテレビの他にはありませんでした。テレビが倒れて画面が割れ、その破片で少しか兄の足に切り傷ができましたがそれ以外に怪我はなくほとんど無傷でした。この時が一番安心や喜びを抱いた瞬間だったと思います。

2階で寝ていた全員が集まると皆で1階に下り、まずリビングを見渡しました。リビングに置いてある物はほとんど固定されていました。だから小さな置物や積んでいた洋服以外に倒れている物はありませんでした。両親が「すごい地震やった」と話していましたが、兄の足の小さな切り傷以外、誰も怪我をしていないし部屋も普段と何ら変わりなかったので、この時はまったく信じていませんでした。しかし祖母の部屋を見に行ったとき、考えが変わりました。

祖母の部屋は私の家の中では一番被害が大きな場所でした。祖母は片付けをするときに物をタンスの上や物と物の隙間に積み重ねて置くのが癖でした。それが原因で、タンスが倒れたひょうしに積み重ねられた物もすべて倒れて部屋の中はグチャグチャになっていました。幸い祖母はタンスから離れたところで寝ていたのだから怪我はありませんでした。祖母の安全を確認した後、通れるように両親は一番邪魔だったタンスだけを元に戻しました。そのあとガス、水道、電気のチェックをしました。ガスと水道は使えましたが、電気は停電していました。しかしその停電も少しの間だけでした。時間も明け方だったので電気が無くては行動でき何の不便も感じませんでした。

このとき、どの地域もこの程度の被害だったのだろうかと思っていました。

大きな被害

停電が終わるまで家族全員リビングで過ごしました。私と兄はソファで寝て、両親はもしもに備えて大きなカバンに荷物をつめたり、危ないものは落ちていないかの点検をしたりしていました。父が電気工事士の仕事をしているので懐中電灯やライトはすぐに場所がわかり活用することができました。

停電が終わると皆でテレビを見ました。当時私は、ニュースなどは全く見ませんでした。でもこの時は、どの番組も速報のニュースばかりだったので仕方なくニュースを見ることになりました。最初に目に入った映像は、上空から神戸や長田の街を撮ったものだったと思います。今では見慣れていますが、そのときはすごく恐く感じたのを覚えています。自分の住んでいる場所からさほど遠くない地域がほぼ壊滅していたからです。兄も両親も祖母も言葉も出ないという様子で、何も話さずにじっとテレビを見ていました。このときにさっきまでの地震はとてつもなく危険なものだったのだと幼稚園に通っていた私でもはっきりわかりました。

地震発生から半日

地震が発生した日は幼稚園があるかないか分らなかったので行かないことにしました。その日は兄も学校を休み、父も仕事が休みになったので家族総出で家の片付けをしました。祖母の部屋を最初に片付け、そのあとリビングや寝室の片付けをしました。被害はタンスが倒れたり、部屋が散らかったりしたぐらいだったので3、4時間程度で終わりました。

片付けが終わると近所に住んでいる友達や知り合いに会いに行きました。どの家も家具が倒れるなどの小さな被害はあったものの怪我人は出ていませんでした。友達に会うととても落ち着きました。

家に帰り、母が祖父に電話し安全と困っていることはないかを確認し、同じことを親戚周りにもしていました。

心配事

阪神・淡路大震災で1つ心配だったことがありました。それは神戸に住んでいる親戚の伯母のことです。あまり被害はなかったものの、いつもより生活が困難だったそうです。いったん家に泊まりに来て神戸の街の状況が落ち着くまで一緒に住むとの話が出ていました。でも伯母は「そんなに困っていないから大丈夫」と断りました。翌日、それでも心配だった父が念のためということで食料や水を持って行きました。

余震

小さい揺れだったけれど余震を感じることもありました。少しでも大きな余震を感じると、「またあの地震がくるのかな?」「次はどこが神戸みたいになってまうんやろ」と思い心配になることがありました。神戸や長田の大きな被害を受けたところではもっと不安な気持ちになっているのだろうかと思いました。

いつも通りの日常

次の日からもういつも通りの生活でした。幼稚園に行ったり、学校に行ったり、仕事に行ったりみんな普通に生活をしました。幼稚園では震災の時どうしたら良いかを先生に教えてもらい、避難訓練をしました。友達と震災の話はしたけれど、ほんの少しだけで後は普通に遊んでいました。なかには家族が怪我をしてしまった子や、怪我をして休んでいる子もいました。怪我をして休んでいる子には手紙を書いたり、見舞いに行ったりしました。手紙を書くということは「心のケア」につながっていると思います。今思うと、小さい頃でもみんな知らず知らずのうちに「心のケア」をしていたのだとわかりました。

地震発生から2週間

地震が発生してから1週間もするともう頭の中に地震のことはほとんどありませんでした。テレビのニュースで避難所や被災地の状況を見ることはありましたが、そういえば大きな地震があったなぐらいにしかとらえていませんでした。今思うと、どんな大きな震災や災害があっても被害が小さかった地域や何の関係もなかった地域の人からしたら、そんなに気に留めることがなくすぐ忘れ去られてしまうのだろうと思います。

ボランティア

阪神・淡路大震災のニュースを見ていて初めてボランティアという言葉を知りました。また、炊き出しやごみ拾い、清掃、募金活動の風景をテレビのニュースで見て「こういうことをする人たちなんだ」と大雑把にですが活動の内容がわかりました。

私の地域でも募金活動や救援物資の収集のボランティアをしている中学生や高校生、地域のおじさんやおばさんをたくさん見かけました。近所には「神戸の親戚が大変やから」と言って物を持って行く人、ボランティアに直接行く人もたくさんいました。私も何か手伝いをしに行きたいと思いましたが母に「邪魔なるからやめとき」と止められました。確かに自分が行っても何にもならないと自分でも思いました。

もし将来、何らかの災害があったらボランティアに絶対行こうとこのとき思いました。

地震

阪神・淡路大震災を実際に体感したということと、神戸という同じ県内で比較的近くの街が大きな被害にあったということで、地震は本当に恐ろしいものなのだとわかることができました。この恐ろしさは実際に体験した人たちにしかわからないと思います。

今後の地震

今後兵庫県には東海、南海、東南海地震が発生するといわれています。その地震では津波が主な被害で建物の倒壊の被害はあまりないといわれていますが、油断しないことが重要だと思います。今後地震や地震に関連している災害によってできるだけ被害が出ないように全国の人びとが防災に興味を持ってくれたらと思います。

もしも

地震が発生してから、もしもあの時...だったらと思うことがよくありました。そうしてみると自分が生きているのは奇跡的なことだと思いました。また、もしも発生したのが明け方ではなくて通勤時間や昼間の街がにぎわっている時間だったならば、もっとたくさんの人の命が無くなってしまっていたと思います。そう思うととてもゾッとしました。また、もしも自分が大人だったなら絶対にボランティアに行くのにと思いました。

環境防災科に入って

私が環境防災科を選んだ理由は、将来消防士になりたいという夢があって、この環境防災科には消防学校の体験入校があり少しでも消防について学べると思っていたからです。しかし実際は消防関係以外のこともたくさん学ぶことができました。

1年生の時には、阪神・淡路大震災の状況や概要、人々の行動、専門家の行動、政府や消防などの行動について外部講師の方々に話をしてもらいました。また六甲フィールドワークや消防学校の体験入校などで自分の体で直にいろいろ学びました。ボランティアの大切さや、阪神・淡路大震災のときにどんな活動をしていたかなども知ることができました。実際に自分たちが募金活動や地域の防災訓練などのボランティア活動に参加して直接体験できる機会もたくさん与えてもらいました。これらのことを通して、阪神・淡路大震災について自分が知らなかったことをたくさん知ることができたとし、ボランティア活動や地震のメカニズムをほかの学校では知れない深いところまで学習できたと思いました。

いろんな貴重な体験や学習ができて本当に良かったと思うし、これからはいろいろ学び続けていこうと思いました。

これから

これから地震によってたくさんの人々が亡くなったり悲しんだりすることがなくなれば本当に良いのと思います。これからは身近な人に伝えていくという小さなことでも自分のできるかぎりのことをしていきたいと思います。

感想

私は「語り継ぐ」の授業を通して初めて父や母、兄、祖母、同じ地域に住んでいる人などたくさんの人に阪神・淡路大震災について聞きました。自分の思っていたよりも被害が大きかった家が同じ地域にあって驚いたし、いろんな人の話を聞くことによって薄れかけていた記憶を再び思い出すことができとても良い機会になりました。阪神・淡路大震災を風化させないためにもたまにはみんなで話し合っ思い出す機会も大切だと思いました。

これからは阪神・淡路大震災を体験した人がどんどん減っていってしまうので、自分は体験した1人としてできるだけたくさんの人に伝えていけたらなと思います。またそれと同時に防災を伝えていくことができたなら今後の地震により亡くなる人や被害が少なくなっていくと思うので「語り継ぐ」と同時に防災も広げていけることができたらなと思います。

あの日から学んだもの

神戸市垂水区舞子台
山田 真志

地震発生前

地震なんかでは人は死なない。当時、人の死を身近に感じたことがなく、まだ地震の怖さを知らない僕は本当にそう思っていた。それに、どこか別の地方で地震があったとニュースで言っているのに「神戸に大きい地震はこんって言われてるから大丈夫やで」と母が言っていたため、地震なんて自分には全く関係のないことだと思っていた。おそらく同じように思っていた人は他にも結構いると思う。

僕の家では、地震の備えなど全くしていなかった。弟が誕生したばかりだったため、毎日みんなで世話をしては可愛がっていた。とても幸せでいっぱいだった。僕も毎日幼稚園に行き、友達と遊んで、家に帰ったらゲームをしたり公園に遊びに行ったりしていた。こんな幸せな毎日の中で、まさか神戸にあんなにたくさんの被害をもたらす地震がやってくるとは、全く予想しなかった。

地震発生

阪神・淡路大震災が起きてしまった。この時、僕はまだ幼稚園の年中だったためほとんどのことは記憶に残っていない。しかし、記憶にはっきりと残っているのは、目が覚めると地面は大きく揺れ、目の前には父が覆いかぶさっていたこと。揺れている最中、何が起きたのか、さっぱり理解ができなかった。まだ夢の世界にいるのだろうかと思っていた。

揺れがおさまると、父が懐中電灯を手に他の部屋の様子を見に行き、他の部屋に行くまでの通路がグチャグチャだったためすぐに戻ってきた。それから、家族5人でベッドの上で明るくなるのを待った。僕はまた少し寝た。目を覚まして僕が最初に目にしたものは、食器棚にたくさんあったはずの食器がすべて床に落ちて割れてしまっていたり、CDが飛び散っていたりと荒れてしまった家の様子だった。やっぱりあれは夢じゃなかったのだと気づいた。それから少し片付けをして外に出ると、黒い小さなものがパラパラと降っていた。駐車場に行くと白いはずの車が黒くなってしまっていた。僕は闇に染まった世界が怖かった。

その日の夜、残っていたご飯でおにぎりだけを食べた後、焼き芋売りが家の下に来ていたから母と一緒に買いに行った。焼き芋を売っていたおじさんが、タダで焼き芋を分けてくれた。おじさんが僕に手渡ししてくれたことがとても嬉しかった。あんな大きな地震で、自分のことだけじゃなく、来る客みんなに焼き芋を分けていたおじさんは本当に素晴らしい人だと思う。大げさかもしれないが、こういう人がいたから僕は生きているのだと思う。地震の影響で、僕が住んでいた家はガスと水道がストップしていた。そのためトイレはお風呂の残り湯で流していた。水の供給が来て、灯油を入れるような入れものに水を溜めた。

この日僕は、幼稚園の年中ながらも大変なことが起きたことは分かっていたので、まだ幼稚園にも入園していない妹と、生まれてまだわずか3週間しか経っていない弟を、兄として面倒を見て可愛がったことを覚えている。しかし、とてもこんなことを言ってしまうのは悪いが、僕はいつもと違う家の雰囲気や周りの様子にワクワクしていた。テレビで神戸の状況を見るまでは…。僕のこの日の記憶は、一生忘れることはないだろう。

おじいちゃんの家

阪神・淡路大震災の影響で水道とガスがストップしていたため、お風呂に入ることができなかった。しかし、東落合に住んでいたおじいちゃんの家は偶然にもライフラインがストップしていなかったため、何日かお世話になった。そこで地震発生以降、初めてテレビを見た。スイッチを押して最初に画面に映ったものは、それは高速道路で今にも落ちそうになっているバスの映像だった。高速道路がズラッと倒れているのを見た。神戸の街が一面火事になっているのを見た。どれも本当に驚いた。自分の住んでいる神戸が無くなって消えていくような気がした。正直、自分がこんな目に遭わないで家族みんなが生きていてよかったと思っていた。

父と一緒に風呂に入った。僕は小さい頃、父と一緒に風呂に入ることが大好きだった。風呂場でどんな会話をしたかなどは全然覚えていないが、あの風呂場の光景は今でも微かに覚えている。それだ

け嬉しかったということだろう。

おじいちゃんの家には誰か知らないおじさんが僕たち3兄弟と、とても仲良く遊んでくれた。一緒に車のおもちゃを作って、それを家の中で動かして楽しんだ。あまりに楽しかったため、家に帰ることを嫌がった。遊んでくれたおじさん、助けてくれたおじいちゃんには本当に今でも感謝している。

しかし震災以降、そのおじいちゃんの家遊びに行った記憶が無い。それに、長い間会って話した記憶もない。物凄くもったいないことだと思う。震災で亡くなって、会いたくても会えない人がいるのに、こんなこと、その人達に申し訳ない。もし今おじいちゃんが亡くなってしまったら後悔でいっぱい。だから、2人ともが生きているということに喜びを感じ、たまには電話したり家まで会いに行ったりしようと思う。絶対に後悔にならないように。

父の親友の死

父には高校時代から仲が良く親友だった、みっちゃき(三宅)という人がいた。その人とは、僕が3歳の時に、一緒に沖縄旅行もした。よく抱っこしてくれたり、可愛がってくれたりしてよく遊んでくれていた。昔の自分の写真を見ていると、一緒に写っている写真も多い。そんなみっちゃきも、今はもういない。阪神・淡路大震災で亡くなったのだ。寝ていた時に屋根が落ちてきて逃げ遅れ、圧死だったそうだ。父が別の友人から電話でその報告を聞いていた時、僕は父の横にいた。父は泣いていた。普段あまり涙を見せない人だったので、何で泣いているんだろうと思っていた。数日後、家族5人揃ってみっちゃきの亡くなった家へと行った。周りの家も全壊していて別世界のようだったことを今でも覚えている。亡くなった家の前に、手作りのおにぎりを供えた。その時始めてみっちゃきはもうこの世にいないんだと実感した。とても悲しかった。でもそれ以上に、親友を失った父はもっと悲しかったと思う。もし今、また同じような震災が起きて僕の親友が死んでしまったら、おそらく僕は立ち直れないだろう。昨日まで普通に遊んで普通に会話していた親友が突然いなくなる。ありえない。信じられない。こんなこと、考えただけでもゾッとする。そう考えると、父は本当に強い人だと思う。親友を亡くした悲しさの中でも、僕たち家族を守り続けてくれた。3人の兄弟の前ではいつも強がって、心配させないようにしてくれた。本当に誇らしく思える、素晴らしい父親だ。

震災から何年か経ってから、父のもう1人の親友の渡辺という人が「さんぺいた」という居酒屋を開いた。たろうと呼ばれている父と、得平という人と、みっちゃきと、この店を開いた渡辺さんの4人は高校時代からの親友同士だ。この「さんぺいた」という名前は、「さん」がみっちゃきの名字の三宅の「三」からとったもの、「べい」が得平という人の「平」からとったもの、「た」がたろうと呼ばれていた父の「た」からとったもので、渡辺さんが「みっちゃきが亡くなくても4人は親友のまま」という意味で開いたそうだ。本当に厚い友情だと思う。

今でもみっちゃきのお墓参りには1年に1回程行っている。お墓参りの後には、4人が昔よく遊んでいたという、甲子園浜に遊びに行くことが多い。4人が通っていた西宮今津高校は、甲子園浜のすぐ裏にある。一度、父と2人で西宮今津高校を眺めに行ったことがある。昔話を聞かせてくれた。高校をジッと見つめる父の顔は、どこか懐かしんでいるように見えた。きっと、色んなことを思い出していたのだろう。そんな父を見ていると切なくなった。そして遊んだ後は「さんぺいた」へ行く。これはお決まりみたいなものである。「さんぺいた」では、いつも昔話で盛り上がる。みっちゃきは亡くなってしまったけど、今でもこうして4人は繋がっている。これからもずっとずっと繋がりが続けるだろう。決して切れることのない友情の糸で.....

友達のかなむ

僕が住んでいる家は集合住宅であるため、同じ住宅に住む子供たちとは本当に仲が良かった。いつも10人以上の友達が集まって砂場で山を作ったり、だんごを作ったりしていた。親同士の仲も良かったため、たまに家でパーティーをしたりもしていた。その中でも僕が特に仲が良かったのが、同い年のかなむだ。幼稚園も一緒だったため、毎日1日中一緒だった。しかし、震災が起きてからしばらくはお互い大変だったため、一緒に遊ぶことができなかった。最初は、辺りのいつもと違う様子にワクワクしていたが、少しすると、遊べないことがすごく寂しかった。そして久しぶりに遊ぶとなって、かなむの元気そうな姿を見た時に、本当に安心したし嬉しかった。あの時に会ったあの場所も光景も覚えている。初めて友情というものを感じたのだと思う。あの時、かなむはどう思っていたのか、今でも知りたいところだ。

震災の年に、かなむは板宿に引っ越してしまった。それでも家族同士で遊んだりしていたから、それ

ほど寂しくなることはなかったが、かなむと一緒に幼稚園を卒園したかった。

今でも毎年夏休み頃にかなむとは家族同士で会っている。いつも昔話で盛り上がる。小さい頃に仲良しでよかったと思うし、あの頃の友情が今でも途切れていないと思うとすごく嬉しい。これからはかなむとの友情は大切にしていきたい。

小学校 1 年生

震災から 1 年と少し経ってから、僕は小学校に入学した。小学校 1 年生の時から、元気な子供で、休み時間は毎日外で遊んでいた。友達とケンカもよくした。家では母によく叱られて泣いていた。

入学して 3 ヶ月程経ったある日、僕は休み時間にいつものように遊具で遊んでいた時、足を踏み外し遊具の一番上から落ちて頭をぶつけ、大けがをしたことがあった。落ちた瞬間「うわ～ヤバイ。また母さんに怒られる」と、自分の体より母に叱られる方の心配をしていた。しかし、病院で母と会うと「大丈夫か？他に痛いところは？」と言って、凄く心配してくれた。仕事から帰ってきた父も、母と同様に心配してくれた。その後、少し叱られたけど、父と母の僕への思いが伝わって、とても嬉しかった。この時僕はまだ幼いながら、震災でみっちゃきの死があったばかりにも関わらず、親に心配をかけ、更に悲しませるようなことをしてしまい凄く申し訳なく思っていたことを覚えている。あの日以降は、あんなに大きな事故はしたことがない。

小学校 1 年生の時のことで、もう 1 つ忘れられないことがある。それは、ある授業参観の日のことである。僕の両親も来ていたが、僕は頭が良くなかったため、先生が「分かったら手をあげて」と言っても僕は分からないから手をあげられず、その姿を見られるのが凄く嫌だった。ようやく嫌な授業が終わり、最後にクラスみんなで「しあわせ運べるように」を歌った。この曲を歌ったことによって、一生忘れられない授業参観日になった。なぜなら、この曲を聴いてたくさんの親達が涙を流していたからだ。僕の両親も泣いていた。歌い終わった後の教室が、いつもと違う異様な空気だった。僕は、「自分の家だけじゃなく、みんな辛い思いをしてきたんだな」と思った。家に帰ると父が僕に「最後に歌った曲よかったなあ。行ってよかったわ。」と言ってきた。僕自身も、この曲の歌詞が好きだった。今でも小学校でこの曲を習っているのかという疑問はあるが、震災の教訓を語り継ぐと同時に、この曲も継いでいかないといけないと思う。あの震災をずっと風化させないように。

中学生

中学 2 年生のある日、僕は夢を見つけた。それは消防士になることである。偶然見ていたニュースで消防士の人が救助している姿に憧れたからだ。このニュースを見て自分も世の人々を守り、頼りにされたいという思いがグングン湧いてきた。その後、主人公が消防士のドラマなどもやっていたため、そのドラマを見て消防士になりたいという思いが更に強まった。この気持ちは中学 3 年生になっても、消えることはなかった。そして進学する高校を決める時、僕は最初、舞子高校の普通科に入学することを希望していた。なぜなら環境防災科の存在は知っていたが、この時の僕のイメージしていた環境防災科とは、地震と山と火と温暖化のことだけを勉強する自分には全く関係のない学科だと思っていたからだ。しかし、担任の先生から環境防災科で本当にやっていることなどを教えてもらい、消防士になりたいという思いがあったことや、阪神・淡路大震災で身近な人を失った経験があったことなどから、環境防災科に入学したいと思ったのである。

環境防災科に入学

正直言うと、僕は環境防災科に入学して最初のほんの少しの間、環境防災科特有の授業が嫌で「やっぱり普通科にしてあげばよかった」と思っていた時期があった。消防士になることを希望している人には、そのことだけを勉強させて欲しいとも思っていた。しかし、環境防災科特有の授業を嫌々受けていく中で、僕の中での考え方が少しずつ変わっていった。そんな授業に興味を持ち始めたのである。代表例を挙げると、「災害と人間」という授業では、阪神・淡路大震災当時のことをいろんな外部講師の方々から聞いて、今まで知らなかったことを日々学んでいくことに楽しみを覚えていったのだ。全く興味がなかった防災のことも、どんどん新しい知識が身につくのが嬉しかった。そんな心の変化の中で、消防士になりたいという思いまでも少しずつ薄れていったのだ。決定的に消防士になることが夢でなくなったのは、1 年生の時の消防学校体験入校である。消防士らしい厳しさもあったしカッコ良かったし自分の長所を活かすことができるなとも思ったのだけれど、なぜか将来ここで働きたいという感情は強く湧

いてこなかった。そんな僕のような本気で消防士になりたいと思っていない人間が消防士になんてなれるはずがないし、仮になってしまったとすれば、本気で消防士になりたいと思っているがなれない人に申し訳ないし、こんな僕のように中途半端な人間が消防士だったら世の人が不安で火も使うことができなくなってしまうと考えたため、消防士になりたいという夢はなくなった。しかし、これは悪いことではないと思う。自分が本気で目指すものが違うと発見することができたからだ。

僕が高校生になってから、卒業してからもずっと続けていきたいと思ったのはボランティア活動である。そう思い始めたきっかけは、新潟県中越地震のボランティア活動に参加したからだ。僕は仮設住宅の前に積もった雪を除く作業をした。作業を終えると、仮設住宅に住んでいるおばあさんが「本当にありがとう。おかげさまで助かったよ。」と言ってくれたのだ。本当に来てよかったと思った。その他の人にもたくさんお礼を言われたが、今でもあのおばあさんの喜んだ表情が忘れられない。自分が行った作業によって被災者の力になっているということが嬉しくてたまらなかった。これからも、阪神・淡路大震災の時にボランティアの方に助けてもらったお礼としても、いろんな場所でボランティア活動をしてたくさんの方の力になりたいと思う。

僕が環境防災科に入って一番よかったと思うことは、素晴らしいクラスメートに出会えたことだ。だいたいの方があの阪神・淡路大震災を経験しており、それぞれの人がさまざまな悲しみを持っている。それでも共通している思いは、この悲しみを語り継いで風化させないということである。クラスメートのほとんどの人が風化させないという思いが強く意識の高い人ばかりだ。こんな人達に囲まれたおかげで僕の忘れかけていた悲しい思いも少し蘇り、あの震災を経験した僕達が語り継いでいけないういぬいぬあと思いはじめた。あの時のようにまたいつ大きな地震が来るかは分からない。いつ死んでしまうか分からない。だから、生きていく今を絶対後悔のないようにクラスメートとは仲良くして、ずっと大人になっても大切にしていきたいと思う。

僕が阪神・淡路大震災から一番学んだことは、命の大切さである。今この世の中では、殺人や自殺といった人の命に関係する事件が多い。僕はこのような事件をテレビのニュースなどで見ると本当に胸が痛くなる。阪神・淡路大震災で生き続けたくても生きることができなかった人がたくさんいたのに、なぜ人の命を奪ったり自らで命を絶ったりするのかが分からないし許せない。そんなの生き続けたくても生きることができなかった人に失礼だ。もっと命というものを大切にしたいと思う。そして僕は将来、愛する人と結婚し子供を持ち一家の大黒柱となったら東海・東南海・南海地震のような近い将来必ず来ると言われている災害から大切な家族を守るために、家は耐震性を良くして家の中では家具の固定などをして、つねに備えておきたいと思う。

未来

僕はこの「語り継ぐ」を書くことによってたくさんの心の奥底に眠っていた記憶を呼び起こすことができた。今でもあの時の悲しさや悔しさを忘れることはなく覚えている。僕達の世代が、阪神・淡路大震災を覚えている最後の世代と言われている。ようするに、僕達が次の世代に、あの震災での教訓やボランティアの在り方などを語り継いでいけないういぬいぬあと思いはじめた。もしこの先同じような災害が2度と起こらないのなら語り継ぐ必要はないかもしれない。しかし、災害というのは必ずまたいつか起きるのだ。だから、そのときに同じ失敗をしないように教訓を活かせるように、語り継ぐのだ。将来の災害で被害者の数を減らすか減らさないかは、今の僕達の行動次第だと思う。僕達は、あの震災で亡くなった方々の命を決して無駄にはしてはいけない。今、僕達にはするべきことがあるのだ。

薄れていく記憶

神戸市垂水区
山本 翔太

はじめに

震災当時の記憶はほとんど忘れている。それは記憶力がないから。確かにそうかもしれないが、僕は運よく家族も全員無事だったし、あまり辛い思いをしてないから、過去のことだと思っているのかも知れない。知らず知らずのうちに記憶は風化していく。悲しいくらいに…。忘れたくても忘れられない出来事である人もたくさんいると思う。そう思うと自分は運がよかったからといって、震災のことを忘れていくのはなにかやりきれない気持ちだ。僕らの世代、僕らの後輩の世代くらいまでしか震災の記憶はないと思う。そして、震災を知っている人々たちは世を去って行き、震災を知らない人々がこれからはどんどん増えてくる。僕は震災を知っている世代としての使命みたいなものを感じ、先輩たちが語り継いできたものを受け継いで、次は後輩につないでいきたいと思い、とぎれとぎれの記憶を思い出しながら書く。

地震発生前日

僕の家族は両親と兄2人と僕の5人でマンションに住んでいたし、今も住んでいる。子供部屋は2つしかなく、兄が使っていて僕は両親と3人で大きな寝室に寝ていた。

地震のことをあまり覚えていないのに、前日のことなど全くと言っていいほど記憶にない。たぶんその日はいつもどおりの平凡な1日を過ごしていた。そして幼い僕は10時くらいに寝た。

いろんな人が、前日は「空の色が気味悪かった」、「雲が変な形だった」、「ペットが奇妙な行動をとった」、などといった前兆現象を見て記憶に残っていると言うが、僕は鈍感なのか別に衝撃的な前兆現象を見た記憶はないし、印象に残っていない。

ただわかっているのは、小さな僕にとってあの日まで地震とは、たまにきてちょっと揺れる楽しいものであった。

地震発生

「ゴォォ」という感じで地震は起こったらしい。楽しい時間は早く過ぎるけど、嫌な時間は長く感じる。どれくらい揺れていたかわからない。ただ長かった気がする。ということは、やはり地震は嫌なことだったのだと思う。地震発生時、僕はまだ寝ていた。厳密に言うと、少し起きていた。夢と現実が混ざったような、寝ぼけていた感じだ。今でこそ、寝ていたなどとのんきなことが言えるが、実際は運がよかっただけで親が守ってくれていなかったら死んでいたかもしれない。そう考えると寝ていた自分がとても情けない。目が覚めると、母が覆いかぶさっていた。そして揺れがおさまった。違う部屋で寝ていた兄達に来て、無事を確かめていた。幸い家族はみな無事で、まだ余震が来るかもしれないので布団にくるまっていた。そしてそのうちまた寝ていた。目が覚めて、別にすごいことが起きたという実感はなかった。ただ単に、地震があっただけと思っていた。が、すぐにすさまじい光景が目に入ってきた。いろんなものが倒れ、散乱していた。また、1月で寒いからスリッパを履いていたので、寝室のすぐそばにスリッパがあってよかった。青色の綺麗なペアのグラスが割れていた。何かの記念に親が買ったものだろう。とても悲しそうな目をしていたのは、はっきり覚えている。母が最初に台所の方へ行き、被害を調べた。父は何をしていたのかは記憶にない。被害は食器棚の食器が全部割れていたくらいの被害で助かった。

その後聞いた話だが、僕の寝ていたところは、頭のすぐ後ろにタンスがあって、タンスの上に額に入ったジグソーパズルがたくさんあって僕の上に落ちてきたらしいが、母親がとっさに覆いかぶさってくれたおかげで助かった。タンスも倒れてきたけど、父が支えてくれたらしい。また今僕は長兄の使っていた部屋を使っているが、よく考えると長兄の部屋は外開きで、もし物がドアの近くにあれば閉じ込められていただろう。

散らかった部屋の中でスリッパを履いて玄関まで行き、靴に履き替えた。玄関はほとんどと言っていいほど被害はなかった。廊下にも被害はなかった。外に出るとお向かいさんも出て来ていて無事でよかったと言っていた。5階から階段で下まで行った。エレベーターは余震が来たら止まりそうなので、使うのをやめた。ただ、この時僕は余震などという言葉さえ知るわけもなかった。親に付いて行くだけだった。下において、一時マンションの会議室にみんな居た。けど、少ししたらもう家に帰って片付け作業をまたやり始めた。

長兄は中学生でサッカー部だった。朝になり、みんなの無事を確認したあと長兄は、「サッカー部の朝練に行ってくる」と言い出した。親は止めたがどうしても行くと言って近くの中学に行った。が、やはり朝練などあるはずもなく帰ってきた。外の様子はひどかったらしい。その後は、とりあえず危ないので割れた食器を片付け始めた。いろいろ倒れていたものなどを直し、思ったことはそんなに被害はない。結構すぐに元に戻った。その後の記憶はあまりない。その時長田の方はすごいことになっているなんて知らなかった。知ろうとも思わなかった。自分のマンションの周辺だけだと思っていた。自分の家族は大丈夫だから、友達もみんな生きていると思っていたし、この地震で亡くなる人なんていないと思っていた。

救援物資

地震が発生し、ライフラインは止まっていた。トイレは今までどおり家の物を使い、汲んできた水を流して使っていた。地震の情報はラジオで得ていたと思う。電気はろうそくを灯し、火はカセットコンロを使っていた。ご飯は何を食べていたか覚えていない。缶詰とかを食べていたのだろうか。カセットコンロで料理をしていたのかはわからない。ただ空腹ではなかったと思う。

最初、マンションから出てマンションを見ると、細かい亀裂は入っているものの、それほどダメージはなかった。数日経っていたのかはわからないが、近くの高校で、水を配っていた。朝から僕はその近くの高校に親と水筒を持って水をもらいに行っていた。それが日課のようだった。まだ小さかった僕はとても小さな水筒だった。とても行列は長く、坂道だったのでしんどかった事を覚えている。1日に何往復もした。これが大変なことだとは思っていなかった。行列に並んでいるときにマンションの友達と会った。別に生きていて当たり前だと思っていたので、あまり感動もなく無事でよかったという気持ちではなかった。地震を体験したこと、すごく揺れたことを話したかった。水以外は何が救援されていたのかはわからない。水以外もらわなかったのかもしれないし、僕が知らないだけで食糧ももらっていたのかもしれない。正直、地震が起きたのに、いつもと違う毎日にわくわくしていた。

風呂

震災から数日後、風呂に入った。比較的風呂には困らなかった。震災時の風呂のことで思い出す光景は3つある。1つ目は、ガスコンロで水を沸騰させ風呂場に持っていくという作業を繰り返してお湯をためて入ったこと。とても地味でしんどい作業だ。僕はあまり手伝わなかった気がする。この方法はお湯が冷めたら終わるので、近所の友達何人かで一緒に入ったりした。震災を受けたのに、何か楽しかった。お風呂で友達と遊ぶことが、とても楽しかった。

2つ目は、震災から数日経って、マンションの友達の家は水道が出るようになったので、お風呂に入れてもらったこと。その時も、友達とお風呂に入って、楽しかった記憶がある。その時だけは、震災を忘れられた。

3つ目は、母の友達だと思うが、知らない人たちとどこかの銭湯に車で行ったことだ。銭湯に行く機会などあまりなかったので楽しかった。水風呂とかではしゃいだ。家族はみんな笑っていた。風呂を出て、母が買ってくれたジュースはとてもおいしかったことは、今も鮮明に覚えている。

復旧

復旧の過程は全く覚えていない。別にどこかに避難したわけでもなければ、親戚の所にも行ってない。いつから幼稚園に行きだしたのか、ライフラインはいつ復旧したのか。気付けば家はもう震災前同様何不自由なく、今までの暮らしになっていた。幼稚園も卒園し、小学校に入学していた。幼稚園は僕

が卒業した後、きれいな新しい校舎になった。もうその時点で記憶は薄れてきていたのかもしれない。しかし、ある日の授業で初めて阪神・淡路大震災の被害の大きさを知った。震災当時の長田の方の被害をビデオで見て、自分の中の地震と実際の地震のギャップに驚いた。長田の方は、火災もひどく黒い煙が充満し、建物もたくさん倒壊していて死者も大勢いた。その事実を知りとてもびっくりした。

小学生のときにマンションは工事を始め、きれいになったし補強もされた。地震によって生じた亀裂は無くなった。このように復旧していくことで、だんだん震災の記憶も薄れてきたのだろう。

あれだけの大きな地震を体験したが、別にトラウマなどはない。が、当時は楽しいものだったが今は楽しくとも何ともない。ただ今思うことは、復旧はこれから生きていく上でしないとイケないが、記憶もともにきれいになっていくと思う。

今

小学校も卒業し、中学校に入学した。その時にはもう、震災のことは知ってはいるけど記憶もほとんどなく、忘れていっていた。それはとても悲しいことだ。中学生同士の普通の会話に震災について話す人などいなかった。最近家の近くに震災を思い出すようなきっかけを与えてくれる場所もなければ、風景もない。しかし中学3年になり進路を決める時期になったとき、僕の学力的にというかなんとなく舞子高校に入りたいと思って、しかも推薦で入りたいなあと思っているいろいろ調べていると、今の舞子高校環境防災科について調べることができた。地震のことを思い出した。その時の夢は消防士だったので、消防学校で体験できることもうれしかったし、この時に震災のことなど普通ではないことを学べる学科だと思って入りたいと思った。そして受験して、環境防災科に入学できた。この学科に入ってたくさんのことを学んだ。

環境防災科に入って...

環境防災科に入って「災害と人間」という授業を受けた。この授業では、消防士や警察、その他いろいろなところからいろいろな人が来てくださって、震災当時の話を聞くことができた。それまで、震災当時の他人の気持ちや行動、そんなことは考えてなかった。いろいろな話を聞いていると、それぞれいろんな状況・立場に立たされ、苦勞をしたこと、家族と仕事、大人の観点で震災を見た。当時子供だった僕と、当時大人だった人の苦勞の違い、大人の活躍によって守られたたくさんの命。このことについて考えるとこれから大人となって、もし地震が来たら助ける立場になるのだから、やらなければいけないことがたくさんあると思った。

「長田のまち歩き」で、いろいろな人の当時の話を聞いた。これは授業で聞きに行ったが、見ず知らずの僕らに、悲しい記憶、思い出したくないであろう記憶を思い出し、震災について語ってくれた。今回は授業だから聞きに行くことができたが、普段から1人で聞きに行くことは僕にはできないだろう。聞きに行く人もあまりいないだろう。長田のまち歩きのように、自分から知ろうとして震災のことを聞きに行くことは僕らが得た良い機会であって、普通の人は、聞きに行きたくても行かない人や、行けない人もいるだろう。そして、知ろうとしない人が大半だと思う。なぜなら、「別に過去のことだから」、「別に体験してないし...」などと思っているに違いない。僕も正直、環境防災科に入る前までは興味もあまりなかったし、どうでもいいことだった。ただ、震災の知識を得るうちに、「どうでもいいこと」ではなくなっていた。今、興味ない人が別に悪いわけじゃない。今まで震災に関する知識を得る機会がなかっただけなのだ。だから僕らは伝えなければならぬと思う。それが、震災の記憶を風化させないため、苦しい思いをしているいろいろな話を聞かせてくれた人のため、そして震災によって、悲しくもこの世を去って逝った人のためにも、僕がしなければいけないことだと思った。

今思うと小学校の時に被災した人がつらい気持ちを思い出しながら語ってくれたことがあったが、小学生の僕は自分も震災を体験したということと、集中力がなかったからあまり真剣に聞いていなかったし、早く終われと思っていた。とても失礼なことだと思う。震災当時を語る人の気持ちなど考えていなかった。

この学科でいろいろなことを学んでいくうちに、「近所付き合い」ということがとても重要だと知った。震災当時、消防士などより近所の人に助けられたという人が多かった。特に僕はマンションに住んでいて、近所の人と触れ合う機会が多いと思う。実際震災当時同じマンションの友達の家で、お風呂に入ったり食糧も分け合った。今思えばその時は助け合うということが当たり前だった。震災から10年経つ

た今、僕はいまだに近所の人とは仲が良いほうだと思う。けど、近所の人とあまり仲が良くない人も結構いるだろう。お隣さんの顔を知らないような時代だ。でも、近所の人と仲良くなる、知り合うということが一番簡単にできる防災だと思う。人の命は人が守るのだ。挨拶をすることからいろんなことが始まると思う。

防災

環境防災科で学んでいて思ったことは地震の教訓を活かした防災をしていくべきだということだ。僕たちはただ単に震災を体験しただけではない。ちゃんと教訓を得て今後活かすべきだと思う。そのためにはまず地震のことや、当時のことについて興味を持ち、防災というものを知って、阪神・淡路大震災のようなことが2度と起こらないようにしていくべきだと思う。防災については環境防災科に入るなど、自ら行動を起こさないと知ることは難しいと思う。身近でできるのは地域の避難訓練や防災のイベントに参加することだ。また、そういうイベントに参加することで、地域の人との交流を持ち、いざというときに助け合って欲しいと思う。そのスタートとしてこの「語り継ぐ」を読んで当時の震災について知り、少しでも興味を持ってもらえたらいいと思う。

あとがき

これを書いていて思ったのは、もう「卒業」、3年生になったのだということ。高校に入ってまだ少ししか経っていないと思う。それは環境防災科のクラスが3年間同じだから？わからないけど「時」が経つのは早いと思う。そしてこの過ぎ去る「時」の中で、震災の記憶は忘れ去られていくのかと思うと、とても残念なことだ。町並みを見ても、もう震災の爪痕は少ない。震災を知らない人も増えてくる。そういう人たちにも、今後あのような出来事を起こさないように、過去に阪神・淡路大震災という出来事があり、たくさんの人々の命が失われたという事実を知ってもらいたい。

このような「語り継ぐ」機会は滅多にないと思う。そして僕が一番知って欲しいことは、一番大切なものは命ということだ。そしてまず災害が起きた場合、第一に自分の命を大切に。自分の命が守れなければ、他人を守ることもできない。まずは自分の命を守ることから始めるべきだ。そんなのは簡単だと思っている人が多いと思う。地震が来ても自分は死なないと思っている人も多いと思う。災害時には、普段どおりに行動できないと言われている。でも自分は動けると思っている人も多いと思う。僕もそう思っていた。でも、環境防災科に入ってそれは間違っていることを知った。揺れを体感したけど実際は動けなかったし、突然地震が来たら動けないと思った。なので、思い込むのではなく、いろんなことを知り、自分の命を大切にしたいと思う。

今を生きる

神戸市垂水区
山本 美羽

1. はじめに

あの日の朝、神戸のまちは大きく変わった。

刻一刻と近づくあの瞬間を誰も予測することはできなかつただろう。燃え盛る大きな火を前にただ茫然と立ちすくむ人々の姿が印象的だ。

遅生まれのため当時の私はまだ4歳だった。父はホテルマンとして働いており、母は3人の子供の育児に追われ、小学校1年生の兄と幼稚園に通う姉の5人家族で、とある集合住宅に住んでいた。当時のことは無に近いほど覚えていない。この途切れ途切れのパーツを集めたとしても、きちんとしたパズルを完成させることはできないが、今回は自分自身で伝えられる部分、まだ記憶がうっすらと残っている地震発生前後を重点的に書きたいと思う。

2. 特別な日

1995年1月17日。この日は私たち家族にとって、1年に1度ともいえる大切な日だった。7歳を迎える姉の誕生日だったからだ。前日にはこの日の誕生日会のために部屋の飾り付けやバースデーケーキなどの準備に追われ家の中は慌ただしかった。同時に絵に描いたような幸せな雰囲気にも包まれていた。私自身もケーキのためにと、折り紙でたくさんの輪を作り積極的に準備に取り組んでいたのを覚えている。イベント好きな私はこの日を誰よりも楽しみにしていたかもしれない。その日の夜は姉とともに、明日にひかえた誕生日会のことを話しながらいつの間にかぐっすり深い眠りについてた。

3. 地震発生

午前5時46分。確実に私の体は何か反応していたに違いない。いつもなら決まった時間に目を覚ましていたが、大地が大きな悲鳴を上げるほんの30秒ほど前に突然はっと目が覚めた。目覚まし時計が鳴る数秒前に起きてしまうという今の癖はこの頃から始まったのだろうか。もちろんこれから何が始まるのかなど当時の私に想像できるはずもない。部屋の中は真っ暗で朝日もまだ昇っておらず、家族はまだ誰も目を覚ましていなかった。いつもと変わらない風景に胸をなでおろし、もう一眠りつこうとした、その時だった…。 “ゴゴゴゴオー！” という、吸い込まれるような音がすると思うやいなや、部屋全体が大きく揺さぶられ始めた。自分の体はいうこともきかず、ただただ身を任せるしか手段はなかった。何が起こったのだろうか、全く分からない。あまりにも突然のことで頭の中はパニック状態だった。4歳の私が考えることだ、テレビの中からゴジラのような怪獣が抜け出してこのまちにやってきたんだ、そんなことをとっさに思いついただろう。「布団かぶってじっとしていなさい！」という母の強い一声にはっと我に返り、姉と2人で布団を頭からかぶって1人色んなことを考えていた。あの何とも言えない大きな揺れは、私にとって、まるで遊園地のジェットコースターに乗っているような気分だった。この時の感覚は今でもはっきりと覚えている。家族全員1つの部屋で川の字になって寝ていたため、その安心感からか怖いという恐怖感はほとんどなかった。母の言うことを聞き、揺れがおさまるまで布団の中でじっとしていた。20～30秒ほどだったらしいが、揺さぶられている時間は異様に長く感じた。食器の割れる音がかすかに耳の奥に残っている。

4. 地震発生後

ようやく揺れがおさまり布団から少し顔を覗かせ、うす暗い部屋の中をぐるっと見渡した。一言、めちゃくちゃという言葉がぴたりな状態だ。恐怖感はない。それどころか兄弟3人して足の踏み場もないほど散乱している部屋の中を走り回っていたくらいだ。机の上には本が散乱し、工作の作品が見るも無残な姿に変わっていた。自分の机がこんな状況になっていることを自慢したいかのように兄は写真を求めた。その写真が当時を物語る、唯一のものになり今でもよく目にする。

部屋の電気はつかなかったものの、幸いテレビをつけることはできた。まだ太陽が昇っておらず、薄暗い部屋をいくつかのろうそくとテレビの光が照らした。電源をつけたと同時に地震の速報が入ってき

た。どのような内容だったかは全く覚えていない。むしろ当時の私にとって、そんなことはどうでもよく、ニュースよりも毎朝欠かさず見ていた朝の番組を見たかった。しばらく両親は食い入るようにしてテレビに目を向けていた。私が番組を見ている途中、幾度となく上方に速報が入ってきたことはうっすらと頭の片隅に残っている。読もうとするものの漢字が読めずもどかしかった。

外では母を含んだ同じ集合住宅に住む人たちが話し始めていた。幸い誰もケガをした人はおらず、建築年数が相当であったらう建物も亀裂が入っただけだったらしい。しかしその亀裂は縦に 4、5m という大きなものだった。よく倒壊しなかったなとつくづく思う。

父はまだ陽も昇らないうちに会社へ向かった。もちろん電車など動いているはずもないが。

私にとってはいつもと変わらない状況だった。お父さんがいて、お母さんがいて、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいて...だいたいなテレビ番組も見ることができた。ただ少し部屋の中が散らかっているだけ。朝が少し早くやってきただけ。テレビの中の人々が忙しいだけ...。本当にそれだけだった。神戸の町並みが変わっていき一方、同じ場所に住む私のこの落ち着いた状況が今では信じられない。

5. 父の奇跡

今思えば、私たちが寝ていた場所は危険すぎた。大きなタンスや衣装ケース、兄の机、その上にはたくさんの本や参考書などが積まれていた。“神戸に地震はこないだろう”両親はそんな安易な考えを持っている1人でもあったため、もちろんのこと、タンスなどが固定されているはずもなく、されるがままあちこちに倒れかかった。しかもその巨体は父にも襲いかかっていたのだ。固定されていない大きな洋服タンスは父を挟むようにして置いてあった。普通なら下敷きになってもおかしくない状況だ。しかし運よくタンス同士が丁度 T の字になって止まり、父はかすり傷1つしなかった。それどころかあの大きな揺れにさえ気付かず、ぐっすり眠っている始末だった。あの時もしタンスが1つしかなかったら...今考えてもぞっとする。父の寝ている方に顔を向けた時に見たこの光景は、あまりにもショックが大きかった。幼いながらも一瞬“死”というのが頭によぎるものだった。阪神・淡路大震災と聞くといつも真っ先にこの光景が浮かぶ。

6. 新たに...

テレビを見ていると姉が大きな声で泣き叫んでいる声が聞こえてきた。覗いてみると台所には今日食べるはずのバースデイケーキが冷蔵庫から飛び出しており、とてもじゃないが食べられる状況ではなかった。前日、いや、もっと前からこの日をどれだけ楽しみにしていただろう。年に1度の誕生日。この日、毎年決まって行われていた誕生日会が開かれることはなかった。こうして私たち家族にとって、姉の誕生日である1月17日には新たに“阪神・淡路大震災”がつけ加えられた。

毎年感じる複雑な思い。この日を喜んでいいものなのか。“姉の誕生日”と“阪神・淡路大震災”。言い換えれば“喜”と“悲”。確かに誕生日は誕生日以外の何者でもなく、直接的に震災に関する訳でもない。素直に喜ばばいい。おめでとう、と祝えばいい。でもいつも決まって言葉にしにくい複雑な感じがついてくるのが正直なところだ。自分の中でこの2つの間に区切りができるのはいつになるのだろうか。

7. 数時間後

しばらくして姫路に住む祖母から電話がかかってきた。そちら側では震度4を記録し、祖父が軽いケガを負っただけで済んだらしい。テレビで神戸が震度7を記録したことを知り、心配で電話をかけてきてくれたそうだ。集中的な電話利用で回路が混み、なかなかつながらなかったということも言っていた。これからのことを母がしばらく祖母と話していた。私たちの家とは違い、祖母の家は井戸水だったので水も止まっておらず、食糧に困っていることもなかったため、結局私たちは祖母の家へ行くことになった。滞在期間は分からず、家を空けてしまうので、とりあえず散らかっている部屋を母と兄妹3人で片付け始めた。どこをどう片付けたかは全く覚えていないが、父に襲い掛かったあのタンスを4人がかりで起こしたことはとても印象的だ。その後荷物をまとめ、母の妹がクルマで迎えに来てくれた。母はもう一方の祖母の家へ行くことになり、私はだだをこねて母について行こうとした。しかしそんなわがままが通用するはずもなく、あっけなくクルマに乗せられた。母がいないことに多少の不安もあったがそんなことが忘れられるほど、車内は久しぶりに会った叔母との会話ではずんでいた。

「どれだけ揺れたの?」「怖かった?」次々に来る質問に対して兄妹そろって負けないように答えて

いた。いつもなら高速道路を通過して1時間半程度で着くはずだが、高速には乗れず、一般道路を利用したため相当な時間を車の中で費やしただろう。姫路の方へと近付くにつれ、被害は減少していた。いつも見る光景とは違っていただけのもの、コンビニやスーパーは営業していたようだ。車はなかなか進まずクラクションが行き交っていた。延々と続くアリの行列のような道を往復してくれた叔母に、今さらだが感謝しなければならない。

しばらくすると朝早く目覚めたためか、ぐっすり夢の中に入っていた。
気付いた頃には祖母の家に来ていた。

8. おばあちゃんち

祖父・祖母・叔父が私たちを出迎えてくれた。本当に揺れたのだろうか。特に変わった様子もなく、この時には朝の揺れのことほとんど忘れかけていた。しかし体は覚えていたのだろう。幾度となく続く余震には過敏に反応していたらしい。誰も気付かないわずかな揺れでも気付き1人こたつの中に隠れていたことを聞いた。それほどの恐怖感は全くなかったはずなのに。

朝からほとんど何も口にしていなかった私に祖母はお菓子を用意してくれていた。それを食べながらテレビを見たが相変わらず面白くなかった。どのチャンネルも地震のニュースばかりで忙しそうにしていた。母や叔父たちは食い入るようにその番組を転々と見ていた。「うわあ〜」や「大変や」などとそれぞれの感想が行き交い、こちら側からすると番組よりもみんなの反応の方が面白かったのを覚えている。

朝早くから会社へと向かった父も、何も問題はなかったらしく到着した。この日、家族全員揃うことができたのが、とても久しぶりの気がした。素直に嬉しかった。篠山の方に住む祖父も母もケガはなく、また、連絡のつかなかった人とも連絡がついた。そうして地震発生から10時間後、誰一人として欠けることなく揃い、安否確認も終了し、とりあえずだがみんなの肩の荷が下りたようだった。

祖母の家では水も出るし、電気もつくし、あたたかいご飯も食べることができた。この何不自由ない生活ができたことに感謝しなければいけないと今では強く思う。私のまわりにはやはり変わったところというのはなかった。テレビではあれほど騒がれていたにも関わらず、同じ神戸に住む私の周りではただ普通に毎日が繰り返されていた。不思議な感じがする。

それから約1週間程度だったのだろうか、祖母の家に滞在し、学校が始まるという連絡が入ったので家に帰ることになった。祖母の家は広く、大好きな犬もいたので離れるのが心細かった。

最近になって知った話だが、家に帰る前に一度みんなで近くの神社へ行ってお参りをすることになったそうだ。そして帰り道の途中のデパートでそれぞれがチャリティ募金をしたらしい。その話を聞いて、記憶がほんの少し蘇ってきた。今でもはっきり覚えている。お金を入れた後、お姉さんから言われた「ありがとう」の一言が、照れくさくてなにより嬉しかったこと。「大きくなったら美羽もあんなのやりたい」と言った一言を。軽はずみに言ったのではなく当時は本当に思ったはずだ。募金するのと引き換えに心に暖かな灯がともされた。記憶の中ではあれが初めての募金協力になるだろう。

9. 意識

小学校に入学してから毎年1月17日には防災訓練が行われていた。授業の途中で突然始まる防災訓練に、当時は何気なく指示された通りに動いていただけだった。運動場に出て、話を聞いて、と本当のところ知らないと思っていたからだ。なによりも防災ということに興味がなかったのだろう。高学年になると“しあわせ運べるように”を用いた震災の授業も多くなってきたせいか、震災のことを少しずつ意識だしていた。当時は死者数や倒壊家屋の数などの数字を見ても想像することはできず、いまいち現実味というものはない。あの震災によって多くの方が亡くなったということ、それに伴ってたくさんの方が悲しんだということ、人間の力では自然に敵わないのだという事実の方が印象深く残っていた。そしていつも胸がキュッと締め付けられる苦しい気分になるのだった。ふとした瞬間に考える。同じ神戸に住んでいるのに、震災を経験した1人なのに、ケガもせず、周りで亡くなった人だって誰一人としていない。悲しむこともなかった。それだけでなく自分はほとんど不自由なしにあの時を過ごしていた。これだけ多くの方が亡くなり、神戸のまちは深い悲しみに包まれた。それなのに自分は...そんなことをよく考えていた気がする。

そんな小学校での震災教育を通じて阪神・淡路大震災を見つめ直し、今自分は“生きている”という

よりも“生かされている”という風に考えるようになった。これという理由はない。でもなんとなくそんな気がしたのだ。あの時多くの犠牲者が出た。当たり前だが誰も死にたいと思って亡くなった訳ではない。無駄な命は何1つなかった。たまたまあの場所にいたから、たまたまこんな事をしていたから、そんな偶然が生死を分けることになった。私自身あの震災で亡くなってもおかしくないのだ。でも今こうして生きている。そんな偶然の中で生かされた意味。その意味を、また、亡くなった方々の命を、無駄にしてはいけない。“しあわせ運べるように”の歌詞の中にも書かれているように、毎日を大切に生きていくということ、そしてこの震災の記憶を風化させないように語り継いでいくこと。それでようやく、今自分が生かされている意味が成り立つような気がした。

小学校6年生のときには、周りよりも震災への意識が高かったと思う。

10. 今とわたし

こんな言葉を一度は聞いたことがないだろうか。

“あなたが無駄に過ごした今日は、昨日亡くなった人があれほど生きたかった明日なんだ”

阪神・淡路大震災とは小学生の頃に“震災を学ぶ”という形で再会した。大きな転機だったものの、その後思い出すことは少なかった。それどころか着々と私の記憶は風化していた。再び思い出すきっかけとなったのは中学3年の頃。「震災から10年」ということでテレビや新聞で、“阪神・淡路大震災”という文字を目にすることが多くなった。同時に自分の中に何か感じるものがあった。自然とこの文字に目がいってしまう。言い過ぎかもしれないが自分と震災とが切っても切れない関係にあるような気がした。あの震災を経験した1人として、また、多くの命を無駄にしないために、何か出来ることはないのだろうか。そんな時、運命的に出会ったのがこの“環境防災科”だった。

自分の中で描いていた高校生活よりもはるかに上回る忙しさだった。というよりも、高校生である私たちがいいのかと思うほど、貴重すぎる経験をさせてもらっている。あらゆる分野の外部講師の先生方からのお話、数多くある校外学習、自分を成長させる発表の場など日本一忙しい高校生と言われてもいいほどだろう。ふと考えてみる。このような経験ができるというのも原点をたどってみれば、あの阪神・淡路大震災に行き着くのだ。もし震災が起こっていなかったとしたらこんな経験どころか、環境防災科が発足することもなかった。ここに集まったクラスの人たちや先生とも出会うことはなかっただろう。

ある外部講師の先生がおっしゃっていた。

「ここにいる私たち1人1人は、あの震災で通じているんだよ」と。

“1995年1月17日”

この日にちを見て何を思い出すだろうか。阪神・淡路大震災と口にすると人はどれだけいるのだろうか。震災の記憶は人々の頭の中から今もなお薄れつつある。そしてまた、10年・20年と経過するにつれ歴史の一部のこととしてとらわれていくのだろうか。この“語り継ぐ”を書くにあたって当時の記憶を鮮明に覚えていないせいか、行きづまることが多かった。少しずつ記憶が薄れている証拠だと思う。

これから先、震災を知らない世代がやってくる。それと同時に、語り継ぐ人自身も少なくなってしまう。そんな中でこの“語り継ぐ”が一種の教材として利用されることを心から願いたい。

ただただ普通に繰り返されるだけの毎日を過ごしたくはない。

6400人以上の命を無駄にしないためにも、あれほど生きたかった今日という日を大切に過ごしたい。

過去、現在、未来

神戸市垂水区
若林 ゆい

私は、正直言って阪神・淡路大震災の記憶がはっきりと残っていない。親や親戚などに聞いてこの文章を綴った。私の家族は両親、私、弟、双子の妹で暮らしていた。私は、5歳だった。当時の家はマンションだったが、よく考えたら倒壊しなかったことが奇跡だ。

私の家は全体的に長方形の作りで、玄関から入ると目の前には台所があり、その奥にはこたつのあるリビング、そのまた奥に私たち家族の寝室があった。

震災当日、私は揺れてから目が覚めた。いきなり何が起こったかもわからず左右に揺れていたので立つことが出来なかった。両親に腕を引っ張られズルズルとこたつの下に潜らされた。何事かと思った。こたつが置いてある部屋には、食器棚も置いてあった。家族全員が入ってこたつの中はぎゅうぎゅうだった。私は怖くて家族の誰かにずっと抱きついていて、こたつの外では、食器の音がずっと鳴り響いていた。天井の電気が落ちてきてびっくりした。私は、家の中で誰かが暴れて、めちゃくちゃにしているのかと思った。まるで、ジェットコースターに乗っている気分だった。ほんの数秒の揺れだったが、本当に長く感じた。

揺れが無くなりこたつの外を見るとテレビが前に倒れ、仏壇の水がこぼれていた。食器は棚には無くほとんど床に落ちていて割れていた。こたつの周りは割れた食器で覆われていた。本当に自分の家なのかと思うくらい崩壊していた。これはただごとではないと感じた。なんだか、家の中で台風が起こり、過ぎ去った後のようだった。そして、たくさんの家具などに傷がついた。最初は何がなんだかわからなかった。いつものようにみんなで、起きて、「おはよう」って言って、TV見て、みんなで話をして、そんな当たり前の毎日が始まるはずだったのに、ほんの数秒の揺れで出来なくなった。その時、母が外で見た景色がいつもと違うように見えたようだ。屋根が歪んで見え、瓦がはがれていたようだ。いつもの神戸の街には見えなかったようだ。

外の様子が気になったので外に出ようとしたらドアが開かなかった。家族はパニックになった。その時、近所の人達が私たちの家のドアが開かないことに気付いてくれて、ドアを開けてくれた。近所の人と繋がりがあって良かった。そして、近所同士と両家の祖父、祖母、曾祖母の安否確認をした。全員無事でホッと胸を撫で下ろした。しかし、近所の人々もまだ状況が分からずパニックになっている様子だった。本当に情報がなくて困っていた。

そこに、私の家に1本の電話がかかってきた。電話で初めてこれが地震だということが分かった。それからしばらく経って、近所の人から「学校に救援物資が届いたからね。」と言って水と食料を渡してくれた。自分の分以外に他人のまで持って来てくれて、人って本当に暖かいと思った。私たちは何かあったら何でも近所同士で助け合っていた。何かがあった時はすぐみんなで協力をして、心強かった。ライフラインは、忙しくて気付かなかったけど、ガスだけが使えなかったので家族で銭湯に行った。早くもとの生活に戻りたいと思った。

母方の祖父、祖母は塩屋に住んでいたが、祖父母の周りは特に被害はなかった。塩屋駅ではいくつかの家が壊れていた。祖母は地震が起こる前から起きていて、すごい音がしたのを覚えていた。祖母は、震災が起こる前から常に枕元には懐中電灯を備えていた。親戚から電話が来て、連絡を取り合った。家は2階建てで、グランドピアノが2階に置いてあり、少し動いていた。また、家具で、ピアノが少し傷ついていた。すごく重たいグランドピアノが動いたことにすごく驚いた。地震の力は本当にすごいと感じた。それから、電気はすぐに戻ったけれど、ガスと水は1か月程止まっていた。地震の直後は水もガスもまだ使えていたので、その時ある分だけの水を風呂に貯めて、洗濯機にも貯めてあらゆる物に水を貯めこんだ。そして、家にある分のお米をたくさん炊いた。使えるうちにすべてのことはやったようだ。水が無くなってからは、公園の水や、近くの塩屋小学校まで行って水を給水車からもらった。塩屋小学校は避難所になっていたが、そんなに人は多くなく、他の地方からやってきて炊き出しをしているのが印象的だった。しばらく経ってから、近所の方がペットボトルやおにぎりを持って来て下さった。

父方の祖父、祖母、曾祖母の3人は六甲の方で暮らしていた。祖父は、「大丈夫だ。心配するな。」の一点張りで祖母の様態は悪くなるばかり。近くに親戚も誰もいないので私たちが迎えに行くことにした。いつも通りのルートで行くと道が使えず通行止めになっているため、半日以上かかって父方の家に着いた。その時、3人とも公園でテント暮らしをしていた。一緒に連れて帰って生活をした。

最初は9人で暮らしていたが、家が狭いため父方の祖父の長男が住んでいる明石に曾祖母が行くことになった。そして、その年の4月17日。阪神・淡路大震災から3ヶ月後に亡くなった。私は、曾祖母に会いに行くといつも笑顔で抱っこされていたのを覚えていた。亡くなった時は、実感がわかなかった。どうして？なんで？私の頭の中は真っ白になった。

曾祖母は目が不自由でよく気を遣う人だった。だから、自分の家が一番落ち着く場所だったと思う。けれど、地震で家を無くし、いつも傍にいた祖父、祖母のもとを離れ、父方の祖父の長男の家に行った。目の前で自分の家が壊される、どれだけショックだったのだろう。さらに環境が変わったので、たくさん気を遣ったのだと思った。甘えることができなかつたのだと思った。環境が変わると精神的に疲れる。直接的ではないけれども、間接的に環境が変わり精神的に不安定になったのが引き金だった。狭い家に9人でも私たちの家で暮らしていたら何かは変わったかもしれない。狭いけど、祖父母と一緒に生活すれば良かった。何で地震なんか起こったのだ。何で1人だけ違うところにやったのか。今でも悔しい気持ちでいっぱい。曾祖母と過ごした時間はたった5年だけど、すごく楽しかった。たくさん思い出ができた。目をつぶると曾祖母の顔が鮮明に出て来る。言葉にできない程感謝している。今でも曾祖母に会いたい。ひいおばあちゃん、ありがとう。ひいおばあちゃんと出会えて私は幸せでした。天国でこれからも私を見守っていて下さい。ひいおばあちゃん大好き。

8人で暮らしていて、私たち兄弟は祖父と祖母がいることがすごく嬉しかったので、ほぼ毎日遊んでもらっていた。当時のことを考えると酷いことをしたと思う。けれど、逆に同情されるのも嫌なんじゃないのだろうか。自分の家が壊れて、テント生活で心もボロボロだったはずだ。けれど、遊んでいる時の祖父、祖母の顔はすごく笑顔だったので少しは力になったのかなと思った。震災後の私たちの祖父、祖母への対応は良かったのかは、未だによくわからない。

私たちの家は大分傷がついていた。数日が経ち、家が一部損壊していたので罹災証明をもらった。

祖父と祖母が仮設住宅に当たりそちらに移ることになった。仮設では必死さが伝わったし、とても不自由に感じた。殺気だっている人も多くいたように感じた。快晴の日でも、仮設住宅だけはすごくどんよりした雰囲気が印象的だった。仮設では年配の方を多く目にした。相変わらず私たちは新しい遊び場所が増えたかのように、元気にタイヤのプランコで遊んでいたこともあった。祖母の補聴器を無くしたこともあった。けれど、祖父達は叱ることなく笑顔で見ている。仮設住宅の人達も笑顔で私たちに声をかけてくれた。たまにお菓子をくれる人もいた。かなり無知な行動だったが、私たちはみんなに笑顔を与えることができたのではないかと思った。

ガス以外のライフラインは使えたのでTVをつけると、長田の街の様子が映っていた。神戸が悲鳴をあげていた。長田の街はものすごく悲惨だった。ほんの数十秒の揺れでこんな大惨事になるとは思わなかった。母はTVを見てボロボロと泣いていた。本当に言葉にしようがなかった。私はこの頃から地震と聞くとすごく恐くて、気分が悪くなった。

ライフラインの日頃のありがたさが身に染みて分かった。普段は蛇口をひねるだけで水が出てくる。地震が起こればそんなことが当たり前できなくなる。

その年から幼稚園に入学することになっていた。入園できるか心配だったが、無事に1995年4月上高丸幼稚園に入園することができた。

何度も余震が続いていて怖かった。寝るのにもすごく時間がかかった。地震という言葉にさえ心も体も拒否反応を起こしていた。地震の体験は長い間体が覚えていたが、震災から何年も経つと自然と体は忘れていき、記憶だけが残りつつあった。

それから私は環境防災科を受験することを決めた。震災の教訓を得る学科だと知り、私は、阪神・淡路大震災のことを思い出し、この学科でたくさんのことを学びたい、もっと他の災害を知りたい、命の

大切さを学びたい気持ちでいっぱいだった。入学してから、たくさんの人達の話聞いた。体験し、学んだ。

あれから12年。今でも地震と聞くとドキッとする自分がいる。環境防災科に入り常に災害のことを学んでいるので、普段の生活で、もし今災害が起こったら、と考えるようになった。そして、家族の意識も少しずつだが変わってきている。震災への意識が高まった。私自身も環境や災害についてもっと知りたい気持ちが大きく膨らんできた。たまに、地震で揺れた日があると不安と恐怖が襲い、夜はなかなか眠れない。地震という言葉にも、段々聞き慣れているが、体が勝手に拒否反応を起こすことがあった。

長い年月が流れて今、阪神・淡路大震災が風化されようとしているが、災害は忘れた時に来るので風化させてはいけない。風化させれば私たちが頑張ってきたことに意味が無くなってしまう。何年も何百年とずっと語り継がれて欲しい。神戸だけが教訓を得るのではなく、他国や他の県にもぜひ生かしていつてもらいたい。12年の年月が流れたが、私にはあっという間に感じた。ほんの少し前に感じた。もう12年まだ12年。いろいろな考え方がある。阪神・淡路大震災は大切なことだから語り継いでいくことが大切だ。

12年経って街が震災のころより大分変わった。けれど、町は戻っても亡くなった方々、人々の心はまだ止まったままだ。少しでもそんな人達の心を動かせるような人になりたい。そして、成長し続けていきたい。

神戸以外の人にとっては、阪神・淡路大震災といえばもう忘れられつつある存在だ。しかし、そんなことではいざ震災が起こったときどうすればよいのか？毎回毎回技術力が上がるだけで人々が忘れていたら教訓なんて生かせられないのだ。日本だけでなく世界全体の防災力を高めていき、人々がこれ以上悲しまないようにしたい。できる限り多くの命を救いたい。

あの時震災で亡くなった人は生きたかったはずだ。けれど生きられなかった。どれだけその気持ちが悔しいか。生きられなかった人達の分の命の重さを私たちは知っておかなければいけない。だからとって毎日沈んでいたら亡くなった方に申し訳ない。震災では、助けたかったのに助けられなかった人がたくさんいる。目の前で人が死んだのを体験した人もいるだろう。辛い経験をしたけれど、もう楽になっても構わない。一生引きずらなくても構わない。せめて、忘れないでいてあげて下さい。その人の分まで精一杯生きてあげて下さい。その人がいたという真実だけ覚えておいて下さい。毎日を大切に過ごして欲しい。

多くの教訓を今後も生かしていきたい。私は、普段の生活を当たり前と感じてもらいたくないのと同時に、命がどれだけ大切か、今後広めていきたいのだ。

だから私は将来先生になりたい。先生になって、たくさんの子供たちに私の震災体験や、環境防災科で学んだことを、私に関わったすべての子供や保護者、先生たちに語り継いでいきたいのだ。今の小学生は震災があった頃には生まれていない。震災を経験したことがないから同じことを繰り返すのは嫌だ。それを風化させないために教育の現場に立ち、普段の授業からそんな話をして語り継いでいけたら嬉しい。そして、防災教育をこの舞子高校以外にも作っていきたい。自分は経験していないから、そんなことは関係ないのだ。経験した人が感じたこと、経験したことを長い月日をかけて未来まで繋げて欲しい。私たちが、経験しただけで語り継ぐことを忘れてしまったら震災で亡くなった方に本当に申し訳ない。だから、知らないふりをせず、しっかりと後世に語り継ぎたい。

また、学校の先生になって語り継いで行くと同時に EARTH のメンバーに入り、阪神・淡路大震災だけでなく、他国の災害を伝えたい。津波で家を無くした人、家族を亡くした人、他の国だけれども同じ人間が苦しんでいることにもっと関心を持って欲しい。自分たちには何も起こってないから大丈夫という考えはしないで欲しい。私自身も、もっと近くで見て感じて、五感全部を使い多くのことを学びに行きたい。発展途上国などを見て私たちは何ができるのか、できることなら何でもしたい。どんな支援ができるのか生徒と一緒に考えたりしたい。今、防災に対して行政がしていることなどを伝えたい。普段から生徒が防災に目を向けられるように、興味を持てるように環境を作りたい。

EARTH 以外に海外青年協力隊に入るのも夢の1つだ。全部学校の先生にならないと就けない仕事な

ので、まず教職の資格を取り全世界に羽ばたきたい。今の子供は世界の大きさがよくわかっていないそう。自分がどれだけ恵まれている環境にあるのか知ってもらいたい。もっと日本の子供たちに世界に目を向ける機会をたくさんあげたい。だから多くの経験を積んで帰って来たい。

そして、生徒に防災というものをもっと身近に感じてもらいたい。防災を語り継ぐ先生が今後神戸を中心に広がっていけたら嬉しい。先生にも防災を伝えられる人材になり、そういう講義を地方に広めたい。生徒以外にも、先生にも防災に興味を持ってもらえる学校。地域にも防災を広げたいので地域にも親しまれる学校作りをしたい。そうやって学校から地域と防災の広がる輪をどんどん大きくしていきたい。自分が今、何ができるのか、できないからしないではなく、できないことをするのでもなく、今できる最大限のことができる人材になりたい。防災も、備えられるのに備えなければ一緒だ。教育は防災と似ていると感じている。こうやって夢を防災に繋げて貢献していきたい。

震災で、たくさんのものを失ったが、それより得たものは見える以外にもたくさんある。私たちはそれを忘れず前を見て進んでいきたい。未来は、災害が起こっても強い街、人でありたい。そんな未来を私たちは作って行かなければいけないのだ。